

## はじめに

研究は挑戦的であると同時に抑制的でなければならない。この相矛盾しそうな方向を両立させないと、前者は現実を変える力のない研究のための研究になってしまいますし、後者は客観性も担保できないような唯我独尊型の「研究」になってしまいかねません。教育学研究は（もちろん玉石混交ではあります）このようなアンビバレン特な命題を肝に銘じ、戦後一定の蓄積をこれまで形成してきているところですが、教育実践最前線の教育研究にまでは十分な影響力を發揮していない感があります。

自然科学の装いを見せる仮説－検証型の実証スタイルは客観性を担保しているように見えますが、そこで研究手続きや調査手法、またその結果解釈にはかなりの強引さや甘さが見え隠れしています。問題設定においては、それまでの先行研究の成果と課題といった一定の蓄積を踏まえることなく毎年単発で進められ、次に継承されることもないまませっかくエネルギーを注いだ紀要は戸棚に眠ってしまうといった状態が続いているのではないでしょうか。

こうした状況を何とか打破したいと考えて参りましたが、言うは易しで現実は厳しいことを痛感しております。福岡市教育センターのグループ研究（通称：G研）は面白い試みとして、学校に在籍する研究員、センターの指導主事、そして大学の研究者が研究同人として課題の設定から研究発表会まで関わっていくというスタイルで行われており、当日の発表会だけに指導・助言者として入り、苦労されたプロセスを知らずに大学人が不羨なコメントをするといった従来の関係とは全く異なるものです。この6年間、特別活動研究室に関わらせていただき、学級の現実、教師の指導や支援といったアクション、そしてその後の子どもたちの変化・変容について、他の変数を捨象し、その因果関係を客観的にえぐり取るような調査手法や研究方法を模索しましたが、答えはいまだ見出せないままでいます。しかしながら抑制的に研究成果を捉えることには努めて参りました。

また、特別活動研究室では福岡市内の小・中学校をリードするような先進的な研究に挑戦するというG研の趣旨を十分に踏まえ、学校週5日制の完全実施による時数削減や学力重視によって危機に瀕している「特別活動」領域の可能性を追求するような挑戦的・野心的なテーマに取り組んで参りました。従来であれば生徒指導の領域として捉えられてきた自己存在感や社会力（実践的社会性）、キャリア教育、そして家庭科等で扱われる教育（食教育）にも触手をのばし、文部科学省や中央の学会がこれらを特別活動として取り上げるよりも常に半歩前に研究をすすめてきたという自負はあります。

このたび学校経営学研究室に移ることになり、福岡市教育センターの許可を頂いて、一つの節目としてこの6年間のあゆみを冊子として綴り直すことに致しました。この間、研究同人として一緒におつきあいくださった研究員、指導主事の先生方のエネルギーが注がれている本冊子をこれから特別活動の研究に取り組まれる諸先生方、そして教職を志し、特別活動を学習されている大学生の皆さんに活用していただけると幸いです。

## 目 次

平成15年度研究報告書(第677号)	
集団の一員として役割を果たし、自己存在感をもつ特別活動の在り方	1
平成16年度研究紀要(第699号)	
自発的、自治的な活動を通して特別活動の在り方実践的な社会性を育てる	21
平成17年度研究紀要(第723号)	
小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割	45
-「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通して-	
平成18年度研究紀要(第748号)	
小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割	67
-「4つの能力」の育成につながる学級活動(1)の実践を通して-	
平成19年度研究紀要(第776号)	
特別活動における食に関する指導の在り方	97
-交流活動を生かした学級活動の実践を通して-	
平成20年度研究紀要(第802号)	
豊かな人間性や社会性を身に付けた児童を育てる特別活動の役割	125
-食に関する交流活動を生かした特別活動の実践を通して	

平成15年度  
研究報告書  
(第677号)

G 1 2 - 0 1

## 集団の一員として役割を果たし、 自己存在感をもつ特別活動の在り方

特別活動の中で児童が自己存在感を高めていくためには、集団の一員としての役割を自覚し、それぞれの活動を行っていくことが大切である。そのためには、指導者自身が、集団の一員としての役割をどう捉え、指導、援助していくかとしているのかが重要である。本研究では、集団の一員として5つの役割をあげ、児童一人一人がそれを自覚し、意欲をもって活動ができるように指導を行った。その結果、充実感・連帯感・有用感が高まり、児童が自己存在感をもつことが明らかになった。

## 目 次

### 第Ⅰ章 自己存在感と特別活動

1	なぜ「自己存在感」なのか	1
(1)	自信のない子供たち	1
(2)	自己存在感と特別活動	2
(3)	自己存在感をはぐくむために	2
2	研究の目標	2
3	研究の仮説	3
4	研究の基本的な考え方	3
(1)	自己存在感を捉える3つの視点	3
(2)	「集団の一員として」役割を果たすとは	3

### 第Ⅱ章 自己存在感をもつ特別活動の研究の実際

1	役割についての考察	4
(1)	役割の概念と特性	4
(2)	『集団の一員』として	5
(3)	顕在的役割と潜在的役割	5
(4)	児童が果たす5つの役割	6
2	学級活動の実際とその考察（その1）	6
	議題「1年生と夢スポーツフェスティバルを開こう」	
(1)	議題の選定と活動計画	6
(2)	集団の一員として役割を果たすための具体的な手立てと考察	7
3	学級活動の実際とその考察（その2）	12
	議題「ドミノ倒しで一致団結！5の3思い出集会を開こう」	
(1)	議題の選定と活動計画	12
(2)	集団の一員として役割を果たすための具体的な手立てと考察	13

### 第Ⅲ章 自己存在感をもつ特別活動の在り方

#### （研究のまとめと今後の課題）

1	研究のまとめ	16
(1)	児童の自己存在感の変容	17
(2)	自分と学級の関係イメージ図の変容から	17
(3)	考察（研究の成果）	18
2	今後の課題	18
3	研究へのコメント	18
	引用・参考文献	19

## 第Ⅰ章 自己存在感を高める特別活動とその指導の基本的な考え方

### 1 なぜ「自己存在感」なのか

#### (1) 自信のない子供たち

急速な科学の進展、社会・経済のグローバル化とインターネットに象徴される高度情報化の中で、私たちは多くの情報とコミュニケーションの手段を手に入れ、互いに理解し合い、密接に人間関係を築くことが可能になってきている。その反面、豊かな人間性や主体的な態度の形成の不十分さ、人間関係の表層化・希薄化、そして社会性の欠如など、様々な問題が身近なところに生じているのも確かである。

児童に目を向けてみても、不登校の事態にまでは至らなくても学校や学級集団の中で自分の存在を実感できず、自信をもてずに生き生きとした楽しい学校生活が送れずにいる児童も見受けられる。また、自分の思いや考え、感情などを上手に他者に伝えたり、他者の気持ちを考えて行動したりすることを苦手にする児童も多い。

日本・米国・中国の3カ国の児童生徒を比較した表-1から明らかなように、日本の児童生徒は、他国の児童生徒に比べ、自分自身を認めたり、他者から認められたりすることを通して得られる自分に対する価値や存在感、そして自信が極めて低い状況であるということができる。

表-1 児童生徒の状況「生活意識」

日本青少年研究所 H13～14年(%)

	日本	米国	中国
私は他の人々に劣らず価値ある人間である。	8.8	51.8	49.3
計画を立てたら、それをやり遂げる自信がある。	9.8	54.2	32.8

本研究室が小学校5年生を対象に実施したアンケート調査では、図-1のように学校、学級生活の中で「自分のことがわかつてもら

っていない」と感じている児童が全体の35%であることが分かった。このことから3分の1の児童が他者から理解してもらっていないと感じており、予想以上に多いことが分かる。

学級生活において共に学び、共に活動する中で互いに自分のよさを發揮し合い、充実感や有用感を高め、自分自身への価値や存在をもつことができるようになることが必要である。

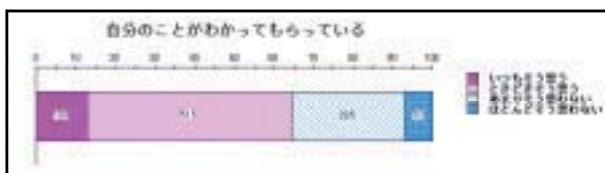


図-1 「自分のことがわかつてもらっている

(市内小学校5年生 200名 H15年6月)

また図-2では、「みんなといっしょにいるのが楽しい」「自分のことがわかつてもらっている」のアンケート調査についてクロス集計したものである。「自分のことがわかつてもらっている」と思っている児童のほとんどが、「みんなといっしょにいるのが楽しい」と感じている。それに対し、「自分のことがわかつてもらっている」という意識が低い児童ほど、「みんなといっしょにいることが楽しくない」と感じていることがわかる。

以上のような児童の実態から、望ましい人間関係を育て、個と個、個と集団など他者とのかかわりに視点をあてながら、児童一人一人の自信を高め、自己存在感をもたせていくことが大切であるといえる。

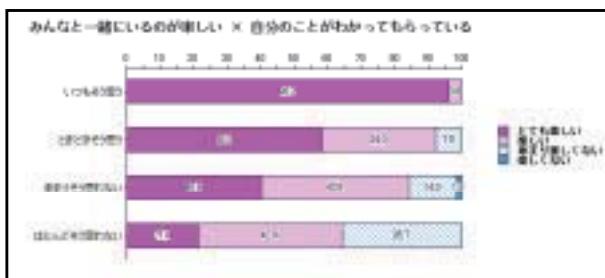


図-2 「みんなといっしょにいるのが楽しい」

×「自分のことがわかつてもらっている」

(市内小学校5年生 200名 H15年6月)

## (2) 自己存在感と特別活動

教育課程審議会答申(平成10年)の「教育課程の基準の改善の基本的考え方」において次のように述べられている。「教科の授業だけではなく、学校でのすべての生活を通して、子どもたちが友達や教師と共に学び合い活動する中で、自分がかけがえのない一人の人間として大切にされ、頼りにされていることを実感でき、存在感と自己実現の喜びを味わうことができる事が大切であると考える。」

ここには、豊かな学校生活の実現を図ることを通して、児童が自分自身を大切にし、望ましい自己実現を目指すとともに、他者を尊重し、他者とかかわり合いながら、心豊かにたくましく人生を切り拓いていく力を身につけていくことが求められているのである。この豊かな学校生活の実現は、全教育活動を通して行われるものであることは言うまでもないが、そのことを目標としているのが、特別活動である。

特別活動は、望ましい集団活動を通してなすことによって学ぶという他教科にはない特質をもち、個性の伸長と豊かな社会性の育成を目標としている。そしてその目標は、児童が所属する集団の中で、自己の役割を自覚し、仕事の責任を果たすために、児童相互が協力し合い、さらに集団活動を行うための必要な知識や態度などを学びとる過程を通して達成するものである。

このように、集団の一員として児童一人一人が自分の役割を自覚し、責任をもって仕事を果たすなどの集団活動を通して、児童の自己存在感を高めることは、特別活動の重要な働きである。

## (3) 自己存在感を育むために

特別活動の指導においては「望ましい集団活動を通して」という指導原理によって、教師の適切な指導のもとに自主的・実践的に活動することを特質としている。

小学校学習指導要領解説特別活動編には、望ましい集団の条件が、次のように記されている。

### 資料－1 望ましい集団の条件

- ア 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること
- イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、それを協力して実践すること
- ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解していること
- エ 一人一人の自発的 requirement が尊重され、互いの心理的な結び付きが強いこと
- オ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること
- カ 集団の中で、自由な相互交渉が助長されるようになっていること

上記の望ましい集団の条件を教師がしっかりと踏まえ、集団活動を指導・援助していくことは、個と個、個と集団の結び付きを強め、相互が認め合い、信頼し合い、自分の居がいや存在を実感することにつながるのである。

つまり、児童が「自己存在感」をもち、自分の価値を実感し、自信もって生き生きと生活することができるようになるためには、共通の目標をもち、その達成のために自分の果たす役割や責任を自覚し、友達と話し合い、協力しながらそれを遂行し、よりよい学校学級生活の充実を目指していくことが必要である。

そこで本研究室では、児童一人一人が集団の一員としての役割をしっかりと果たすことを通じて、児童自らが充実感、連帯感、有用感を高め、自己存在感をもつ特別活動の在り方を探ろうと考えた。

## 2 研究の目標

児童が充実感、連帯感、有用感を高め、自己存在感をもつために、集団の一員としての役割を明らかにし、特別活動の在り方を探る。

### 3 研究の仮説

特別活動において、望ましい集団活動を展開し、児童が集団の一員としての役割を果たせば、充実感、連帯感、有用感が高まり、自己存在感をもつことができるであろう。

### 4 研究の基本的な考え方

#### (1) 自己存在感を捉える3つの視点

人は他者とのかかわりの中で生きており、そのかかわりの中で自己の存在感を見い出すとき、安心や自信にあふれ、生き生きとした姿を示す。自己存在感を得ることなしに自分を肯定的に見ることはできず、また、自己実現を図ることはできない。

児童にとって自己存在感をもつとは、望ましい集団活動を通して感じる実感であり、「なすことによって学ぶ」結果として生じてくるものであると考える。それは、活動したことについての喜びや満足などの充実感であったり、活動の中での集団や自分のよさへの気づき（連帯感・有用感）であったりする。

そこで、本研究室では、児童の活動に対する充実感、集団に対する連帯感、自己自身に対する有用感の3点から自己存在感を捉えることにした。そして特別活動の実践を通して、充実感・連帯感・有用感を高め自己存在感をもつ児童を育成しようと考えた。

#### ○ 活動に対する充実感

児童一人一人が、「うまくいった。最後まで頑張ってよかった。」「うまくはいかなかったけれど、よく頑張った」という充実感を味わうためには、全員の共同及び共通の問題が達成（解決）できたという喜びや、達成に向けた努力への満足感をもったり、個々の思いや願いが活動の中で生かされることを実感したりすることである。

#### ○ 集団に対する連帯感

自分たちの共通する目標を目指し、その目標を達成するためにみんなで考え、決まったことについての自分のかかわりを考え、役割

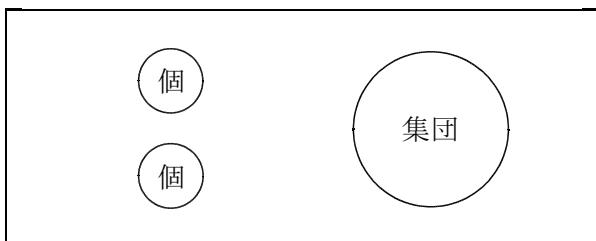
を果たしながら、友達と協力して解決していく過程を通して、児童と教師、児童相互が認め合い、信頼し合い、集団同士が相互に密接に関連をもちながら、心地よい安定を保っている状態のことである。

#### ○ 自分自身に対する有用感

集団における自分の役割があり、その役割が理解され、その役割を果たすことが期待されていると感じる気持ちのことである。また、役割を成し遂げることによってみんなの役に立ったと感じる満足感、仲間と共に活動しているという充実感の中で自己を発揮できる喜びのことである。

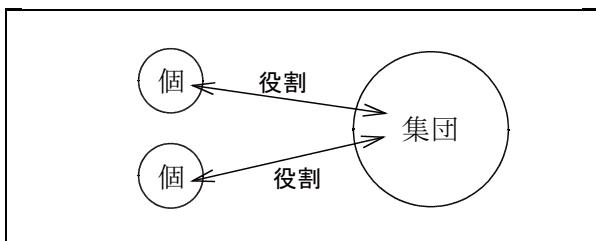
#### (2) 「集団の一員として役割を果たす」とは

児童は、自分の意思にかかわらず、集団の一員として決定づけられる。はじめは共通する目標や目的ではなく、個と集団の関係は、図－3のように表すことができる。



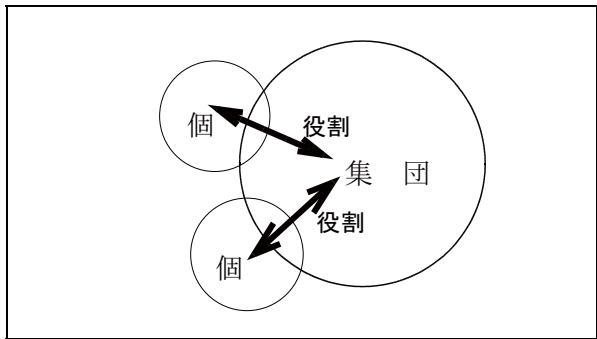
図－3 個と集団の関係 その1

しかし、集団での生活を過ごしていく中で、個と集団の間には必ずいくつかの「役割」が生じてくる。集団形成の初期の段階においては、「役割」は個の理解や納得を十分に得られたものではないが、図－4のように、個と集団とを媒介するものとして出現てくる。

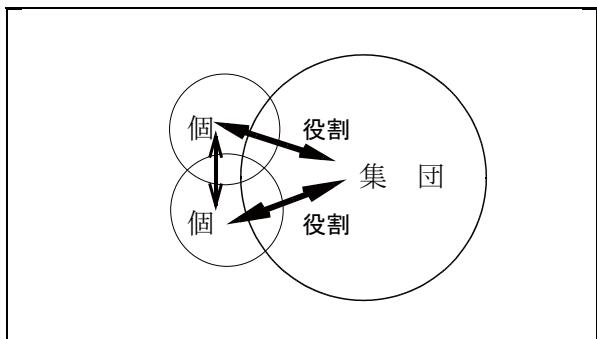


図－4 個と集団の関係 その2

次に、図－5のように、児童は学級に所属し、お互いに協力し合って活動していく過程で、次第に集団目標の志向性や活動の充実感が醸成され、集団の中で個の要求や欲求は満たされ、個と集団の心理的な結び付きが強くなっていくのである。



更に、望ましい集団活動を体験を通して、図－6のように、個は、集団の目標を正しく理解し、その実現に向けて努力していく過程で、個と集団、個と個の結び付けがさらに強固になっていくと考える。



このように、「集団の一員として役割を果たす」とは、目標や目的を共有し、個と集団、個と個の媒介となる「役割」を自覚し、最後までやりとげることである。また、「役割」には、全員が共に果たすべきものと、個々に分担して果たすべきものがあり、集団の一員としてともに重視する必要がある。

役割を果たす結果として、活動の充実感を味わい、個と集団、個と個の結び付けを強め、

集団に対する連帯感、自分自身に対する有用感を培うことにつながるのである。

## 第二章 自己存在感をもつ特別活動の研究の実際

### 1 「役割」についての考察

#### (1) 役割の概念と特性

社会の中での人間を捉えるとき、社会学では「役割」という概念をよく用いる。「わたしは□□□です」にあてはまる言葉を考えてみると、例えば小学生・受験生・長男・教師・担任などがある。これらは、相手との関係において自分が担うことになる社会的カテゴリーであり、まとめて「役割」(role)と呼ばれている。

ある人は家庭では母親であり妻であり、職場では教師であり、コンビニでは客であり、映画館では観衆の一人として存在している。つまり、人はそのつど役割を担って社会に登場しているということができる。その意味で役割は個人と社会を媒介するものといえる。

社会との関係において担う役割には、その集団や社会が期待する行動が備わっており、これを「役割期待」と呼ばれている。つまり、役割を果たす行為は、権利とともに期待に応える義務をあわせもつということができる。

レーヴィトは「als規定」(alsとはドイツ語で「として」のこと)の中で役割のもっとも基本的な要素に「□□として」があると述べている。そして私たちは他者を認識するために必ず「として」を適用して認識する。また、これは他者に対してだけでなく自分にも適用しそれを手がかりにして自分の行為の方向付けをする。更に、他者と自己の関係についても「として」を適用しながらその認識を深めていくと述べている。

上記のことについて、特別活動における具体的な場面をイメージしながら、役割について

て考えることにする。

## (2) 『集団の一員』として

特別活動の目標には「集団の一員として」という文言がある。レビットの理論から考えると「集団の一員」という役割は、重要なキーワードであり、それを適応しながら集団に所属する他者を認識したり、集団の中での自分の活動を方向付けたり、集団における他者や自分の関係に気付いていくことができる。

また、「子供の社会化は、役割の学習によって進行する」といわれるよう、児童は、他者との相互作用の中で自分と友達、自分との集団の位置付けや「集団の一員」らしさを学んでいくのである。

では、特別活動における「集団の一員」としての役割は具体的にはどのようなものが期待されるのかを考えてみることにする。

解説特別活動編では「豊かな社会性を身につけるためには、児童が互いの特性を認め合う中で、与えられた役割を自覚し、責任をもって仕事を果たす必要があるのであり、そのような経験を積み重ねることが大切である。」と示されている。ここでの役割は、実践に向けて各自に振り分けられた仕事、或いは選択した仕事と捉えることができる。これを本研究室では、顕在的役割とした。

解説では更に続けて「指導に当たっては、友人と協力して身の回りの諸問題を解決することへの関心・意欲を高め、諸問題の解決に向けて思考・判断を深めるとともに、集団活動を行うのに必要な知識や技能を身に付けるよう、発達段階に応じて適切に指導することが求められる」と示している。これは指導者への配慮事項であるとともに、関心・意欲を高めること、思考・判断を深めることや知識や技能を身に付けることは集団における児童の果たすべき役割だと考えた。これを潜在的役割とした。

## (3) 顕在的役割と潜在的役割

本研究では、児童が「集団の一員として役割を果たす」ことによって、充実感、連帯感、有用感を高め、自己存在感をもつことができるようすることを目標にしている。

そこで、集団活動の中でその成員である児童が果たすべき役割を明らかにする必要がある。まず役割を、先述のように2つに分けることができる。

- 集団活動における顕在的な役割
- 集団活動における潜在的な役割

顕在的な役割とは、実践に向けて分担された仕事を自覚し、見通しをもって友達と協力しながら活動することである。

潜在的な役割については、小学校学習指導要領解説 特別活動編の「望ましい集団の条件」（資料－1）や「集団の一員としての自覚をもつ児童に期待される活動」中川(1996)（資料－2）を参考にし、検討を行った。

### 資料－2 集団の一員としての自覚をもつ

#### 児童に期待される活動

- 集団に誇りをもち、活動を通して心理的な結びつきを深め、所属することの喜びを知ること
- 所属する集団の向上のための改善を図る、という目的意識をもつこと
- 集団の中では、一人一人が重要な役割をもつことを知り、意欲をもって参加し、責任を果たすよう努力すること
- 集団の一員として、見方を深くし、考え方を広げるようにすること
- 他の成員と協力して初めて集団が成果をあげ、そのことが一人一人に返ってくることを理解すること

2つの資料に共通していることは、次のようなことである。

- ・集団としての結び付きが強く、全員が共通の目標をもっている。
- ・何のための活動か、そのめあてをしっか

りと理解している。

- ・達成するための手段や方法を全員で話し合い、集団（自己）決定をしている。
- ・認め励まし合い、見つめ振り返りながら活動している。

これらのことを見童の役割と捉えるかについては議論されるところではあるが、これを期待する児童の姿として捉えるよりも、児童自身が自分の役割として捉え、「集団の一員として」集団の向上を目指した活動を主体的に行うことができるようになることを期待しているのである。

#### (4) 児童が果たす5つの役割

以上のことから、本研究室では集団の一員として児童が果たす5つの役割をあげることにした。

##### ◆ 集団の目標を共有する (役割①)

集団の目標を集団の成員全員の話し合いでつくりだす。そしてそれを共有することは集団の一員としての第一の役割である。このことで実践に向けての集団意識や意欲が育つのである。

##### ◆ めあてを意識する (役割②)

なぜこのことを話し合うことになったのか、何を解決しようとしているのか、人ごとではなく、自分とのかかわりでその活動のめあてをしっかりと意識化させる。

##### ◆ 集団決定を重視する (役割③)

問題の解決や実践化に向けて話し合っておかなければならないことが数多くある中で、全員で話し合い、全員で決定していくなければならないことは何かを考えさせ、それについての自分の意見をもたせる。そして、十分に意見を出し合い納得のいく、そして覚悟をもった決定を行うのである。自発的、自動的な話し合い活動の中でも教師が指導することで、集団の思考を高め、焦

点化し、望ましい集団決定につながるものであれば臆せず指導すべきである。

##### ◆ 実践化を目指した活動をする

(役割④)

共通の目標達成のために、活動のイメージ化を図ったり、具体的な活動内容について考えさせる。また、自分の役割を自覚し、実践までの見通しをもって友達と協力しながら活動させる。

##### ◆ 活動を振り返る (役割⑤)

充実感・連帯感・有用感の3つの視点で、活動や自分の役割について評価させる。自己評価は自らの役割を振り返り、自分の次の活動意欲に結び付くようになることが大切である。

## 2 学級活動の指導とその考察（その1）

### 議題

「1年生と夢スポーツフェスティバルを開こう」  
(小学校5年)

#### (1) 議題の選定と活動計画

本学級は「みんなで協力して自分たちの夢をかなえるクラス」を目指して活動している。5月に学級の歌、学級の応援歌を作つて学級の目標をより具体的な言葉でとらえることができるようにになった。

学級会でもこの学級目標に向か、学級計画委員会（学級会係、提案者、司会グループ）を組織し、話し合い活動を行つてゐる。学級会係は「夢ポスト」を開き、みんなで議題の選定をしたり、事前の調査活動や資料の作成をし、話し合い活動が活発にできるように工夫したりしている。5年の1学期から司会グループは輪番制とし、グループ内で「司会1」「司会2」「記録」の仕事を分担している。学級会を自分たちで進めようとする意欲は盛

んである。1学期から集会の計画、実践を自分たちの力で取り組み、みんなで協力して実現できた喜びを経験している。みんなで何かを楽しみたい、高学年として他の学年と交流したいという気持ちはより膨らんできている。

本議題では、友達と協力して1年生ができる内容を考えたり、1年生がもっと楽しめるルールを話し合ったり、役割を分担し実践していく。このことで、児童は、共通の目標を達成する喜びを味わったり、仲間と共に活動する楽しさを味わったり、さらに、1年生との交流を通して有用感を感じたりすることで自己存在感を高めていくと考える。

### ア 事前の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助 ☆評価	日時
1 学級会の議題について計画委員会で話し合う。	○ 適切な議題を選び学級全員の承認を得る。	10月14日 昼休み
2 スポーツ集会での内容のアンケートをとる。	○ 1年生が楽しめるることを考えて書くようにする。 ☆ 1年生がよろこんでくれるスポーツフェスタを考えることができたか。	10月15日 朝の会
3 計画委員が1年生にアンケートをとる。	○ 記入の仕方など一年生にわかるように説明する。 ☆ 友達と協力して一年生の取材活動ができたか。	10月16日 朝の会
4 計画委員で資料作りをする。	○ 1年生や5年生のアンケート結果をわかりやすくまとめる。	10月17日 昼休み
5 スポーツフェスタの原案を作成	○ 仲良くなれ、楽しめる種目の5つの原案を作る	10月21日 昼休み
6 話合いの柱を決めて、全員に知らせる。	○ 話合いの柱を決定する。 ☆ 自分の意見をもつことができたか。	10月24日 昼休み
7 学級会ノートに自分の考えを書き、発表時の具体物の準備をする。	○ 一人一人の考えを認めるようにする。	10月28日 朝の会
8 計画委員会を開き、学級会の準備をする。	○ 司会グループと学級会の進め方を確認する。	10月30日 昼休み

### イ 本時の活動計画

話合いの順序	指導上の留意点
1 はじめの言葉	○ 大きな声ではっきり言うようにさせる
2 学級の歌	○ 緊張をほぐし場を楽しい雰囲気にする
3 議題の確認と提案理由の説明 ・話合いのめあて、柱の確認	○ 計画委員が一年生からのアンケート結果を説明し、1年生が集会を楽しむにしていることを知ることを知らせる。 ○ 試しの動きなどを入れながら工夫して考えを伝える。 ☆ 自分の意見をみんなに十分聞いてもらうことはできたか。(充)
4 話合い ○ スポーツフェスタの種目をきめる ・風船バレーしぶとりゲーム ・ドッジボールジャンケン列車 ・手つなぎおに	☆ 友達の意見を良く聞いたり、取り入れて発言したりできたか。(連) ○ 友だちの考えのよさに目を向けることができるようとする。 ○ スポーツフェスタが楽しくスムーズに
○ 役割分担	

5 役割分担グループの中で話し合う	行える必要な係を考え意見を出し合う。 ○ ネームカードを貼り役割分担をし、その中で具体的な仕事の内容を相談する。 ☆ 自分の意見がみんなに認められ納得のいく集団決定ができたか。(有)
6 先生から	○ 1年の先生からのメッセージビデオを見せ、楽しいスポーツ集会への意欲につながるような話をする。
7 おわりの言葉	○ 元気な声と大きな拍手で終わる。

### ウ 事後の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助 ☆評価	日時
① プログラムを決め、仕事分担を確認し集会の準備をする	○ 各役割の準備ができているか随時確認しながら本番に向けて準備ができるようにする ☆ 集会のめあてに向かって進んで活動することはできたか。 ☆ 友達と協力して集会を運営することはできたか。 ☆ みんなといっしょに活動でき楽しむことはできたか。 ○ 1年生に積極的に関わり楽しく自分の役割を果たせるように励まし、援助する。 ☆ 自分の役割を十分果たすことはできたか	11月4日 朝の会 随時
② 「1・5年夢スポーツフェスタ」を行う。	○ 11月15日 1時間	
③ 活動の反省、感想を書く。	○ 自分たちの活動についての反省や感想を学級会ノートにまとめる。 ○ これからどのような集会活動をしていくのか話を合う。	11月16日 朝の会
④ 今後の活動について話し合う。		11月17日 帰りの会

### (2) 集団の一員として役割を果たすための具体的な手立てと考察

#### ◆ 集団の目標を共有する（役割①）

##### 手立て 1

学級の目標、学級の歌／応援歌を作る

4月の最初の学級会に全員で学級目標を作った。児童一人一人の思いや願いを出し合い、一つの言葉にまとめ上げていった。その学級目標を教室前面に掲示し（資料－3），話合い活動をはじめ係活動や集会活動のときにもこの学級目標の達成を目指したものにしていこうという意識を大切にした。

また、その具体的な言葉を歌詞に込めて学

級歌や応援歌を作った。学級会や集会の時には、学級の歌や応援歌を全員で歌い、活動の意欲や場の雰囲気を高めている。

#### ◇ 考察

学級としての目標を全員でつくりあげ、共有化していくことで学級内での活動や生活のめあてを考えていくときにも、児童は、常に学級目標と関連付けて考えることができるようになった。

また、目標に近づいていくことがみんなの喜びとなり、児童一人一人に学級の一員である自覚が芽生え、連帯感が生まれてきた。

資料－3 学級目標



#### ◆ 活動のめあてを意識する（役割②）

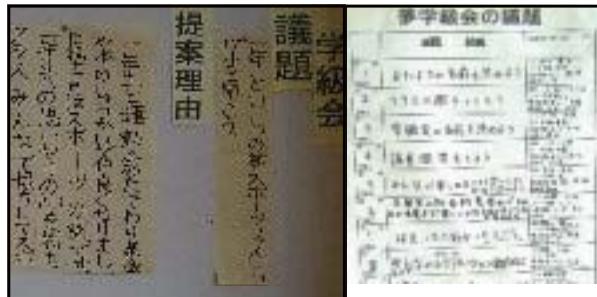
手立て 1  
計画委員会の児童による資料、環境作り

事前の計画委員会には、教師も一緒に参加するようにした。まず計画委員会の児童が、話合いの目的を理解し、これからの活動の計画を立てていくことができるように支援した。計画委員会の児童は、「1年生への思いやりの心をもち、協力してスポーツフェスティバルを成功させよう」というめあてをつくり、朝の会でみんなに確認し、学級活動コーナーに議題・提案理由・話合いの柱を掲示した。（資料－4）

また、事前に1年生がスポーツフェスティ

バルを楽しみにしている様子を撮影したり、話合いがより活発になるように1年生にどんな遊びがしたいがアンケートを行い、集計したりした。そして、学級会がめあてに沿った話合いになるための資料づくりや準備を行った。（資料－5・6）

資料－4 学級会のお知らせと今までの学級会の掲示



資料－5 1年生にアンケートを実施している様子



資料－6 1年生の遊びアンケートの結果



#### ◇ 考察

計画委員会の事前の環境づくりによって、学級の児童はめあてを意識し、話合いの柱についての自分の考えをもつことができた。そして「夢スポーツフェスティバルを成功さ

せたい」「1年生に喜んでもらいたい」という集会への意欲が高まった。

また、計画委員会によるアンケート作り、ビデオ撮影などによって計画委員自身も自分の役割への自覚を深まった。放課後にも学級会での自分たちの仕事についてお互いに練習し合う姿が見られた。話合いがスムーズに行くように友達同士で「もっと声を大きく出そう」「時間を考えて指名していこう」とアドバイスし合い、連帯感や有用感をもって活動できた。

#### ◆ 活動のめあてを意識する（役割②）

手立て 2  
取材ノートの活用

1年生の様子をよく知って自分の考えをもつことができるように、全員に取材ノートを持たせた。そして、休み時間に1年生と一緒に遊んだり、話したりしながら取材活動を行い、1年生の好きな遊びや日頃の様子を記入していく。（資料－7）

資料－7 取材ノートの内容を絵に書きこんだもの



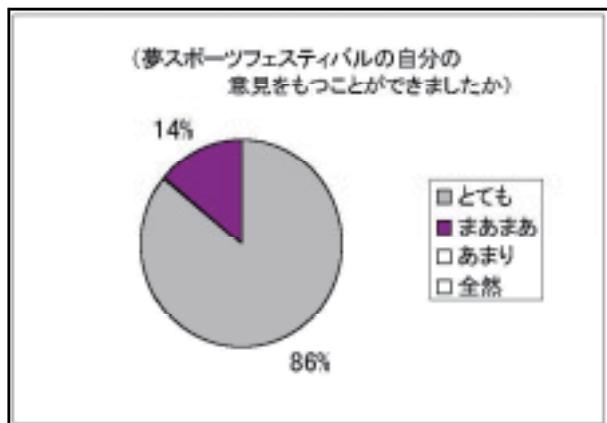
#### ◇ 考察

取材ノートを持たせることによって、毎日意欲的に1年生の教室に行くようになった。図－7は「夢スポーツフェスティバルの自分の意見をもつことができましたか」の事前アンケート結果である。「とても」と答えた児童が学級の86%であった。ほとんどの児童が1年生が楽しめ、5年生と仲良くなることのできるスポーツに目を向け、学級活動の個人

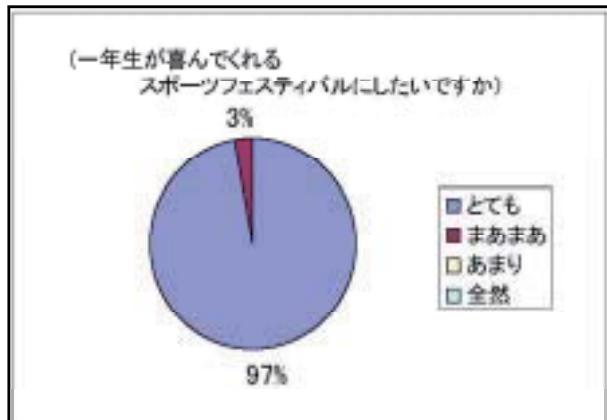
ノートに自分の考えを書くことができた。

図－8では「1年生が喜んでくれるスポーツフェスティバルにしたいですか」の問い合わせに97%の児童が「とてもしたい」と答えている。1年生といっしょに遊び、取材活動を続けたことは、1年生と仲良くなり、○○お兄ちゃん、○○お姉ちゃんなど呼ばれ、「1年生をもっと喜ばせたい」「1年生のために何かしたい。」という上級生としての自覚と、自分が1年生から必要とされているという有用感の芽生えにつながったと考えられる。

資料7の児童の感想から、この集会の目的をしっかりと捉え、成功させたいという気持ちをもっていることが分かる。取材ノートを持せることによって、事前の活動が拡がり、児童は取材活動への充実感や成功に向けて頑張ろうとする自分への有用感を持たせることができた。



図－7 事前のアンケート結果①



図－8 事前のアンケートの結果②

## 資料-8 児童生徒の感想

私は初め1年生に知っている人がいませんでした。でも、友達と1年生の教室にいっしょにいって「遊ぼう」と声をかけると「うん」と言ってくれたのでとてもうれしかったです。1年生はすぐ仲良くなってくれるし、何でも自分からすすんでるのでいいなと思いました。走ることも大好きだし、とっても素直です。1年生の特徴や良いところを生かした最高の集会にしたいです。学級会では自分も発表しみんなの意見もしっかり聞いて1年生も自分たちも楽しめる種目やルールを作って1年生を楽しませ、もっと仲良くなるようにしたいです。

### ◆ 実践化を目指した活動をする（役割④）

手立て 1

具体的な資料を活用した話合いの工夫

学級会では始めて計画委員会が撮影した1年生の楽しみにしている様子を見せた。

また、自分の考えが具体的に相手に分かるよう工夫するとよいことを事前に児童に伝えていた。そのため種目を提案する児童は、模造紙に書いた資料やビデオの映像を使って自分の考えを伝えることができた。（資料-9）

計画委員会が①楽しくなる種目②仲良くできる種目③一緒にできる種目の3つを選ぶときのめあてとして示した。話合いでは、児童がめあてと比べながらそれぞれの友達の意見を聞いたり、自分の意見を発表したりする姿が多く見られた。

## 資料-9 ビデオで自分の考えを説明している様子



### ◇ 考察

自分たちがいまから話し合おうとしている集会を1年生がとても楽しみにしている様子をビデオで見たことで、どの児童にも笑顔が見られ、話合いの意欲が増した。

図-9は「友達の意見をよく聞いたり、取り入れて発言したりしましたか」のアンケート結果である。ビデオや模造紙を使った提案により、それぞれの種目のよさがみんなにわかりやすく伝わり、具体的な話合いとなった。

（友達の意見をよく聞いたり、取り入れて発言したりしましたか）

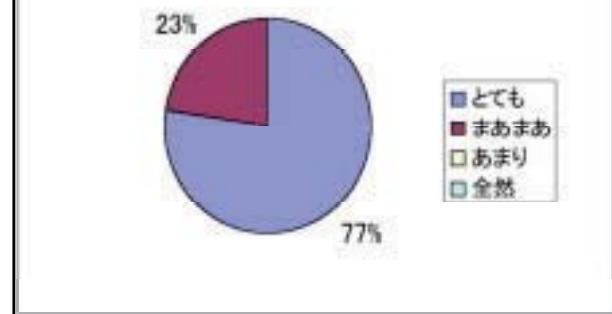


図-9 話合い活動後のアンケート結果①

図-10では「自分の意見をみんなに聞いてもらいましたか」の問い合わせに対して91%の児童が「とても」と答え、高い数字を示している。具体的な資料を使うことで、児童は集会のイメージをもつことができ、話合い活動の満足感や充実感をもつことにつながったと考えられる。

（自分の意見をみんなに聞いてもらいましたか）

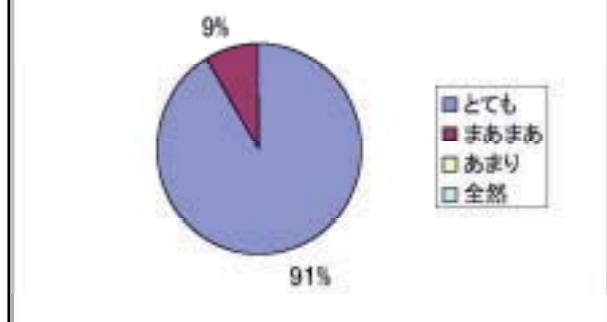


図-10 話合い活動後のアンケート結果②

資料-10のA児は、自分の意見を友達にしっかりと聞いてもらえたことに満足している。また、日頃発表が少ない友達が積極的に意見を言っている姿に目を向け、賞賛している。A児の感想からも話し合い活動への満足感、充実感が感じられる。

#### 資料-10 話合い活動のA児の感想

意見を言うとき緊張したけど友達が私を見てうなずきながら聞いてくれていたので、ほっとしました。がんばって意見を言ってよかったですなと思いました。今日1番がんばっていたのは○○君です。日頃あまり発表しないけど1年生のことを考えて意見を言っていたのがかっこいい5年生だなと思いました。今日はどれもよい意見ばかりで迷いました。種目が決まらなかったけどくいの残らないよう1年生が喜ぶような案を出して火曜日にもう1度話し合うのが大変楽しみです。

#### ◆ 実践化を目指した活動をする（役割④）

手立て2

各係での打ち合わせと進み具合いの確認

司会、プログラム書き、メダル賞状作り、準備、ルール説明、名札作りの係に分かれ、昼休みに集会の準備を行い、各係での打ち合わせを大切にした。そして、帰りの会では、それぞれの係の仕事の内容や進み具合いを報告し合うようにした。

#### ◇ 考察

図-11は「集会のめあてに向かって進んで活動することはできましたか」、図-12は「友達と協力して集会を運営することはできましたか」、図-13「自分の役割を十分果たすことはできましたか」のアンケート結果である。どの問い合わせに対しても「とても」と答えた児童の割合が高い数値を示している。

昼休みに各係で打ち合わせや準備を行ったことで、「賞状は1年生一人一人に合った言葉や絵を入れよう」などのアイデアがあがり、

常に1年生の顔を思い浮かべながら活動ができた。また、帰りの会で各係の進み具合いを報告し合い、各係の準備が進むにつれてこのスポーツフェスティバルを成功させたいという気持ちが強まっていった。

集会の打ち合わせを十分に行うことによって、集会当日は、手つなぎおに、しっぽ取りゲームをスムーズに進めることができた。

（資料-11）児童が自信をもって自分の仕事を遂行し、有用感を高めるためには、係や係相互の打ち合わせは有効な手立てであった。

最後のメダルと賞状渡しのときに1年生の喜ぶ顔を見て、自分たちが集会に向けてしっかりと準備してきたことへの満足感や充実感を感じることができていた。（資料-12）

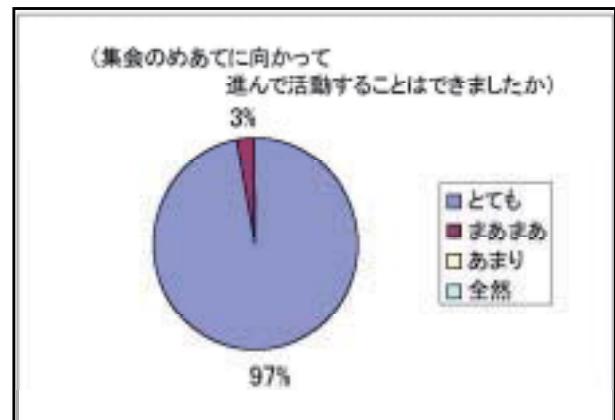


図-11 事後のアンケート結果①

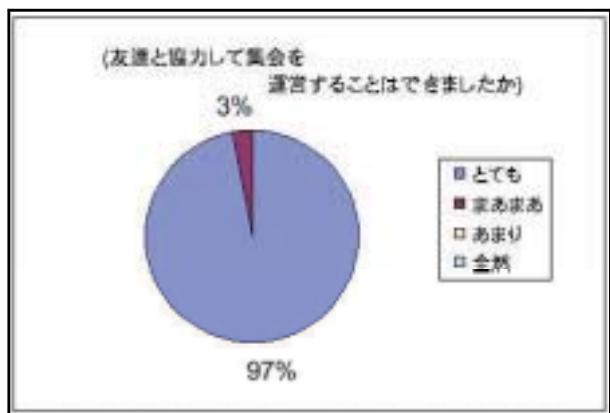


図-12 事後のアンケート結果②

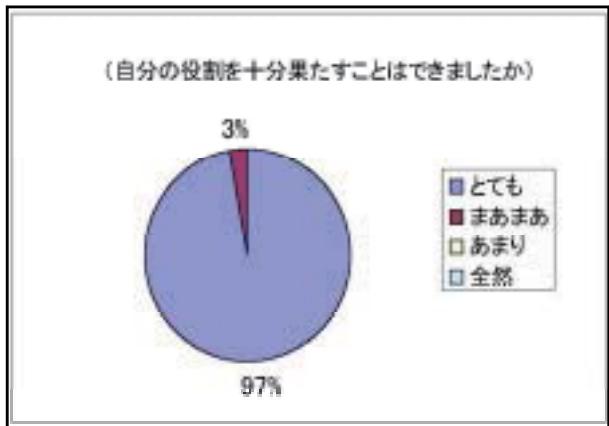


図-13 事後のアンケート結果③

資料-11 手つなぎ鬼でいっしょに遊んでいる様子



資料-12 1年生に賞状とメダルを渡している様子



#### ◆ 活動を振り返る（役割⑤）

手立て 1  
自己評価カードの活用

事前・事中・事後のそれぞれの段階で、自分の活動を振り返り、充実感・連帯感・有用感の観点で自己評価カードに記入していった。また、感想の欄には、自分や友達のがんばったことを具体的に書くようにアドバイスした。

#### ◇ 考察

それぞれの段階で、活動の自己評価を行い、自分自身の活動を見つめることができ、自分ががんばったことや、次の活動への意欲付けとなった。また、友達のがんばりにも気付き互いに励まし合ったり、賞賛し合ったりする声が学級内で聞かれるようになり、学級集団への連帯感が高まってきた。

集会後の感想に、ルール説明の係の児童が「私は目立つ役がとても苦手なのでとても心配しました。4年生の時になかなか言えずに近くの人に助けてもらったからです。今度は自分の力で自分の役を終らせたいと思いました。ルール説明の後『わかりましたか』とみんなに聞いたら、『わかりました』といってくれたのでほっとし、自信をもちました」と書いてあった。自分の役割を果たせたという充実感と有用感が自信につながっている。

### 3 学級活動の指導とその考察（その2）

#### 議題

「ドミノ倒しで一致団結！5の3思い出づくり集会を開こう」（小学校5年）

#### (1) 議題の選定と活動計画

本学級では、学級活動で「学級目標をつくろう」「学級のシンボルマークをつくろう」「学級の合い言葉を決めよう」「なかよしタイムをつくろう」などを話し合う中で、学級集団としての意識や実践への意欲を高めてきた。また、6月下旬には自然教室での体験を通して、みんなで協力する喜びを味わうなど、次第に学級集団としての結び付きが見られるようになってきた。

2学期になり、学級ポストに「クラス全員で何か一致団結する活動をしたい」「みんなの心が一つに楽しくまとまるように、みんなで遊びたい」「まだ5年3組でクラス集会をしたことがないので、集会をして思い出をつ

くりたい」という議題案が児童から出された。

そこで、計画委員会を開き、議題について話し合った。提案者の児童から、集会の内容について「ゲームや寸劇などのただのお楽しみ会のようなものではなくて、みんなの心が一つになれるような集会がしたい。」という意見が出された。ある児童がテレビ番組で見たドミノ倒しでがんばっている学級のことを紹介してくれた。そこで、それについて計画委員で情報をを集め、話し合いを行い、学級の全員で本議題を決定した。このように児童が議題選定までの過程を大切にしたのは初めてであり、これから本議題について話し合い、実践していくことは、児童の充実感や有用感、そして連帯感を高める上で意義深いと考えた。

### ア 事前の活動

児童の活動	教師の指導と援助 ☆評価	日時
1 学級会の議題について5の3計画委員会で話し合う。	○ 適切な議題を選び、学級全員の承認を得る。 ☆クラス全員が一致団結し、思い出になる内容を考えることができたか。	10月31日 星休み・帰りの会
2 5の3計画委員でドミノ倒しの資料作りをする。	○ ドミノ倒しについてインターネットを活用して調べる。 ☆友達と協力して資料作りができたか。	11月4日 星休み
3 集会の原案を作る。	○ みんなの心が一つにできる集会の内容を考える。	11月5日 星休み 帰りの会
4 話し合いの柱を決めて、全員に知らせる。	○ 話し合いの柱を決定する。	11月6日 朝の会
5 学級会ノートに自分の考えを書き、発表できるように準備をする。	☆ 自分の意見をもつことができたか。 ○ 一人ひとりの考えを認めるようにする。 *司会グループと学級会の進め方を確認する。	星休み
6 5の3計画委員会を開き、学級会の準備をする。		

### イ 本時の活動計画

話合いの順序	指導上の留意点
1 はじめの言葉	○ 大きな声で言えるように励ます。
2 議題の確認と提案理由の説明 ・話し合いのめあて、柱の確認	○ 計画委員が議題、話し合いのめあて、柱を説明する。 ○ テレビ番組「ドミノカップ2003小学生大会」の映像を流しながら、提案者に工夫して考えを伝えさせる。 ☆ 自分の意見をみんなに十分聞いてもらうことはできたか。(充実感) ○ 友達の考え方よさに目を向けることができるようとする。 ☆ 友達の意見をしっかり聞いたり、取り入れて発言したりできたか。(連帯感)
3 話合い ○ 柱1 班のお友達全員でつくるか、一人一人で作るか。	○ 友達の考え方よさに目を向けることができるようとする。 ○ 集会を成功させるために必要な役割・係を考えて意見を出し合う。
○ 柱2 集会が成功したときの思い出に残るイベントの仕方を決める。	☆ 自分の意見がみんなに認められ納得いく集団決定ができたか。(有用感)
4 先生から	
6 おわりの言葉	

### ウ 事後の活動

児童の活動	教師の指導と援助 ☆評価	日時
① プログラムを決め、仕事分担を確認し集会の準備をする	○ 各役割の準備ができるようか随時確認しながら本番に向けて準備ができるようにする	11月4日 朝の会 随時
② 「1・5年夢スポーツフェスタ」を行う。	☆ 集会のめあてに向かって進んで活動することはできたか ☆ 友達と協力して集会を運営することはできたか。 ☆ みんなといっしょに活動でき楽しむことはできたか。 ○ 1年生に積極的に関わり楽しく自分の役割を果たせるように励まし、援助する。 ☆ 自分の役割を十分果たすことはできたか ○ 自分たちの活動についての反省や感想を学級会ノートにまとめる。	11月15日 1時間
③ 活動の反省、感想を書く。	○ これからどのような集会活動をしていくのか話合う。	11月16日 朝の会
④ 今後の活動について話し合う。		11月17日 帰りの会

### (2) 「集団の一員として役割を果たす」ための具体的な手立てと考察

#### ◆ 集団決定を重視する（役割③）

##### 手立て 1

##### 試しの活動と話し合いの柱の決定

児童は、思い出に残る集会にしたいという思いは高まりつつあったが、ほとんどの児童がドミノ倒しについては友達から話を聞いた程度で、イメージが十分にもてず、ドミノ倒しをすることと学級の一致団結がどうつながるのか理解できていなかった。そこで教師の方でドミノを取り寄せ、実際にドミノを並べたり倒してみたりする試しの活動を行った。

第2回目の計画委員会では、学級会の話し合いの柱を決めるための話し合いを行った。集会に向けて、決めておかなければならぬことが数多くある中で、学級会でみんなと何を話し合えばよいのかを意見を出し合った。計画委員会の児童は、教師の助言をもとに、話し合いの柱を次のように決定した。

#### ・話し合いの柱 1

「班で約1000個のドミノを並べてつないでいくときに、班の全員で作るか。一人一人が作ってつなげるか。」

### ・話合いの柱2

「集会が成功したときの思い出に残るお祝いの仕方を決めよう。」

#### ◇ 考察

試しの活動を行うことで、児童は、学級のみんなで一つのものを作り上げていく楽しさやちょっとしたことすぐに壊れてしまう難しさなどドミノ倒しの魅力に気付くことができた。そして、集会への期待感を更に膨らませ、話合いに具体性が出てきた。

計画委員会での話合いで、班でどのようにドミノを並べていくかが問題となり、そのことを話合いの柱とした。

また、この集会を一致団結の思い出として残すために工夫できることを考えることを2つ目の話合いの柱とした。事前の活動が十分でなかつたり、教師主導で進められたりする話合いは、とかく合理的、効率的で確かに話し合う必要があるものではあるが、そこでの集団決定は児童にとってどちらでもよいということが多い。今回は、この他にも班毎に場所をどのように分けるか、必要な係とその分担をどのようにするかなど決めなければならないことは数多くあったが児童が試しの活動で感じたことや、こだわりを大切にし、全員で結論を出すということについて児童自身が重視することを大切にしたいと考えた。

その結果、本時は活発な話合いとなつた。

#### ◆ 集団決定を重視する（役割③）

手立て2

司会グループへの指導と

学級会個人ノートの活用

司会グループには、話合いの進め方のマニュアルを持たせ、自信をもって進行できるようにした。意見が分かれたときや意見が出なくなったりしたときには、小グループで話し合いを進めたり、みんなの意見が反映できる集団決定

になるようなアドバイスを行つた。

また、自分の考えを書いた学級会個人ノート（資料-13）を持ち、意見を言うことが出来るようにした。教師は、個人ノートを事前に読み、励ましの言葉を記入した。

#### ◇ 考察

司会グループの児童は、事前にマニュアルを見ながらリハーサルを行うなど意欲的に取り組む姿が見られた。

児童は事前の活動の中で、計画委員会からの説明を聞き、試しの活動を行い、自分の考えを個人ノートに記入することで、どの児童も積極的に発言する姿が見られ、たくさんの意見が出された。

資料-13 学級会個人ノート

月	日	5の3学級会「個人ノート」	TIME
黒板			備考欄
黒板用紙			
黒板		筆記用紙	
黒板		筆記用紙	
ノート用紙		話し合ラロ	用 四( ) 拡張
話し合の席で話し合つた内容 (役1)		自分の考え方(参考の場合は必ず可算にう)	
*		(役1について)	
(役2)		*	
*		(役2について)	
決まったことについて自分なりに書き留めること			
学級会「自己評議」			
1 自分の考え方を誰んで出せましたか? (○ □ △ × ×)			
2 実施方や実施範囲はどうでしたか? (○ □ △ × ×)			
3 各日の学級会の感想を書きましょう。			

#### ◆ 実践を目指した活動をする（役割④）

手立て1

集会に向けての役割分担と確認

集団決定したことをもとに、次に自分たちが何を行っていかなければならないかを判断し、実践に向けて役割を分担しながら全員で取り組ませるようにした。「本番には○○の

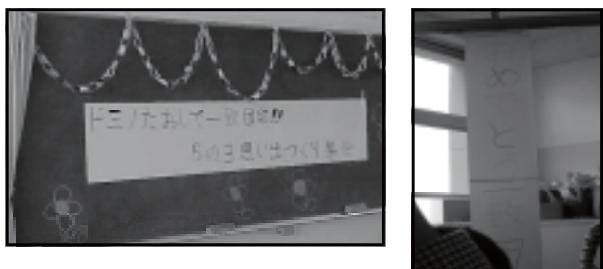
係を決めておかなければいけないね。」という児童の声をとり上げながら、朝の会や帰りの会で確認するようにした。

児童が必要だと考えた係は、会場飾りつけ係・盛り上げ係・場所割り係・ストッパー外し係・記念写真撮り係・ビデオ撮り係・司会進行係・スタート係であった。係の決定後は、仕事の状況を報告し合い、全員で確認しながら集会の準備を行った。（資料－14、15）

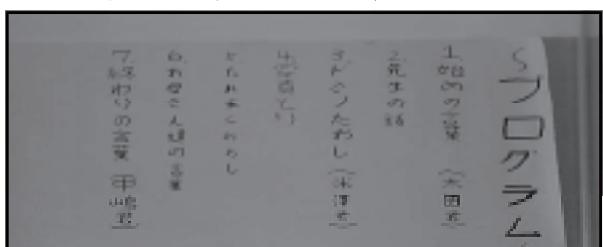
中休みや昼休み、放課後のちょっととした時間を見つけては、各係で打ち合わせをしながら熱心に準備を進める姿が見られた。

また、児童それぞれが並べ方を工夫しながら、6000個のドミノ牌を並べ、つなげるために力を合わせ取り組めた。（資料－16）

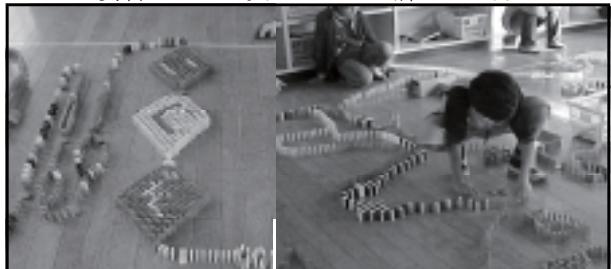
資料－14 かざりつけ係の横断幕や垂れ幕



資料－15 自分達で決めた集会プログラム



資料－16 工夫したドミノ牌の並べ方



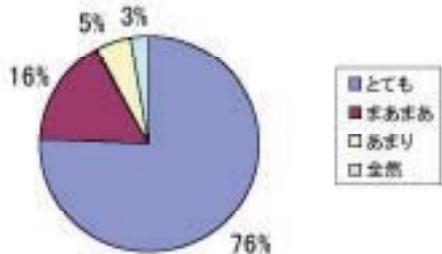
#### ◇ 考察

図－14は、「集会のめあてに向かって進んで活動することができましたか」、図－15は

「友達と協力して集会を運営することができましたか」、図－16は「自分の役割を十分に果たすことはできましたか」のアンケート結果である。できたと思っている児童は、どれも90%以上であり、高い数値を示している。

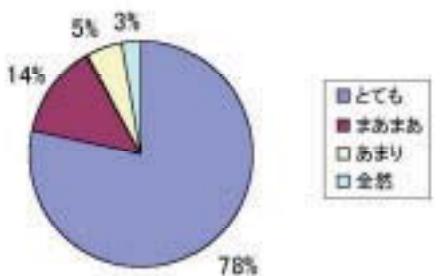
これらの結果は、これまでの手立ての成果として表れたものであるが、自分に任された役割を果たし、みんなに報告しながら仕事を進めていく喜びを感じ、自分自身への有用感を高めたこともその理由の一つだと考える。

(集会のめあてに向かって  
進んで活動することができましたか)



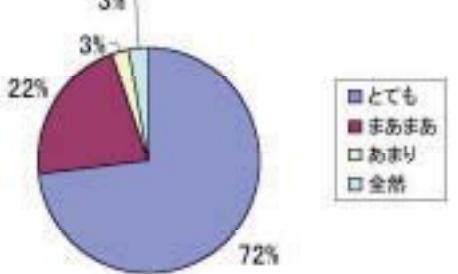
図－14 事後のアンケート結果①

(友達と協力して集会を運営することができましたか)



図－15 事後のアンケート結果②

(自分の役割を十分に果たすことができましたか)



図－16 事後のアンケート結果③

ドミノ倒し大会当日は、それぞれの係が責任をもって自分の役割をしっかりと果たしていった。（資料-17）全員で並べ、つなげた6000個のドミノが見事に倒れ、感動の体験を味わうことができた。思い出に残るお祝いとして、垂れ幕や紙吹雪、記念写真撮影を行い、仲間とともに目標が達成できた喜びを味わうことができた。

資料-17 司会進行役の児童



#### ◆ 活動を振り返る（役割⑤）

- 手立て 1
- 自己評価カードの活用

事前・事中・事後の活動後、自己評価カードに充実感・連帯感・有用感の3つの観点で4段階の評価を行うようにした。自由記述の欄には自分がんばったことを書くようにさせていった。

また、集会後に短時間ではあるが、活動を振り返る時間をとった。集会の目的が達成されたか、結果として一致団結し、学級の思い出として残ったか、次の集会に生かしていくべきことは何かなど、児童と一緒に振り返った。

#### ◇ 考察

集会後の児童の感想（資料-18）には、みんなと力を合わせ取り組めた充実感や、一致団結し、集会をやり遂げた達成感、そして、自分の役割を果たしながら思い出に残る集会にすることことができた有用感が表れており、自

分自身の自信へとつながっていることがうかがえる。

また、活動の振り返りを行うことは、児童の充実感・連帯感・有用感を高めると共に、学級集団としての高まりに気付かせ、更に高めていくとする意欲をもたせることにつながることが分かった。

資料-18 集会後の児童の感想

- 今日は5の3一致団結したと思います。いろいろなアクシデントがあったり、けんかしたり、本当いろんなことがありながら、あの一瞬でみんな一致団結したと思いました。また、5の3の終わりでドミノをして一致団結したいです。
- 少しとまつたりもしたけれど最後までいき、5年生最高の思い出になりました。きっと、最初で最後の思い出になると思います。いつまでも心に残るステキなステキな思い出です。みんなと心が一つになり、めあての一致団結になってよかったです。これからもこのような最高の思い出作り集会！したいです。
- とっても楽しかった。また、やってみたいという気持ちがおさえきれない。
- 今日は6000個倒しました。とっても楽しかった。ストッパーを取る時に、B班のが多く倒れてしまつたけど立て直しました。途中で何回も止まってしまったけど最後までしっかり倒れてとってもうれしかったです。「ドミノ倒しで一致団結！5の3思い出づくり集会」は私にとって大成功！

## 第三章 自己存在感をもつ特別活動の在り方 (研究のまとめと今後の課題)

### 1 研究のまとめ

本研究室では、児童一人一人が充実感、連帯感、有用感を高め、自己存在感をもつために、集団の一員として果たす5つの役割を考えた。

そして、それらを児童自身が自覚し、意欲をもって活動できるように、具体的な手立てを工夫し、実践を進めてきた。その結果、児童の自己存在感の変容がみられた。

## (1) 児童の自己存在感の変容

本研究室では6月と12月に児童に自己存在感に関する実態調査を行った。

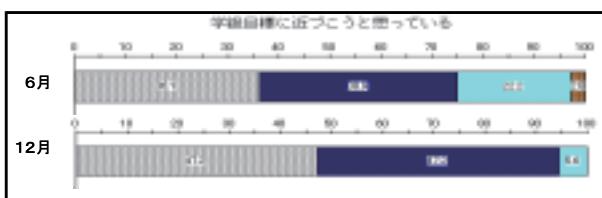


図-17 学級目標グラフ

図-17では、学校生活において児童が学級目標に近づこうと「いつも意識している」「ときどき意識している」と答えた児童が、6月は75%であったが、12月には95%に増加し、「ほとんど意識していない」と答えた児童はいなかった。



図-18 感動するくらいうれしかったこと

図-18では、感動するくらいうれしかったことについての問いで「いつもある」「ときどきある」と答えた児童が6月は約65%であったが12月には約95%に増えている



図-19 自分のことがわかってもらっている

図-19の自分のことがわかってもらっているかの問いには「いつもわかってもらっている」「ときどきわかってもらっている」と答えた児童が6月は65%から12月には95%近くまで増加している。

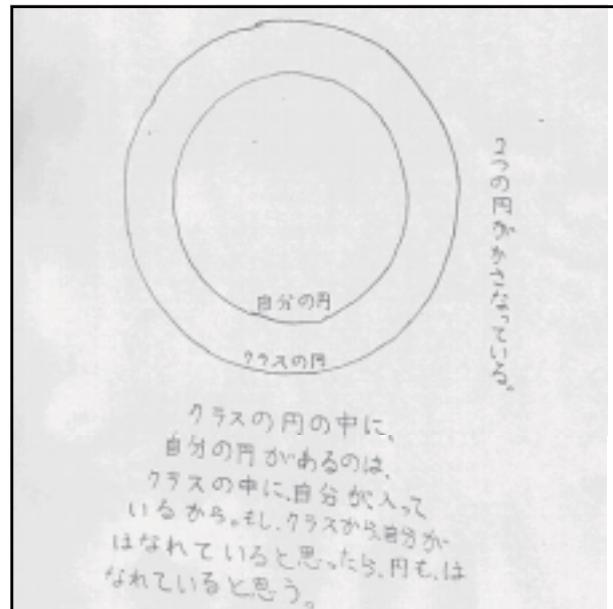
図-17, 18, 19の自己存在感に関する実態

調査の結果から、児童一人一人の充実感・連帯感・有用感が高まっていることが分かる。

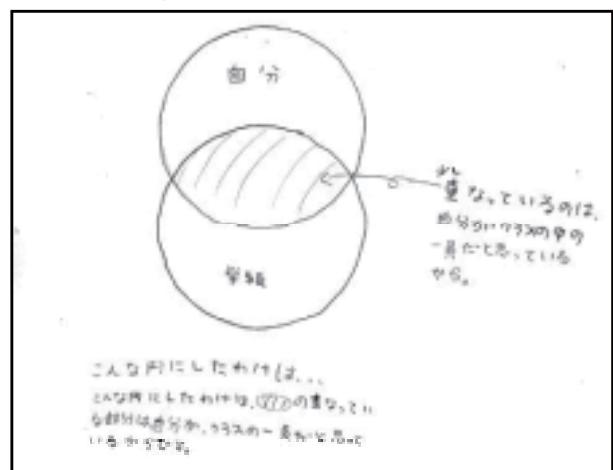
## (2) 自分と学級の関係イメージ図の変容から

本研究室では、自己存在感を見る様々な工夫の一つとして、6月と12月に「私と学級」という2つの関係を円で表す調査を行った。

資料-19 S児の6月イメージ図



資料-20 S児の12月イメージ図



資料-19（6月）では、その理由をS児は「クラスの円の中に自分の円が入っているのは、クラスの中に自分が入っていると感じているから。もし、クラスから自分が離れてはいると思ったら円も離れる。」と考えていた。

資料-20（12月）ではクラスと自分の円を交わった関係で表している。その説明として「重なっているのは自分がクラスの一員だと思っているから。」と答えていた。

このS児の自己存在感に関する調査結果をみると「学級目標に近づこうとしている」「感動するくらいやれしかったこと」「自分のことをわかつてもらっている」の問い合わせに対し3項目とも6月では「あまり思わない」と答えていたが、12月には3項目とも「いつも思う」と答えており、自己存在感が高まっている。

2つの円の関係から6月はクラスの中に自分は入っているものの、自分を理解してもらっているという意識は低く、自己存在感をあまりもてていなかつた。

12月には自分と学級の円が同じ大きさになり重なっている部分がある。クラスの一員という意識をもち、自分とクラスとの結び付きを強めた結果の表れではないかと思われる。

### （3）考察（研究の成果）

本研究室では児童が望ましい集団活動を通して集団の一員として役割を果たし、自己存在を感じ、高めていく特別活動の在り方について研究を進めてきた。その中で児童が集団の一員として果たす5つの役割を明らかにし、5つの役割を児童がしっかりと自覚し、集団活動を行うことで、充実感・連帯感・有用感が高まることが分かった。

この5つの役割は、裏返せば特別活動における教師の指導の視点であり、児童が集団の一員としての役割意識や関わりが薄ければ、教師は役割に気付かせ、役割を果たすことができるように指導することが必要である。自主性、主体性という言葉の下に教師が特別活動で指導すべきことを児童に任せてしまうことは避けなければならない。

児童の自己存在感を捉えるために、充実感・連帯感・有用感の3つの視点で、児童の活

動をみていくことは有効であることが分かつてきた。しかし、様々な視点から児童の自己存在感を捉えていくことが必要である。

資料-21のY児の感想からも読み取れるように、本研究の実践を通して集団の一員としての喜びを感じ、集団の中での自分の存在に気付き、生き生きとした学校生活を送ろうとする意識が児童の中に高まってきたことは大きな成果といえる。

### 資料-21 Y児の感想

私は学級会が好きです。私は発表はあまりしないけれど学級会が楽しいです。それは友達の発表を聞くことで人のいいところを見つけることができるからです。

発表を聞いて「あっ、この人こういう事すごいな、いいね。」と思えるからです。

例えば、Mさんは折衷案が出せるので人の意見を聞くのも上手なんだろう。また、Tさんは人の目を見てしっかりきいているからいいな、と思っています

先生がいっていたように人のいいところを見つけるのは楽しく心がうきうきするなと思いました。今度は私のいいところを見つけてもらおう、そう思って今度の学級会、発表をがんばります。これからもいい学級会ができるようにしていきます。

## 2 今後の課題

- 自己存在感を高める学級活動の年間指導計画と特別活動の他の内容との関連
- 特別活動における児童の自主的な活動への関わりと教師の指導性

## 3 研究へのコメント

本研究のテーマ「集団の一員として役割を果たし、自己存在感をもつ特別活動の在り方」というタイトルは一見地味だが、実は野心的な課題設定となっている。キーワードは3つ、「役割」「自己存在感」「特別活動」である。

ここで「役割」とは係活動といった狭義の概念ではなく、社会学でいう役割期待や集団におけるリーダー／フォロワーシップなど、関係性を示す包括的な内容を意図している。

第2に、自己肯定感や自己効力感ではなく、

所属感や帰属意識と通底する「自己存在感」の概念にここで着目したのは、「特別活動」が様々な集団組織を基盤とする活動だからである。経営組織論の知見を踏まえ、集団へのコミット度合いの検証方法として2つの円を用いたり、「自己存在感」の下位概念として、①充実感、②連帯感、③有用感を設定し、これらを5つのステージにおける役割論の中で具体的に検証したりするなど意欲的である。

また、これまでともすれば、子どもたちの「自主性・自発性」に委ねる余り機能不全の傾向にあった学級活動(1)を核としながらも集会活動や学校諸行事（本稿では割愛）など特別活動の全領域にわたって研究を展開している点はあって「特別活動の在り方」と命名している所以である。

こうした「特別活動」におけるさまざまな試みを通じて、子どもたちが「自己存在感」を高めていくことは、個（児童）と個（児童）、個（児童）と集団（組織）が自律的な関係となることを意味し、そこでは各人が協働して班や学級、校内の各集団の組織文化を支持的な風土へと変革する可能性さえ期待できる。それゆえ特別活動研究の進展は「信頼される学校教育の確立」に向けての力強い推進力となるだろう。

(九州大学 元兼正浩)

---

#### (引用文献)

---

- 1 中川 昭則 小学校特別活動の特質と指導 文溪堂 (平成8年)

---

#### (参考文献)

---

- |               |                   |                |
|---------------|-------------------|----------------|
| 1 文 部 省       | 小学校学習指導要領解説 総則編   | 東京書籍 (平成11年)   |
| 2 文 部 省       | 小学校学習指導要領解説 特別活動編 | 東洋館出版社 (平成11年) |
| 3 指定都市教育研究所連盟 | 子どもの社会認識をさぐる      | 東洋館出版社 (平成9年)  |
| 4 内藤勇次 編著     | 生きる力を育てる          | 東洋館出版社 (平成4年)  |
| 5 カール・レーヴィット  | 人間存在の倫理 (佐々木一義訳)  | 理想社 (昭和47年)    |
- 

#### 共同研究者

- 天野 裕二 (主任指導主事)  
砥上 美保子 (柏原小学校教諭)  
穴井 仁人 (別府小学校教諭)

#### 研究指導者

- 元兼正浩 (九州大学大学院助教授)



平成16年度  
研究紀要  
(第699号)

G 11-01

## 自発的、自治的な活動を通して 実践的な社会性を育てる特別活動の在り方

特別活動の中で児童が実践的な社会性を高めていくためには、人間関係を作る力と自ら役割を果たす力を持つ活動が大切である。本研究室では、気付く、決定する、実践していく、新たな課題を見つけ出す4つの活動場面において、児童の自発的、自治的な活動を促し、援助を行った。その結果、自主性、他を思いやる協調性、実践性、創造性が高まり、実践的な社会性をもつことが明らかになった。

## 目 次

### 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

1	主題設定の理由	21
(1)	なぜ実践的な社会性なのか	21
(2)	特別活動における実践的な社会性のとらえ方	22
(3)	実践的な社会性を育むための視点	22
2	研究の目標	23
3	研究の仮説	23
4	研究の内容と方法	23
(1)	自発的、自治的な活動とは	23
(2)	自発的、自治的な活動を通して 実践的な社会性を育む活動を展開するために	23
5	実践的な社会性を育む学級モデル図	24

### 第Ⅱ章 実践的な社会性を育む特別活動の指導の実際

1	学級活動の指導とその考察	25
	事例 1 「1, 5年でA小パワーアップ」（小学校5年生）	25
	事例 2 「思い出に残る出し物をしよう」（小学校5年生）	30
	事例 3 「『学校パワーアップ大作戦』を決めよう」（小学校6年生）	35

### 第Ⅲ章 研究のまとめと今後の課題

1	研究のまとめ	39
(1)	児童の実践的な社会性の変容	39
(2)	人間関係－役割の相関図の変容	41
(3)	考察（研究の成果）	41
2	今後の課題	41
3	研究へのコメント	42
	引用・参考文献	43

## 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

### 1 主題設定の理由

#### (1) なぜ実践的な社会性なのか

佐世保の小6女児同級生殺害事件など社会を驚愕させる痛ましい事件が近年続いている。原因は様々であると考えられるが、人間関係の希薄化も要因の一つとしてあげられている。

児童の生活現状に目を向けると、集団体験や自然体験、生活体験が不足し、自己中心的な面が顕著になるとともに、人間関係をつくる力の低下による様々な事象が社会問題となっている。学校においては、このような状況を開拓し、児童に生きる力を育成することを基本的なねらいとして、豊かな人間性や社会性の育成を図っていくことが強く求められている。

ここで求められる社会性とは、単に、すでにある社会にうまく適応できていること、社会に適応してやっていけるさまざまな知恵や技術を身につけていることなど、やるべきことをそつなくこなし、他のメンバーとの人間関係もうまくやっていけるといった社会への適応に重点を置いたものではない。「主体的に好ましい社会を構想し、作り、運営し、改革していく意図と能力、そのための日常的な活動を含めた意味」（門脇1999）で社会性をとらえることが必要である。

つまり、所属する集団にただ順応することだけではなく、自分を確立し、主体性と協調性をもって集団とのよりよい人間関係をつくりだしながら、集団をよりよい方向に変えていくために自分が果たすべき役割をしっかりと自覚し、責任をもって積極的に取り組もうとする実践的な社会性を身につけていくことが求められているのである。

本研究室が小学校5年生を対象に実施した2つの調査項目、「学級の仕事を最後まで責任をもってする」と「友達のよいところを互いに

いに言う」について、図-1のようにクロス集計を行った。その結果、「友達のよいところを互いに言う」の項目で「いつも言う」と回答した児童の全員が「学級の仕事を最後まで責任をもってする」の項目に「いつも責任をもってする」と回答している。逆に、「友達のよいところを互いに言う」の項目に「言わない」と回答した児童の中で「いつも責任をもってする」と回答したのはわずか20%であり前者と大きな差が見られる。図-1からは、友達のよいところを言う児童ほど、責任をもって仕事をする割合が高くなっていることが分かる。



図-1 「学級の仕事を最後まで責任をもってする」  
×「友達のよいところを互いに言う」  
(市内小学校5、6年生 264名 H16.6実施)

ところが図-2のように、学級生活の中で友達のよいところを互いに言うことが「ない、あまりない」と回答した児童が全体の6割を超えて、互いのよさについて伝え合い、よりよい人間関係をつくろうとする日常的な活動が十分とは言えない状況である。



図-2 友達のよいところを互いに言う

このように、実践的な社会性を育成するためには、よりよい人間関係をつくりだそうとする力との関連が深いことが分かる。しかし、学校教育においてよりよい人間関係づくりを意図した様々な取組が必要であることは多くの教師が共通に認識しているところであるが、特別活動をその中核的な教育活動としてとらえ、そこに重点を置いて指導に当たろうとする教師は多いとはいえない。

## (2) 特別活動における実践的な社会性のとらえ方

学校教育において社会性の育成に関する直接的な指導領域は、特別活動である。その特別活動は、望ましい集団活動を通して、個人的な資質とともに、社会的な資質の育成を目指している。ところが、集団としてのまとまりに力点がいき過ぎ、児童の独自性とか思い願いなどが十分に生かされていなかったり、逆に、個性を生かす教育の強調によって集団活動という特別活動の特質が失われていたりする実態も見られる。

特別活動の充実に当たっては、児童一人一人が集団に埋没しないような主体性を重視するとともに、それぞれの考え方の違いや多様性を認めながら共によりよいものをつくりだしていくこうとする実践的な社会性をしっかりと身につけさせることが大切である。そのためには、特別活動の指導原理である望ましい集団活動としての実践を基盤としなければならない。

また、小学校指導要領解説特別活動編では、「豊かな社会性を身につけるためには、<sup>①</sup>児童が互いの特性を認め合う中で、<sup>②</sup>与えられた役割を自覚し、責任をもって仕事を果たす必要があるのであり、そのような経験を積み重ねることが大切である」と述べている。下線①は人間関係をつくり出す力、下線②は役割を見いだし果たす力であり、本研究室の実践的な社会性と一致するものである。

前文科省視学官の宮川氏は「学級活動(1)においては、自分もよく、みんなもよいという実践目標を決める話し合いの体験を児童に積ませ、自分たちの力でよりよい人間関係や学校、学級生活をつくりだせるようになることが大切である」と述べている。「自分もよくみんなもよい」の中には、互いのよさを出し、尊重し合い、折り合いをつけ、納得するよりよい決定がそこにある。その結果、学級集団の中での自分の役割が自覚でき、その期待に応えようとする活動が一層活発になり、学級をよりよいものにしていくとする積極的な態度、すなわち実践的な社会が育つのである。

## (3) 実践的な社会性を育むための視点

これまで述べてきたように、実践的な社会性は集団への適応面だけでとらえるのではなく、自他のよりよい関係をつくり、集団の中で自己を生かす能力や態度が大切である。

そこで、本研究室では特別活動の4つの内容の内、学級活動に視点を当てることにした。特に自発的、自治的な実践活動を特質とする活動内容(1)において、以下のような視点で実践的な社会性をとらえ、実践的な社会性を育む特別活動の在り方を探ろうとした。

### ○「人間関係をつくる力」

自他を尊重し、協調しようとする力

### ○「役割を果たす力」

よりよい生活を創るために、役割を果たし、活動を成し遂げたり、更に広げようとする力

## 2 研究の目標

児童が人間関係をつくる力、自ら役割を果たす力を高め、実践的な社会性をもつために自発的、自治的な活動を進める教師の支援、援助の在り方を明らかにする。

### 3 研究の仮説

特別活動において主体性を發揮し、他との関わりを大切にした自発的、自動的な活動を設定すれば、人間関係つくる力、役割を果たす力がより高まり、実践的な社会性を身に付けた児童が育つであろう。

### 4 研究の内容と方法

#### (1) 自発的、自動的な活動とは

自発的とは、自ら進んで、自ら問題意識をもつこと。自動的とは、自分の所属する集団による民主的な手続きによって決定した総意に基づいて教師の支援や援助を借りないで行動すること。

つまり、自発的、自動的活動とは、児童自らが学級生活の問題を発見し、それを解決するために、進んで話し合い、組織のもとに計画を立て、友達と協力して実践を通して解決を図り反省や評価も自分たちの手で行うことである。

自発的、自動的な活動を通して次のような児童の育ちを目指すことができる。

- ・ 自分の個性（よさ）を生かし、自己実現を図るためにどのような行動をしたらよいかを体験を通して考え主体的に判断することができます。
- ・ 友達と協力して問題解決のために積極的に努力するとともに結果についても責任をもつことができる。
- ・ 集団生活の充実や向上のために必要な仕事や役割を分担し最後まで根気強く実践することができる。
- ・ 自分が所属している集団へ所属感や連帯感及び集団の一員としての自覚の上にたって行動することができる。

今回の改訂で児童の自発的、自動的な活動が一層活発に行われるようになるとある。各自分が集団の一員としての役割を担いその責任を果たすなどの活動を通して、係の活動や集

会活動、生活をよりよいものに工夫するなど、いわゆる生活の諸問題の解決に学級の全員で協力して取り組むことを重視するということである。また、計画委員会や係の組織編成が児童の話し合いの下に行われるようになるとともに、そうした組織活動を通して集団活動の活発化をめざしている。

#### (2) 自発的、自動的な活動を通して実践的な社会性を育む活動を展開するために

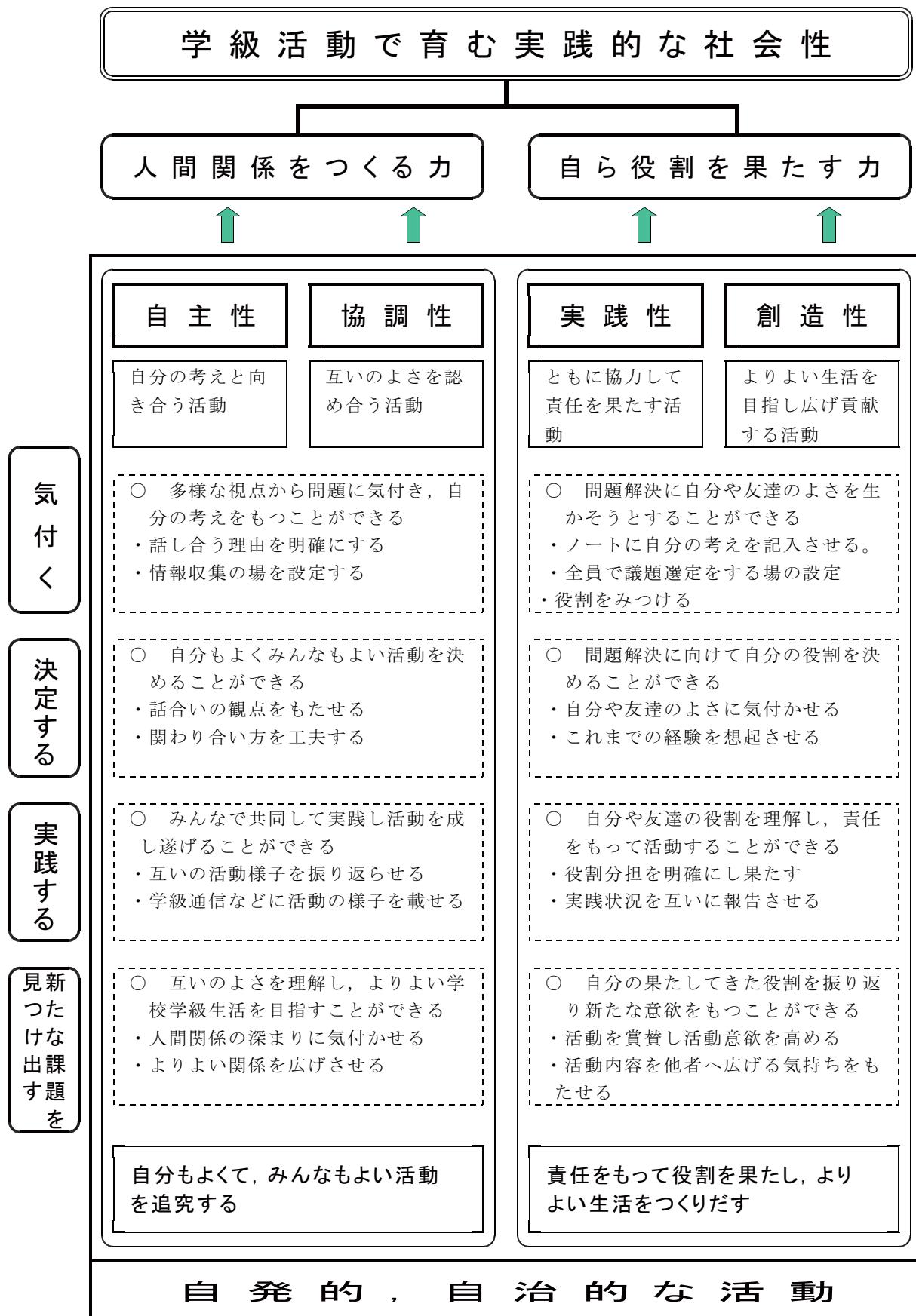
自発的、自動的な活動を通して実践的な社会性を育むためには、以下のような活動になるように見通し、展開していく教師の役割が重要である。

- ①自分のよさ、友達のよさに気付く活動を重視する
- ②自分もみんなも生き生きと輝く集団活動を重視する
- 個を育てる集団活動であるとともに集団の一員としての自覚をもった個の育成も必要である。
- ③組織づくり、役割分担等、集団としての機能を發揮する活動を重視する。
- ④自分の力、自分たちの力で活動を成し遂げた体験を重視する。
- ⑤集団活動の楽しさ、素晴らしさを体得する活動を重視する。
- ⑥自己の課題、学校学級の課題を見いだす活動を重視する。

これらのこととを学級活動(1)の指導過程の各活動場面に位置付け、児童の発達段階や実態に応じて適切な指導、援助を行うことが大切である。

次に示す実践的な社会性を育む学級活動のモデル図は、それを示したものである。

## 5 実践的な社会性を育む学級活動のモデル図



図－3 自発的、自治的な活動を通して、実践的な社会性の基盤となる「人間関係をつくる力」と「自ら役割を見つける力」を育むモデル図

## 第Ⅱ章 実践的な社会性を育む特別活動の指導の実際

### 1 学級活動の指導とその考察

#### 事例 1

##### 議題

「1, 5年でA小パワーアップ」  
(小学校5年)

#### (1) 議題の選定と活動計画

本学級は「笑顔いっぱい、やる気いっぱい、きずないいっぱい」を目指して活動している。学級会でもこの目標の達成に向け、学級計画委員会（学級会係、提案者、司会グループ）を組織し、話し合い活動を行っている。

本学級は1学期、1年生と本の読み聞かせを行ったり雨の日クラブに1年生を呼んだりしてきた。

2学期になって1年生と何かもっとしていきたいという気運が高まり、学級ポストに「1年生と何か一緒に学校のためにしたい」「学校を美しくしていきたい」という議題案が出された。そこで、計画委員会で議題候補の選定をして本議題をみんなで決めた。

学校の今の現状をよりよくして少しでも過ごしやすく楽しい学校に自分たちの手でしていこうとするこの議題は、実践的な社会性を育てることにつながると考えられる。

本議題の「1, 5年でA小パワーアップ」で、1年生と一緒に計画委員会を開き、1年生の意見に耳を傾け、よりよい学校づくりの参画を意識させる。自分の考えをもち、よりよい学校を考えて友達の意見と折り合いをつけながら話し合っていき、活動が決まったら、それぞれに合った役割を分担し実践していくように支援していく。この議題で、共通の目標を達成できる喜びを味わったり、仲間と共に活動する楽しさを味わったりすることは

本学級目標を達成することにもつながる。さらに代表委員会など外に向けて自分たちの考えを提案していき活動することは、実践的な社会性をもつことができると考えられる。

#### ア 事前の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助	日時
1 学級会の議題について計画委員会で話し合う。	○ 適切な議題を選び学級全員の承認を得る。	9月17日 昼休み・帰りの会
2 1, 5で計画委員会を開き1年生にアンケートをとる。	○ 記入の仕方など一年生にわかるように説明する。	9月15・16・17日 中・昼休み
3 1年生と一緒に学校の課題を見つける。	○ よりよい学校をめざして1年生と一緒に学校を回る	9月17日 中休み・昼休み
4 全員でアンケート結果のまとめをする。	○ 1年生や5年生のアンケート結果をわかりやすくまとめて、みんなにパワーアップの内容を意識づける。	9月17日 昼休み
5 掃除、あいさつ、集会の原案を作る。	○ 話合いの柱を決定する。	9月16・17日 中休み・昼休み
6 話合いの柱を決めて、全員に知らせる。	○ 3つの観点を意識させる	9月28日 朝の会
7 学級会ノートに自分の考えを書き、発表時の具体的物の準備をする。	○ 一人一人の考えを認めるようにする。	9月29日 朝の会
8 計画委員会を開き、学級会の準備をする。	○ 司会グループと学級会の進め方を確認する。	9月30日 朝の会

#### イ 本時の活動計画

話合いの順序	指導上の留意点
1はじめの言葉	○ 大きな声ではっきり言うように伝えておく。 ○ 自分のめあてを紹介し、がんばろうという気持ちを高める。
2司会グループの紹介	○ 計画委員が全校をパワーアップしていくよさをみんなに伝える。
3議題の確認と提案理由の説明話合いのめあて、柱の確認	○ 原案の説明を思い出しながら、パワーアップのそれぞれのよさ、工夫する点を出し合う。
4話し合い	○ 友だちの考えのよさに目を向けることができるようになる。 ○ 2つの観点①全校のためになること②1, 5年で一緒にできること③継続できることを考えながら発表したり聞いたりできるようになる。 ○ 提案者は3つ目の観点として長く続けられることをもっておき、意見が分かれたときはこの観点を出す。
柱① 1・5年柏原小パワーアップ活動のよさを出し合おう、工夫しさらによくしていこう。	○ 友だちの考えのよさに目を向けることができるようになる。
柱② あいさつ・掃除の課題を解決する方法やさらによくする工夫を出し合おう。	○ 1, 5年で一緒にできること③継続できることを考えながら発表したり聞いたりできるようになる。
5先生から	○ 校長先生からのパワーアップ活動の意欲につながるような話をしてもらう。 ○ 計画委員会への賞賛をする。
6おわりの言葉	○ 元気な声と大きな拍手で終わる。

#### ウ 事後の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助 ☆評価	日時
① 仕事分担を確認しパワーアップ活動の準備をする。	○ 各役割の準備ができているか、隨時確認しながらに向けて準備ができるようにする。	10月4日 朝の会 随時
② 「1・5年パワーアップ活動を」を行う。	○ 1年生に積極的に関わり楽しく自分の役割を果たせるように励まし、援助する。	10月12日 朝の会 随時
③ 活動の反省、感想を書く。	○ 自分たちの活動についての反省や感想を学級会ノートにまとめる。	10月30日 朝の会
④ 今後の活動について話し合う。	○ これからどのような1・5年パワーアップ活動をしていくのか話し合う。	11月5日 帰りの会

## (2) 実践的な社会性を育むための具体的な手立てと考察

今回は以下の3つの活動場面において手立てをうち、実践的な社会性を育むこととした。

- ① 問題を進んで見つけ、気付く活動場面
  - ② 協調性をもち、決定する活動場面
  - ① 人間関係を深め、実践していく活動場面

#### ① 問題を進んで見つけ、気付く活動段階

## 手立て 1 (事前)

- ・ 学級全員でアンケート結果を整理する場を設定する。
  - ・ 1, 5年生一緒に全校を回り課題を見つけ資料を掲示する。
  - ・ 校長先生からの励ましを聞く場を設定する。

まず、1, 5年生で一緒にやりたいパワーアップのアンケート結果を学級全員で整理する場を設けた。（資料-1）

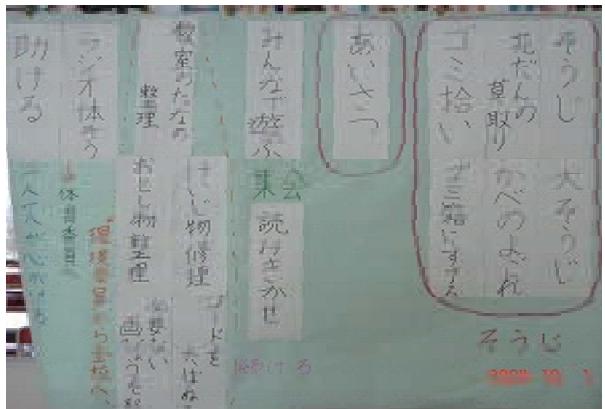
一人一人の考えを大切にしてまとめていき、あいさつと掃除に整理されたことを学級で確認した。現状をよく知るために、1、5年生と一緒に学校を回り、足と目で学校の実態を情報収集した。（資料-2、3）

中休み前と掃除後に校舎のゴミ情報を収集し、校舎配置図に記入していった。中休みに気づいたことを水色の紙に、掃除後に気付いたことをピンクの紙に「2階の階段のすみに綿ぼこりがあった」「掃除後なのに廊下に小さい紙が落ちていた。」などと書いていった。

資料をいつもみえるように教室に掲示した。  
(資料-4)

また校長先生より学校をパワーアップしようとすることについて期待していることを話してもらうことによって児童の意欲を高めようとした。（資料-5）

## 資料－1 アンケート結果を整理した模造紙



## 資料-2 1, 5年生で全校のごみの情報収集



### 資料-3 1, 5年生一緒に資料づくり



#### 資料-4 校舎のゴミの情報収集をまとめた模造紙



## 資料－5 校長先生の言葉

校長先生がこの学校に来たとき皆さんには3年生でした。その時校長先生が「お手伝いしてくれる」と頼んだら皆さんは快く引き受け一生懸命にお手伝いをしてくれました。毎日毎日来て手伝ってくれる校長先生は大助かりしました。みんなの優しい気持ちに感激しました。今は5年生です。誰から言われるのではなく、自分たちで自主的にA小学校のためになることをみつけてやってほしいと思います。あなたたちなら、やれると期待しています。上級生の素晴らしい姿を全校に見せてください。

### ◇ 考察

今までではアンケート調査の整理などは計画委員会でてきていたが今回学級全体で行うこと、自分が書いたアンケートが大切にされ、どのようにまとまっていくのか経過を見ることができた。それによって、パワーアップ活動がなぜ、掃除になったのか、なぜ、落し物の整理が消えたのかが全員が納得いく整理の仕方となった。また、1、5年一緒に情報収集では1年生に「学校のどこにゴミが落ちているかさがしにいこう」「トイレの中もよく見て回ろう」など積極的に声をかけながら学校を回ることによって、自分から話しかけコミュニケーションを取ろうとする姿が見られるようになってきた。

情報収集の回数を重ねることによって、学校全体をみていくようになり、上級生としての意識が芽生えた。さらに、1年生と一緒に情報収集することは低学年の目の高さに気付くことができ、他の学年の感じ方や考え方を大切にしていこうとする、人間関係をつくる力につなげていく上で有効であった。

校長先生からの話を聞くことで、期待に応えていきたい、A小をパワーアップしたいという気持ちをさらに強め、活動の価値に目を向け、自分たちで解決していく問題として捉えさせる上で有効であった。

### ② 協調性をもち、決定する活動場面

#### 手立て2（話し合い活動）

- ・課題性、相互性、現実性の3つの観点をもつ。
- ・集団決定を工夫する。

話し合いの観点は課題性、相互性、現実性、から教師と計画委員会といっしょに作っていく。本学級活動の話し合いでは

- 全校がよくなるもの（課題性）
- 1、5年生一緒にできるもの（相互性）
- 継続できるもの（現実性）

の観点に基づいて、あいさつ・掃除のよさや課題について話し合った。

話し合いの柱1では、あいさつ・掃除のよさを出し合い、活動の価値を出し合った。柱2では、あいさつ、掃除を全校に広げるための問題点や解決方法のアイデアを出し合い、付加修正しながら話し合った。

（資料－6、7、8、9）

#### 資料－6 話合い活動の板書



#### 資料－7 話合い活動で出された発言

	あいさつ	掃除
よ さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生と一緒に挨拶をすると絆が深まる。</li> <li>・1年生からかわいい挨拶をされるとみんなうれしくなり笑顔が出てくる。</li> <li>・挨拶された人、した人が明るくなる。</li> <li>・正門に立って声かけをしたら他の学級の人も</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見た人が気持ちよくなるのは全校のことを使ってる。</li> <li>・学校がきれいになり、みんなすっきりして勉強に集中できる。</li> <li>・1年生と一緒にすると絆が深まる。</li> <li>・ごみを僕たちが拾っていると何かなと思い、見た</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進んで立ってくれるかもしれないで全校に拡がるのではないか。</li> <li>・話さない人から挨拶をされたら話すきっかけになる。</li> <li>・みんなが進んで挨拶をすると学校中が元気になれる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人もゴミを拾う気持ちになる。</li> <li>・きれいにしているとみんな生活しやすくなる。</li> <li>・きれいにしたら全校のみんながゴミを捨てない。</li> </ul>
全校に広げる方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通に立っていたら遊んでいると間違われるから腕章やバッヂを付ける。1年生も喜んで立って挨拶できると思う。</li> <li>・7時55分から挨拶をする。8時前にくる人もいるからより多くの人に挨拶ができる。</li> <li>・ローテーションを組んで門に立つ。</li> <li>・立つ場所は正門。人がいっぱい集まるところだから。</li> <li>・1年生があまり早く来るのは危ないから5年生が1年生を迎えて一緒に挨拶する。</li> <li>・8時20分まで。30分までだと朝の会に遅れる。</li> <li>・人が一番登校してくる時間帯がいい。</li> <li>・正門やバルーン広場もいいけど確実に人が通る靴箱がいい。</li> <li>・校舎内を歩き回って会った人に挨拶をする。</li> <li>・立つ場所のところに立つ人の名前を書いておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝のうち、1人10個ではなく5分間学校を歩いてゴミを拾う。その方がいっぱい取れるから。</li> <li>・10個拾うことを毎日続ける。</li> <li>・朝にゴミ拾いタイムをつくっては。5分位がちょうどいい。</li> <li>・毎日続くか分からぬので週に3回</li> <li>・ゴミがあったら拾うと書いてたけどゴミを落とさない工夫もしたらしい。</li> <li>・きれいなだけじゃなく机の整理とか掃除箱の中とか靴箱とか見えないところもある。</li> <li>・ひとがあまり通らないところもある。</li> <li>・中休みの10分位に1年生と一緒に拾う。</li> <li>・ゴミは人を落としたゴミなので落とさないポスターを作って知らせる。</li> <li>・パワーアップするには恒に心がけておき自分から見つけて拾う。</li> <li>・挨拶に行くときにゴミを拾う。</li> <li>・小さいことから始める。</li> <li>・1, 5年一緒に学校を回り中休みに30個拾う。</li> </ul>

資料－8 児童の意見を隣の児童が代わってノートを見ながら発言しているところ



資料－9 具体物をもって説明をする児童



その後、あいさつと掃除のグループに別れ、出された発言からどれを取り入れるかを話し合っていった。（資料－10）

資料－10 グループに分かれて話し合っている場面



#### ◇ 考察

観点をもって話し合いをすることによって何を中心に話さなければいけないかを学級全員が意識できた。また、継続できることを観点に話し合っていったので具体的な活動をイメージしながら「自分が実際に活動するには」という気持ちをもって話合いに臨めた。

このことは、実践的に自分がどのような役割を今からしていこうかと考えることができ、自ら役割を見つける力につなげて行く上で有効であった。しかし、観点を前面に出しすぎ、児童の思考を狭めしたことにもなった。

原案を付加修正する話合いをもつことによって、一人一人の考えのよきが出され成就感

を味わわせることができた。（資料－11）また、友達と協力してたくさんの考えを出してよりよいものにしていくこうとする協調性を高める上で有効であった。（資料－8）これは、人間関係をつくる力につながっていったと考えられる。しかし、児童が付加修正をする話し合いの経験が不十分だったため、出されたたくさんの考えを融合し練り上げるには至らなかつた。今後も様々な話し合いの形態や方法の経験を積んでいく必要がある。

資料－11（話し合い後の児童の感想）

今日の学級会でみんなが言った柱1のよいところで「ああ、こんな良いところが掃除やあいさつにあるんだな。」とパワーアップをする素晴らしさを実感しました。また、いつもよりたくさん意見が言えて楽しかったし自分が思つた考えと同じだつたりたくさんの人人がびっくりするような「なるほど」と思う発言をしたりしていたので感心しました。納得のいく決定になったのでこれからあいさつや掃除をがんばっていきたいです。

### ③ 人間関係を深め、実践していく活動場面

#### 手立て3（事後）

- ・役割分担の明確化をする。
- ・代表委員会を通して全校へ働きかけるようする。

掃除、あいさつとも役割分担表を作り、誰がどこで何をするのかを明確にした。人、立つ場所や時間見えやすい場所に掲示し帰りの会などで活動の状況を報告させることで活動の意識化を継続できるようにした。あいさつ運動と書いたメダルをかけたり、パワーアップバッジをつけたりすることで何をしているのかが全校のみんなに分かるようにし、低学年の活動意欲を高めようとした。

教師は朝の会、帰りの会で活動の様子を報告させ賞賛していった。また、先生方にも積極的に活動していることを激励してもらい継続の意欲付けを行つた。

活動を2週間続けた頃、自分たちの学級と1年生だけでA小をパワーアップするのではなく、全校に呼びかけよう、賛同者を増やそうという声が上がってきた。そこで代表委員会でパワーアップ隊の学級の活動を知らせ、「A小パワーアップ隊」を募った。（資料－12）すぐに3年生が9人入り、次の日からあいさつ運動に参加してくれた。徐々に他の学年もパワーアップ隊に入り今も一緒に活動しており、パワーアップ新聞を定期的に発行し全校に発信している。

資料－12 代表委員会に出したパワーアップ新聞



資料－13 あいさつ運動、掃除に取り組んでいる児童



## ◇ 考察

役割分担をはっきりともつことで責任感をもって自分の仕事を果たそうとするようになった。また、低学年の児童と一緒に活動するので「あいさつ運動に一緒にいこう」や「ここにもゴミが落ちているよ」「もっと笑顔で大きな声であいさつしようよ。」など声かけを自分からするようになり、他学年とのコミュニケーションを増やすのに有効な手立てであった。役割を明確にすることで、他の人にも働きかけようとする気持ちが強まり、あいさつなどを通して全校とよりよい関係をもちたいという、人間関係をつくる力を育てるにつながっていったと考えられる。

代表委員会を通じて全校への働きをすることで上級生としての自覚がますます深まり、自分の学校や友達に愛着をもって、自分たちの力で学校をパワーアップさせていかなければいけないという実践的な社会性を培うことにつながったと考えられる。（資料－14）

### 資料－14 活動の実際の児童の感想

- 私は掃除やあいさつを毎日しています。学校がきれいになっていることがわかります。最初はめんどくさい、やりたくないといっていた人もだんだん一生懸命やるようになりました。私たちは今まで学校のことなどあまり考えなかっただけでパワーアップ隊に入って学校をきれいにすることがどんなに大切なことか分かってきました。これからも掃除やあいさつ、全校のためにできることを考え自分から進んで何でもやっていきたいです。
- 私たちは今までパワーアップ隊を全校に広めるためにいろいろな事に取り組んできました。この前はパワーアップ新聞を全校に配りました。その他にもメダルをつけてあいさつしながら、みんなに「あいさつしてください」という気持ちを伝えています。私たちの努力の成果が出たのか、たくさんの方がパワーアップ隊に入ってくれたり、あいさつをする人も増えたりしました、学級目標の「笑顔一杯やる気一杯きずな一杯」が全校に広がっている気がしてうれしくなります。校長先生からも「5年生があいさつ運動を始めて他の学年にも広まってよかったです。さらに学校中に広がってあいさつが響きあうようにして下さい。」といつてくれました。1年生、2年生、3年生がいろんな人に自分たちからも呼びかけてくれたのがうれしかったです。みんなで努力して全校でパワーアップしていきます。

## 事例 2

### 議題

「思い出に残る出し物をしよう」

（小学校5年）

#### （1）議題の選定と活動計画

本学級は「心をひとつに」を学級目標に掲げて活動している。学級会でもこの目標の達成に向け、計画委員会（司会グループ、提案者）を組織し、話し合い活動を行っている。

議題の集め方としては、議題ポスト以外にも係向けのポストを用意している。係ポストを設置することで、問題解決に必要なクラスの役割分担を判断基準とすることができる。係に対しての質問や意見などは係ポストに入れようとしている。各係は、係活動の時間や休み時間等に係ポストを開き、場合に応じて話し合いや返事を書くなどしている。返事は、全員が見るように掲示している。また、係で解決できない場合は、係から議題ポストへ提案するようにしている。

学級会ノートに自分の考えを書き、話し合いに臨むことは、自分の考えと向き合う自主的な活動であると考える。また、よさを認め合い、折り合いをつけた話し合いを通して協調性も育つ。本学級会後、意欲的・計画的に活動することは、自らの役割を自覚し、協力しながら活動することにつながる。活動過程の中で生じた課題については、学級全員で解決することで実践性が高まり、自ら役割を見つける力が付くことにつながる。これらの活動を通して自分たちの手で最後までやれたという経験は、実践的な社会性を育てると考えられる。

本学級会は、自然教室3日目に計画されているキャンドルの集いの中で行われる各学級の出し物についての話し合いである。10月中旬の係活動の際、11月行事予定を調べていた児童が、自然教室での出し物のことを知り、議

題案としてポストに入れた。（但し、係からの提案ではなく、2名の児童による提案）計画委員会で議題候補の選定をした後、本議題を決定した。

学級のよさを出すための出し物を考えて決めるることは、自分の所属する集団を振り返ることができる。また、集団の一員として協力し、責任を果たす活動の工夫を行うことで、実践的な社会性を育てることができ、本議題は重要な意義をもつものと考えられる。

#### ア 事前の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助	日 時
(1) 提案を基に、学級活動ノートに自分の意見を書く。実行委員がアンケートを取り、集計し、まとめます。	○ 学級会の議題へ向けて、関心をもたせ意欲付けをする。 ○ 自分の考えをもって話し合いに参加できるように、自分の意見を学級活動ノートにまとめておくよう助言する。	10月14日 帰りの会
(2) 計画委員会を開き話し合いの柱とめあてを決める。	○ 話合いの柱、めあてや時間配分についての助言をする。	10月15日 昼休み
(3) 話合いの柱とめあてを全員に知らせる		10月18日 帰りの会

#### イ 本時の活動計画

話し合いの順序	指導上の留意点
1. はじめの言葉 2. 司会グループの紹介 3. 議題確認と提案理由の説明 4. 話合いのめあて、柱の確認 5. 話合い 柱○1 出し物を決めよう。	○ 話合いの際の観点を出し、友だちの意見のよさを見付けようとする聞きかたを意識付ける。 ○ 各グループからの提案。 ○ 学級活動ノートを利用して、自信をもって自分の意見を発表できるようにする。 ○ 相手グループのことを考える時間を設け、友だちの考えていることを推察する。 ○ 周囲の友だちと話し合う。
柱○2 計画的に進める係を	

決めよう。	合う時間を設け、よりよい意見を練り上げようとする場をつくる。 ○ 決まったことをまとめ、分かりやすく伝えます。
6. 決まったことの確認 7. 反省 8. 先生のお話 9. 終わりの言葉	

#### ウ 事後の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助	日 時
(1) 協力して準備をする。	○ 5年生同士協力し楽しさをもたらす意欲をもたせる。	随時
(2) キャンドルの集いの中で学級の出し物をする。	○ 自然教室キャンドルの集いを思い出に残るように、活動意欲を高める。	12月2日
(3) 活動の振り返りをする。	○ 録画したものを持ち、転校した友だちへ送り活動の振り返りをする。	12月20日

#### (2) 実践的な社会性をもつための具体的な手立てと考察

今回は以下の3つの活動場面において手立てをうち、実践的な社会性を育むこととした。

- ① 問題を進んで見つけ、気付く活動場面
- ② 協調性をもち、決定する活動場面
- ③ 人間関係を深め、実践する活動場面

##### ① 問題を進んで見つけ、気付く活動場面

###### 手立て 1（事前）

- ・ 係・議題ポストの設置と入っていたカードを掲示する。
- ・ 全員で議題選定をする。
- ・ 全員の考えを書いた紙を黒板に掲示し、整理する。

まず、議題ポストの中に入っているものを紹介し、どれが議題としてふさわしいか話し合って決めた。自然教室の出し物について話し合うことが決まったため、家族や6年生などに聞き、情報収集をしておくことを課題と

して与えた。

後日、全員の考えを知るために、それぞれが考える自然教室での出し物を紙に書き、黒板に掲示（資料-15）した後で、観点を2つ与え整理させた。

- 観ている人も楽しめるもの
  - 話合い後、計画的に行えるもの
- その結果、ウォーターボーイズ（創作ダンス）、CM特集、こわい話に絞られた。

資料-15 個人で考えた出し物の掲示



#### ◇ 考 察

1学期は、議題ポストの中から計画委員が議題を選定し、選ばれなかつた議題に関しては、個人的に議題カードを返していたが、この方法では、何を話し合いたいと考えている友達がいるかを全員が知りうることができない。そのため2学期に入り、議題ポストを2つ設け、1つは学級の係に対しての意見を入れる係ポスト。もう1つは学級で話し合いたいものを入れる議題ポストとした。係ポストに入ったものは、各係が返事を書き、ボードに掲示して、資料-16のように全員が見ることができるようにした。

資料-16 議題カードの掲示



議題カードを掲示することは、個人の考えを学級全員が知ることができ、認め合う関係が作られる素地となった。また、自主的な係活動が行われたり、議題選定の基準となったりするなど有効であった。

#### ② 協調性をもち、決定する活動場面

##### 手立て2（話し合い活動）

- ・ 観点をもたせた話し合いをする。
- ・ 自分の考えに応じた座席の移動をする。
- ・ 第三者（意思を決めかねている児童）からの意見を聞くようとする。

次に、本時の話し合い活動でも2つの観点をもとに話し合った。

- 自分も楽しみ、見ている人も楽しむことができる。
- 学級の心がひとつになることができる。

話し合いの柱1の出し物を決めようでは、2つの観点にもとづき、3つの提案（ウォーターボーイズ、CM特集、怖い話）のよさや課題について話し合った。（資料-17、18）

話し合いが進み、2つの提案（ウォーターボーイズ、怖い話）に絞られた時点で座席移動を行い、自分がよいと思う提案、または、決めかねている児童の合計3グループに別れ、話し合いを続けた結果、ウォーターボーイズを実施することに決まった。

資料-17 話合い活動の板書



資料-18 話合い活動で出された発言

	よ さ	課 題
ウ オ ー タ ー ボ ー イ ズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>練習している間に仲良くなれる。</li> <li>自分もみんなも楽しい</li> <li>自然教室で一番盛り上がる。</li> <li>嫌な人がいれば、司会などに回ればいい。</li> <li>学級の心がひとつになる。</li> <li>心がひとなればきっと完成する。</li> <li>全員できたら楽しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>することを嫌な人がいる。</li> <li>怪我をしたら危ない。</li> <li>練習中に怪我をしたら大変。</li> </ul>
C M 特 集		<ul style="list-style-type: none"> <li>自然教室に材料を持っていくのが大変。</li> <li>嫌な役がある。</li> </ul>
怖 い 話	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞いていると、びっくりしたりドキドキしたりする。</li> <li>オチを作ればいい。</li> <li>眠れなくてもいつかは寝る。</li> <li>ドキドキする気持ちは同じ。</li> <li>懐中電灯で仲良くなれる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>こわくて寝むれない人がいる。</li> <li>準備に一ヶ月もいらない。</li> <li>オチをしたらこわい話じゃない。</li> <li>心がひとつにならない。</li> </ul>

#### ◇ 考 察

観点をもって話し合うことで、話し合い後の活動計画や、自然教室での出し物を実施する過程での学級の変容を想定した話し合いを行う

ことができ、話し合い後の自主的、自治的な活動に結びついた。しかし、よさを出すことはできたが、自分の意見に固執するあまり協調できない児童もいた。話し合う中で生まれた問題点の解決策を出し合うことで、意見の収束を図ることができたのではないかと思われる。

話し合いの途中での座席移動は、どの児童がどの提案に賛成している・決めかねているのかを視覚的に認識することができた。また、グループ内での連帯感が強まり、意識の統一はできた反面、他グループとの協調性が低くなった。このとき、決めかねている児童からなぜ決めかねているかという理由を聞き、第三者的な意見を判断材料の一つとしようと考えたのだが、はっきりとした理由を引き出すことができず、一石を投じるに至らなかった。このことから、座席移動には大きな影響力があり、意見を変えるといった折り合いをつけにくい状況を生み出してしまったといえる。第三者的な意見を引き出し、有効に利用するためには、二者択一の話し合いでなく、A案、B案のどちらがよいかをC案に賛成している児童から聞くといった状況が必要であった。

#### ③ 人間関係を深め、実践する活動場面

##### 手立て3（事後）

- 役割分担に自他のよさを生かす。（経験、よさ、チャレンジ）
- 実践過程で生じた課題に対して話し合いの場を工夫する。

計画立てて実行していくために必要な係について話し合った後、それぞれのよさを生かせそうな係に所属した。係の中には転校した友達にビデオを送るための撮影係もある。

係・・・司会係、ダンス係、音楽係、振り付け係、撮影係

音楽係がいくつか選曲し、給食時間に学級に紹介して絞り込んだ。曲が決まり、振り付

けとダンスのメンバーが話し合いながら、まとめていった。

昼休みや放課後、休日などに練習した。

(資料-19) また、練習の様子をデジタルカメラで撮影し、本番に向けての撮影の練習も行った。

自然教室の出し物（資料-20）での経験を通じて、それぞれの役割を果たしながら作り上げていくことの難しさを振り返ること（資料-21）ができた。また、他の係との折り合いをつける話し合いを通して、他者との関わりを深めることができた。これらの経験が、個々のよさを生かしながら学級全員で作り上げたという実感につながった。

資料-19 放課後の様子



資料-20 本番の様子



#### 資料-21 自然教室後の振り返り

○ 1組、2組の出し物の時は楽しくみていたけどぼくたちの番になると、きん張してがちがちでした。

でも、全て間違いなくやれて、終わった後とほっとしました。キャンドルの集いを終わって、ぼくは、つらい時こそ仲間をたよるべきなんだと思いました。

○ 自然教室のダンスは、みんなで考えて、完ぺきにできていました。やっぱりできてよかったなあと思いました。本当に何でもきれいにやり通すととても気持ちいいし、何より楽しかったのが本当によかったと思いました。

#### ◇ 考 察

個人のよさを生かした係に所属し、自分の役割を認識することで、活動に対しての個々の意欲や自覚が高まり、休み時間や放課後などの空き時間を利用した自主的な活動につながった。

また、他の係への働きかけを積極的に行い、係間の連携が生まれ、協調性が高まったといえる。また、自分の役割を認識した活動の中で生まれてくる問題に対しては、他の係にお願いしたり、全員で話し合いの場を設けたいといった発言がでたりするなど、他者への積極的な関わりが生まれ、実践性が高まつたと思われる。

自然教室終了後に、ビデオを観て、活動の振り返りを行うことで、達成感を味わうことができた。また、転校した友達に編集したビデオを送るための活動は、他者を意識して伝えようとする活動となり、創造性が高まり、実践的な社会性を培うことにつながったと考えられる。

### 事例3

議題
「『学校パワーアップ大作戦』を決めよう」 (小学校6年生)

#### (1) 議題の選定と活動計画

本学級は、「仲良しで、心の広い、チームワークのある6年1組」を学級目標に活動をしている。学級会はこの学級目標を達成するための大切な話し合いの場として位置づけられ、計画委員会を組織し、話し合い活動を行っており、自分たちの手で話し合い活動を進めることに充実感をもっている。

9月に行ったアンケート調査「学級がもっとよくならないかな?」の集計結果をもとに本学級のみんなの思いを計画委員会で話し合った。「責任感がたりない。」「人任せになっている。」「協力がまだたりない。」等の意見がみられ、C小学校の最上級生として、まだたりない部分があるのではないかと言う意見が出された。そこで計画委員が帰りの会でアンケート調査の結果を示しながら、C小の最上級生としてあるべき姿に近づくような議題を募集した。集まった議題を計画委員で選定する中で、めあてをもって全員で取り組むことと、下級生(全校)を意識した活動をすることが、最上級生として必要ではないかということになった。そこで、1つの議題原案をもとに議題を練り直し本議題を決定した。

最上級生としてのあるべき姿を自覚し、それをめざすことで卒業へ向けての思いを高めるとともに、学校全体を見据えた活動を意識することができる。また、卒業までの間、一人一人が役割分担をして計画的に活動を継続することで、実践的な社会性を育てる上でも意義ある議題であると考えられる。高学年において、学級の枠を超えて、学校全体をよりよくしていこうとする活動は、児童の実践的・社会性の育成につながるものである。

#### ア 事前の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助	日時
1 学級会の議題について計画委員会で話し合う。	○ 事前に行った「もっとよくならないならないかな?」のアンケート結果を提示してみんなが学級会で話し合いたいと思っている内容を計画委員に伝える。	10月25日 星休み (中休み)
2 C小の最上級生らしい姿をめざすための議題を募集する。	○ アンケート結果から多くの児童が責任感をもったり、自主的に活動したりする姿を求めていることを伝えられるようにする。	10月25日 帰りの会
3 計画委員会で、集まった議題を選定し、議題に対する提案を考える。	○ 議題を選定した理由を全員に明確に伝えるようう助言し、事前に議題に対する提案を多く集められるようにする。	10月26日 星休み 帰りの会
4 議題に対する提案を3つに絞り、各グループで提案の価値をアピールする準備を行う。	○ 原案をしっかり練るようにする。 ○ 資料や具体物を作つて相手を納得させるような工夫ができるようにする。	10月27日 ~随時
5 話合いの柱を決める。	○ 2つの観点を意識させる。	10月28日
6 学級会ノートに自分の考えを書き、提案のよさをまとめる。		10月28日
7 計画委員会で学級会の準備をする	○ 学級会の進め方を確認する。	10月29日

#### イ 本時の活動計画

話合いの順序	指導上の留意点
1 はじめの言葉	○ 大きな声ではっきり言うようにする。
2 司会グループの紹介	○ 自分の役割のめあてを言いながら紹介し、がんばろうという気持ちを高めるようにする。
3 議題の確認と提案理由の説明、話合いのめあて、柱の確認	○ 最上級生としてあるべき姿に近づくことの重要性を説明し、話し合う意欲を高められるようにする。
4 話合い 柱1 各提案のよさや課題を出し合おう。 柱2 よりよい活動にしよう。	○ 相手に語りかけるように議題の価値をアピールできるようにする。 ○ 2つの観点①最上級生らしいもの②全校に広がるもの意識して話し合うようにする。
5 先生から	○ 計画委員や提案者への賞賛をする。
6 終わりの言葉	○ 元気な声と拍手で終わる。

#### ウ 事後の活動計画

児童の活動	教師の指導と援助	日時
1 役割分担をもとに実践する。	○ 意欲が持続するように適宜賞賛する。 ○ 役割を意識して責任をもつて活動できているか声かけを行う。 ○ 熱心に取り組み、達成感を味わえるように励まし、援助する。	11月8日 ~随時
3 活動をふりかえり今後の活動について話し合う。	○ 反省点を生かしてさらに充実した活動を考える。	適宜

## (2) 実践的な社会性を育むための具体的な手立てと考察

今回は以下の4つの活動場面において手立てをうち、実践的な社会性を育むこととした。

- ① 取り組むべき課題に気付く活動場面
- ② よさを認め合いながら協調して話し合う活動場面
- ③ 人にはたらきかける実践的な活動場面
- ④ 新たな課題を見つけ、活動を広げていく活動場面

### ① 取り組むべき課題に気づく活動場面

#### 手立て1（事前）

- ・ 学級の問題に気づく調査活動を行う。
- ・ めざす最上級生像をもつようとする。
- ・ 全員で議題選定を行う。
- ・ 議題選定までの流れを掲示する。

9月の始めに学級の問題点や改善点について目を向けさせるアンケート調査を行い、学級の課題に気付くようにした。また、計画委員がそのアンケート調査の集計結果をもとに学級として取り組むべき課題とは何かについて話し合った結果、最上級生としての自覚が足りないので、最上級生としての自覚をもつ必要があるのではないかという結論に達した。そこで、最上級生としてふさわしい姿に近づくことができるような議題を募集し、朝の会で全員で議題を1つに絞り込み、6年1組としてめざす最上級生像を明確にもたせるようにした。

また、計画委員が作成した議題選定までの足あとを教室側面に掲示した。（資料－22）

資料－22 議題選定までの流れ①



資料－23 議題選定までの流れ②



### ◇ 考 察

学期始めにアンケート調査を行うことで、1学期の活動をふりかえるとともに、2学期に取り組むべき課題を明確にもつことができた。また、計画委員がアンケートの集計結果をもとに最上級生としてのるべき姿を見いだし、議題を募集したことで、学級を超えて全校に広がるような活動を意識するきっかけを作ることができた。

さらに、計画委員だけではなく、クラス全員で議題選定することを通じて、各自がめざす最上級生像を明確にもつことができ、話合いに主体的に参加する素地を作ることができた。

これらの議題選定の流れを掲示することで、学級会に向けた意識を高めることができた。（資料－24）

資料-24 学級会コーナー



② よさを認め合いながら協調して話し合う活動場面

手立て 2 (話し合い活動)

- ・ 話合いの観点をもつ。
- ・ 話合いの形態を工夫する。

計画委員会で話し合いの観点として

- 最上級生らしい活動であること。
  - 全校に広げられそうなものであること。
- の2点を上げ、焦点を絞った話し合いが行われるようにした。

また、3つの原案（あいさつ運動を広める作戦、廊下を走る人を減らそう大作戦、学校中のごみを減らそう作戦）に対して座席を3ブロックに分け、原案ごとにプレゼンを行い、意見を深められるような場づくりをした。児童は原案のプレゼンテーションをもとに自分の考えをまとめ、それぞれの場所に移動した。

(図-4)

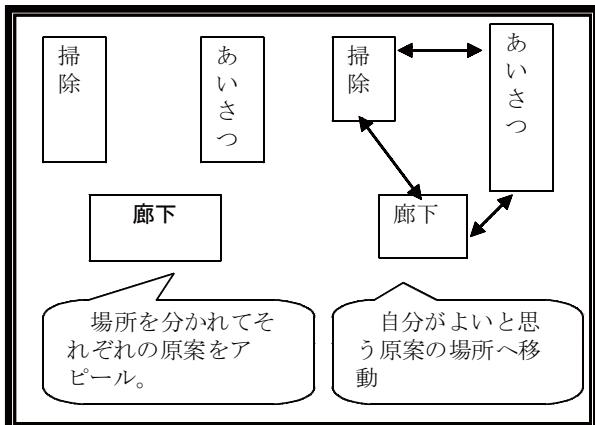


図-4 話合いの形態

◇ 考 察

話合いの観点を設けることで最上級生を意識した意見や、全校に発信することを目的とした考えが出された。学級目標をふまえた意見も出され、全校にかかわる実践を通して自分自身を高め、あるべき最上級生としての姿をめざそうという意欲を高めることができた。

また、原案ごとに座席を3つのブロックに分けプレゼン形式で話し合いを進めることで、各原案のよさや問題点を明らかにすることができた。（資料-25）

各原案のよさを認め合うことで、自分が支持した案が選ばれなくても、話し合いの内容に満足し、自主的に活動していこうとする意欲をもつことができた。（資料-26）

さらに、話し合いの過程で、自分が賛成する原案の場所へ移動して意見を深める活動を取り入れたことで、自分の意志をはっきりと示すことができ、学級全体の意見の流れを視覚的に捉えることができた。

ただ、実際に場所移動を行うと、その場に腰を据えてしまい、当初期待していた意見の流動的な動きや心の揺れを充分引き出すことができなかった。今後は実際に場所移動をするほかに、ネームプレート上で自分の考えを動かすなどの工夫も必要である。

また、複数の原案の中から活動を決める際に、話し合いの観点をもたせるという手立てを打ったが、話し合いの折り合いをさらにつけやすくするような手立てを講じる必要もある。

資料-25 プrezentをもとにした話し合い①



資料-25 プレゼンをもとにした話合い②



資料-27 正門でのあいさつ運動



資料-26 話合い活動のA児の感想

今日の話し合いで自分の案が通らなかったのは残念でしたが、みんなが真剣に話し合って、いい活動を選ぶことができたと思います。結局あいさつ運動に決まったけれど、あいさつも大切なことで、いい活動だと思うので自身も協力をていきたいと思います。みんなでこの運動を盛り上げて、学校全体に広がればいいなと思いました。これからどんな活動になるのか、とても楽しみです。

### ③ 人にはたらきかける実践的な活動場面

#### 一 手立て3（事後）

- 朝の会で活動内容を交流する。
- あいさつ運動に対する活動の価値を共有する。

朝、正門、黒門（裏門）に立つ当番を始めは一班ごとにまわしていたが、活動をする中で人数を増やすために二班ずつでまわすようになった。（資料-27）

また、全学級にあいさつ運動を呼びかける手紙を書き、各学級を訪問して自分たちの活動をアピールした。児童にはあいさつ運動に対する学校内や地域の賞賛の声を紹介し、みんなから注目され、期待されていることを知らせる声かけを行った。（資料-28）

資料-28 各学級への呼びかけ



#### ◇ 考察

朝の会で活動報告を行うことで、互いのがんばりを認め合うことができ、さらに活動を続けていこうとする意欲をもつことができた。

また、賞賛の声かけをすることで自分たちの活動が少しずつ広がっていることに気付き、ますます全校に広げていこうという意欲をもつことができた。（資料-29）

これまでの活動をふりかえる話合いも自主的に行われ、活動自体をレベルアップさせようという自治的な活動に広がりを見せた。最上級生として全校を見渡す意識をもつことができ、より実践的な活動を行えるようになったと考えられる。（資料-30）

資料-29 校長先生と一緒に



資料-30 実践を行ったB児の感想

あいさつ運動をした後はさっぱりします。少しづつ全校の人に広まっていくので 楽しみです。あいさつをしてくれる人としてくれない人はどこが違うのだろう？あいさつがごく自然に、みんなができるようになるまで学級の友だちと協力していきたいと思っています。6年生全員であいさつ運動をしてみたいとも思います。これからも途切れないようにがんばっていきたいです。

#### ④ 新たな課題を見つけ、活動を広げていく 活動場面

##### 手立て4(事後)

- ・ 1年間の活動を振りかえり、あいさつ運動の成果に気付く。
- ・ 卒業に向けた活動を意識する。

卒業が近づき、学級目標やこれまでの活動を振りかえり、卒業までの日々をどのように過ごしていくか、自分たちがどんな姿で卒業していきたいかを話し合った。さらに、これまでの学習を振りかえり、自分たちの成長は多くの人々やもの、出来事によって支えられてきたことを話し合った。このような話し合いを通して、自分たちを支えてくれたものの中でも、委員会活動や、クラブ活動において一番かかわりのあった5年生に対して最上級生としてのバトンを引き継ごうと考えるようになった。そして、自分たちの活動の中でも特

に思い入のがある、あいさつ運動を引き継いでほしいという思いをもつようになり、効果的に引き継いでもらうための方法を話し合った。

#### ◇ 考 察

1年間の活動を振りかえることで、これまでの活動のよさに気付くことができ、特に自主的に続けてきたあいさつ運動の成果には全員が喜びを感じることができた。また、自分たちが昨年の卒業式に参加したときに、前6年生から最上級生としてのバトンを受け取ったことを思い出し、今の5年生に対して最上級生としてのバトンを渡そうという思いをもつことができたと考えられる。

児童は学級会で、どのようにしたら自分たちの思いをうまく伝えることができるかについて話し合うことができ、よりよい活動を全校に広げ、人間関係を深めていこうとする態度が育ったものと思われる。

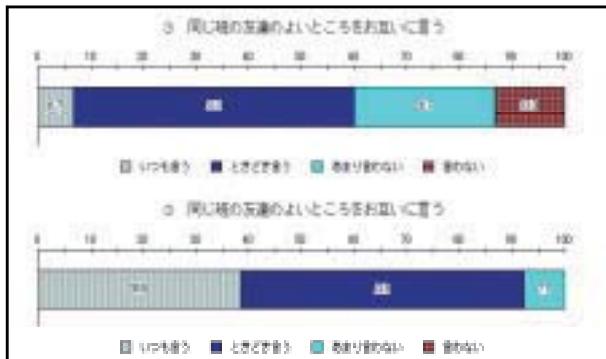
## 第Ⅲ章 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

本研究室では、児童一人一人が自主性・協調性を高め、実践的な社会性をもつために、人間関係をつくる力と役割を見つける力を育てることを考えた。そして、それらを児童自身が自覚し、意欲をもって自発的、自動的な活動ができるように実践を進めてきた。その結果、児童の実践的な社会性の変容が以下のように見られた。

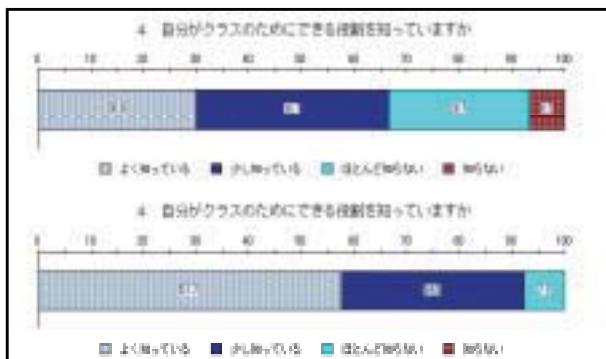
#### (1) 児童の実践的な社会性の変容

本研究室では、6月と11月に児童に実践的な社会性に関する実態調査を行った。



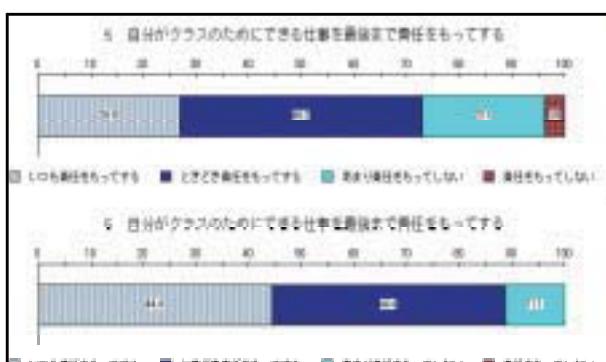
図－5 友達のよいところをお互いに言う

図－5では、友達のよいところをお互いに言いかについての問い合わせ、「いつも言う」「ときどき言う」と答えた児童が、6月は60%だったが、11月には92%に増加し、「いわない」と答えた児童はいなかった。



図－6 役割を見付ける

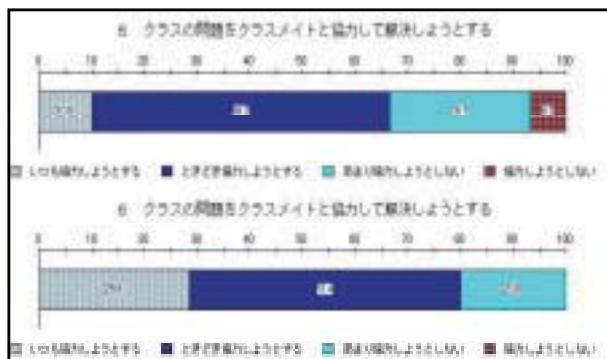
図－6では、クラスのためにできる役割を「よく知っている」「少し知っている」と答えた児童が6月は67%だったが、11月には92%に増加し、「知らない」と答えた児童はいなかった。



図－7 仕事を最後まで責任をもってする

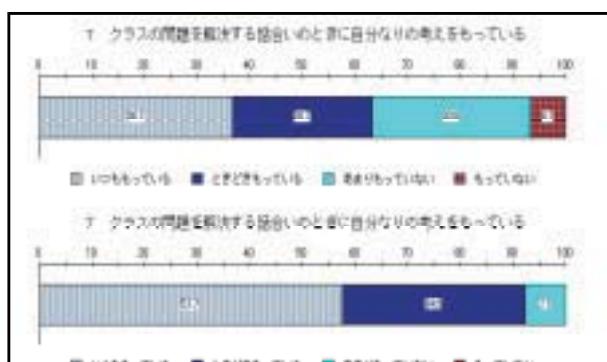
図－7では、仕事を最後まで責任をもって

するかとの問い合わせに対して、「いつも責任をもってする」「ときどき責任をもってする」と答えた児童が、6月は73%であったが、11月には89%に増加し、「責任をもっていない」と答えた児童はいなかった。



図－8 協力して解決しようとする。

図－8のクラスの問題をクラスメイトと協力して解決するかの問い合わせには、「いつも協力しようとする」「ときどき協力しようとする」を答えた児童が、6月は67%であったが、11月には80%に増加し、「協力しようしない」と答えた児童はいなかった。



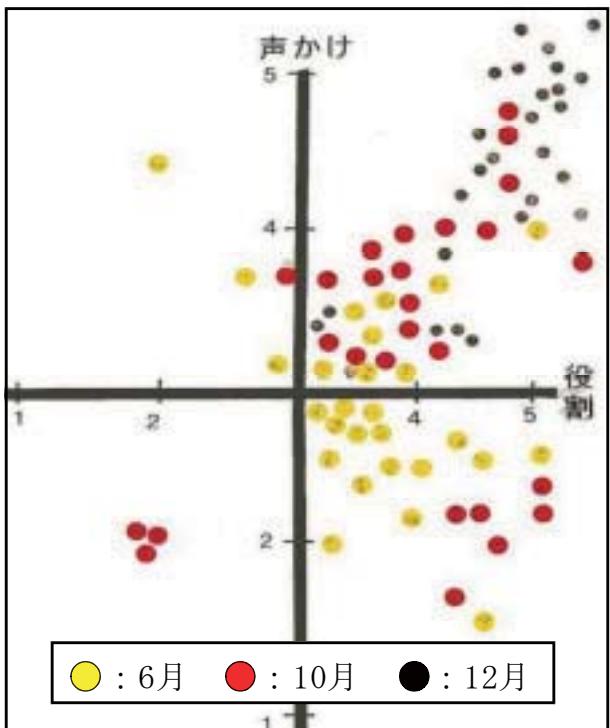
図－9 自分なりの考えをもっている

図－9では、話し合いのときに「自分なりの考えをもっているか」の問い合わせには、「いつももっている」「ときどきもっている」と答えた児童が、6月は、63パーセントであったが、11月には92%まで増加している。

図－5から図－9までの間人関係をつくる力と役割を見つける力に関する実態調査の結果から、児童一人一人の実践的な社会性が高まっていることが分かる。

## (2) 人間関係－役割の相関図の変容

本研究室では、実践的な社会性をみる様々な工夫の1つとして、6月と10月と12月に「人間関係をつくる力－役割を見つける力」(図-10)と「自主性－協調性」(図-11)の関係についての調査を行った。



-10 人間関係－役割の相関図

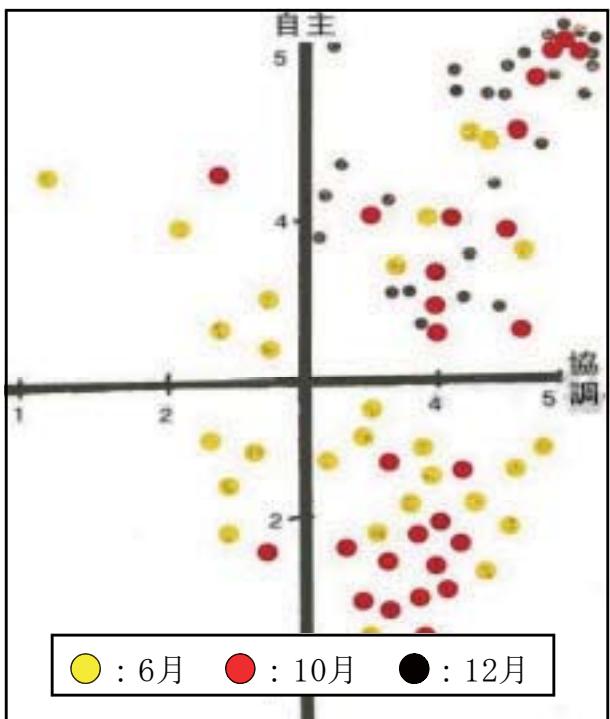


図-11 自主性－協調性の相関図

図-10では、6月はグラフの中心に集まっていた。5段階評価では、3に集まっていた。10月では、役割を意識した児童は増えたが、3名が2に集まっていた。これは、自分の役割を自覚してはいたものの最後まで責任を果たせなかつたと言う結果の表れではないかと考える。12月では、人間関係、役割、共に増加した。

図-11では、6月は全体的にばらつきがあるが、10月では、協調性の高まりが見られる。また、12月では、自主性の高まりが見られた。

## (3) 考察（研究の成果）

本研究室では、児童が自発的、自動的な活動を通して、人間関係をつくり、役割を自覚することで、実践的な社会性を高めていく特別活動の在り方について研究を進めてきた。

その中で、児童が他との関わり（他グループ、異学年、全校等）をもてるよう仕組むことで、自主性と協調性が高まったと考えられる。また、実践していく中で、よりよい生活を作るために役立とうとする態度が育ち、自分の仕事に責任をもつという自覚が生まれた。

児童の具体的な姿としては、あいさつをする場面で、気持ちを込めて相手に大きな声であいさつができるようになった。また他の学習の中でも、進んで友達の意見を認め、自分の考えの中に取り入れることができるようになった。さらに、係活動や委員会活動において自ら課題を見つけたり、他と連携を取りたりして、責任をもって役割を果たす姿が見られるようになった。

## 2 今後の課題

- 実践的な社会性を身につけた児童の姿を具体化する。
- 実践的な社会性を育成するために、学年の基礎的な事項を明確に設定し、系統的に推進していく。

### 3 研究へのコメント

昨年の「自己存在感」に引き続く第2弾のキーワードは、「実践的な社会性」である。本研究テーマの設定に際して、福岡市内の（ひいては日本の）子どもたちの「等身大」の現状把握から出発したところ、「社会性」の不足ないし欠落問題は一貫した喫緊の検討課題であり続けている（昨年も浮上）。

昨年はこれを学級集団内部での人間関係に着目することにより、とりわけ集団と個との関わりの中で「自己存在感」（所属感、居がい）を実感できる学級づくりとして研究した。

本年はこれを学級内外にまで拡げ、しかも門脇教授命名の「社会力」というラジカルな社会変革（「所属する社会にただ順応するだけではなく、自分を確立し、社会をよりよい方向に変えようとする積極的な態度」）まで視野に入れた「実践的な社会性」に焦点を当て、次のアクションに繋がる特別活動（学級活動）のあり方を研究している。

また、昨年、自己存在感という課題達成のための方法論として注目した「集団の一員として役割を果たす」ことに今年も注目して、4頁のモデル図にみられるように「学級活動で育む実践的な社会性」の下位項目として「自ら役割を果たす力」をこれまた昨年の課題であった「人間関係をつくる力」とともに位置づけている。

すなわち、一見異なるタイトルではあるが、昨年、筆者が「野心的」と評した研究課題の発展的な継続研究として本研究は位置付き、それゆえ本研究は「タイトルは一見地味だが、実は野心的」な研究の「第2弾」なのである。

この「野心」は授業実践にも現れており、学級活動の従来型パターンをのりこえるためささやかな挑戦を行っている。

例えば、事例1では、「1・5年でA小パワーアップ」のために1年生と一緒に全校をまわって見つけた課題やアンケート結果から「開かれた」選定プロセスを経て抽出された2つの原案（挨拶と掃除）について、従来型のいずれの

原案を選択するかという議題ではなく、同時並行的に2つの原案を「まな板」にのせ、双方をよりよくするための手立てを①協働性、②継続性、③波及性等の観点から自由闊達にブレーンストーミングしている。1つのプランに無理矢理絞り込むスタイルでなく、オープンエンドな学級会であったため、次のステップの実践活動に余韻を残すことができている。

事例2は、自然教室3日目のキャンドルの集いに向けて「思い出に残る出し物をしよう」

（議題）という活動である。翌月の行事予定表から偶然この自然教室のことを知った2名の児童からの自発的な提案にはじまり、自然教室の直前に転校していった友だちに当日のビデオを編集して郵送するまでの一連の活動は実践的な社会性に通底するものである。

「本時」の活動における新しい試みとして、提案理由と学級目標に由来する「話し合いの観点」を踏まながら、プレゼンテーションされた3つのアイデアを吟味していく際に、陥りがちな「三つ巴」の膠着状態における解消法を提案している点が挙げられよう。

事例3は、最上級生としての「『学校レベルアップ大作戦』を決めよう」という議題で、「仲良しで、心の広い、チームワークのある」（学級目標）という学級の支持的組織文化を全校に広げ、下級生に対する文化伝承の視点をもった実践的な社会性の取り組みである。

具体的には、学級目標と2学期のめあてと1月のめあてに通じる3つの提案（①廊下を走る人を減らす作戦、②あいさつ運動を広めよう、③学校全体をきれいにしよう作戦）に対して、必ずしも取捨選択を目的とせず、ひたすら実行可能性の観点から問題点を指摘しあうことにより、その後のあいさつ運動などの実践（実践的社会力）に結びついている。

ただ、いずれにしても研究仮説を授業実践で「実証」することはきわめて困難な作業であり、今年度は「実践的な社会性」を授業者各人が咀嚼し、関連づけながらの授業実践の段階である

ことはご海容いただきたい。

しかしながら、今回、3人の授業者による新たな試みとして、旧来のパターン化された学級活動の進め方に対するパラダイム転換を指向す

るささやかな挑戦を行っており、このこともG研の役割として注目していただきたいと願っている。

(九州大学 元兼正浩)

---

(引用文献)

---

- |         |                   |                |
|---------|-------------------|----------------|
| 1 文 部 省 | 小学校学習指導要領解説 特別活動編 | 東洋館出版社 (平成11年) |
| 2 門脇 厚司 | 子どもの社会力           | 岩波新書 (平成15年)   |

---

(参考文献)

---

- |               |                                  |                 |
|---------------|----------------------------------|-----------------|
| 1 文 部 省       | 小学校学習指導要領解説 総則編                  | 東京書籍 (平成11年)    |
| 2 文 部 省       | 小学校学習指導要領解説 特別活動編                | 東洋館出版社 (平成11年)  |
| 3 宮川 八岐       | 初等教育資料No777 実践的な社会性を育む特別活動の展開    | 東洋館出版社 (平成16年)  |
| 4 山口 満        | 悠 2003.11 新教育課程の特別活動             | ぎょうせい (平成15年)   |
| 5 天笠 茂        | 道徳と特別活動Vol.12 No.8 特別活動における社会性   | 文 溪 堂 (平成 7 年)  |
| 6 新倉 剛        | 道徳と特別活動Vol.12 No.9 自主性と社会性の関連    | 文 溪 堂 (平成 7 年)  |
| 7 浅木 麻人       | 道徳と特別活動Vol.21 No.4 学級活動押されたいポイント | 文 溪 堂 (平成16年)   |
| 8 指定都市教育研究所連盟 | 子どもの社会認識をさぐる                     | 東洋館出版社 (平成 9 年) |
| 9 門脇 厚司       | 学校の社会力                           | 朝日新聞社 (平成15年)   |
| 10 中川 昭則      | 小学校特別活動の特質と指導                    | 文溪堂 (平成 8 年)    |

---

共同研究者

- |         |             |       |           |
|---------|-------------|-------|-----------|
| 天 野 裕 二 | (研修課研修企画係長) | 東 智 裕 | (大原小学校教諭) |
| 砥 上 美保子 | (柏原小学校教諭)   | 吉 田 卓 | (原小学校教諭)  |

研究指導者

- 元 兼 正 浩 (九州大学大学院助教授)



平成17年度  
研究紀要  
(第723号)

G 11-01

## 小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割

—「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通して—

本研究室では、特別活動をキャリア教育の視点でとらえ、福岡市小学校基底教育計画の学級活動年間指導計画をもとに、学級活動モデルとして再構成した。そして、小学校におけるキャリア発達課題を達成するための「4つの能力」に視点をあて、実践を行った。その結果、進路の探索・選択の基盤形成の時期にあたる小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割が明らかになってきた。

## 目 次

### 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

1	主題設定の理由	45
(1)	キャリア教育が求められる背景とその基本的な考え方	45
(2)	特別活動におけるキャリア教育の考え方	46
(3)	キャリア教育における能力領域	47
2	研究の目標	48
3	研究の仮説	48
4	研究の内容と方法	48
(1)	「4つの能力」を軸とした活動について	48
(2)	「4つの能力」を軸とした学級活動のモデルの作成	48

### 第Ⅱ章 キャリア発達にかかわる諸能力の育成を視野に入れた指導の実際

1	人間関係形成能力の育成を視野に入れた学級活動の実践事例とその考察	50
	題材 「のばそう！自分らしさ」(第5学年)	
2	将来設計能力の育成を視野に入れた学級活動の実践事例とその考察	54
	題材 「夢の実現に向かって歩こう」(第6学年)	
3	意思決定能力の育成を視野に入れた学級活動の実践事例とその考察	58
	議題 「学校を明るくするために、自分ができる活動を決めよう」(第5学年)	

### 第Ⅲ章 研究のまとめと今後の課題

1	研究のまとめ	62
(1)	人間関係形成能力育成の視点から見た特別活動の役割	
(2)	将来設計能力育成の視点から見た特別活動の役割	
(3)	意思決定能力育成の視点から見た特別活動の役割	
2	今後の課題	64
3	研究のコメント	64

### 引用・参考文献

## 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

### 1 主題設定の理由

#### (1) キャリア教育が求められる背景とその基本的な考え方

平成17年10月26日に「新しい時代の義務教育を創造する」と題して中央教育審議会答申が出された。その中の「第Ⅱ部各論第1章(2)教育内容の改善 イ学習指導要領の見直し」において「学習指導要領の見直しにあたっては、将来の職業や生活への見通しを与えるなど、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させる教育を充実し、学ぶ意欲を高めること」と提言している。

文部科学省はこれを受けて、『「これまでの審議の整理」において盛り込むことが必要な項目(素案)』に「子どもに対する教育の検討課題」として「学習や将来の職業に関する前向きな力の育成」を挙げ、キャリア教育の重要性を示している。

このようにキャリア教育が求められる社会的な背景としては、

- 少子高齢社会の到来や産業・経済の構造的変化、雇用形態の多様化・流動化
- 就職・職業をめぐる環境の変化
- 精神的・社会的自立が遅れ、人間関係をうまく築くことができない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない、進路を選ぼうとしないなど、子どもたちの生活・意識の変容
- 高学歴社会におけるモラトリアム傾向が強くなり、進学も就職もしなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加などが挙げられ、その変化はとどまることなく、将来への不透明さは増している。

様々な改革が進む教育現場において、今、教育をどのような方向に変革していくべきなのか。また、そのことを通して、21世紀の変

化の激しい流動的な社会を力強く生きていくために必要な資質や能力の育成など、学校教育に対する期待は大きく、私たちは、カリキュラム改善・授業改善などを通して、信頼される学校教育を確立していかなければならぬ。

このような状況の中、児童生徒が「生きる力」を身に付け、明確な目的意識をもって日々の学校生活に取り組む姿勢や態度、激しい社会の変化に対応し主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりと勤労観・職業観を身に付けること。また、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようとするキャリア教育の推進が強く求められている。

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」(2004年文部科学省 以下キャリア教育報告書)では、キャリアを次のように定義している。

- 個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖
- その過程における自己と働くこととの関係付けや価値の累積

そこでは、キャリアの概念について、『「キャリア」が、「個人」と「働くこと」との関係の上に成立する概念であり、個人から独立して存在し得ないということである。また、「働くこと」については、今日、職業生活以外にも、ボランティアや趣味などの多様な活動があることなどから、個人がその職業生活、家庭生活、市民生活等の全生活の中で経験する様々な立場や役割を遂行する活動として幅広くとらえる必要がある。』と述べられている。そして、キャリア概念に基づき、キャリア教育を次のように定義している。

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ、端的には「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

さらに、キャリア教育の推進にあたっては、学校の教育活動全体を通じて、児童生徒の発達段階に応じた小学校段階からの組織的・系統的な指導が必要であると述べている。

このように、キャリア教育の目指すところは、広義には生きる力を身に付け、社会性をはぐくみ、社会の一員として自立していくことを目指す教育と考えられる。

のことからキャリア教育は、集団活動を通しての特質を生かし、集団の一員としての自覚を一層深め、豊かな人間性や社会性の育成を図ろうとする特別活動との関連が極めて強いということが分かる。

本主題には、改めて「キャリア教育」の視点から教育の在り方、特別活動の在り方を再確認しようとする意図がある。それは今、まさに求められている児童の「生きる力」をはぐくむ教育を推進することに他ならない。

活動モデルの開発にあたっては、特別活動をキャリア教育の視点でとらえ、本市の特別活動モデルとして再構成するものである。

## (2) 特別活動におけるキャリア教育の考え方

特別活動における小学校段階でのキャリア教育は、何ら新しい教育を始めるということではない。これまでの活動をキャリア教育の視点でとらえ直すことで、キャリア教育のねらいを明確に意識し、キャリア形成を図ることができる内容としていくのである。

特別活動は、教科学習で学んだ成果を様々な体験活動や話し合い等を通して深化・発展、統合させたり、逆にその成果を教科の学習に還元し反映させていくというねらいをもつ。

小学校学習指導要領第1章総則第5では

各教科等の指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること。

と課題選択や自己の生き方を考える機会の充実について示され、小学校におけるキャリア教育を考える際の原点となっている。さらに同解説総則編においても、

小学校において、児童の発達段階に応じて選択能力を育てたり将来の生き方や進路などを考えたりする指導を工夫することが大切である。なかでも、思春期に入り、自分の将来に目を向け始める児童が多い高学年段階では工夫した指導が望まれる。

と示れており、そこで展開される職業や進路に関する内容をはじめ、自分の生き方に関する学習活動は、キャリア教育を進める上で、直接的かつ中核的な取組として最も重要な役割を担うものであり、その計画等を改善、充実することが求められる。

これらの指導にあたっては、児童の生活体験や興味・関心をもとに主体的に課題を見つけ、自分の方法で解決に取り組むことができるよう配慮し、課題選択能力や課題解決能力を育てることが必要である。また、児童が自分自身を見つめ、自らの将来について目を向ける機会などを通して、自分のよさや可能性などに気付き、自分らしい生き方を実現していくとする態度を育成していくことが大切である。

特別活動においては、小学校学習指導要領第4章特別活動第2内容A学級活動(2)で、「希望や目標をもって生きる態度の形成」が第1に挙げられ、将来と自分とのかかわりや、自己を生かそうとする生活態度の育成の必要性が述べられ、キャリア教育がねらう能力や

態度との関連が深いことが分かる。学級活動だけでなく、望ましい集団活動を通して個性の伸長を図り、集団の一員としての自覚を深め、自主的、実践的態度の育成を目指す特別活動は、自分と他者、自分と集団とを関係付け、価値付けながら望ましい勤労観・職業観を身に付けようとするキャリア教育に果たす大きな役割があると言える。

具体的に考えられる特別活動の4つの内容とキャリア教育の関係を表-1に示す。

表-1 特別活動の内容とキャリア教育の関係

学級活動	
・学級を単位として、学級生活の約束やきまりのなかで役割を果たし、個性を伸ばしていく場	
児童会活動	
・集団活動を行う上での組織や役割の重要性を認識するのに役立つ場	
・様々な役割や仕事があることを、体験を通じて学ぶ場	
クラブ活動	
・自分の興味のあることに取り組む喜びを知り、能力を伸ばす場	
・異年齢集団における生活に適応する場	
学校行事	
・現実の社会との接点のある集団活動を通じて、児童が「役割」や「立場」を自覚し、主体的に行動することが求められる場	

本研究室では、4つの内容のうち、キャリア教育の基盤となる学級活動に視点をおき、実践を行った。

### (3) キャリア教育における能力領域

人は様々な場面で進路・職業を選択、決定し、社会生活に適応して自己実現しようとする。そのために必要とされる能力や態度を成長させる過程をキャリア発達といい、その発達上の課題がキャリア発達課題である。小学校におけるキャリア発達の段階は、進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期にあたる。

キャリア教育報告書では、小学校における4つのキャリア発達課題として、次のように示している。

- ① 自己及び、他者への積極的関心の形成・発展
- ② 身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上
- ③ 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得
- ④ 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成

さらにこれらの発達課題を達成するための能力や態度として、表-2のように4能力領域8能力を示している。本研究室では、これらの分類をもとに、4能力領域を「4つの能力」ととらえ、キャリア教育における特別活動の在り方を探ることにした。

表-2 4能力領域8能力

領域	能力
人間関係形成能力	自他の理解能力 コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力 職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力 計画実行能力
意思決定能力	選択能力 課題解決能力

#### ○ 人間関係形成能力

他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同して物事に取り組む。

#### ○ 情報活用能力

学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。

#### ○ 将来設計能力

夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。

#### ○ 意思決定能力

自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。

## 2 研究の目標

キャリア発達にかかる「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を明らかにする。

## 3 研究の仮説

「4つの能力」の育成を軸として開発した活動モデルをもとに特別活動の授業実践を積み上げれば、キャリアを形成していくために必要な小学校段階での意欲・態度や能力を育てることができるものである。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 「4つの能力」を軸とした活動について

キャリア教育に果たす特別活動の役割を明確にするためには、キャリア発達にかかる「4つの能力」の育成を視野に入れ、特別活動の特色である児童の自主的、実践的な態度を育てる望ましい集団活動を開拓することが求められる。そこで、キャリア発達を促すために育成することが期待される能力や態度の中から、特別活動の目標や内容に最も大きくかかわるものを抽出し、活動を仕組む必要がある。

そこで本研究室では、学級活動の目標や内容をキャリア教育の視点で整理し、キャリア発達にかかる「4つの能力」の育成が見込まれる題材を精選して実践を行った。学級活動を通してキャリア発達にかかる「4つの能力」を育むためには、以下のような活動になるように見通し、展開していく必要がある。学級活動の目標を達成することを通して「4つの能力」の育成を目指す。

- 人間関係形成能力の育成を軸とした活動  
様々な集団活動の中で人間的なふれあいを深めることを通して自他の個性を発見、理解し、一人一人のよさや可能性を伸ばしていく活動。自他の理解能力とコミュニケーション能力の育成を目指す。

○ 情報活用能力の育成を軸とした活動  
自分の考えを簡潔で適切に伝えたり、効果的に発表したりするための調査・統計・結果の表示を行う活動。情報収集・探索能力と職業理解能力の育成を目指す。

### (2) 「4つの能力」の育成を軸とした学級活動のモデルの作成

「4つの能力」を軸とした学級活動を開拓するために、学級活動の目標や内容を「4つの能力」の視点でとらえ直し、整理した。

次に示す学級活動のモデルは、平成16年度版福岡市基底教育計画に示された学級活動の内容を、表-2で示した4つの能力領域8能力で分類したものである(表-3)。

本研究では、「人間関係形成能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の育成を視野に入れた3つの授業実践を行った。

表-3 「4つの能力」の育成を軸とした学級活動モデルプラン

		「4つの能力」の育成が期待される学級活動例		
		低学年	中学年	高学年
人間関係形成能力	自他の理解能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の好き嫌いが言える 「のばしていこうぼくわたしのいいところ」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎友達と仲良く遊び助け合う 「みんななかよし」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人</span></li> <li>◎お世話になった人に感謝する 「お世話になった方に年賀状を書こう」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分のよいところを見つける 「自分のよさのしようかい」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎友達の良いところを認める 「仲良しクラス会」(1)</li> <li>◎自分の生活を支えている人に感謝する 「2分の1成人集会」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを發揮する 「のばそう！自分らしさ」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする 「学級の歌と旗を作ろう」(1)</li> </ul>
	コミュニケーション能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎あいさつや返事をする 「あいさつと返事」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">基</span></li> <li>◎「ありがとう」、「ごめんなさい」を言う 「ことばづかい」(1)</li> <li>◎自分の考えをみんなの前で話す 「グループ自まんしゅう会をしよう」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の意見や気持ちを分かりやすく表現する 「なやみの解決」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎友達の気持ちや考えを理解しようとする 「みんなともだち」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人</span></li> <li>◎友達と協力して活動に取り組む 「仲良しクラス会の計画を立てよう」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎思いやりの気持ちをもち相手の立場に立って考え方行動しようとする 「1年生と交流会をしよう」(1)</li> <li>◎異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする 「全校児童集会の話し合いをしよう」(1)</li> </ul>
情報活用能力	探査情報収集・	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎身近で働く人々の様子が分かり興味・関心をもつ 「しごとのたすけあい」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎いろいろな職業や生き方があることが分かる 「読書発表会」(1)</li> <li>◎分からぬことを自分なりの方法で調べる 「いろいろな資料の活用」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">図</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎身近な産業・職業の様子やその変化が分かる 「修学旅行への参加」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">他</span></li> <li>◎自分に必要な情報を探す 「コンピュータ目録の利用」<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">図</span></li> <li>◎気付いたこと、分かったこと、まとめたことを発表する 「学級十大ニュースを決めよう」(1)</li> </ul>
	職業理解能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎係や当番の活動に取り組み、その大切さを知る 「そうじのしかた」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">基</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎係や当番活動に積極的にかかわる 「清掃の工夫」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">基</span></li> <li>◎働くことの楽しさが分かる 「係活動を工夫しよう」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎係・委員会活動の大切さを知り、積極的にかかわる 「最上級生としての自覚」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎学んだり体験したりしたことと、生活や職業との関連を考える 「感謝と希望の集会」(1)</li> </ul>
将来設計能力	認識役割把握・	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる 「グループのきょう力」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎互いの役割や役割分担の必要性が分かる 「楽しいグループ活動」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人</span></li> <li>◎日常の生活や学習と将来の生き方との関係に気付く 「情報とわたしたちの生活」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">図</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる 「将来に向けて」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎仕事における役割の関連性や変化に気付く 「児童会と自分の役割」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">人</span></li> </ul>
	計画実行能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎作業の準備や片づけをする 「ゲーム大会をしよう」(1)</li> <li>◎決められた時間やきまりを守る 「休み時間のすごしかた」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">健</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎将来の夢や希望をもつ 「もうすぐ5年生」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎計画づくりの必要性に気付き、作業の手順が分かる 「係活動の計画を立てよう」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎将来のことを考えることの大切さが分かる 「もうすぐ中学生」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎夢について考え、今しなければならないことを考える 「夢の実現に向かって歩こう」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> </ul>
意思決定能力	選択能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の好きなもの、大切なものをもつ 「自分のとく意なことの発表会をしよう」(1)</li> <li>◎して良いことと悪いことが分かる 「こていせつつかいかた」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">健</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分のやりたいこと、よいことなどを考え進んで取り組む 「わくわく4年生」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎してはいけないことが分かり、自制する 「毎日くりりかえすこと」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">基</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ 「係のイベントの計画を立てよう」(1)</li> <li>◎教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す 「心の健康」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">健</span></li> </ul>
	課題解決能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自己的ことは自分で行おうとする 「身の回りのせい理せいとん」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">基</span></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の仕事に責任を感じ、最後までやり通そうとする 「委員会活動への参加」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> <li>◎自分の力で課題を解決しようとする 「学級ボランティアの計画を決めよう」(1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする 「学校を明るくするために自分ができる活動を決めよう」(1)</li> <li>◎将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする 「自分のよさを将来の夢に生かそう」(2) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">希</span></li> </ul>

〈略号〉 希希望や目標 基基本的な生活習慣の形成 人望ましい人間関係の育成 図学校図書館の利用 健健康で安全な生活態度の形成

## 第Ⅱ章 キャリア発達にかかる諸能力の育成を視野に入れた指導の実際

### 1 人間関係形成能力の育成を視野に入れた学級活動の実践事例とその考察

#### (1) 題材

「のばそう！自分らしさ」（第5学年）

#### (2) 目標

- 自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを發揮することができる。
- 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとすることができる。

#### (3) 本題材の意義とキャリア教育との関連

キャリア発達にかかる諸能力は、4能力領域8能力が示されている。本事例は、その一つである「人間関係形成能力」（能力領域）における「自他の理解能力」（能力）の育成を視野に入れた学級活動（2）の授業実践を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探ろうとしたものである。

学級活動は、次の二つの活動内容から構成されており、学級を単位として、学級や学校の生活の充実と向上を図り、健全な生活態度を育成することを特質としている。

- (1) 学級や学校の生活の充実と向上に関すること。
- (2) 日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること。

小学校学習指導要領解説特別活動編では、学級活動（2）に関する内容として、「希望や目標をもって生きる態度の形成」が示され、具体的な例として「自己の理解を深め個性の伸長を図るなど自己を見つめる内容」が挙げられている。このことから、本授業実践における学習活動をキャリア教育を進める上で直接的な取り組みとして展開することにした。

国立教育政策研究所生徒指導研究センター調査研究報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（平成14年11月）には、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」が示されている。それによると、「人間関係形成能力」について、

他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同して物事に取り組む。

と説明されており、「自他の理解能力」とは、

自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力

と説明されている。さらに、小学校高学年において育成することが期待される具体的な能力・態度として、

- ・ 自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを發揮する。
- ・ 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。

の二つが示されている。

「自分らしさを發揮する」ことは、「小学校高学年において、育成することが期待される具体的な能力・態度」に示されているように、「自他の理解能力」を形成する要素の一つである。そして、「自分らしさを發揮する」ためには、「自分の長所や欠点に気付く」ことが前提としてとらえられている。そして、「自分らしさ」とは、「自分の長所や欠点」ととらえることができる。そこで、本授業実践では、題材名を「のばそう！自分らしさ」と設定し、自分の長所や欠点に気付かせる活動を仕組み、自分らしい生活をしていくために自分が取り組んでいくことを自己決定させることを通して、児童に「自他の理解能力」を育ませたいと考えた。

以上のような考え方のもと、本事例では、児童に「自他の理解能力」つまり「自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動することができるようとする能力」の育成を視野に入れた授業実践を行った。

#### (4) 実践内容

##### ア 事前

###### (ア) 事前アンケートに回答する

児童の実態調査及び「自分らしさ」のとらえ方を示唆するために「自分のいいところ」「自分の変えたいところ」に改めて気付かせたり、「自分らしさ」について自分の考えをもたせたりする（資料-1）。

###### (イ) メッセージカードをつくる

認め合う雰囲気付くりや自分に対する友達の見方を認識させるために、クラス全員、一人一人のいいところを考えさせ、それをメッセージカードに記入させる（資料-2）。

資料-2 メッセージカード

<b>メッセージカード 友達のいいところを見つけよう！</b>	
(　　) へ	
-----	
-----	
-----	
(　　) より	

資料-1 アンケートの質問項目

1. 「自分のいいところ」は、どんなところですか。
2. 「自分の変えたいところ」は、どんなところですか。
3. 「自分らしさ」とは、どんなことだと思いますか。

##### イ 本時

児童の活動	指導上の留意点
<p>1 事前アンケートを読み返し、アンケートに取り組んだ感想を出し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「自分のいいところ」「自分の変えたいところ」「自分らしさ」について考えた感想を発表させ、学習の雰囲気作りをする。</li> </ul>
<p>2 本時のめあてをつかむ。</p> <p>めあて</p>	<p>自分らしさを生かした生活をするためには、どうしたらよいか考えよう。</p>
<p>3 「自分らしさ」について話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 事前のアンケートで「自分らしさ」について考えたことを想起させ、積極的に発表するように促す。</li> <li>○ 出された意見の共通点に着目させ、「自分らしさ」についてまとめる。そして、それは、自分のいいところをのばしていき、自分の変えたいところを改めていくことが大切であること、また、自分らしさを生かした生活は楽しいことであるということを価値付ける。</li> </ul>

- 4 友達からのメッセージカードを読み、「自分のいいところ」を見つめ直す。
- 5 「自分のめあて」を決め、発表する。
- 6 本時学習を振り返り、まとめをする。

- 「自分のいいところ」を再認識させ、自己決定への意欲へつなげるために、友達が書いたメッセージカードを読ませる。
- 自分らしさを生かした生活をするために、自分のいいところと自分の変えたいところをどのようにしていくか自己決定させる。
- めあてカードに記入することによって、自分にふさわしい具体的な計画やめあてをもたせる。
- 学習の感想を発表させ、本時の学習を振り返らせる。
- 再度、自分らしさを生かした生活は楽しいことであることを確認し、実践への意欲をもたせる。

#### ウ 事後

##### (ア) 「自分のめあて」を実践する

毎日の実践の様子を観察しながら、必要に応じて児童一人一人に助言したり、自己決定した内容を修正する場を設け、個別に指導したりする。

##### (イ) 実践を振り返る

実践に取り組んだ感想をまとめ、日常生活の中にめあてが定着化しているかどうかを振り返る。また、一人一人の児童の実態に応じて、個別指導の継続を図ったり、家庭への協力を呼びかけたりする。

##### (5) 考察

人間関係形成能力の育成に特にかかわる実践を中心に考察を述べる。

##### ○ 事前アンケート（事前）

事前アンケートの結果、本学級の児童は、「自分のいいところ」「自分の変えたいところ」「自分らしさ」について、おおむね自分の考えをもっていることが分かった。しかし、「自分のいいところ」を具体的な生活場面の中で生かしながら生活する姿や「自分の変えたいところ」を積極的に改めていくこうとする姿はあまり見られない。そこで、本時では、

自分が考えた「自分らしさ」について話し合わせ、「自分のいいところ」をのばしていき、「自分の変えたいところ」を改めていくことがより楽しい学校生活につながることに気付かせ、生活場面での実践への意欲をもたせたいと考えた。

##### ○ メッセージカード作り（事前）

メッセージカードについて、次から次へとカードを書いている姿が多く見られた。日頃は友達の欠点や間違いに目を向けてしまいがちであり、そのことが人間関係の広がりのなさや自信や積極性のなさの原因とも考えられるが、カードを書き始めると、「もっと書きたい」という思いがあふれ、お互いを認め合う雰囲気づくりもできた。

##### ○ 「自分らしさ」についての話合い(本時)

本時は、「自分らしさについて自分の意見をもち、積極的に話し合うことができるようになること」「自分らしさを生かした生活をするための自分のめあてを考えることができるようになること」をねらいとした。そのために、まず、「自分らしさ」について、話し合わせた。その際、事前のアンケートでもった自分の考えを積極的に発言するよう促した。そして、

話し合わせる中で、自分のいいところをのばしていき、自分の変えたいところを改めていくことが大切であること。また、自分らしさを生かした生活は楽しいということを価値付けていった。

事前のアンケートで「自分らしさ」について考えさせていたことで、そのことについて積極的に意見を出して話し合う姿が見られた。出された意見の共通点に着目させてまとめていったが、事前アンケートで考えさせた「自分のいいところ」「自分の変えたいところ」の二つをまとめる視点にしたことで児童の思考の流れに沿いながら価値付けていくことができた(資料-3)。

資料-3 「自分らしさ」について話し合う様子



#### ○ メッセージカードを読み、「自分のいいところ」を見つめ直す（本時）

メッセージカードを読ませながら、「自分のいいところ」を再認識させた。児童は、メッセージカードを読むことで「自分のいいところ」を見つめ直すことができた。うれしそうに読みながら、認められた喜びに、どの子も表情を輝かせていた(資料-4)。

資料-4 笑顔でメッセージカードを読む児童



#### ○ 「自分のめあて」の自己決定（本時）

自分らしさを生かした生活をするために、自分のいいところと自分の変えたいところをどのようにしていくかを自己決定させた。生活めあてプリントに「いつ」「どこで」「何を」「どうする」という4つの観点で記入することによって、自分にふさわしい具体的な計画やめあてをもたらせることができた。自分のいいところを大切にしていき、自分の変えたいところを改めていくことがより自分らしく楽しい学校生活につながることを確認しながら、事後の実践への意欲をもたらせた(資料-5・6)。

資料-5 生活めあてプリント

生活めあてプリント		5年1組 ( )		
「のばそう！自分らしさ」				
自分らしさを生かした生活をするために、自分のいいところと自分の変えたいところをどのようにしていきますか。				
【自己決定】				
自分のいいところ	自分のいいところ			
「いつ」「どこで」「何を」「どうする」	「いつ」「どこで」「何を」「どうする」			
自分の変えたいところ	「いつ」「どこで」「何を」「どうする」			
【生活がんばりチェック】 ( ◎よくできた ○できた ▲あまりできなかつた)				
21日(月)	22日(火)	23日(水)	24日(木)	25日(金)
勤労感謝の日				
28日(月)	29日(火)	30日(水)	1日(木)	2日(金)

## 資料-6 「自分のめあて」を決めている児童



### ○ 「自分のめあて」の実践とその振り返り (事後)

本時で自己決定した「自分のめあて」を実践させた。必要に応じて、自己決定した内容を修正する場を設け、個別に指導したり、実践に取り組んだ感想をまとめさせ日常生活の中にめあてが定着化しているかどうかを振り返らせたりした。また、一人一人の児童の実態に応じて、個別指導の継続を図ったり、家庭への協力を呼びかけたりした。

2週間、毎日、帰りの会の時に「自分のめあて」の自己評価をさせた。また、より具体的で価値の高い「めあて」になるよう随時修正させた。これらのこととは、児童にその目的意識を明確にさせながら意欲を高めていき、実践を継続させることにつながった。

児童に「自他の理解能力」をはぐくむためには、自己決定した内容が生活化され、その内容や活動を広げたり深めたりすることができるよう継続して指導していく必要がある。

学級活動(2)での本授業実践は、「人間関係形成能力」(能力領域)における「自他の理解能力」(能力)をはぐくむための基盤となる活動として大変有効であった。学級活動(2)での指導を核に、他の特別活動の内容、さらには、他教科等での指導へ広げていくことで本実践は、より意義深いものとなると考える。

## 2 将来設計能力の育成を視野に入れた学級活動の実践事例とその考察

### (1) 題材

「夢の実現に向かって歩こう」

(第6学年)

### (2) 目標

- 興味のあることや、やってみたいことに目を向け、夢について考えることができる。
- 友達の夢を知り、そのよさに気付き、認め合うことができる。
- 目標をもって努力することの大切さを知り、明日への希望をもち、意欲的に取り組むことができる。

### (3) 本題材の意義とキャリア教育との関連

本事例は将来設計能力の育成を視野に入れた学級活動(2)の授業実践である。

第6学年は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などにおいて、社会で働く人や文化、芸術とふれあう機会が多くなり、社会に対しての関心をもち、自分と働くこととを結びつけはじめる学年である。

本学級では、各学期の個人のめあてや係活動のめあてとその実践計画を決めるなど、常に目標をもつことを意識して実践を行ってきた。また、お互いのよさ見つけをするなど他者理解の機会を多くもっている。

本学級で実施した夢に関する事前アンケート結果では、6割近くの児童が夢をもち、実現するであろうと感じていることが分かった。その反面、4割の児童が夢をぼんやりとしかもっていないことも明らかとなった。そこで、本題材に取り組むことで、夢をもち、明日への希望をもって意欲的に取り組む態度を育てようと考えた。

本題材は、希望や目標をもって生きる態度の形成にかかわる内容である。本題材を通して、夢や希望を育てることは、中学校で行われている総合的な学習の時間での職業体験や、特別活動での進路学習への橋渡しとして

の役割を担うことができると考える。また、児童が、自分の夢や希望について考え、互いに語り合い、発表しあうプロセスを通して、自分自身について理解し、集団の中で考えを共有することで、価値観（勤労観、職業観）の変容を促すことができると考える。

以上のような考え方のもと、本事例では、児童に「将来設計能力」つまり、「夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する能力」の育成を視野に入れた授業実践を行った。

#### (4) 実践内容

##### ア 事前

###### (ア) 学級の意識調査を行う

夢についてのアンケートを実施し、児童の夢に対するイメージを把握する。

###### (イ) 尊敬する人物(先人、身近な人)の生き方調べをする

生き方について学びたいことや参考にしたいことをワークシートにまとめる。

###### (ウ) 調査結果をまとめる

アンケート係が結果をまとめ、グラフ化する（資料-7）。

###### (エ) 職業について調べる

「13才のハローワーク」やインターネット「将来の仕事なりかた完全ガイド（キッズgoo）」などを使って調べる。

###### (オ) 夢を実現するためのカードを書く。

夢を実現するためのカードには、次の項目を挙げている（資料-8）。

- ・生かしてみたい私のよさ
- ・私の夢
- ・夢をもった理由
- ・私の夢について身近な人の意見
- ・夢を実現するために、これまで取り組んできたこと
- ・夢を実現するにあたっての悩み

#### イ 本時

児童の活動	指導上の留意点
<p>1 本時のめあてを確認する。</p> <p>(1) アンケート係が、夢に関するアンケートの結果を発表する。</p> <p>(2) 本時の学習のめあてを確認する。</p> <p>めあて</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">自分の夢に向かって、今、自分ができることを考えよう。</div>	<p>○ アンケートの集計結果をグラフ化して、視覚的にとらえやすくし、クラスの実態を知らせる。</p>
<p>2 夢を追い続けるために必要なことについて話し合う。</p> <p>(1) 夢を追い続けるために必要なことを発表する。</p> <p>(2) 今までの自分を振り返り、どれにあたるか考え、名前カードを黒板に貼る</p>	<p>○ 事前に調べた先人や身近な人の生き方を考えさせる。</p> <p>○ 自分のプラス面やマイナス面で、特に自分が感じていることに貼らせる。</p>
<p>3 お互いの夢実現カードを読みあい、アドバイスを書く。</p> <p>(1) クラス全体で考える。</p> <p>(2) グループで読み回し、アドバイスを書く。</p>	<p>○ 互いのよさを認め、賞賛できるように助言する。</p>

4 夢を更に現実のものとするために、明日からの自分がどんなことを大切にし、実行していくかをカードに書く。

5 自己決定したことを発表する。

○ 今までの活動を振り返り、明日からのがんばりについて書かせる。

○ それぞれの夢が実現することへの期待感を話す。

## ウ 事後

夢を実現するためのカードをもとに保護者と話し合う。

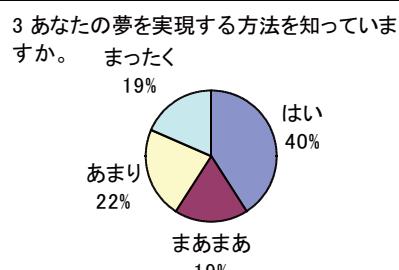
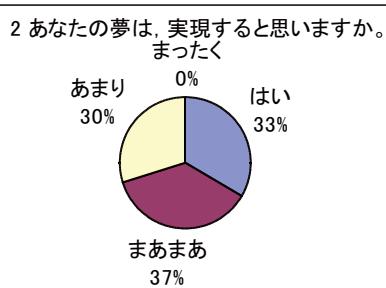
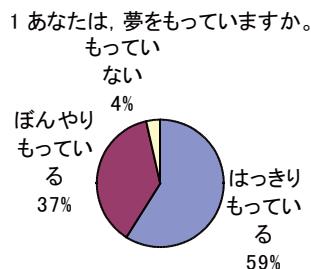
保護者に対しては、学級通信で事前に呼びかけ、協力を依頼しておく。

(ア) 地元紙「ぼくの夢、私の夢」の原稿を書く

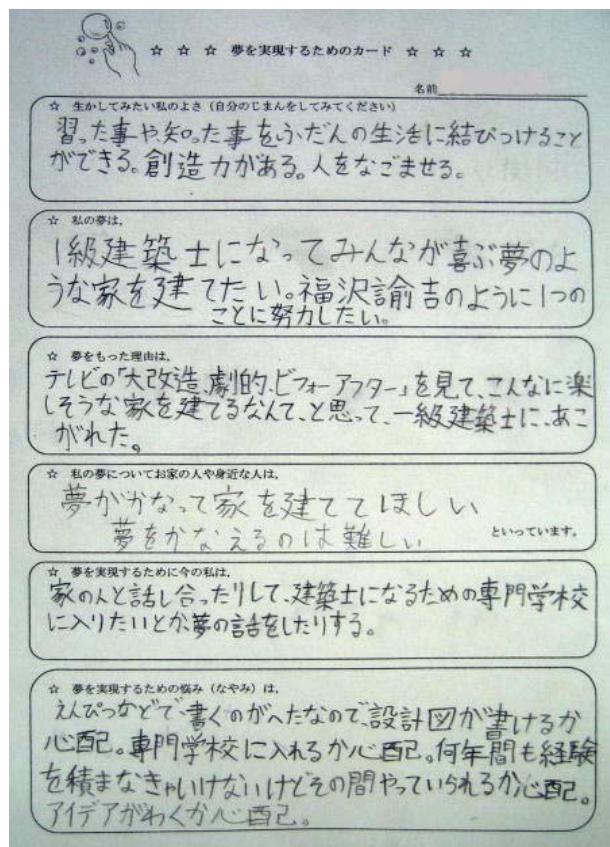
110字以内で、20年後の夢を書く。

(イ) 保護者と話し合った感想と夢について発表しあう

資料-7 夢アンケート結果



資料-8 「夢を実現するためのカード」①



## (5) 考察

将来設計能力の育成に特にかかわる実践を中心考察を述べる。

### ○ 夢についてのアンケート（事前）

児童が夢という言葉に対して、どの位先の未来を夢ととらえ、更にどのようなことを夢としてイメージしているかをとらえるために行った。その結果、夢を職業ととらえている児童がほとんどであったが、数名の児童が、「犬を飼って暮らしたい」「おばあちゃんのようになりたい」などの生き方に関して夢をもっている児童がいた。

夢のとらえ方は様々であったが、事前アン

ケートを実施することで、児童は夢に対する関心をもつことができたと考える。

○ 「夢を実現するためのカード」①(事前)

夢を実現するためのカード（資料-8）には、自分のよさ見つけ、夢に生かそうとする児童の思いと、保護者の助言や事前に調べて分かったことに対する不安との葛藤がみられた。それは、夢を実現するにあたっての悩みとして表れた。

○ 友達からの励ましの言葉(本時)

本時では、将来の職業や生き方などのお互いの夢を知った後で、付箋紙に励ましの言葉を書かせた（資料-9）。

付箋紙には、友達のもつ悩みに対する励ましの言葉が多く書かれていた。本時では、この励ましの言葉を書くことを、友達に希望を与えることとしてとらえさせた。

互いの夢を知り、メッセージを書くことで、集団の中で考えを共有する意義を感じることができたと考える。

資料-9 励ましの言葉を書いている様子

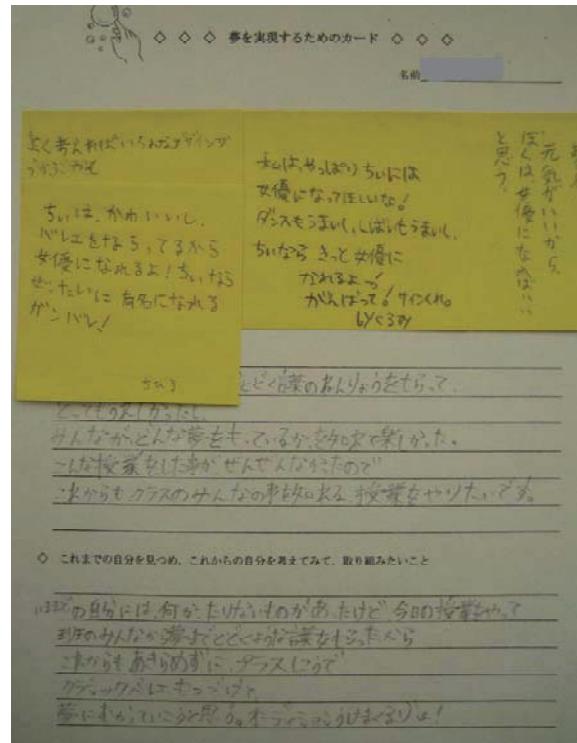


○ 「夢を実現するためのカード」②(自己決定) (資料-10)

友達からの励ましの言葉を読み、本時での学習の感想と自己決定したことを書かせた（資料-11・12）。

励ましの言葉は、より大きな夢をもち、実現させたいという強い願いへつながっていき、有効であったと考えられる。

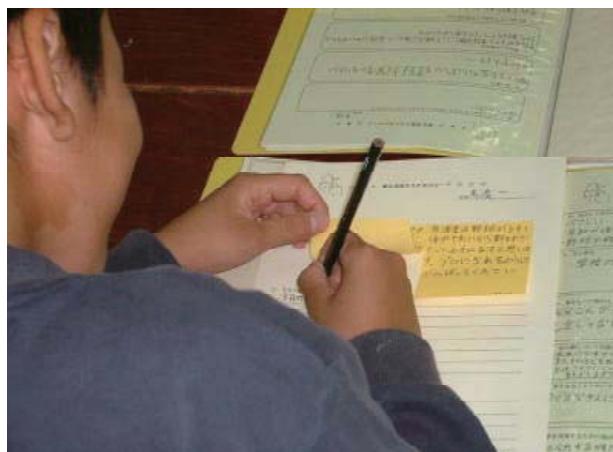
資料-10 「夢を実現するためのカード」②



資料-11 自己決定カードを書いている様子①



資料-12 自己決定カードを書いている様子②



キャリア教育の4能力の一つである将来設計能力の育成という点では、卒業を目前とし、中学校という新たな世界へと旅立とうするこの時期に、夢や希望についての授業を行うことは、明日への希望をもって意欲的に学校生活を送ることにつながり、意義があったと考える。

### 3 意思決定能力の育成を視野に入れた学級活動の実践事例とその考察

#### (1) 議題

「学校を明るくするために、自分たちができる活動を決めよう」 (第5学年)

#### (2) 目標

- 高学年としての意識をもち、自分たちが続けていく活動を意欲的に考えることができる。
- 自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うことができる。

#### (3) 本題材の意義とキャリア教育との関連

本事例は意思決定能力の育成を視野に入れた学級活動(1)の授業実践を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探ろうとしたものである。

10月中旬の学級活動(2)「高学年としての自分の役割」において、児童は学校を明るくするために学校全体を見据え、自主的に活動していくことを確認し、高学年として自分の果たすべき役割を自己決定した。その内容には、卒業生が行ってきた清掃活動やあいさつ運動を自分たちも自主的に行っていきたいというものが見られた。

その後、議題ボックスの中にも「オアシス運動に取り組もう」「校門でのあいさつ運動をしよう」「学校をきれいにしよう」などの議題が多く入れられ、計画委員会で議題を整理し、本議題「学校を明るくするために自分ができる活動を決めよう」をみんなで決めた。

本議題の「学校を明るくするために自分たちができる活動を決めよう」では、学校づく

りへの参画を意識させることをねらいとした。児童の生活体験や興味・関心に基づいて学校内の生活環境を見つめ直し、自分たちの生活をよりよく明るいものにさせたいと考える。

学校を明るくするために自分の考えをもち、自分たちにできる活動をみんなで考えたり、自分にとって価値あるものを選択したりすることを通して、児童に「意思決定能力」の「選択能力」と「課題選択能力」をはぐくませたい。

以上のような考え方のもと、本事例では、児童に「意思決定能力」つまり、「諸問題の解決に向けて自主的、実践的に取り組むとともに、希望や目標をもって生きる能力」の育成を視野に入れた授業実践を行った。

#### (4) 実践内容

##### ア 事前

- (ア) 学級活動(2)「高学年としての自分の役割」の実践

高学年としての自分の役割を知り、自分ができる活動を自己決定する。

##### (イ) 議題選定を全員で行う

議題ボックスの中に高学年として学校全体に働きかけるような議題(資料-13)が多く集まり、計画委員会で整理した後、全員で議題を決定した。

##### (ウ) 校内調査委員を募り、調査期間を設ける

校内調査委員を8名選出し、学校に必要な活動の調査期間を1週間設け、報告書にまとめた(資料-14)。

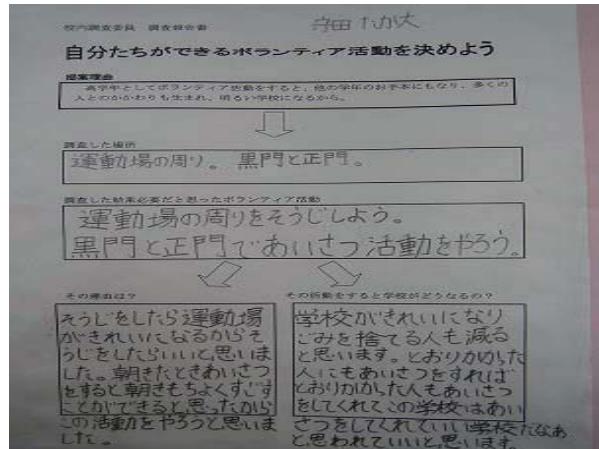
##### (エ) 個人ノートに自分の考えをまとめる

学級会に向けて自分の考えを個人ノートにまとめた。

資料-13 学校全体を意識した議題



資料-14 校内調査委員の報告



## イ 本時

児童の活動	指導上の留意点
1 はじめの言葉	○ 議題の内容について再確認することで、児童の話合いに対する意欲を高める。
2 司会グループの紹介	○ 自分の役割のめあてを言いながら自己紹介し、「責任をまっとうしよう」という気持ちを高めさせる。
3 議題の確認と提案理由の説明、話合いのめあて、柱の確認	○ 高学年として活動することの意義を確認し、話合いへ向けての意欲を高めさせる。
4 話合い 柱1 学校を明るくする活動の提案  柱2 自分が続けられる活動を決める。	○ 話合いがこう着したり、ずれたりしたときには話合いのめあてに戻るようにする。 ○ 話合いの観点を明確にし、より良い活動を考えやすいようにする。
5 先生から	○ 計画委員や提案者への賞賛をする。
6 終わりの言葉	○ 元気な声と拍手で終わらせ。

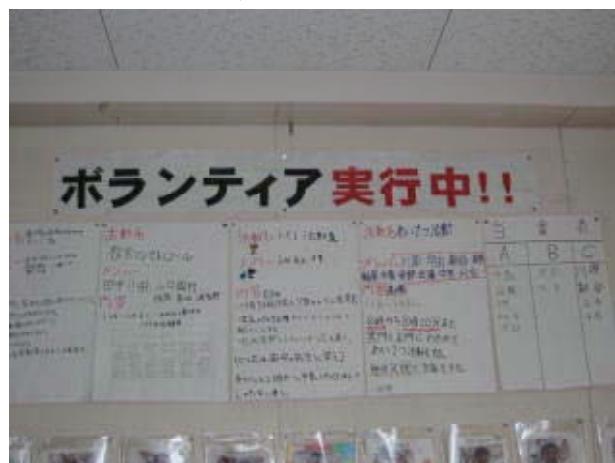
## ウ 事後

- (ア) 活動計画表を掲示する
 

活動のグループごとに計画を立て、当番表や計画表（資料-15）を作成し、教室背面に掲示した。
- (イ) 毎月、活動を振り返る時間を設ける
 

朝の時間に、各グループで活動を振り返る話しを行った（資料-16）。

資料-15 活動計画表



資料-16 振り返りの話合い



### (5) 考察

意思決定能力の育成に特にかかわる実践を中心に考察を述べる。

#### ○ 学級活動(2)「高学年としての自分の役割」の実践(事前)

事前に学級活動(2)を行うことで、高学年としてあるべき姿を確認することができ、これまでの自分の生活を振り返ることにつながった。話合いの中で児童からは、「低学年のお手本になるような行動を心がけなければならない」「まずは自分がきまりを守る必要がある」などの声が聞かれ、高学年としての立場を自覚することができた。

また、校内に残された卒業生の活動の足跡を探ることで、学校全体を見据えた活動も、高学年としての役割であることを確認することができた（資料-17）。

資料-17 卒業生の活動の足跡



児童は「委員会活動に今まで以上に熱心に取り組みたい」「廊下の歩き方に気を付け、低学年にも正しい歩き方を教えてあげる」「自分から積極的にあいさつをする」などの自己決定をすることができた。場面や状況に応じ、適切な行動を意識するとともに、自分の行動に責任を感じることで、「意思決定能力」における「自己管理・選択能力」（主体的に考えた上で自らにふさわしい選択をし、その結果を責任を持って受け入れ、適応・対処する能力）の育成につながるものと考えられる。

#### ○ 課題性、現実性を観点にした話合い

（本時）

- ・学校全体が明るくなるもの（課題性）
- ・3月まで継続できるもの（現実性）

この2つの観点をもって話合いをすることで、課題解決に迫る話合いをすることができた。何について話し合わなければならないのかを学級全員で確認することができた。学校を明るくする活動を実行する意義や、実現可能性に焦点をあてて話し合うことで、活動の内容を具体的にイメージすることができ、自分にとって価値あるものを選択しようとする意欲が見られた。また、継続していくことを観点にしたことで、無理なく実践可能なものを選択することができた（資料-18）。

このことは、活動を続けていく際の課題を明確にもち、自己の「課題解決能力」の育成に有効であった。

資料-18 観点をもとにした話合い



○ グループに分かれて活動内容の決定  
(本時)

グループに分かれて活動内容を詳しく話し合うことで、自分たちの活動を全校に広げ、学校全体を明るくしようという思いを強くもつことができた。これは、自分の活動に希望をもち、実現を目指して努力しようとする態度の育成につながったものと考えられる（資料-19）。

資料-19 児童の自己決定

- 前の6年生に続いてあいさつ運動をしたいです。理由はあいさつをすると、する方もされる方も気持ちがよくなるからです。また、あいさつが返ってきたらさらに気持ちが良くなり、あいさつのよさが全校に広まると思ったからです。
- 学校内のごみ拾いの活動をしたいです。校門や学校の森を毎朝きれいにして、気持ちよく1日を過ごせるようにしたいです。

○ 活動計画表の作成と掲示（事後）

活動計画表を掲示することは、活動に見通しをもつとともに、自分の役割に責任を感じ、最後までやり通そうとする課題解決能力の育成に有効であった。

○ 活動の振り返り（事後）

定期的に活動を振り返る場を設定し、自分がどれだけ計画通りに進めることができたか、自分の役割をしっかりと果たすことができたかを話し合った。この振り返りを通して、自分たちの活動の成果を実感したり、より明るい学校を目指して新たな課題を見つけていたりすることができた。

これは自分の活動に希望を持ち、明るい学校の実現を目指して努力しようとする態度の育成につながるものと考えられる（資料-20・21・22・23）。

資料-20 活動風景①（あいさつ活動）



資料-21 活動風景②（清掃活動）



資料-22 活動風景③（トイレに花を飾る活動）



- このごろはとても寒いので「寒いからいいや」とか、「自分の当番ではないからいいや」と思って活動ができていませんでした。でも、重要なあいさつ活動を始めた以上、心を入れ替えて自主的に活動していきたいです。あいさつ活動はあいさつをして、あいさつが返ってくるとむちやくちゃ気持しがいいので、みなさんもあいさつ活動をやってみて下さい！
- 6年生になったらやめるのではなくて、6年生になっても活動を続け、大人になっても地域の川の掃除などに積極的に参加していきたいと思います。

学級活動(1)の本授業実践は、「意思決定能力」(能力領域)における「自己管理・選択能力」「課題解決能力」(能力)をはぐくむための基盤となる活動として大変有効であった。今後、児童が活動を続けていく中で新たな課題に直面し、さらなる課題解決を行っていくことで、本実践はより意義深いものとなるものと考えられる。

### 第三章 研究のまとめと今後の課題

#### 1 研究のまとめ

本研究室では、キャリア発達にかかる「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探ってきた。「人間関係形成能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の育成を視野に入れた三つの授業実践を通して、次のようなことが明らかになった。

##### (1) 人間関係形成能力育成の視点から見た特別活動の役割

ア 発達段階に応じた系統的な指導の必要性  
本研究における実践事例「のばそう！自分らしさ」は「人間関係形成能力」におけ

る「自他の理解能力」の育成を視野に入れた高学年における実践である。

福岡市小学校基底教育計画では、それにかかる内容として、中学年で「自分のよさしようかい」、低学年で「のばしていこうぼくわたしのいいところ」が学級活動(2)の例として位置付けられている。それぞれ「自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを發揮することができる。」「自分のよいところを見つける。」「自分の好き嫌いが言える。」をねらいとしている。そして、低学年から発達段階に応じて、系統的に、また、発展的に指導していくことでそのねらいを達成していくものである。

小学校学習指導要領解説特別活動編にも「自己の理解を深め個性の伸長を図るなど自己を見つめる内容」の必要性が示されているとおり、特別活動、特に学級活動(2)での指導は、「人間関係形成能力」(自他の理解能力)を育成する上で直接的な取り組みになり得る。特別活動のねらいを達成させることは、キャリア教育のねらいを達成させるためにも重要な役割を担っている。

##### イ 他の活動（能力）との関連性

「人間関係形成能力」は、「自他の理解能力」「コミュニケーション能力」からなるが、培った能力を児童が他の活動場面へ転移できるようにする役割を特別活動は担っている。

例えば、実践事例「夢の実現に向かって歩こう」では、「友達の夢を知り、そのよさに気付き、認め合う態度を育てる」ことをねらいとして挙げている。また、「学校を明るくするために自分ができる活動を決めよう」は集団での話し合い活動を中心としながら自分の役割を再認識させた実践である。

これらのことからも言えるように、「人間関係形成能力」を基盤として、他の場面でもその能力を生かしていくように、活動の展開を工夫したり、発展的に指導したり

することができる。

このように、他の活動と関連させることでキャリア発達にかかる諸能力を統合的に育成することができると考える。

## (2) 将来設計能力育成の視点から見た特別活動の役割

### ア 発達段階に応じた系統的な指導の必要性

本研究における実践事例「夢の実現に向かって歩こう」は「将来設計能力」における「計画実行能力」の育成を視野に入れた高学年における実践である。

高学年において、このような題材を指導するにあたっては、希望や目標をもって生きるための発達段階に応じた系統的な指導が必要である。福岡市小学校基底教育計画では、それにかかる内容として、低学年は「決められた時間や決まりを守って取り組む」、中学年では「めあてや目標をもつ」が学級活動(2)の例として位置付けられている。これらの題材を通して、将来への夢をもち、集団と自己の役割を徐々に認識し、小学校段階での将来設計能力が育成され、更に中学校でのキャリア教育へつながると考えられる。

### イ 他の活動（能力）との関連性

希望や目標にかかる内容を題材として取り扱う場合には、夢や希望をもって生きる態度の育成と目標をもって生きる態度の育成の二つの側面から考える必要がある。

また、夢を語り合う授業を行うためには、安心して話せる学級の雰囲気や所属感を高める指導が大切である。これらの能力や態度は、低学年からの特別活動を通して、人間関係形成能力を高め、信頼関係を築く必要がある。

そして、キャリア教育に必要な社会に貢献しようという思いは、このような集団への所属意識から育つものと考えられる（資料-24）。

資料-24 地元紙掲載記事



## (3) 意思決定能力育成の視点から見た特別活動の役割

### ア 発達段階に応じた系統的な指導の必要性

本研究における実践事例「学校を明るくするために自分たちができる活動を決めよう」は「意思決定能力」における「課題解決能力」の育成を視野に入れた高学年における実践である。

児童が自主的、実践的な活動を通して、生活上の諸問題の解決に取り組み、希望や目標を持って生きる力を身につけるためには、発達段階に応じた系統的な指導が必要になってくる。高学年段階における「課題解決能力」育成のためには、低学年や中学年段階において「自分で考え、自分で行動する」「責任をもって行う」「目標をもって取り組む」などの力が十分育成されることが望まれる。福岡市小学校基底教育計画の学級活動年間計画ではそれに関わる学級活動(1)の議題例が多く示されている。

これらのこと踏まえて、学級や学校における生活の充実と向上を目指し、諸問題の解決を行う学級活動(1)の系統的、発展的な指導を低学年段階から行うことは、キャリア教育のねらいを達成するために大きな役割を果たすものと考えられる。

#### イ 他の活動（能力）との関連性

「意思決定能力」は「選択能力」「課題解決能力」から成るが、これらの能力の育成は他の活動との関連性も高い。

よりよい選択・決定を行ったり、課題解決を行ったりするためには、他者とコミュニケーションを図る能力(人間関係形成能力)や、情報を収集し、活用する能力(情報活用能力)などが必要である。これらの能力の育成は、これまで述べてきたように、望ましい人間関係の育成や、自主的、実践的な態度の育成をねらいとする特別活動の系統的な指導を行うことで十分可能である。

このように、児童の発達段階における、キャリア形成に関わる能力育成の系統性や、各能力との関連性を明らかにすることで、特別活動のキャリア教育に果たす役割はますます大きくなるであろう。

## 2 今後の課題

- 特別活動とキャリア教育における「4つの能力」の関連をさらに明確にし、キャリア形成を図る内容としていく。

## 3 研究のコメント

従来、ともすれば生徒指導のいっかんと捉えられてきた進路指導がキャリア教育としていま注目をあつめている。この「キャリア教育」という用語は、若者の就労のありようが社会問題となつたことを背景に、1999年の中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続改善について」で政策的に初めて取り上げられた。そこでは「望ましい職業観、勤労観及び職業に対する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」としてのキャリア教育を「小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と指摘された。

しかしながら、例えば冒頭の「望ましい職業観、勤労観」の形成に限っても、小学校のどの

時期に、どの時間を使って、どのような内容や方法でこれに応えるかは具体的に明らかにされていない。中学校学習指導要領では特別活動の(3)「学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択に関すること」のなかに「望ましい職業観・勤労観の形成」が、高等学校では「望ましい勤労観・職業観の確立」が謳われており、また、小学校から高校まで学級活動(HR活動)で「将来の生き方と進路の適切な選択(決定)」に関する事項が取り上げられており、さらに「勤労生産・奉仕的行事」を学校行事の一つとして位置づけられてきたことを踏まえると、こうしたキャリア教育の実施に際して、特別活動の領域に対する期待は大きいはずである。

そこで本年度の研究は「小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割」として直裁的かつ大上段にテーマを掲げ、学級活動のみならず、さきの勤労生産・奉仕的行事など特別活動の全般を通して「キャリア教育」という今日的課題にいかに切り込むことができるかについての研究に取り組んだものである。同時に、このことは「返す刀」で、これまでの特別活動を「キャリア教育」というナイフ(視点)で切ることにより、特別活動の新たな断面を明らかにしようという意欲的な試みでもある。

すなわち、2004年の文部科学省・キャリア教育報告書からキャリア教育で期待されるキャリア発達課題を抽出・分解し、「4つの能力」(具体的には4能力領域・8能力)を析出している。そしてこれら4つの能力の育成を基軸とした特別活動のモデル開発を志向している点が本研究のセールスポイントであろう。特-5頁にみられるように、低学年から中学年・高学年までの発達段階に応じた学級活動例がモデルプランとして示され、以下、高学年の3つの能力についてであるが、これに則った授業実践が展開されている。

事例1は「人間関係形成能力」(下位項目「他の理解能力」)の育成を視野に入れた学級活動(2)「のばそう！自分らしさ」(第5学年)であ

る。2年前の研究課題であった「自己肯定感」にも連関する「自分らしさ」は単なる「自分のいいところ」といった長所（キャラクター、性格）ではなく、むしろアイデンティティと読み替えるてもよい概念である。アイデンティティ・クライシスが叫ばれる時代において、「自分らしさ」を自分自身で発見することは必ずしも容易ではない。そこで「集団の中の個」を大事にする学級活動(2)の特性を生かし、鏡としての他者のまなざしや合わせ鏡としての他者の姿を通して映し出される自画像をもとに、自分らしさをデッサンし直す試みであったといえる。今回の取り組みは実践者の意図を超えて、集団のなかで自分を見つめ直す貴重な時間を醸し出す可能性を秘めており、「自分と向き合う時間になった」とまとめた児童のつぶやきが印象的であった。

事例2は「将来設計能力」の育成を視野に入れた学級活動(2)「夢の実現に向かって歩こう」（第6学年）である。これは学習指導要領の希望や目標をもって生きる態度の形成に関わる内容で、中川教育研究所・中川昭則先生によればかつての「不安や悩み」からこの「希望や目標」に移行する際の中間段階では「目標」ではなく「夢」だったそうである。したがって、この「夢」が「目標」と同義にこつこつ歩いて行ける所なのか、文字通り「ドリーム」としてロケットに乗らないと辿り着かないような所なのか、「将来」設計の射程距離が課題となった。各々が披露した「夢」（ほとんどが憧れの職業）に対する班の児童や保護者からの暖かい支持的なメッセージは、学級づくりの成果と、夢へ向かって歩み出す（飛び立つ）エネルギーになる可能性を予感させる教育実践であったが、同時に、改めてキャリア教育の中で小学校段階の特別活動が果たすべき守備範囲を確認する必要性を痛感させられるものであった。

事例3は「意思決定能力」の育成を視野に入れた学級活動(1)「学校を明るくするために自分たちができる活動を決めよう」（第5学年）であ

る。これは昨年度の中心テーマであった「実践的な社会性」と通底する内容であり、学級活動(1)として「選択能力」「課題選択能力」で構成される「意思決定能力」を引き出す実践であった。事前の学級活動(2)「高学年としての自分の役割」（互恵性）から引き継ぎ、これまでの体験や情報を手がかりに価値性や緊要性、継続性、汎用性などの観点から他者との関わりの中で見通しを持って自己決定したり集団決定したりする活動であった。高学年としての自覚をもって主体的に学校を明るくするためのボランティア的な諸活動にその後も積極的に取り組んでいることは例えば昨年度の「実践的な社会性」という観点からは高く評価できるが、果たして当初の狙いである「意思決定能力」がどれほど身に付いたかはのことからでは測定不能である。

このことは、上記の3事例に共通する課題であるが、例えは意思決定の場面を数多く設定すれば自ずと意思決定能力は高まるという類の予定調和では通らないだろう。したがって、「4能力」それぞれについての評価の方法が課題となる。その前提として、そもそもここでいう能力はcompetencyなのかabilityなのかcapabilityなのか、はたまたskillなのか、したがって天賦の能力なのか開発可能なものか、こうした理論的吟味をし、さきの力量測定の指標を模索することが次年度以降の課題となるだろう。

（九州大学 元兼正浩）

## 引用文献

- 1 文部省 小学校学習指導要領解説 特別活動編 東洋出版社 (平成11年)
- 2 国立教育政策研究所 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (平成14年)
- 3 文部科学省 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書  
～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～ (平成16年)
- 4 中央教育審議会 新しい時代の義務教育を創造する(答申) (平成17年)

## 参考文献

- 1 文部省 小学校学習指導要領解説 総則編 東京書籍 (平成11年)
- 2 文部省 小学校学習指導要領解説 特別活動編 東洋館出版社 (平成11年)
- 3 文部省 小学校特別活動指導資料 指導計画の作成と指導の工夫  
全教図 (平成3年)
- 4 文部省 小学校特別活動資料 新しい学力観に立つ特別活動の指導の創造  
全教図 (平成5年)
- 5 文部省 小学校特別活動指導資料 新しい学力観に立つ特別活動の授業の工夫  
東洋館出版社 (平成7年)
- 6 文部科学省 キャリア教育の推進に向けて (平成17年)
- 7 文部科学省 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書  
～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～ (平成16年)
- 8 宮城県教育研修センター みやぎのキャリア教育推進のために (平成16年)
- 9 神奈川県立総合教育センター キャリア教育推進ハンドブック (平成16年)
- 10 千葉市教育センター 生き方学習に関する研究 (平成16年)
- 11 福岡市立原中央中学校 平成16年度研究集録  
豊かに生きる力を身に付けた生徒の育成 (平成16年)
- 12 木村 夏子 道徳と特別活動 特別活動とキャリア教育 文溪堂 (平成16年)
- 13 木場 真理 道徳と特別活動 夢や希望 文溪堂 (平成16年)
- 14 中川 健二 道徳と特別活動 学級活動(2)の新しさ 文溪堂 (平成13年)
- 15 太田 佳光 道徳と特別活動 希望や目標 文溪堂 (平成12年)
- 16 三村 隆男 図解 はじめる小学校キャリア教育 実業之日本社 (2004年)
- 17 柳井 修 キャリア発達論 ナカニシヤ出版 (2001年)
- 18 中川 昭則 小学校特別活動の特質と指導 文溪堂 (平成8年)

---

## 共同研究者

天野 裕二 (研修企画係長) 吉田 卓 (原 小学校教諭)  
東 智裕 (大原小学校教諭) 鶴田 智博 (西花畠小学校教諭)

## 研究指導者

元 兼 正 浩 (九州大学大学院助教授)

平成18年度  
研究紀要  
(第748号)

G 11-01

## 小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割

—「4つの能力」の育成につながる学級活動(1)の実践を通して—

特別活動をキャリア教育の視点でとらえ、学級活動(1)に焦点化し、「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「4つの能力」との関連を明らかにした。そして、学級活動(1)の実践を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探っていった。その結果、学級活動(1)において、児童一人一人が役割を果たし、望ましい集団活動を積み重ねることが「4つの能力」の育成につながることがわかった。

## 目 次

### 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

1	主題設定の理由	67
(1)	キャリア教育をめぐる動向から	
(2)	育成したいキャリア教育の「4つの能力」について	
(3)	特別活動の目標とキャリア教育	
(4)	昨年度の研究の成果と課題から	
2	研究の目標	70
3	研究の仮説	70
4	研究の内容と方法	70
(1)	内容	
(2)	方法	

### 第Ⅱ章 「4つの能力」の育成につながる学級活動(1)の実践

1	第1学年の実践	72
	活動題「係の仕事を見直そう」	
	議題「にこにこかかりをパワーアップしよう！」	
(1)	指導の実際	72
(2)	考察	74
2	第4学年の実践	77
	活動題「5組の友達となかよしになろう」	
	議題「5組の友達ともっともっとなりやくなるための秋祭りをしよう」	
(1)	指導の実際	77
(2)	考察	79
3	第6学年の実践	83
	活動題「スマイル99 思い出に残るイベントをつくろうプロジェクト！」	
	議題「スマイル99 思い出に残るイベントをつくろうプロジェクト！の 計画を立てよう」	
(1)	指導の実際	83
(2)	考察	85

### 第Ⅲ章 研究のまとめと今後の課題

1	研究のまとめ	88
2	今後の課題	90
3	研究のコメント	92

## 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

### 1 主題設定の理由

#### (1) キャリア教育をめぐる動向から

平成15年6月、若年者の雇用問題に対し政府全体として対策を講ずるため、教育・雇用・産業政策の連携強化による総合的な人材対策である『若者自立・挑戦プラン』が取りまとめられた。平成16年6月には、「『若者自立・挑戦プラン』の強化の基本的方向」、同年12月には、同プランの実効性・効率性を高めることを目的とした『若者の自立・挑戦のためのアクションプラン』、平成17年10月には、各施策の具体化について検討を進めた「『若者の自立・挑戦のためのアクションプラン』の強化」さらに、平成18年1月には、『若者の自立・挑戦のためのアクションプラン』の改訂版が取りまとめられ、それらの中でキャリア教育が大きな柱として位置付けられてきた。

文部科学省では、平成16年度より「新キャリア教育プラン推進事業」において、インターンシップ推進のための国レベルでの連絡協議会の設置・開催、若者、地域の関係者等との情報交換、社会全体でキャリア教育を推進する気運を醸成していくための「キャリア教育推進フォーラム」の開催、また、地域ぐるみでキャリア教育に取り組むため、推進地域を指定し実践的研究を行うなどしている。平成17年度からは、「キャリア教育実践プロジェクト」を実施し、各都道府県において、地域における職場体験の推進のためのシステムづくり、中学校を中心とした職場体験の5日間以上の実施など、地域の教育力を最大限に活用し、キャリア教育のさらなる推進を図るために調査研究を行っている。

平成18年1月には、文部科学大臣が、「国際社会の中で活躍できる心豊かでたくましい人づくり」を目指し、「どの子にも豊かな教育を」という考え方方に立って、初等中等教育を中心

として、教育改革のために今後重点的に取り組むべき関連施策を、「教育改革のための重点行動計画」としてとりまとめた。具体的な取組としては、「義務教育の構造改革」、「活力ある人材を育てるための教育の充実」、「充実した教育を支える環境の整備」、「家庭・地域の教育力の向上」が挙げられているが、この中においてもキャリア教育の充実が活力ある人材を育てるための教育の一環として位置付けられている。また、中央教育審議会における学習指導要領改訂に向けた審議においても、キャリア教育に関連した様々な内容が取り上げられているところである。

キャリア教育に関する調査研究等の成果は平成8・9年度文部省委託研究の「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究(最終報告)」(平成10年3月)をはじめ、この成果を継承・発展させた国立教育政策研究所生徒指導研究センターによる「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)」(平成14年11月、以下「調査研究報告書」と略す)、そして、文部科学省による「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議(報告書)」(平成16年1月、以下「キャリア教育報告書」と略す)がある。とりわけ、「調査研究報告書」では、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」(以下、「枠組み(例)」と略す)を開発し、「職業観・勤労観」の形成に関連する能力を「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域に大別し、小学校の低・中・高学年、中学校、高等学校のそれぞれの段階において身に付けることが期待される能力・態度を具体的に示している(P2資料-1)。「キャリア教育報告書」では、キャリア教育推進のための方策の一つとして、各発達段階に応じた「能力・態度」の育成を軸とした学習プログラムの開発を挙げ、その中で、この「枠組み(例)」をキャリア教育における学習プログラムの枠組みの一つのモデルと見なすことができるも

#### 資料－1 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)

		小学校			中学校		高等学校					
		低学年	中学年	高学年								
<b>職業的（進路）発達の段階</b>												
○職業的（進路）発達段階（小・中等学校段階）		進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期										
職業的（進路）発達段階において重視しておきべき要素として、進路選択の基礎力及び将来の職業選択において必要な資質の形成という側面から捉えたもの。												
職業的（進路）発達にかかる能力		職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度										
領域	領域説明	職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度										
		能力説明										
人間関係形成機能	他の個性を尊重し、自己の尊重を發揮する。また、他の個性を尊重し、自己の尊重を發揮する。また、他の個性を尊重し、自己の尊重を發揮する。	<p>【自他の理解能】 自己理解を深め、他者の多様な個性を尊重し、自己の尊重を發揮する。 【コミュニケーション能】 多様な個人、組織の中でコミュニケーションや、ややかな人間関係を築きながら、自分の成長を果たしていく能力</p> <p>・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ・友達と仲良し、遊び、会う。 ・お世話になれた人などに感謝し親切にする。</p> <p>【コミュニケーション能】 あいさつや返事をする。「ありがとうございます」や、「ごめんなさい」と言葉。自分の声をみんなの前で話す。</p> <p>【情報収集・探査実力】 学ぶこと、働くこと、遊ぶこと及び多くの多様性を理解し、広く情報を探して、自分自身で、自分の進路や生き方の選択に生かす。</p> <p>【職業理解能】 様々な職業を通じて、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならないことを理解していく能力</p> <p>【職業理解能】 夢や希望を持つこと、生き方や生活を考え方や社会の実現を貢献するなど、自分の将来に対する見通しを設ける。</p>										
	<p>・自分のよいところを見つける。 ・友達のよいところを認め、めまといし合う。 ・自分の生活を支えている人に感謝し親切にする。</p> <p>・自分の意見や気持ちを分かりやすく表現する。 ・友達の気持ちから考えて行動しようとする。 ・年齢別層別の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。</p> <p>・身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ。</p> <p>・いろいろな職業や生き方が分かる。 ・自分の好きなことを分かることで、興味などを、囲碁などで調べたり、質問したりする。</p> <p>・身近な住民の様子やその変化を分かることで、自分の心地や感情を理解する。</p> <p>・施設・職場見学等を通して、働く人々や苦勞が分かる。 ・学んだり体験したりしたこと、生活や職業との関連をを考える。</p> <p>・自分の役割やその関連での中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 ・社会的な問題や職業に対する態度や感想を理解する。 ・教員の活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や行動に生かす。</p> <p>・将来の夢立てるとの関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 ・社会問題やマナー等の必要性や意義を体験を通して理解し、学習する。</p> <p>・学校、社会において自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす。</p> <p>・ライフスタイルに沿った個人の・社会的役割や責任を理解する。</p> <p>・様々な角度の社会的役割や意義を理解し、自己の生産性を考える。</p>											
情報運用能力	現実的探索と暫定的選択の時期							現実的探索・試行と社会的移行準備の時期				
	<p>・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・既存の自己像に基づく自己認識・勤労観の形成 ・選択の基準や判断の算出 ・生き方や人生設計に関する実験的探索</p>							<p>・自己理解の深化と自己有用感の獲得 ・既存の自己像に基づく自己認識・勤労観の確立 ・将来計画の立案と社会的移行の準備 ・選択の実験的探索による行動的検討</p>				
将来設計機能	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期							現実的探索・試行と社会的移行準備の時期				
	<p>・自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばすとする。 ・他の価値観や規範のユニークさを理解し、それを受け入れる。 ・互いに支え合いながら会える友人を得る。</p>							<p>・自己の悪いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する。 ・人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの磨きを続ける。 ・新たなつながりやコミュニケーションを実現して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 ・新しい環境や人間関係に適応する。</p>				
意思決定機能	現実的探索と暫定的選択の時期							現実的探索・試行と社会的移行準備の時期				
	<p>・自分の好みの仕事に対して責任感を持ち、自己理解を深め、自己の仕事に対する適性を理解する。 ・自分の好みの仕事に対して責任感を持ち、自己理解を深め、自己の仕事に対する適性を理解する。</p>							<p>・選択の基準となる自分なりの直感観、職業観、勤労観を持つ。 ・多様な選択肢の中から、自己的な意志と責任で当選することを選択する。 ・選択肢を実験的・暫定的に評価する。 ・選択肢を実験的・暫定的に評価する。 ・選択肢を実験的・暫定的に評価する。 ・選択肢を実験的・暫定的に評価する。</p>				

のとし、各学校においてキャリア教育を推進する際の参考として幅広く活用することを提倡している。

(2) 育成したいキャリア教育の「4つの能力」について

「キャリア教育報告書」の中で、「キャリア」と「キャリア教育」については、次のように定義されている。

## ○ キャリア

「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」

## ○ キャリア教育

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

また、同報告書では、「『キャリア』の形成にとって重要なのは、個々人が自分なりの確固とした勤労観、職業観をもち、自らの責任で『キャリア』を選択・決定していくことができるよう必要な能力・態度を身につけていくことにある。とりわけ、初等中等教育段階では、キャリアが子どもたちの発達段階やその発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくこと、つまり、『キャリア発達』を支援していくことが重要となる。」と述べている。

人間の成長・発達の過程には、いくつかの段階(節目)と各段階で取り組まなければならぬ発達課題があるが、これをキャリア発達の視点から見た「キャリア発達課題」と示している。小学校段階では、「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」とされており、「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」、「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」、「勤

労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」がキャリア発達課題とされている。この「キャリア発達課題」を達成するために必要とされる能力が「4つの能力」(4能力領域8能力)であり、前述した「枠組み(例)」に低・中・高学年児童の発達段階毎に、具体的な能力態度として示されている。

### (3) 特別活動の目標とキャリア教育

特別活動は、教科学習で学んだ成果を様々な体験活動や話合い等を通して深化・発展、統合させたり、逆にその成果を教科の学習に還元し反映させていくというねらいをもつ。

小学校学習指導要領解説特別活動編第2章第1節2では、特別活動で育成すべき資質・能力について、「望ましい集団活動の展開」、「心身の調和のとれた発達」、「個性の発見と理解」、「社会性の育成」、「自主的、実践的な態度の育成」の観点から示されており、この能力や態度を明確にして、計画的に指導することが大切であるとされている。

昨年度の研究では、小学校学習指導要領第4章特別活動第2内容A学級活動(2)で、「希望や目標をもって生きる態度の形成」が第1に挙げられており、将来と自分とのかかわりや自己を生かそうとする生活態度の育成の必要性が述べられていることについて、キャリア教育がねらう能力や態度との関連が深いことに着目した。そして、「望ましい集団活動を通して、個性の伸長を図り、集団の一員としての自覚を深め、自主的、実践的態度の育成を目指す」特別活動は、「自分と他者、自分と集団とを関係付け、価値付けながら望ましい勤労観・職業観を身に付けようとする」キャリア教育に果たす大きな役割があると考え、研究を推進してきた。

### (4) 昨年度の研究の成果と課題から

本研究室では、昨年度、「4つの能力」の育成を軸とした学級活動(2)の活動モデルの開発を中心に、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探ってきた。その成果は、次のとおりである。

- 「4つの能力」の育成を軸とした学級活動モデルプランを開発した。

「枠組み(例)」を参考にして、福岡市小学校基底教育計画の学級活動年間指導計画に示されている内容を「4つの能力」(4能力領域8能力)で分類・整理した。

- モデル授業を開発した。

学級活動モデルプランをもとに、「4つの能力」のうち「人間関係形成能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の育成を視野に入れ、育成したい能力別に3つのモデル授業を開発した。

しかしながら、「特別活動とキャリア教育における『4つの能力』について、モデルプランの開発にとどまらず、その関連をより明確にできないのか」、「学級活動について、さらにキャリア形成を図る内容にすることはできないのか」、さらには、「学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理などに関する学級活動(1)の活動内容とキャリア教育との関連は明らかにできないのか」という課題が残った。

そこで、本年度は、学級活動の内容を「4つの能力」で分類・整理した昨年度の研究とは視点を変えて、学級活動(1)の一連の活動と「4つの能力」との関連を明らかにするために、よりよい学級生活の実現を目指して、一人一人の児童が協力して学級での生活を充実、向上させるための活動に重点を置き、研究を推進することにした。

つまり、本研究は、学級活動(1)に焦点化して、「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「4つの能力」との関連を明らかにしていくことを研究の方向性として位置付け、「4つの能

力」の育成につながる学級活動(1)の実践を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探ろうとするものである。

## 2 研究の目標

「4つの能力」の育成につながる学級活動(1)の実践を通して、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を明らかにする。

## 3 研究の仮説

学級活動(1)の基本的な展開に「計画委員(司会グループ)」「提案者」「フロア」それぞれの育成したい児童の姿を位置付け、キャリア教育の「4つの能力」との関連を明らかにすれば、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割が明らかになるであろう。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 内容

- ア 実践する学級活動(1)の基本的な展開(以下「基本的な展開」と略す)を共通化する。
- イ 「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「キャリア教育の『4つの能力』」との関連を明らかにする。
- ウ 学級活動(1)の実践を通して、「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「キャリア教育の『4つの能力』」との関連を分析する。

### (2) 方法

- ア 実践する学級活動(1)の基本的な展開と活動を下記のようにする(表-1)。

表-1 共通化した学級活動(1)の展開と活動

展開	活動
事前	1. 議題の募集・整理・選定 (第1回計画委員会) 2. 話合いの柱・提案理由決め, 司会者の役割分担 (第2回計画委員会) 3. 原案作り 4. 議題説明会

	5. 進め方の確認
事中	1. 始めの言葉 2. 司会者の紹介 3. 議題の確認と提案理由の確かめ 4. 話合いのめあての確認 5. 先生の話 6. 話合い 7. 決まったことの発表 8. 話合いの振り返り 9. 先生の話 10. 終わりの言葉
事後	1. 役割分担 2. 準備 3. 実施 4. 振り返り

イ 「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「キャリア教育の『4つの能力』」の関連表を作成する(P5表-2)。

(ア) 縦軸に学級活動(1)の基本的な展開、横軸に活動を構成する役割分担(計画委員・提案者・フロア)をとり、そこに「福岡市小学校評価事例集 特別活動 学級活動(1)」の評価規準の具体的な姿を、「学級活動(1)で育成したい児童の姿」ととらえて、位置付ける。

(イ) 縦軸(展開)に対応させて、関連が強いと考えられるキャリア教育の「4つの能力」を位置付ける。

ウ 学級活動(1)の実践を通して、「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「キャリア教育の『4つの能力』」との関連を分析する。

(ア) 児童の実態、活動の意義、学級経営、組織づくりとの関連などから、学級目標の具現化に向けた、具体的な活動題を選定する。

(イ) 指導計画を立てる。

(ウ) 「枠組み(例)」の「職業的(進路)発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度」をもとに、実践する活動題における「『4つの能力』の育成につながる児童の姿」を設定する。

(エ) 学級活動(1)の検証授業を通して、基本的な展開での児童の具体的な姿を記録する。

(オ) 「検証授業での具体的な児童の姿」と設定した「『4つの能力』の育成につながる児童

の姿」との関連を比較分析する。

(カ) 比較分析をもとに、キャリア教育に果たす特別活動の役割について考察する。

表－2 「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「キャリア教育の『4つの能力』」の関連表(4年)

展開	活動	全員	計画委員 (司会グループ)	提案者	フロア	4つの 能力
事前	1. 議題の募集・整理・選定 2. 話合いの柱・提案理由決め 司会者の役割分担 3. 原案作り 4. 議題説明会 5. 進め方の確認	・議題の提案の仕方、話合いの進め方が分かる。(知・理)  ・準備・計画・話合い・実行・振り返りの一連の活動に関心を持っている。(知・理)	・話合いの見通しを持って計画を立て司会進行をする。また話し合ったことを順序よく記録する。(思・判)	・学級生活から議題を考える。(思・判)  ※代表委員会や学校行事関連の議題を知る。(知・理)  ・決まった議題に対して関心を持っている。(関・意・態)	・議題案を出そうとする。(関・意・態)  ・自分の考えを説明するのに必要な資料を作る。(技・表)	将来設計能力
	1.始めの言葉 2.司会者の紹介 3.議題の確認と提案理由の確かめ 4.話合いのめあての確認 5.先生の話 6.話合い 7.決まったことの発表 8.話合いの振り返り 9.先生の話 10.終わりの言葉	・自分たちの力で話合いを進めようとする。(関・意・態)	・話合いの計画に沿って司会進行をする。また話し合ったことを順序よく記録する。(技・表)		・自分の考えを友達に分かるように話す。(技・表)  ・友達の考えを最後まで聞く。(技・表)  ・実践可能な内容かどうか考える。(思・判)  ・話合いのめあてや友達の考えを合わせてよりよい考えにしていく。(技・表)  ・話合いでの決まったことが分かる。(知・理)	情報活用能力
	1.役割分担 2.準備 3.実施 4.振り返り			・決まったことを協力して実行する。(技・表)		人間関係形成能力
				・活動を振り返り、よかつたことを探そうとする。(関・意・態)		意思決定能力
						人間関係形成能力

## 第Ⅱ章 「4つの能力」の育成につながる 学級活動(1)の実践

### 1 第1学年の実践

活動題「係の仕事を見直そう」

議題「にこにこかかりをパワーアップしよう！」

#### (1) 指導の実際

##### ア 本活動題の意義

本活動題は、係活動を見直すことを通して、今後の意欲につなげていく活動である。

本学級では、1学期に「自分たちでできる仕事みつけ」をし、一人一役で係活動をしてきた。黒板係、くばり係などの当番的な係がほとんどで活動に創意工夫は見られず、活動が停滞してしまった係も多かった。

2学期の始めに、係活動の見直しを行い、「①みんなで協力できる②似たような仕事を合わせる③日直の仕事にできるものは、日直に任せる④クラスが楽しくなるように活動を工夫する」の4つの観点で1学期の係を参考に2学期の係を決めた。その結果、14の係が整理・統合され、9つの係(遊び・かぎしめ・整理・かざり・保健・ランチ・本・クイズ・メッセージ)が誕生した。

最初は、大変意欲的に活動していた係活動が、まだまだ当番的な仕事しかできていない、仕事がない、協力して活動ができるいないなどの理由から、次第に停滞してしまった。そこで、自分の係だけではなく、友達の係の仕事内容を考えることで、いろいろな仕事があることを理解したり、また、友達の考えを取り入れたりしながら自分たちの係をよりよくしていこうと考えた。

本活動題は、友達と共に活動する楽しさを味わい、学級集団の一員としての自覚を1年生なりに高めるとともに、みんなで学級目標を達成していくという態度を育てる上で大変意義があると考えた。

#### イ 目標

○ クラスを学級目標に近づけるために、係の見直しを話し合い、活動することができる。(関心・意欲・態度)

○ 提案理由と結びつけながら、係を見直すための工夫を考えることができる。(思考・判断)

○ 係を見直す工夫を、その理由とともに友達に分かりやすく伝えることができる。(技能・表現)

○ 係を見直す方法が分かり、活動の楽しさや大切さが分かる。(知識・理解)

##### ウ 本活動題とキャリア教育の「4つの能力」とのつながり

本活動では、「4つの能力」の育成につながる児童の姿を、次のように設定した。

###### (ア) 将来設計能力とつながる児童の姿

① 自分の仕事・役割が分かる児童

② 自分の仕事・役割の大切さが分かる児童

③ 学級会や係活動の準備や片付けができる児童

④ 上級生を見て、自分の将来の姿を考えることができる児童

###### (イ) 情報活用能力とつながる児童の姿

① 様々な仕事があることが分かる児童

② 様々な仕事に興味・関心をもつことができる児童

③ 係活動に取り組む児童

④ 係活動の大切さが分かる児童

###### (ウ) 人間関係形成能力とつながる児童の姿

① 自分の考えをもつことができる児童

② 友達と助け合うことができる児童

③ 自分の考えを友達に話すことができる児童

###### (エ) 意思決定能力とつながる児童の姿

① 自分のやりたいことを決めることができる児童

② 決まったことに対して、活動しようとする児童

## 工 活動の実際

展開	活動	全員	計画委員(司会グループ)	提案者	フロア
事前	1.議題の募集・整理・選定		・学級会の議題について話し合った。(計画委員)	・係活動について議題を提案した。	
	2.話合いの柱 ・提案理由決め 司会者の役割分担		・司会グループで役割分担をした。 ・6年生の児童委員に司会のやり方を教えてもらった。(司会)	・提案理由を考えた。 ・提案理由を話す練習をした。	
	3.議題説明会		・議題を知らせた。 ・毎日、司会の練習をした。(司会)	・提案理由をみんなに知らせた。	・係ごとに話し合い、係の今までの活動内容・困っていることを一覧にした。(係)
	4.原案作り		・議題、話合いのめあて、話合いの柱の紙を作った。(黒板記録)	・友達の係パワーアップのアイディアを考えた。(全員) ・パワーアップのアイディアを上級生の所に取材しに行つた。(全員) ・パワーアップのアイディアをカードに書いて、係ごとの画用紙にはつた。 ・係ごとに集まつたアイディアを話合いの観点ごとに分類シールをはつた。 ・アイディアの中で質問したいものを選び、質問をカードに書いた。 ・質問された人は、お答えカードに質問の答えを書いた。(質問された人) ・アイディアの中から取り入れたいアイディアを個人で考えた。取り入れたい訳も考えて個人ノートに書いた。 ・係ごとに司会と記録を決めた。(係)	
	5.進め方の確認		・給食時間に司会の練習をした。(計画委員) ・学級会の準備をした。(計画委員)	・計画委員会の司会の練習に参加し、話しの流れを知つた。(全員)	
	1.始めの言葉		・元気よくはじめの言葉を言った。		
	2.司会者の紹介		・それぞれの役割ごとに自己紹介をした。		
	3.議題の確認と 提案理由の確かめ		・提案理由をみんなの前で話した。 ・議題、提案理由を確認した。		
	4.話合いのめあての確認		・話合いのめあてを確認した。		
	5.先生の話		・先生の話を聞き、今日話し合うことを再確認した。		
事中	6.話合い		・<アイディアタイム>・考えたアイディアを直接渡しに行つた。 ・<アイディアタイム>・渡されたアイディアを直接もらつた。 ・<質問タイム>・アイディアに対して、書いてくれた人に直接質問をしに行つた。 ・<質問タイム>・カードや具体物を渡しながら、質問に答えた。 ・<なるほどタイム>・<まとめタイム> ・係の中で、もつたアイディアの中から、取り入れたいアイディアを話し合つた。 ・個人の考えをまとめながら、取り入れたいアイディアを決めた。 ・取り入れたアイディアをボードに書き、黒板に貼つた。 ・実際に友達のアイディアに自分たちの考えを取り入れながら、活動をした。		
	7.決まつことの発表		・<ここにこタイム>・係ごとに取り入れたアイディアを発表する。そのときに、アイディアを考えてくれた人にお礼を言った。 ・実際に活動の見本があるところは、いっしょに発表した。		
	8.話合いの振り返り		・他の係が取り入れたアイディアを聞いた。		
	9.先生の話		・この学級会でみんなで協力して話し合えたことや係のパワーアップができたことを振り返り、満足感をもつた。		
	10.終わりの言葉		・元気よくおわりの言葉、協力してくれた全員にお礼の言葉を言った。		
	1.役割分担		・係ごとに活動計画を立てた。 ・係ごとに役割分担をした。		
	2.準備				
	3.実施		・友達と協力して係活動に取り組んだ。		
	4.振り返り		・働くことの大切さが分かった。 ・活動を振り返り、みんなへの感謝の気持ちをもつた。		

## (2) 考察

ア 事前の活動における「4つの能力」とのつながり

事前の活動2「話合いの柱・提案理由決め、司会者の役割分担」、事前の活動5「進め方の確認」において、司会グループの児童が、司会、黒板記録、タイマーに役割分担をし、それぞれが学級会のために準備をしたり、自分の役割の練習をしたりする姿が見られた。フロアの児童も、係毎に司会者・記録者・発言者などの役割分担をすることで、自分の役割をしっかりと把握し、事前に一生懸命練習する姿が見られた。この姿は、将来設計能力①「自分の仕事・役割が分かる児童」、②「自分の仕事・役割の大切さが分かる児童」、③「学級会や係活動の準備や片付けができる児童」の姿とつながりが強いと考える。

また、司会の児童が、児童委員会の6年生に司会の方法を教わりに行く姿も見られた。近未来の像である6年生に教わりに行ったことで、「私も高学年になったら、児童委員会に入って司会をしたい。」と自分が上級生になったときの理想の姿をえがくことができた(資料-2)。この姿は、将来設計能力④「上級生を見て、自分の将来の姿を考えることができる児童」の姿とつながりが強いと考える。

事前の活動3「原案作り」において、全員に友達の係のアドバイスカードを書かせ

資料-2 上級生に司会のやり方を教わっている児童



資料-3 友達の係に興味・関心をもち、考えたアドバイスをカードに貼っている児童



表-3 事前の活動と「4つの能力」との関連表(1年)

展開	活動	能力
事前	1. 議題の募集・整理・選定 (第1回計画委員会)	
	2. 話合いの柱・提案理由決め、司会者の役割分担 (第2回計画委員会)	将来設計能力
	3. 原案作り	情報活用能力
	4. 議題説明会	
	5. 進め方の確認	将来設計能力

た(資料-3)。児童は、自分の係だけでなく、友達の係にも興味・関心をもち、たくさんのアドバイスを考えた。中には、兄弟児や上級生に取材をし、様々な情報を集める児童の姿も見られた。この姿は、情報活用能力①「様々な仕事があることが分かる児童」、②「様々な仕事に興味・関心をもつことができる児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事前の活動では、「将来設計能力」および「情報活用能力」との関連が非常に強いと考える(表-3)。

イ 事中の活動における「4つの能力」とのつながり

事中の活動6「話合い」の「アイディアタイム」、「質問タイム」において、直接アイディアを友達に渡しに行ったり、質問をしたりしたことで、友達とコミュニケーションを図る姿が見られた(P9資料-4)。ま

資料－4 自分の考えをアイディアカードに書いて、友達に話している児童



資料－5 具体物を持って、質問に答えている児童



た、質問に答える際に、分かりやすく説明するために具体物をもって答えている児童の姿も見られた（資料－5）。この姿は、人間関係形成能力①「自分の意見をもつことができる児童」、③「自分の考えを友達に話すことができる児童」の姿とつながりが強いと考える。

事中の活動6「話合い」の「なるほどタイム」「まとめタイム」では、アイディアの中から取り入れたいものを係毎に話し合った。その際、事前に書いた個人の学級会ノートをもとに、係の友達と話し合いながら取り入れるアイディアを選択・決定をしていく姿が見られた（資料－6）。この姿は、人間関係形成能力①「自分の意見をもつことができる児童」、③「自分の考えを友達に話すことができる児童」および意思決定能力①

資料－6 係の中で話し合い、自分たちのやりたいことを決めている児童



「自分のやりたいことを決めることができる児童」の姿とつながりが強いと考える。

さらに、決定直後から決まったことに取り組む姿が見られた。例えば、かざり係は「クラスのアルバムをつくる」という決定に対し、早速見本を作り始めた。事中の活動7「決まったことの発表」の「にこにこタイム」では、見本をもとに、係の決定を全体の前で発表をした（資料－7）。この姿は、意思決定能力②「決まったことに対して活動しようとする児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事中の活動では「人間関係形成能力」および「意思決定能力」との関連が非常に強いと考える（P10表-4）。

資料－7 「アルバムを作る」という決定に対し、

見本のアルバムを作り、発表している児童



表-4 事中の活動と「4つの能力」との関連表(1年)

展開	活動	能力
事中	1. 始めの言葉 2. 司会者の紹介 3. 議題の確認と提案理由の確かめ 4. 話合いのめあての確認 5. 先生の話 6. 話合い	
		人意
	7. 決まったことの発表 8. 話合いの振り返り 9. 先生の話 10. 終わりの言葉	意

ウ 事後の活動における「4つの能力」とのつながり

事後の活動1「役割分担」では、係毎に簡単な活動計画を立てた。この中で、いつ・誰が・何をするかといった役割分担をする姿が見られた（資料-8）。この姿は、将来設計能力①「自分の仕事・役割が分かる児童」の姿とつながりが強いと考える。

事後の活動3「実施」では、アドバイスをもとに、友達と協力しながら係活動をする姿が見られた（資料-9）。この姿は、人間

資料-8 いつ・だれが・何をするかを書いた

## 活動計画表

「みんな ゆかよし にここに 2くみ」に うちかづくための... にここにカンパニー こんしゅうのかつどう			
こんしゅう かんぱりごと			
いつのじかんに		だれが	こんなかつどうをします！ OKマーク
月曜日	ひる休み	たにせな だたけすみ	一ねん二くみのドアの つかいにサンタさんやシリ をつくります。
火曜日	中休み	たにまゆ まくまゆ	一ねん二くみのきょうし の中のかづりをつくります。
水曜日	ひる休み	たにせな だたけすみ たにまゆ	一ねん二くみのきょうし の中のいろいろなでこ にかづりをつくります。
木曜日	中休み	たにせな だたけすみ	ど玉たうかおたにじゅうひの とこにかづりをつくります。 そしておなんじゅうひの人 をつくります。
金曜日	ひる休み	たにまゆ だしまゆ	かづりをたくさんつくり ます。そしたら一人 二くみが登ろくさんとおもいます。

資料-9 友達と助け合いながら、決まったことに

対して取り組もうとする児童



関係形成能力②「友達と助け合うことができる児童」、情報活用能力③「係活動に取り組む児童」および意思決定能力②「決まったことに対して、活動しようとする児童」の姿とつながりが強いと考える。

事後の活動4「振り返り」では、係活動に対するアンケートを行った。「係活動は、大切だと思いますか」という項目について、92.8%の児童が「非常に大切」と答えた。この姿は、情報活用能力④「係活動の大切さが分かる児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事後の活動では、「将来設計能力」、「人間関係形成能力」、「意思決定能力」および「情報活用能力」との関連が非常に強いと考える（表-5）。

表-5 事後の活動と「4つの能力」との関連表(1年)

展開	活動	能力
事後	1. 役割分担	将
	2. 準備	
	3. 実施	情 人 意 向
	4. 振り返り	情

## 2 第4学年の実践

活動題「5組の友達となかよしになろう」  
議題「5組の友達ともっともっとなかよくなるための秋祭りをしよう」

### (1) 指導の実際

#### ア 本活動題の意義

本校には、5組（特別支援学級）に4名の児童が在籍している。4年生のC児も在籍しているが、本学級は交流学級ではなく、これまで交流した経験はなかった。休み時間に5組の教室に遊びに行く本学級の児童の姿もあまり見られなかった。しかし、5組の教室前は頻繁に通るので、自分たちとは違う特別な学習をしているという意識はあると考えられた。例えば、5組の教室で行われている「パン作り」や「工作」などに興味を示し「自分たちもやってみたい。」と言う児童もいた。

これらの状況から児童に、「4年生のC児と交流をもっていないこと」、「同じ階、近い教室にもかかわらず、かかわりがあまりないこと」などの問題意識をもたせ、その問題を解決していくことにより、学級や学校の生活を充実、向上させていきたいと考え、本活動題「5組の友達となかよしになろう」を設定した。事中においては、選定した議題「5組の友達ともっともっとなかよくなるための秋祭りをしよう」について話し合い、その具体的な方法を決定していった。

本活動題は、生活上の諸問題を解決していくという学級活動（1）のねらいだけではなく、障がいをもった児童との人間関係を形成することにより、本学級の児童自身が、差別や偏見のない人間形成を行っていく上でも大変意義深いと考えた。

#### イ 目標

- 楽しい活動にするために協力して仲良く活動することができる。  
(関心・意欲・態度)
- 話合いで決まったことを考えながら活

動できる。 (思考・判断)

- 集会における自分の役割を理解し、進んで果たすことができる。(技能・表現)
- ねらいに沿って役割を果たすことの意味が分かる。 (知識・理解)

#### ウ 本活動題とキャリア教育の「4つの能力」とのつながり

本活動では、「4つの能力」の育成につながる児童の姿を、次のように設定した。

##### (ア) 将来設計能力とつながる児童の姿

- ① 学級活動（1）の事前・事中・事後の一連の活動を通して、互いの役割や役割分担の必要性が分かる児童
- ② 学級会や集会の計画づくりの必要性に気付き、活動の手順が分かる児童
- ③ 学級会や集会の計画を立てる児童

##### (イ) 情報活用能力とつながる児童の姿

- ① 分からないことを調べたり、質問したりする児童
- ② 学級活動（1）の事前・事中・事後の一連の活動に積極的にかかわる児童
- ③ 活動することの楽しさが分かる児童

##### (ウ) 人間関係形成能力とつながる児童の姿

- ① 自分のよいところを見つける児童
- ② 友達のよいところを認める児童
- ③ 自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する児童

- ④ 友達の気持ちや考えを理解しようとする児童

##### (エ) 友達と協力して、活動に取り組む児童

- 意思決定能力とつながる児童の姿
  - ① 自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む児童
  - ② してはいけないことが分かり、自制する児童
  - ③ 自分の役割に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする児童
  - ④ 自分の力で課題を解決しようと努力する児童

## 工 活動の実際

展開	活動	全員	計画委員(司会グループ)	提案者	フロア
事前		<ul style="list-style-type: none"> <li>・5組の教室で行われている「パン作り」や「工作」に興味をもった。</li> <li>・5組についてのアンケートに回答した。</li> <li>・5組とのかかわりの現状について問題意識をもった。</li> <li>・5組から「ふんぶんごま作り集会」に招待された。</li> <li>・招待のお礼に自分たちができることはないかと考えた。</li> <li>・5組の担任から障がいについての話を聞き、まずは、休み時間などに5組の児童と一緒に遊び始めた。</li> </ul>			
	1.議題の募集・整理・選定		<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回計画委員会で議題「5組の友達ともっとつなかくなるための秋祭りをしよう」を選定した。</li> </ul>		
	2.話合いの柱 ・提案理由決め 司会者の役割分担		<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回計画委員会で提案理由を決めた。</li> <li>・話合いの柱を決めた。</li> <li>・司会グループの役割分担をした。</li> </ul>		
	3.原案作り			<ul style="list-style-type: none"> <li>・「秋祭り」の出店について、原案を作った。(4グループ)</li> </ul>	
	4.議題説明会		<ul style="list-style-type: none"> <li>・議題説明会を開いた。議題、提案理由、話合いの柱、話合いのめあてなどを説明した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・議題説明会で「秋祭り」の出店のルールや工夫の原案について説明した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの原案に対して、質問や付加・修正の意見を、提案理由や話合いのめあてに立ち返りながら、個人ノートに書いた。</li> </ul>
	5.進め方の確認		<ul style="list-style-type: none"> <li>・司会の練習や記録(黒板、ノート)方法の確認など、学級会のリハーサルをした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級会で提案するために、資料の準備やプレゼンテーションの練習などをした。</li> </ul>	
事中		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちの力で話合いを進めようとした。</li> </ul>			
	1.始めの言葉				<ul style="list-style-type: none"> <li>・議題に対する自分の思いを含めた始めの言葉を述べた。</li> </ul>
	2.司会者の紹介		<ul style="list-style-type: none"> <li>・話合いの計画に沿って司会進行をした。(司会)</li> </ul>		
	3.議題の確認と 提案理由の確かめ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・話合ったことを順序よく記録した。(黒板、ノート記録)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提案理由を述べた。(提案者)</li> </ul>	
	4.話合いのめあての確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話合いのめあてを確認した。</li> </ul>			
	5.先生の話				
	6.話合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達の考えを最後まで聞いた。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「秋祭り」の出店のルールや工夫について、自分たちの考えをプレゼンテーションを通して、友達に分かるように提案した。</li> <li>・友達の考えを提案理由や話合いのめあてに照らして、実践可能な内容かどうかを考えた。</li> <li>・各グループ毎に集まり、友達の考えを合わせて、「秋祭り」の出店のルールや工夫をよりよいものにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの提案に対して、質問したり、付加・修正の意見を述べたりした。</li> </ul>
	7.決まったことの発表			<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いにより付加・修正した「秋祭り」の出店のルールや工夫を発表した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いにより、各グループの原案がどのように付加・修正されたかが分かった。</li> </ul>
	8.話合いの振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話合いのめあてに照らして、振り返りをした。</li> </ul>			
	9.先生の話				
	10.終わりの言葉				<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級会に対する自分の頑張りを含めた終わりの言葉を述べた。</li> </ul>
事後	1.役割分担		<ul style="list-style-type: none"> <li>・実行委員がプログラム、役割分担計画、活動計画などを作成し、提案したことを受け、「秋祭り」実施までの準備内容について考えた。</li> </ul>		
	2.準備		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級会で決まったことに基づいて、協力しながら「おいでよ!なかよし友達いっぽい秋祭り」の準備をした。</li> </ul>		
	3.実施		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おいでよ!なかよし友達いっぽい秋祭り」を実施した。</li> </ul>		
	4.振り返り		<ul style="list-style-type: none"> <li>・本活動題における一連の活動を、よかつたことを探しながら振り返ることで、これから5組さんとのかかわりや、他学級、他学年とのかかわりについても意欲をもった。</li> <li>・学級目標「元気いっぽい、友達いっぽい、最後まであきらめない4年1組」に照らして振り返ることで、その達成に向けたこれからの意欲が高まった。</li> </ul>		

## (2) 考察

### ア 事前の活動における「4つの能力」とのつながり

事前の活動1「議題の募集・整理・選定」で、提案者から「おいでよ！なかよし！友達いっぱい秋祭り」が提案された。この提案は、先に5組から招待された「ぶんぶんごま作り集会」のお礼として、今度は、自分たちが招待するためのものであった。この提案を受けて、計画委員(司会グループ)は、第1回計画委員会において、その計画づくりの必要性に気付き、本議題を選定した(資料-10)。

事前の活動2「話合いの柱・提案理由決め、司会者の役割分担」(第2回計画委員会)では、提案者も出席して、話合いが行われた。

事前の活動1, 2におけるこれらの姿は、将来設計能力①「学級活動(1)の事前・事中・事後の一連の活動を通して、互いの役割や役割分担の必要性が分かる児童」、②「学級会や集会の計画づくりの必要性に気付き、活動の手順が分かる児童」、③「学級会や集会の計画を立てる児童」の姿とつながりが強いと考える。

本学級の児童は、5組の児童みんなに喜んでもらえる「秋祭り」の出店にするために、5組担任に障がいについての話を聞いた

資料-10 第1回計画委員会で議題案を読み上げる

計画委員の児童



資料-11 5組の児童と一緒に工作をして遊ぶ児童



たり、休み時間などに5組の児童と一緒に遊んだりして、お互いにかかわりを深めていった(資料-11)。

事前の活動3「原案作り」では、5組の児童とのかかわりをもとに、分からぬことを調べたり、質問したりしながら、「秋祭り」の出店で行うゲームのルールやその他の工夫について、学級会で提案するための原案を各グループ毎に作ることができた。

また、フロアの児童は、事前の活動4「議題説明会」において、各グループの原案についての説明を聞き、それに対する質問や付加・修正の意見をもった(資料-12)。

事前の活動3, 4におけるこれらの姿は、情報活用能力①「分からぬことを調べたり、質問したりする児童」、②「学級活動(1)の事前・事中・事後の一連の活動に積極的

資料-12 議題説明会で提案された原案に対して、

質問や意見を書くフロアの児童



表－6 事前の活動と「4つの能力」との関連表(4年)

展開	活 動	能 力
事 前	1. 議題の募集・整理・選定 (第1回計画委員会)	将
	2. 話合いの柱・提案理由決め, 司会者の役割分担 (第2回計画委員会)	将
	3. 原案作り	情
	4. 議題説明会	情
	5. 進め方の確認	

にかかわる児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事前の活動では、「将来設計能力」および「情報活用能力」との関連が非常に強いと考える(表-6)。

#### イ 事中の活動における「4つの能力」とのつながり

事中の活動6「話合い」で、提案する各グループは、「秋祭り」の出店のルールや工夫について、自分たちの考えを友達に分かるように、プレゼンテーションを通して、提案した。フロアの児童は、各グループの提案に対して、質問したり、付加・修正の意見を述べたりした。そこには、お互いに友達の意見を最後まで聞こうとする姿が見られた。

次に、提案した各グループは、友達から出された付加・修正の意見を提案理由や話合いのめあてに照らして、実践可能な内容であるかを考えた。そして、グループ内で話し合い、友達の意見を取り入れながら「秋祭り」の出店のルールや工夫をよりよいものにした。そこには、友達と協力して、話合いに取り組む児童の姿が見られた(資料-13・14)。

資料-13 自分たちの考えを、プレゼンテーションを通してわかりやすく提案する提案者の児童



資料-14 友達と協力しながら、話合い活動に取り組む児童



事中の活動6におけるこれらの姿は、人間関係形成能力①「自分のよいところを見つける児童」、②「友達のよいところを認める児童」、③「自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する児童」、④「友達の気持ちや考え方を理解しようとする児童」、⑤「友達と協力して、活動に取り組む児童」および情報活用能力①「分からないことを、調べたり、質問したりする児童」、②「学級活動(1)の事前・事中・事後の一連の活動に積極的にかかわる児童」の姿とつながりが強いと考える。

また、「秋祭り」の出店のルールや工夫をよりよいものにするために、話合いによる

表-7 事中の活動と「4つの能力」との関連表(4年)

展開	活 動	能 力
事 中	1. 始めの言葉	
	2. 司会者の紹介	
	3. 議題の確認と提案理由の 確かめ	
	4. 話合いのめあての確認	
	5. 先生の話	情 人 意
	6. 話合い	
	7. 決まったことの発表	
	8. 話合いの振り返り	
	9. 先生の話	
	10. 終わりの言葉	

集団決定を行い、自分たちの力で議題について話し合い、解決しようと努力する姿も見られた。この姿は、意思決定能力①「自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む児童」、③「自分の役割に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする児童」、④「自分の力で課題を解決しようと努力する児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事中の活動では、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」および「意思決定能力」との関連が非常に強いと考える(表-7)。

#### ウ 事後の活動における「4つの能力」とのつながり

事後の活動1「役割分担」で、「秋祭り」の準備を行う前に、実行委員がプログラム、役割分担計画、活動計画などを作成した。この計画に基づき、全員が実施までの準備内容について考えた(資料-15)。

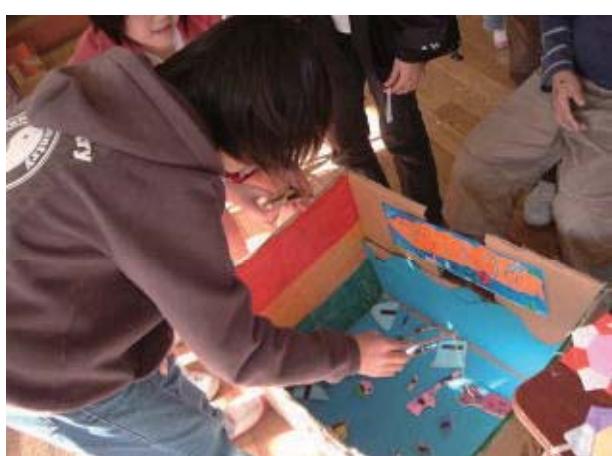
資料-15 実施までの計画に基づいて行われた  
「秋祭り」の準備の様子

事後の活動1におけるこれらの姿は、将来設計能力①「学級活動(1)の事前・事中・事後の一連の活動を通して、互いの役割や役割分担の必要性が分かる児童」、②「学級会や集会の計画づくりの必要性に気付き、活動の手順が分かる児童」、③「学級会や集会の計画を立てる児童」の姿とつながりが強いと考える。

事後の活動3「実施」(秋祭り)では、4つのグループ毎に、それぞれの児童が役割分担に基づいて、協力しながら活動することができた。また、事後の活動4「振り返り」では、本活動題における一連の活動を振り返りながらその楽しさが分かる児童の感想が多く見られた(資料-16)(P16資料-17)。

資料-16 「秋祭り」の出店でゲームを楽しむ

#### 5組の児童



資料-17 自分や友達のよさや活動することの  
楽しさが書かれた児童の感想

今日は、すごく楽しかったです。わたしは、フリ  
ぼり屋で、ストップウォッチを使つて、3分を  
計っていました。たぶん、5組のお友達は、今日  
の秋祭りを喜んでくれたと思います。理由は、4  
つのグループの出店に何度も何度も行つていたし、  
商品もたくさんもらつていたからです。  
わたしたちのフリぼり屋のゲームは、むずかし  
いかなと思ったけど、たくさんついていたので  
すごいと思いました。  
5組のお友達とお話をしたり、「あんばれ」と  
「かすごいね」とか声をかけることができたので  
も、とも、となかよくなれたと思います。そして、  
「友達いはばい」の学級目標にも近づけたと思  
います。

事後の活動3, 4におけるこれらの姿は、  
情報活用能力②「学級活動(1)の事前・事中  
・事後の一連の活動に積極的にかかわる児  
童」、③「活動することの楽しさが分かる児  
童」の姿とつながりが強いと考える。

事前の活動で5組に招待された「ぶんぶ  
んごま作り集会」、事後の活動で5組を招  
待した「おいでよ!なかよし!友達いっぱい秋  
祭り」、その「振り返り」などだけではなく、  
休み時間なども含めて、5組の児童の気持  
ちを理解しようとしたり、自分の気持ちを  
分かりやすく伝えようしたりしながら、  
5組の児童との人間関係を築いていく姿が  
見られた(資料-18)。これらの姿は、人間関  
係形成能力①「自分のよいところを見つける児童」、②「友達のよいところを認める児童」、③「自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する児童」、④「友達の気持ちや考えを理解しようとする児童」、⑤「友達と協力して、活動に取り組む児童」の姿とつながり  
が強いと考える。

資料-18 「秋祭り」の招待状を届ける児童



また、自分たちと5組とのかかわりについて、問題意識をもつことから始まった本活動題における一連の活動を通して「秋祭り」など自分がやりたいことやよいと思うことを考えて実行したり、自分の役割に責任をもって取り組んだりするなど、問題解決に向けて努力していく児童の姿が見られた。この姿は、意思決定能力①「自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む児童」、③「自分の役割に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする児童」、④「自分の力で課題を解決しようと努力する児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事後の活動では、「将来設計能力」、「人間関係形成能力」、「意思決定能力」および「情報活用能力」との関連が非常に強いと考える(表-8)。

表-8 事後の活動と「4つの能力」との関連表(4年)

展開	活動	能力
事後	1. 役割分担	将
	2. 準備	
	3. 実施	情 人 意 情
	4. 振り返り	

### 3 第6学年の実践

活動題「スマイル99 思い出に残るイベントをつくろうプロジェクト！」

議題「スマイル99 思い出に残るイベントをつくろうプロジェクト！の計画を立てよう」

#### (1) 指導の実際

##### ア 本活動題の意義

本活動題は、学級目標である児童の「みんな笑顔-なかよく笑顔で個性を生かして協力し何にでも挑戦して心に残る年に-」という願いから生み出されたものである。教師からの「6年生全体で、卒業に向けてやってみたい活動はないか」という声かけのもと、議題ポストに入れられていた「思い出に残る作品を作りたい」「3学期にタイムカプセルを作りたい」「学年で集会をしたい」などの議題案を統合する形で、議題として取り上げた。

本活動題の「スマイル99」には、「99人の6年生全員で」という提案者の思いや願いが込められていた。その思いや願いをクラス全員が十分に受け止め、みんなで課題解決に取り組んでいく中で学級への所属感を高めて学級目標を達成していくこうとする態度を育てることができると考えた。さらに、学年で協力したり競い合ったりしていく中で、学年としてのまとまりを強め、卒業に向けて学年としての気持ちを一つにしていくこうとする態度を育てる上で、大変意義深いと考えた。

##### イ 目標

- クラスを学級目標に近づけるために、それぞれの役割を自覚しながら学級会を計画・実行し、学級の一員としての自覚や連帯感を深め、満足感、達成感を味わうことができる。（関心・意欲・態度）
- 自分の考えを提案理由と結びつけながら、提案をよりよくするための工夫を考えることができる。（思考・判断）
- 自分の考えを、その理由とともに友達

に分かりやすく伝えることができる。

（技能・表現）

- 話合いで決まったことが分かり、自分の役割を果たすことができる。

（知識・理解）

##### ウ 本活動題とキャリア教育の「4つの能力」とのつながり

本活動では、「4つの能力」の育成につながる児童の姿を、次のように設定した。

###### (ア) 将来設計能力とつながる児童の姿

- ① 学校生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる児童
- ② 学級活動における役割の関連性や変化に気付く児童
- ③ 卒業までのことを考える大切さが分かり、今しなければならないことを考える児童

###### (イ) 情報活用能力とつながる児童の姿

- ① 自分に必要な情報を探す児童
- ② 個人やグループでまとめたことを発表する児童
- ③ 学級活動を通して学んだり体験したりしたことと、日常生活との関連を考える児童

###### (ウ) 人間関係形成能力とつながる児童の姿

- ① 自分の長所や欠点に気付き、自分しさを發揮する児童
- ② 話合い活動に積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする児童
- ③ 思いやの気持ちをもち、相手の立場に立って考え方行動しようとする児童
- ④ 学級活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする児童

###### (エ) 意思決定能力とつながる児童の姿

- ① 学級活動で、自分のやりたい役割、やれそうな役割を選ぶことができる児童
- ② 学級・学校生活での課題を見つけ、自分たちの力で解決しようとする児童
- ③ 将來の夢や希望をもち、実現を目指して努力する児童

## 二 活動の実際

展開	活動	全員	計画委員(司会グループ)	提案者	フロア
事前	1.議題の募集・整理・選定		・第1回計画委員会で、議題『スマイル99 思い出に残るイベントをつくるプロジェクト』の計画を立てよう。』を選定した。(計画委員)		
	2.話し合いの柱 ・提案理由決め ・司会者の役割分担		・司会グループの役割分担をした。 ・司会マニュアルをもとに司会者の言葉の練習をした。 ・黒板記録の練習をした。 ・議題・提案理由・話し合いのめあて・話し合いの柱を作った。 ・卒業に向けて学年全体でどんなことをしたいかアンケートをとった。	・提案理由や、議題に込めた思いや願いについて整理した。	
	3.原案作り		・アンケートの結果をもとに、提案理由に沿うか、という視点で計画委員会でアイディアを絞った。	・原案グループを募り、各原案グループで原案を作り、教室に掲示した。 ・フロアの友達に分かりやすい提案ができるように、提案の資料を工夫して作った。原案には、プロジェクトの内容や方法を書いた。	
	4.議題説明会		・議題、提案理由、話し合いの柱に沿って自分の考えを個人ノートに書いた。	・学級会の議題、話し合いのめあて、話し合いの柱を説明した。 ・原案を提案した。(原案グループ)	・原案グループの提案を聞いて、議題、提案理由、話し合いの柱に沿って自分の考えを個人ノートに書いた。
	5.進め方の確認		・司会マニュアルをもとに、学級会の流れを確認した。	・児童のアイディア一覧表を作った。 ・話し合いの見通しを持って計画を立てた。 ・学級会のリハーサルをした。	・提案理由、活動題に込めた思いや願いを話す練習をした。(提案者) ・提案のリハーサルをした。(原案グループ)
	1.始めの言葉		・始めのあいさつとともに、学級会に対する自分の思いを話した。		
	2.司会者の紹介		・司会グループの自己紹介とともに、学級会でがんばりたいことを話した。		
	3.議題の確認と提案理由の確かめ		・議題、提案理由を確認した。	・提案理由に込めた思い・願いを話した。(提案者)	
	4.話し合いのめあての確認		・話し合いのめあてを確認した。		
	5.先生の話				
事中	6.話し合い	<アイディアタイム> ・各原案グループの友達の立場や思いを受け止めながら聞いた。	・話し合いの計画にしたがって司会進行し、話し合いを進めた。(司会) ・出された意見を分かりやすく記録した。(黒板)	<アイディアタイム> ・各原案グループが、友達に分かりやすく自分の考えを提案した。	<質問タイム> ・原案グループの提案に対して、分からぬ部分を質問した。
		<なるほどタイム> ・自分とは違う考え方も受け入れながら友達の発表を聞いた。		<なるほどタイム> ・各グループの原案について、付加・修正の考え方を出した。	
				・自分と違う友達の考え方を認め、友達の考えにも賛成や付加・修正をしながら発表した。	
		<まとめタイム> ・話し合いに出てきた考え方をもとに、原案を付加・修正した。		<まとめタイム>	
		<にじにじタイム> ・付加・修正したことを発表した。			
	7.決まつことの発表		・決まつことを発表した。(ノート)		・話し合いで各グループの原案がどのように付加・修正されたか分かった。
	8.話し合いの振り返り	・話し合いについての自己評価、感想を書いた。			
	9.先生の話				
	10.終わりの言葉		・終わりのあいさつとともに、学級会についての感想を話した。		
事後	1.役割分担		・それぞれ参加したい提案グループを選んだ。 ・各提案グループに分かれ、役割分担をして準備に取りかかった。		
	2.準備		・提案のために必要な情報を集め、提案資料を作った。		
	3.実施		・提案に必要な具体物を作った。 ・他のクラスによりよい提案ができるように、協力して取り組んだ。		
	4.振り返り		・本活動題における一連の活動を、活動自体のよさ、自分や友達のよかつたところを探しながら振り返ることができた。		

## (2) 考察

ア 事前の活動における「4つの能力」とのつながり

事前の活動1「議題の募集・選定・整理」において、計画委員会の児童が学年全体で取り組む活動である本議題を選定した。この姿は、③「卒業までのことを考える大切さが分かり、今しなければならないことを考える児童」の姿とつながりが強いと考える。

事前の活動2「話合いの柱・提案理由決め、司会者の役割分担」において、司会グループはそれぞれの役割を把握し役割分担をする姿が見られた。また、提案者となった児童が、6年生99人全員で生き生きとした姿で卒業したいという思いや願いを整理して、提案理由を設定している姿が見られた(資料-19)。この姿は、将来設計能力①「学校生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる児童」、②「学級活動における役割の関連性や変化に気付く児童」、③「卒業までのことを考える大切さが分かり、今しなければならないことを考える児童」の姿とつながりが強いと考える。

事前の活動3「原案作り」において、原案グループとなった児童は自分たちの提案内容を用紙にまとめ、フロアに提案する準備を進めた。フロアの児童に分かりやすい提案ができるように、写真や具体物を用意するなど提案のための資料を作るのに必要な情報を集めることができた。この姿は、情報活用能力①「自分に必要な情報を探す児童」、②「個人やグループでまとめたことを発表する児童」の姿とつながりが強いと考える。

資料-19 「スマイル99」についての説明

スマイル99の説明
スマイル99のせつめいをします。 まず、スマイルは笑顔という意味で、99というのは6年生全員の人数です。私たちでいろいろな計画を立てて、思い出に残るイベントにして、生き生きとした姿で卒業したいです。

資料-20 原案の提案から必要な情報を探し、自分なりに付加・修正の意見を書いている児童



事前の活動4「議題説明会」において、フロアの児童は各原案グループの提案を聞き提案理由や話合いの柱に沿って原案に対する付加・修正の意見をもつことができた(資料-20)。この姿は、情報活用能力①「自分に必要な情報を探す児童」の姿とつながりが強いと考える。

事前の活動5「進め方の確認」において、司会グループは打ち合わせやリハーサルを繰り返し、話合いをスムーズに進めるための計画を立てることができた。また、提案者や原案グループの児童もリハーサルを十分に行っている姿が見られた(資料-21)。この姿は、将来設計能力①「学校生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる児童」、②「学級活動における役割の関連性や変化に気付く児童」の姿とつながりが強いと考える。

資料-21 学級会における役割の大切さや関連性が

分かり、リハーサルをする児童



表－9 事前の活動と「4つの能力」との関連表(6年)

展開	活 動	能 力
事 前	1. 議題の募集・整理・選定 (第1回計画委員会)	将
	2. 話合いの柱・提案理由決め, 司会者の役割分担 (第2回計画委員会)	将
	3. 原案作り	情
	4. 議題説明会	情
	5. 進め方の確認	将

以上のような点から、事前の活動では、「将来設計能力」および「情報活用能力」との関連が非常に強いと考える(表-9)。

#### イ 事中の活動における「4つの能力」とのつながり

事中の活動6「話合い」の「アイディアタイム」において、自分たちが考えた原案をフロアの児童に分かりやすく発表することができた(資料-22)。この姿は、情報活用能力②「個人やグループでまとめたことを発表する児童」の姿とつながりが強いと考える。

「なるほどタイム」において、フロアの児童は提案理由や話合いのめあてに照らして他のクラスに提案するために原案をよりよくしようと、付加・修正の意見を出すことができた(資料-23)。その際、自分と異なる意見も受け入れながら友達の発表を聞いた上で、発言することができていた。この姿

資料-22 グループでまとめた原案を発表する児童



資料-23 自分と異なる意見も受け入れながら、付加・修正の意見を発表する児童



は、人間関係形成能力②「話合い活動に積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする児童」の姿とつながりが強いと考える。

「まとめタイム」において、各原案グループはフロアの児童から出された付加・修正の意見を聞きながら自分たちの原案のよさや不十分な点に気付き、出された意見の中から取捨選択を行い、よりよい提案するために、原案の付加・修正を行った(資料-24)。この姿は、意思決定能力③「将来の夢や希望をもち、実現を目指して努力する児童」の姿とつながりが強いと考える。

さらに、「にこにこタイム」においては、付加・修正した原案を各原案グループが発表し、集団決定を行った。この姿は、意思決定能力②「学級・学校生活での課題を見つけ、自分たちの力で解決しようとする児童」の姿とつながりが強いと考える。

資料-24 他のクラスへの提案の実現を目指して、

原案の付加・修正をする児童



表-10 事中の活動と「4つの能力」との関連表(6年)

展開	活 動	能 力
事 中	1. 始めの言葉 2. 司会者の紹介 3. 議題の確認と提案理由の確かめ 4. 話合いのめあての確認 5. 先生の話 6. 話合い	情 人 意
	7. 決まったことの発表 8. 話合いの振り返り 9. 先生の話 10. 終わりの言葉	人

事中の活動8「話合いの振り返り」において、自分や友達のがんばりやよさを探しながら、話合い活動についての振り返りをすることができた。この姿は、人間関形成能力①「自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを発揮する児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事中の活動では「人間関係形成能力」、「意思決定能力」および「情報活用能力」との関連が非常に強いと考える(表-10)。

#### ウ 事後の活動における「4つの能力」とのつながり

事後の活動1「役割分担」において、児童一人一人が、自分が提案したい提案グループを選択し、各グループの中で役割を分担して、プロジェクトの実現を目指して他のクラスへの提案の準備に取りかかる姿が見られた(資料-25)。この姿は、意思決定能力①「学級活動で、自分のやりたい役割、やれそうな役割を選ぶことができる児童」、将来設計能力①「学校生活にはいろいろな役割があることやその大きさが分かる児童」、②「学級活動における役割の関連性や変化に

資料-25 自分のやりたい提案グループを選び、役割分担しながら準備に取りかかる児童



気付く児童」の姿とつながりが強いと考える。

また、学年全体での活動を通して、卒業へ向けて学年としての気持ちを一つにしていこうという課題意識から始まった本活動題における一連の活動を通して、自分たちが生み出す活動に夢や希望をもち、その実現を目指して努力していく児童の姿が見られた。この姿は、意思決定能力③「将来の夢や希望をもち、実現を目指して努力する児童」の姿とつながりが強いと考える。

事後の活動2「準備」においては、インターネット等も活用しながらより具体的な情報を集め、提案する内容を画用紙にまとめ、協力して他のクラスへの提案の準備を進める姿が見られた(資料-26)。この姿は、情報活用能力①「自分に必要な情報を探す児童」および人間関係形成能力④「学級活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする児童」の姿とつながりが強いと考える。

資料-26 必要な情報を集め、進んで自分達の

提案内容をまとめている児童



資料-27 提案グループでの役割を果たし、まとめた提案内容を発表する児童



事後の活動3「実施」において、グループで協力し、他のクラスに対して、資料を見せながら分かりやすく提案することができた(資料-27)。この姿は、人間関係形成能力④「学級活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする児童」および情報活用能力②「個人やグループでまとめたことを発表する児童」の姿とつながりが強いと考える。

事後の活動4「振り返り」において、活動自体のよさ、自分や友達のがんばりやよさを探しながら、一連の活動についての振り返りをすることができた。このことは人間関係形成能力①「自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを發揮する児童」の姿とつながりが強いと考える。

以上のような点から、事後の活動では、「将来設計能力」、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」および「意思決定能力」との関連が非常に強いと考える(表-11)。

表-11 事後の活動と「4つの能力」との関連表(6年)

展開	活動	能力
事後	1. 役割分担	将意
	2. 準備	情人
	3. 実施	情人
	4. 振り返り	人

### 第三章 研究のまとめと今後の課題

#### 1 研究のまとめ

- (1) 事前の活動における「学級活動(1)で育成したい児童の姿」とキャリア教育の「4つの能力」との関連

第1・4・6学年における学級活動(1)の検証授業を通して明らかになった事前の活動における児童の姿と「4つの能力」との関連をまとめたものが表-12である。

その結果、3つの検証授業全てにおいて、「育成したい児童の姿」と「4つの能力」との関連が同じ傾向を示すものがあることが分かった。

具体的には、事前の活動2「話合いの柱・提案理由決め、司会者の役割分担」(第2回計画委員会)における児童の姿と「将来設計能力」との関連、また、事前の活動3「原案作り」における児童の姿と「情報活用能力」との関連である。

よって、学級活動(1)の事前の活動は、「将来設計能力」ならびに「情報活用能力」の育成と密接にかかわっていると考える。

事前の活動は、児童の自発的、自治的な活動が一層活発に行われるようとする観点から学級内での話合いの活動(事中の活動)の計

表-12 事前の活動と「4つの能力」の関連表

展開	活動	「4つの能力」		
		1	4	6
事前	1. 議題の募集・整理・選定 (第1回計画委員会)		将	将
	2. 話合いの柱・提案理由決め、司会者の役割分担 (第2回計画委員会)	将	将	将
	3. 原案作り	情	情	情
	4. 議題説明会		情	情
	5. 進め方の確認	将		将

画や準備等を行う活動である。そこに現れた児童の姿は、計画委員（司会グループ）、提案者、フロアの役割や意義およびその関連等を理解しながら、生活上の諸問題の解決のための計画を立てる姿であり、また、必要な情報を選択・活用し、解決の糸口を見いだそうとする姿であった。まさにこの姿は、「将来設計能力」、「情報活用能力」の領域に包含されるものである。

つまり、事前の活動を充実させることは、キャリア教育の「将来設計能力」および「情報活用能力」の育成につながると言える。

#### (2) 事中の活動における「学級活動(1)で育成したい児童の姿」とキャリア教育の「4つの能力」との関連

第1・4・6学年における学級活動(1)の検証授業を通して明らかになった事中の活動における児童の姿と「4つの能力」との関連をまとめたものが表-13である。

その結果、3つの検証授業全てにおいて、「育成したい児童の姿」と「4つの能力」との関連が同じ傾向を示すものがあることが分かつ

表-13 事中の活動と「4つの能力」の関連表

展開	活動	「4つの能力」		
		1	4	6
事中	1. 始めの言葉			
	2. 司会者の紹介			
	3. 議題の確認と提案理由の確かめ			
	4. 話合いのめあての確認			
	5. 先生の話			
	6. 話合い	情 人 意	情 人 意	情 人 意
	7. 決まったことの発表	意	人	
	8. 話合いの振り返り			人
	9. 先生の話			
	10. 終わりの言葉			

た。

具体的には、事中の活動6「話し合い」における児童の姿と「人間関係形成能力」および「意思決定能力」との関連である。

よって、学級活動(1)の事中の活動は、「人間関係形成能力」ならびに「意思決定能力」の育成と密接にかかわっていると考える。

事中の活動は、学級や学校における生活上の諸問題の解決のために児童が共同して具体的に解決の方法を見いだすために話し合う活動である。そこに現れた児童の姿は、それぞれの役割・立場でコミュニケーションを図りながら、お互いの考えを認め合い、問題の解決方法を選択・決定していく姿であった。まさにこの姿は、「人間関係形成能力」、「意思決定能力」の領域に包含されるものである。

つまり、事中の活動を充実させることは、キャリア教育の「人間関係形成能力」および「意思決定能力」の育成につながると言える。

#### (3) 事後の活動における「学級活動(1)で育成したい児童の姿」とキャリア教育の「4つの能力」との関連

第1・4・6学年における学級活動(1)の検証授業を通して明らかになった事後の活動における児童の姿と「4つの能力」との関連をまとめたものが表-14である。

表-14 事後の活動と「4つの能力」の関連表

展開	活動	「4つの能力」		
		1	4	6
事後	1. 役割分担	将	将	將 意
	2. 準備			情 人
	3. 実施	情 人 意	情 人 意	情 人
	4. 振り返り	情	情	人

その結果、3つの検証授業全てにおいて、「育成したい児童の姿」と「4つの能力」との関連が同じ傾向を示すものがあることが分かった。

具体的には、事後の活動1「役割分担」における児童の姿と「将来設計能力」との関連、また、事後の活動3「実施」における児童の姿と「人間関係形成能力」および「情報活用能力」との関連である。

よって、学級活動(1)の事後の活動は、「将来設計能力」、「人間関係形成能力」ならびに「情報活用能力」の育成と密接にかかわっていると考える。

事後の活動は、話し合いを通して児童が自主的に見いだした諸問題の解決方法を児童全員が協力して実践する活動である。そこに現れた児童の姿は、集団決定した解決方法について、それを実現するためにそれぞれの果たすべき役割等を考えながら、協力・共同して実行していく姿であり、また、そこでの体験を通して、活動することや役割を果たすことの意義を理解していく姿であった。まさにこの姿は、「将来設計能力」、「人間関係形成能力」および「情報活用能力」の領域に包含されるものである。

つまり、事後の活動を充実させることは、キャリア教育の「将来設計能力」、「人間関係形成能力」および「情報活用能力」の育成につながると言える。

#### (4) 小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割

本研究は、学級活動(1)の実践を通して「キャリア教育の『4つの能力』の育成につながる児童の姿」を設定し、現れてきた児童の姿を表-2の関連表に整理し、分析することを通して、「4つの能力」の育成との関連を明らかにしていくことを目指した。

当初、学級活動(1)と「4つの能力」は、表-2のとおり、学級活動(1)の展開に沿って、

事前→事中→事後の順に、「将来設計能力」→「情報活用能力」→「人間関係形成能力」→「意思決定能力」→「人間関係形成能力」と段階的に位置付きながら関連していることを想定していた。しかし、検証授業の結果、学級活動(1)と「4つの能力」は、段階的な位置付きの上で関連しているのではなく、その活動が、常に「4つの能力」全てにつながりながら展開していくことが分かった。特に、事中の活動で「人間関係形成能力」および「意思決定能力」の2つの能力とのつながりの強さを同時に見せていることや事後の活動で再び「将来設計能力」と「情報活用能力」との強いつながりが明らかになったことは、大きな成果であった(P25表-15)。

以上のことから、事前・事中・事後という基本的な展開に沿って学級活動(1)を実践し、児童一人一人の役割や望ましい集団活動を積み重ねていくことは、特別活動が目指す児童を育成することはもちろん、小学校のキャリア教育における「4つの能力」の育成に大きな役割を果たしていると言える。同時に、本研究において、特別活動をキャリア教育の視点でとらえて推進してきたことは、特別活動を実践していくことの重要性を改めて明らかにすることにもなった。

## 2 今後の課題

キャリア教育における特別活動の役割の重要性が明確となり、一層の特別活動の充実が求められることとなった。今後は、学校生活での望ましい集団活動を通して、実践的な社会性や集団性を育てる特別活動の在り方について研究を深めていく必要がある。

表－15 「学級活動(1)で育成したい児童の姿」と「4つの能力」の関連表(検証授業後)(4年)

展開	活動	全員	計画委員 (司会グループ)	提案者	フロア	4つの 能力	
事前	1. 議題の募集・整理・選定 2. 話合いの柱 提案理由決め 司会者の役割分担 3. 原案作り 4. 議題説明会 5. 進め方の確認	<b>準備・計画・話合い・実行・振り返りの一連の活動に关心を持つている。(知・理)</b>  <b>議題の提案の仕方、話合いの進め方が分かる。(知・理)</b>	<b>・話合いの見通しを持って計画を立て 司会進行をする。</b>  <b>・学級生活から議題を考える。(思・判)</b>	<b>・議題案を出そつとする。(関・意・態)</b>  ※代表委員会や学校行事関連の議題を知る。(知・理)  <b>・決まった議題に対して関心を持っている。(関・意・態)</b>			   
事中	1. 始めの言葉 2. 司会者の紹介 3. 議題の確認と提案理由の確かめ 4. 話合いのめあての確認 5. 先生の話 6. 話合い 7. 決まったことの発表 8. 話合いの振り返り 9. 先生の話 10. 終わりの言葉	<b>自分たちの力で話合いを進めようとするとする。(関・意・態)</b>  <b>・自分たちの力で話合いを進めようとするとする。(関・意・態)</b>	<b>・話合いの計画に沿って司会進行をする。また話し合ったことを順序よく記録する。(技・表)</b>	<b>・自分の考えを友達に分かるように話す。(技・表)</b>  <b>・友達の考えを最後まで聞く。(技・表)</b>  <b>・実践可能な内容かどうか考える。(思・判)</b>  <b>・話し合いのめあてや友達の考えを合わせてよりよい考えにしていく。(技・表)</b>  <b>・話合いでの決まりごとが分かる。(知・理)</b>			   
事后	1. 役割分担 2. 準備 3. 実施 4. 振り返り			<b>・決まったことを協力して実行する。(技・表)</b>  <b>・活動を振り返り、よかつたことを探そうとする。(関・意・態)</b>			   

### 3 研究のコメント

#### (1) 研究の継承と発展

この特別活動研究室のメンバーは本年度大幅に入れ替わりましたが、これまでの研究の蓄積を継承し、研究主題も昨年度立ち上げた「小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割」の2年目として位置づけることにより、これを発展させることを目指してのスタートとなりました。したがって、まずはこれまでの研究の流れを理解し、その成果を確認し、残された課題を分析する作業から始めなければならず、それは平坦な道のりではなかったものと思われます。しかし、とても賢明な選択だったと受けとめています。

なぜなら、このG研に限らず、毎年数多の研究発表会が全国各地で開催され、また教育論文なるものも大量に生産され続けているわけですが、こうした研究の成果が教育現場における貴重な知（ナレッジ）的財産としてどのように集積され、そして活用されているのか、いま一度吟味する必要性を痛感しているからです。

研究は他人に批判され、継承され、蓄積されなければ意味がないと言われます。先行の研究を批判的に検討することによって当該分野・領域の理論的・実践的な到達点を把握しこれをふまえ研究を行い、残された課題は来年、再来年の自分（達）が、または後輩（他者）が継承していくべきだということです。けれども、実際には先行研究の積み重ねを踏まえない唯我独尊型の研究がきわめて多いのが実態です。

「先人の後を引き継ぎ、後進に手渡してゆく。」生きている間には決して完成の日を見ることができないというガウディのサグラダファミリアに人生を賭け、命を刻むようにー。そもそも「教育」という営み自体が一生をかけても到達不可能な「人格の完成」を目指す果てしないエンドレス・ストーリーであります。教育も研究も文化もDNAもいかに継承して

いくかが我々人類の課題なのでしょうし、その蓄積が人類の叡智なのだと思います。

#### (2) 研究の実践と架け橋

併せて、研究同人である3教諭は各学校において毎日60前後の瞳に見つめられている学級担任でもありますので、現役教師としての各人の抱える課題をもこのテーマに絡めて織り込んでいかなければ、単なる「研究ごと」に終わってしまいかねません。

実を申せば、昨年度「キャリア教育」を本研究室のテーマに据えた理由の一つは、研究同人3名がいずれも高学年の学級担任であり中学校との接続において課題を感じていたからでもありました。小・中の連携は生徒指導はもとより、「総合的な学習の時間」の系統性（シークエンス）、教科指導の重複の解消など、あらゆる側面で模索されていますが、こと「キャリア教育」については連携や接続のための橋渡し（共通言語）となる可能性を秘めています。共通言語としてのキャリア教育という側面は小学校内にも援用可能です。

小学校の低学年から高学年まで串刺しにする概念の一つとしてこの「キャリア教育」の視点は重要です。偶然にも本年度は3名の担当学年が1年生・4年生・6年生、すなわち低・中・高学年に散っておりましたので、学級の子どもたちの実態を踏まえながら、それぞれの発達段階における「キャリア教育」との関わりを模索してもらうことになりました。このことにより、昨年度の課題でもありました「高学年以外」のキャリア教育の有り様にも若干踏み込むことができたのではないかと考えております。

#### (3) 研究テーマと方向性

さて、キャリア教育2年目の本年度の研究は主題はそのままですが、副題は大きく変更しています。昨年度は「ー「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通してー」

でしたが、本年度は「—「4つの能力」の育成につながる学級活動(1)の実践を通して—」です。文言も一見似ているように見えますが、大きく方向性を転換させています。

昨年度は、2004年の文部科学省・キャリア教育報告書からキャリア教育で期待されるキャリア発達課題を抽出・分解し、「4つの能力」（具体的には4能力領域・8能力）をまず析出し、これら4つの能力の育成を基軸とした特別活動（学級活動(2)や児童会活動、学校行事も視野に納めた内容）のモデル開発を志向していました。

本年度は、これとはベクトルを逆向きにし、まずは学級活動(1)をしっかりとやっていくという原点に立ち返っています。この原点は4年前にG研で特別活動研究室を独立させたゆえんの一つでもありました。それゆえ、じっくり学級活動(1)に取り組んだ結果の延長線上にさきの「4つの能力」とどのようなつながりがあるかを考察するというのが今年のスタイルとなっています。すなわち、はじめに「キャリア教育ありき」ではないのです。

#### (4) 研究手続きと方法論

したがって、教育実践も「4つの能力」のうち、1年生は情報活用能力、4年生は人間関係形成能力、6年生は将来設計能力に重点を置いて授業を展開するというかたちを採用しておりません。それぞれの実践の中にはたとえ45分の中にも「4つの能力」すべてにつながる要素があれこれと散りばめられており、1つだけに限定されえないからです。

とはいえる、実際に研究するとなると、ただ単に全力で実践に取り組めば済むというものではありません。何本かの注射を打って、その中の一つでも効き目があって、熱が下がりさえすれば、現場はそれでいいかもしれません。しかし、研究となるとどの注射がどこに効き、どこには効かなかったかをはっきりさせなければなりません。

そこでまずは「福岡市小学校評価事例集」を題材に、評価規準に示されている「児童の姿」を「4つの能力」で分類していく作業から着手しています。これにより、「評価事例集」を財産として活用し、蘇らせることができました。これも継承と発展の一つでしょう。

そして学級活動(1)に特化して、事前・事中・事後の一連のプロセスにおいて、そこで「育成したい子どもの姿」と「キャリア教育の4能力領域」にどのような関連があるかのマトリックスを各学年別に作成しています。今回の検証事業はこのフレームにもとづいて行われたという次第です。

#### (5) 本研究の限界と可能性

ただ、問題はこうした分類作業のスタイルは例えば「コウモリ問題」と呼ばれるような悩ましさに出会います。たしかに研究というのは「分けて」「分かる」ことは少なくありません。けれども「分ける」に際して、獣の仲間なのか、鳥の仲間なのかといった分類に直面した際に主観的判断の域を超えられません。

そもそも「4つの能力」が並列されているのか、重なり合っているのか、離ればなれで点在しているのか、それとも次元の違うところに位置しているのか、こうしたモデル構造が国立教育政策研究所などでもまだ十分に整理できていないことに限界があります。

ただ、それらはあくまで仮説であり、今回の検証授業を通じて修正を図っていくことができました。当初、想定していた事前→事中→事後という流れに沿って、「将来設計能力」・「情報活用能力」→「人間関係形成能力」・「意思決定能力」→「人間関係形成能力」といった流れを思い描いて研究や検証授業に臨んだわけですが、それらが必ずしも予定調和に順々に出てくるのではなく、そのウェイトをかえながらも学活(1)自体は4つの能力につねにつながりながら展開していくこと、事後にふたたび「将来設計能力」や「情報活用

能力」と密接に関わることの2点が明らかになつたことは特筆できます。

これは低・中・高のいずれも同じ傾向がでてきておりますが、同じ「将来設計能力」といっても1年生の描く「将来」と6年生が描く「将来」の異同、同じく「情報活用能力」といった場合の「情報」が低中高で同じなのか、どのように深まっていくかといった点で単なる学年進行ではない発達段階を踏まえた「能力」概念の整理と「キャリア発達」との連動をいかにデザインできるかということを課題として提示しておきたいと思います。

(九州大学 元兼正浩)

## 引用文献

- 1 国立教育政策研究所生徒指導研究センター  
　　すべての子どもたちの職業観・勤労観を育むために  
　　－児童生徒の成長に応じた学習プログラムの枠組み(例)－ (平成15年)
- 2 文部科学省 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書  
　～児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために～ (平成16年)

## 参考文献

- 1 文 部 省 小学校学習指導要領解説 総則編 東京書籍 (平成11年)
- 2 文 部 省 小学校学習指導要領解説 特別活動編 東洋館出版社 (平成11年)
- 3 文部科学省 キャリア教育の推進に向けて (平成17年)
- 4 文部科学省 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書  
　～児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために～ (平成16年)
- 5 文部科学省 教育改革のための重点行動計画 (平成18年)
- 6 文部科学省 初等中等教育と高等教育との接続の改善について (平成11年)
- 7 国立教育政策研究所 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (平成14年)
- 8 国立教育政策研究所生徒指導研究センター  
　　すべての子どもたちの職業観・勤労観を育むために  
　　－児童生徒の成長に応じた学習プログラムの枠組み(例)－ (平成15年)
- 9 若者自立・挑戦戦略会議 若者自立・挑戦プラン (平成15年)
- 10 若者自立・挑戦戦略会議 若者の自立・挑戦のためのアクションプラン (平成16年)
- 11 若者自立・挑戦戦略会議 「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」の強化 (平成17年)
- 12 若者自立・挑戦戦略会議 「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」の改訂版 (平成18年)
- 13 宮城県教育センター みやぎのキャリア教育推進のために (平成16年)
- 14 神奈川県立総合教育センター キャリア教育推進ハンドブック (平成16年)
- 15 児島 邦宏・三村 隆男 小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開例 (平成18年)
- 16 福岡市教育センター 福岡市小学校評価事例集
- 17 福岡市教育センター特別活動研究室  
　　平成17年度研究紀要小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割  
　　－「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通して－ (平成17年)

---

## 共同研究者

原 口 勝 (研修支援係長) 鶴 田 智 博 (西花畠小学校教諭)  
権 藤 薫 (長住小学校教諭) 後 藤 美 香 (柏原小学校教諭)

## 研究指導者

元 兼 正 浩 (九州大学大学院助教授)



平成19年度  
研究紀要  
(第776号)

G 11-01

## 特別活動における食に関する指導の在り方

—交流活動を生かした学級活動の実践を通して—

本研究室では、児童に望ましい食習慣を身に付けさせるために、食に関する指導目標に照らし合わせて、目指す児童の姿を設定し、他者との交流活動を生かした学級活動を実践した。

その結果、学級活動に、効果的に交流活動を取り入れることにより望ましい食習慣の1つである社会性の育成に有効であることが分かった。

## 目 次

### 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

1	主題設定の理由	97
(1)	学校教育に食育が重視される背景	
(2)	特別活動における食育の考え方	
(3)	学級活動における食育指導の観点と食に関する指導の目標	
(4)	昨年度の研究との関連	
2	研究の目標	99
3	研究の仮説	99
4	研究の内容と方法	99

### 第Ⅱ章 交流活動を生かした学級活動の実践例

1	異学年との交流活動を生かした学級活動（1）の実践事例とその考察	101
	議題 「6年生ともっとなかよくなるために にこにこレストランにするために マナーとゲームについて話し合おう」（第1学年）	
2	地域との交流活動を生かした学級活動（1）の実践事例とその考察	107
	議題 「おいもパーティーについて話し合おう」（第2学年）	
3	栄養教諭との交流活動を生かした学級活動（2）の実践事例とその考察	112
	題材 「お米の力で元気100倍」（第3学年）	

### 第Ⅲ章 研究のまとめ

1	食に関する指導の視点から見た特別活動の役割	118
2	成果と課題	119
3	研究のコメント	120

### 引用・参考文献

# 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

## 1 主題設定の理由

### (1) 学校教育に食育が重視される背景

科学技術の進歩発展は社会や家庭での生活や食文化を豊かにし、様々な生活の可能性を広げた。反面、社会経済情勢がめまぐるしく変化し日々忙しい生活を送るなかで、生活時間の多様化とともに、人間関係の希薄化、生活体験・自然体験の不足から子どもたちの心身の健全な発達に望ましくない影響を与えていているのも事実である。

特に、偏った栄養摂取、孤食、朝食欠食、不規則な食事時間と夜型生活、家族などと楽しく食卓を囲む機会の減少など、食をめぐる問題は、基本的な生活習慣の崩壊につながり、さらに子どもたちの生活習慣病の危険性とも結びついている。

その解決のためには、子どもたちに望ましい食習慣を身に付けさせる指導が必要である。つまり、食物の栄養素や調理の方法など単なる知識を教えるだけではなく、人と共に食事をすることを通して、食事のマナーを学び、食事を楽しみ、大切にしていこうとする自主的・実践的态度を育てることが大切である。

また、平成14年、中央教育審議会答申では食に関する指導において「食に関する知識を教えるだけではなく、知識を望ましい食習慣の形成に結びつけられるような、実践的な態度の育成が必要である。」と述べられている。また、教諭や養護教諭はもちろんのこと食に関する専門家である学校栄養職員の積極的な参画・協力が重要で「栄養教諭」制度など、学校栄養職員にかかる、新たな制度の創設を検討すべきことを提言している。

さらに、平成17年6月、国は食育を重要課題ととらえ国民的な運動として推進していくため「食育基本法」を制定した。

本法律では「食育」を次のように位置づけている。

- 生きる上での基本であって知育、德育及び体育の基礎となるべきもの
- 様々な経験を通じて、食に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てるこ

本法律の前文では、特に子どもの食育について、次のように規定している。

子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるもの

同法の規定に基づき、平成18年に「食育推進基本計画」で、子どもへの指導内容の充実などが図られ、平成19年には文部科学省から「食に関する指導の手引き」が発行された。

また、福岡市でも、平成19年2月に教科等と関連付けた「食育指導計画・実践事例集」が作成された。同年3月には、「福岡市食育推進基本計画」が施行され、平成19年度学校教育指導の重点にも、食に関する指導の項目が記載されるようになった。

### (2) 特別活動における食育の考え方

#### ア 特別活動における食育の位置付けと経緯

特別活動における食育の位置付けが明確になったのは、昭和43年の学習指導要領改訂からである。特別活動への位置付けと学校教育における食育の経緯は、表-1（P2）に示す通りである。

特別活動は、教科等の学習で学んだ内容を様々な体験活動や話し合いを通して、深化・発展・統合させるねらいをもっている。食育の内容を考えると、「学校給食法」制定以来、食育が、特別活動を中心として位置付けられたことが理解できる。

表－1 学校教育における食育の経緯

S29 「学校給食法」制定
S33 学習指導要領改訂で、学校給食の指導が、学校行事等の内容に位置付けられる。
S43 学校給食の指導が、小学校では特別活動「学級指導」に位置付けられる。
H1 学級会活動と学級指導の統合により、学級活動(2)に位置付けられる。
H10 学級活動(2) (カ)「学校給食と望ましい食習慣の形成」と位置付けられ、食育の一層の充実が図られる。

#### イ 特別活動における食育の考え方

食という行為は人間が生きていく上で欠かせない営みである。

前に述べたように、子どもたちの望ましい食習慣は、人と共に食事をすることなど、人の関わりの中で形成される。よって食に関する指導において、様々な場や機会を通して、他者との交流活動を取り入れることは、意義があることと考える。

特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、互いに協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度の育成」である。

つまり人との関わりという点で、自主的・実践的な態度を育成していく特別活動が果たす役割は非常に重要である。

ここでいう交流活動とは、本研究室では、「望ましい食習慣を身に付けるために、相手意識・目的意識・課題意識を明確にもって、進んで他者に関わる活動」と、とらえる。

他者との交流活動の「他者」とは、主に学級や同学年の児童、異学年の児童、地域の方々、先生や学校職員（栄養教諭など）、保護者、施設などで働く人々などが考えられる。

また、交流活動の内容としては、話し合い、インタビュー、講話、○○会などのイベント、共同作業などが考えられる。この交流活動は、児童の活動内容や交流相手に応じて、事前・

事中・事後に適宜仕組む。

特別活動で、食に関する指導に直接的に関わるのが学級活動である。

小学校学習指導要領第4章特別活動にも、学級活動(2)に「学校給食と望ましい食習慣の形成」とあり、学級活動の内容の具体例が示されている。（表－2）

この表－2に掲げた学級活動の内容の指導を通して、「望ましい食習慣の形成」を図ることが食育の充実のためには必要である。

表－2 学級活動(2)の食に関する内容

#### (カ) 学校給食と望ましい食習慣の形成

楽しく食事をすること、健康によい食事のとり方、給食時の清潔、食事環境の整備など、望ましい食習慣の形成を図るとともに、食事を通して好ましい人間関係の育成を図ることにかかわる内容である。

学校給食に関する内容については、昼の給食の時間を中心に指導することになるが、学級活動の時間でも取り上げて計画的に指導することが大切である。

また、学校給食の特性を生かし、楽しい給食を目指した多様な指導法の工夫が必要である。

なお、内容によっては、学校栄養職員などの協力を得て指導に当たることも考慮する必要がある。

指導の実際にあたっては、児童の実態に即して年間指導計画に、弾力性や融通性をもたらせることが大切である。また、望ましい食習慣や人間関係の在り方は、児童の実践活動を通して体得していくものである。学校における集団活動の経験が十分に生かされ、発揮されるとともに家庭や地域社会における集団活動の経験を、学校教育に生かすことも大切であると考える。

以上のことから、発達段階に即して、児童の自主的・実践的な態度を育てることに、留意しながら指導することが大切である。

### (3) 学級活動における食に関する指導の観点と目標

前述の通り、食に関する学級活動では、「望ましい食習慣の形成」を図ることが大切である。

文部科学省は、食に関する指導の目標を次のように設定している。(表-3)

表-3 食に関する指導の目標

- 食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。 (食事の重要性)
- 心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し自ら管理していく能力を身に付ける。 (心身の健康)
- 正しい知識・情報に基づいて、食物の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身に付ける。 (食品を選択する能力)
- 食物を大切にし、食物を大事にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心をもつ。 (感謝の心)
- 食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける。 (社会性)
- 各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心をもつ。 (食文化)

本年度は子どもたちに望ましい食習慣の形成を図るための学級活動を通して、特別活動が目指す豊かな人間性や社会性を培うことができるを考えた。そこで、食に関する指導の在り方の手立てとして、他者との交流活動を生かした学級活動の実践を考えた。

### (4) 昨年度の研究との関連

本研究室では、昨年度、「学級活動(1)で育成したい児童の姿」とキャリア教育の「4つの能力」との関連を明らかにし、小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割を探ってきた。その成果として、学級活動を実践し、望ましい集団活動を積み重ねていくことは、特別活動が目

指す児童を育成することは、もちろん、小学校のキャリア教育における「4つの能力」の育成に大きな役割を果たすことが分かった。

今年度の研究課題である「食に関する指導」においても、「食事のマナーや食事を通した人間関係形成能力を身に付ける。(社会性)」(表-3)が挙げられており、人間関係形成能力を身に付けることは、領域を問わず、特別活動において重要な課題であると考えた。

以上のことから、様々な人々と交流する場や機会を意図的に取り入れ、活動することにより、食を通した人間関係が広がり、ひいては特別活動の目指す、豊かな人間性や社会性を身に付けることができると考えた。

そこで、他者との交流活動を生かした学級活動の実践を通して、食に関する指導の在り方について究明するため、本研究主題を「特別活動における食に関する指導の在り方」と設定し、今年度は学級活動(1)と(2)の実践を試みた。

## 2 研究の目標

他者との交流活動を生かした学級活動の実践を通して、特別活動における食に関する指導の在り方を明らかにする。

## 3 研究の仮説

他者との交流活動を生かした食に関する学級活動を実践すれば、豊かな人間性や社会性を育むために必要な望ましい食習慣を身に付けることができるであろう。

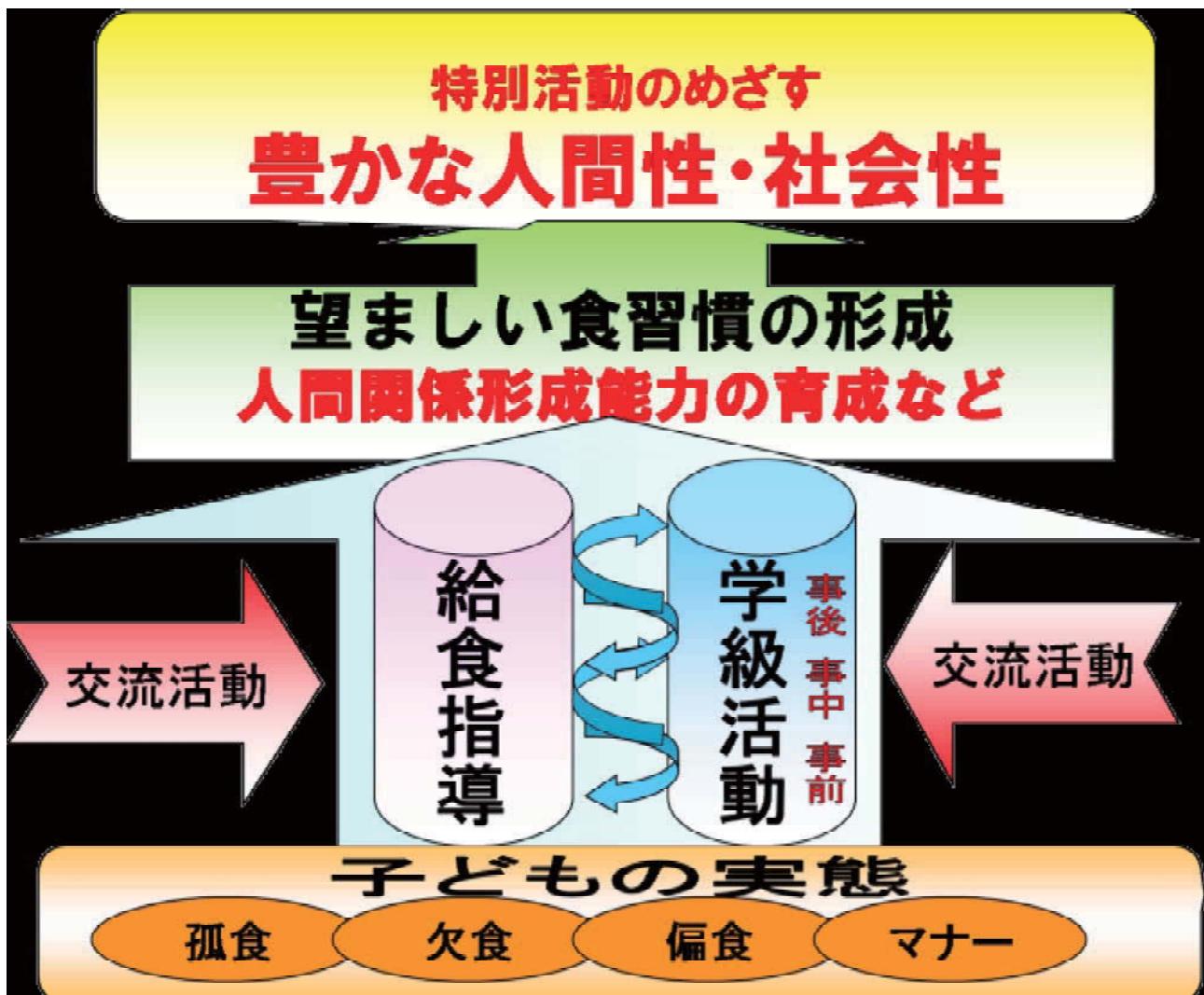
## 4 研究の内容と方法

ア 他者との交流活動を生かした食に関する学級活動の在り方を明らかにする。

- ・児童の食に関する実態調査をする。
- ・交流活動の目的を明らかにする。
- ・交流活動の目的と学級の実態をもとに、誰と、どのような交流活動をすればよいのか明らかにする。
- ・議題や題材を決める。

- ・食に関する指導目標を、議題や題材に応じて目指す児童の姿として具体化する。
- ・学級活動の指導計画を立てて、授業実践をする。
- ・検証授業を通して、児童の具体的な姿を記録する。
- ・検証授業での具体的な児童の姿と、食に関する目指す児童の姿との関連を、比較分析する。
- ・比較分析した結果をもとに、特別活動における食に関する指導の在り方を考察する。

表－4 研究構想図



## 第Ⅱ章 小学校段階における望ましい食習慣 につながる学級活動の実践

### 1 異学年との交流活動を生かした学級活動（1） の実践事例とその考察

#### （1）議題

「6年生ともっとなかよくなるにこにこレストランにするために、マナーとゲームについて話し合おう」（第1学年）

#### （2）目標

- 楽しい活動にするために話し合い、自ら進んで活動することができる。  
(関心・意欲・態度)
- 提案理由と結びつけながら、自分の考えをもち発表することができる。  
(思考・判断)
- 一人一人の考えを生かしながら話し合い自分の役割を果たして交流給食をすることができる。  
(技能・表現)
- 楽しい交流給食にするための自分の役割がわかり、活動の楽しさを味わうことができる。  
(知識・理解)

#### （3）本議題の意義と食に関する指導との関連

本事例は、望ましい食習慣の形成を目指した学級活動（1）の授業実践を通して、特別活動における食に関する指導の在り方を探ろうとしたものである。

本学級の児童は、1学期から6年生と歓迎遠足やお話タイムなどで交流活動を行ってきた。1学期の最後には、6年生に集会に招待され、2学期には「自分たちも何かお礼がしたい」「もっと6年生と仲良くなりたい」という気持ちを強くもつようになった。

また、これまでに5年生や4年生とランチルーム交流給食を経験しており、今度は6年生と一緒に、ランチルームで交流給食がしたいという願いから、本議題が設定された。

食に関しては、食べることが大好きで、最初はマナーも意識して食べることができていた。2学期になり、給食時間のマナーで課題が出て

きた。そこで、9月に学級活動（2）「食事のマナーについて考えよう」という題材で授業を行い、子どもたちは、「姿勢に気をつけて食べる」「ご飯粒を残さずに食べる」などのめあてを決めた。その後、保護者の協力も得ながら、1週間取り組んできたことで、給食時間のマナーについても改善されてきた。

事前に行ったアンケートによると、一人で食事をとる「孤食」を頻繁に行っている児童が6割、「人と食事をするのが嫌い」と答えた児童がおよそ1割いた。これまでに、2回の交流給食を行ったが、「人と食事をすることが嫌い」と答えた児童の一人は、交流給食のときにお腹が痛くなり泣き出してしまったことがある。このことからたくさんの人と食べる喜び、食事を通した好ましい人間関係をつくることは、望ましい食習慣の形成、とくに社会性の育成につながると考えた。

そこで、本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣を次のように設定した。

表－5 本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣

- 協力して給食の準備や後片付けをすることができる。  
(社会性)
- はしの使い方や食器の並べ方、話題のび方などマナーを意識しながら給食を吃ることができる。  
(社会性)
- 6年生や友達との会話を楽しみながら気持ちよく会食をることができる。  
(社会性)
- 会食の楽しさがわかり、6年生や友達と、よりよい人間関係を築くことができる。  
(社会性)

#### （4）実践内容

##### ア 事前

- (ア) 学級活動（2）の「食事のマナーについて見直そう」の実践をした。

自分の食事のマナーについて振り返り、気を付けたいことを自己決定した。

- (イ) 司会グループと教師で議題を選定した。  
 (ウ) 今までの交流給食についてのアンケートをとった。  
 (エ) アンケートをもとに計画委員会で話し合いの柱を決め、司会グループの役割分担をした。  
 (オ) 提案者は6年生にインタビューをしながら  
 イ 事中

ゲームの原案を決めた。

全員が朝の時間や休み時間などをを利用してゲームの試しの体験活動を行った。

- (カ) 体験活動をもとに個人ノートに自分の考えをまとめた。

話し合いの順序	指導上の留意点(○) 評価(●)
1 始めの言葉	○ 明るく大きな声で、あいさつや紹介ができるように伝えておく。
2 司会者の紹介	
3 議題の確認と提案理由の説明	
○議題	<p>6年生となかよくなるためにここにレストランにするために、マナーとしょくごのゲームについてはなしあおう。</p>
○提案理由	<p>いつもおせわになっている6年生といっしょに、きゅうしょくをたべて、もっとなかよしになりたいから。</p>
4 話し合いのめあての確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ともだちのかんがえをよくきいて、じぶんのかんがえをはっぴょうしよう。</li> <li>・つぎのことをかんがえながら、はなしあいをしよう。</li> </ul> <p>○みんながきもちよく、きゅうしょくをたべることができるか。</p> <p>○6年生ともっとなかよくなれるか。</p>
5 先生の話	○ 提案理由、話し合いのめあてに沿った話し合いになるよう、もう一度強調しておく。
6 話し合い	
柱1 みんなできもちよくたべるためのマナー（食事の食べ方について）をかんがえよう。	
(1) ランチ係がアンケートの結果を発表し、自分たちのマナーの実態について課題意識をもつ。	○ 4年生とのランチルームを終えてのアンケートや最近の給食時間の様子などからマナーについて提案できるようにする。
(2) 課題の解決方法について、グループで体験活動も取り入れながら、話し合う。	○ 体験活動を取り入れながら、解決方法を話し合うことができるようとする。
(3) 解決方法を発表する	● 気持ちよく会食するためのマナーについて考えをもつことができる。

柱2 もっとなかよくなれる にこにこレストランにするためのゲームを1つ決めよう。	
(1) 提案タイム…ゲームの原案を提案する。 ・「たべものしりとり」 ・「きゅうしょくクイズ」 ・「すきなたべもの○×ゲーム」	○ 体験活動をさせ、実感を伴った集団決定ができるようにする。 ○ 話し合いが行き詰りそうになったら、提案理由や話し合いのめあてに立ち返ることができるように助言をする。 ● 6年生と人間関係をよりよくするようなゲームを考えることができる。
(2) 質問タイム…提案者に質問をする。	
(3) なるほどタイム…体験活動を取り入れて、みんなでゲームをやってみる。 (意見を出す)	
(4) まとめタイム…体験活動や6年生の意見なども参考にしながら集団決定する。(意見を整理する)	
(5) にこにこタイム…決まった意見を確認する。(意見の確認)	
8 話し合いの振り返り(自己評価と感想)	○ 話し合いで決まったことのよさ、6年生と一緒に話合うことができたこと、司会者グループへの労い、集会への意欲付け、などを教師の話に取り入れる。
9 先生の話	
10 終わりの言葉	

#### ウ 事後

- (ア) 必要な係を話し合い、役割分担をした。
- (イ) レストラン集会の準備をした。
- (ウ) にこにこレストラン集会を実施した。
- (エ) 活動の振り返りを行った。

#### (5) 考察

望ましい食習慣の形成につながる実践を中心に考察を述べる。

##### ア 事前の活動

この活動に入る前に、学活(2)「マナーを見直そう」の題材で授業を行い、それぞれの児童が自己決定に沿って実践をしてきた。例えば、ごはんつぶをたくさん残していた児童が一粒残らず食べれるようになったり、「ひじについて食べてはいけないよ」などお互いにマナーについての言葉かけもできるようになった。児童はマナーよく食べることは、気持ちのよい食事につながることを実感できるよう

になった。

この後、4年生との交流給食を行った。すると、食事のときにふざけすぎてしまい周りの人を不快にさせてしまったり、4年生と全く会話ができず黙り込んでしまったりする児童がいた。中には緊張のあまりお腹が痛くなってしまい泣き出してしまう児童もいた。

しかし、自己決定したマナーを実践でき自信をつけた児童も見られた。また、4年生との交流は初めてであったが、4年生が自己紹介ゲームや○×ゲームなどをしてくれたことで、4年生と仲良くなれた児童もたくさんいた。これは、食事を通してよりよい人間関係をつくることができたと考える。

4年生との交流給食後のアンケートによると「もう一度、交流給食がしたい」「今度は、6年生と食べてみたい」などの声が出され、ランチ係の提案による本議題が選定された。話し合いの柱決めでは、柱1に4年生との

交流給食での課題であった「みんなで気持ちよく食べるマナーについて」柱2では、「6年生ともっとなかよくなるためのゲームについて」話し合うことにした。原案づくりでは、4年生の交流給食での経験をもとに「食べものに関係があるゲームをしよう」という意見や「6年生と1年生が仲良くなれるゲームをつくろう」という意見が取り入れられ、「給食クイズ」「食べ物しりとり」「6年生の好きな食べ物○×クイズ」の3つの原案が出された。

これは、望ましい食習慣の一つである「会食の楽しみがわかり、6年生や友達とよりよい人間関係をつくることができる（社会性）」児童の姿につながりがあると考える。

#### イ 事中の活動

事中では、「6年生と気持ちよく食事をするためのマナーについて」と「6年生ともっとなかよくなるためのゲームについて」について話し合いを行った。

柱1では、ランチ係がクラスのマナーの現状や4年生との交流給食での課題を、提案した。「マナーで気をつけること」の話し合いで「ふざけて気持ち悪い言葉を言わない。わけは、まわりの人が楽しくなくなるからです。」や「口に物を入れてしゃべらない。わけは、6年生が嫌な気持ちになるからです。」など交流相手の6年生や友達のことを意識した発言が出された。また、教師が口に物をいれてしまふという間接体験を手立てとして取り入れた。そのことにより「うわ。本当に気持ちが悪い。」「いやな気持ちになった。」などの声が聞かれた。

資料-1 マナーについての間接体験をする児童



体験活動を取り入れたことで実感を伴った集団決定をすることができた。

これは、望ましい食習慣の一つである「マナーを意識する（社会性）」児童の姿につながりがあると考える。

柱2でも、ゲームの体験を取り入れながら集団決定していった。

児童の意見としては、「すきなもの○×がいいと思います。わけは6年生のことを知ることができます。」「たべものしりとりがいいと思います。わけは、みんなで話し合うことができるからです。」などの交流相手である6年生を意識した発言が出された。

これは、望ましい食習慣の一つである「会食の楽しさがわかり、6年生や友達とよりよい人間関係を築くことができる（社会性）」児童の姿につながりがあると考える。

資料-2 ゲームの体験活動をしている児童



#### ウ 事後の活動

事後の活動では、6年生との交流給食を実施した。給食の準備や後片付けも全員で協力して行った。その際、食器の扱いにも気をつけて運ぶ姿が見られた。給食を配膳するときに、「どうぞ」という声をかけながら配膳する姿が見られた。

これは、望ましい食習慣の一つである「協力して給食の準備や後片付けをすることができる（社会性）」児童の姿につながりがあると考える。

交流給食の座席も、「たくさんの6年生と仲

良くなりたい」という思いから、くじ引きで決めた。児童は、最初は緊張していたが今まで話したことのない6年生とも、学級会で集団決定された「すきなたべものを聞く」などを参考に会話をすることができていた。普段は、食べることに抵抗を感じている児童や、人と食べることが苦手な児童も、みんな笑顔で食べることができていた。

これは、望ましい食習慣の一つである「仲間との食事のよさを知ることができる(社会性)」児童の姿や「6年生や友達との会話を楽しみながら気持ちよく会食をすることができる(社会性)」児童の姿とのつながりがあると考える。

資料－3 6年生と楽しそうに会食する児童



交流給食の始めには、学級会の柱1で集団決定された「マナーについての発表」の時間をとり、全員がマナーを意識しながら食事をするように呼びかけた。その結果、「口の中に食べ物がなくなつてから、お話ししようね。」など、マナーを意識した会話をする姿も見られた。

これは、望ましい食習慣の一つである「はしの使い方や食器の並べ方、話題の選び方など、マナーを意識しながら給食を食べることができる(社会性)」児童の姿とのつながりがあると考える。

食後には、学級会の柱2で集団決定された食後のゲーム「すきなもの○×」を全員で行った。ゲームの問題を6年生にインタビューをして、作ったので、児童は6年生に「好きな食べ物はなんですか」などと話しかけたり、一緒に答えを考えたり、積極的に6年生と会話をする姿が

見られた。

これは、望ましい食習慣の一つである「6年生や友達との会話を楽しみながら、気持ちよく会食をすることができる(社会性)」児童の姿とのつながりがあると考える。

資料－4 食後のゲームの様子



最後の感想では、1年生の児童だけではなく6年生にも感想を言ってもらった。「今日は、今まで話したことのない1年生とも話せて、楽しかったです。これからも仲良くしていきましょう。」「1年生が6年生のためにここまで準備をしてくれて本当にびっくりしました。一緒に給食を食べることができてうれしかったです」などの感想を言ってもらえた。1年生の児童も「今日は6年生と一緒に給食を食べることができて、本当にうれしかったです。」「今日は6年生来てくれてありがとうございます。」などの感想が聞かれた。

これは、望ましい食習慣の一つである「会食の楽しさが分かり、6年生や友達とよりよい人間関係を築くことができる(社会性)」児童の姿とのつながりがあると考える。

資料－5 感想を言っている6年生の児童



「振り返り」では、交流給食でのアンケートをとった。「人とたべるのは好きですか」の質問に対し、実施前は91%の児童が「好き」と答えたが、実施後は100%の児童が「好き」と答えた。理由も「みんなで食べるとおいしいから」「みんなでたべると楽しいから」などが出された。また、感想では、「にこにこレストラン(交流給食)はとても楽しかったです。またやりたいです。」「今度は、別の学年と食べたいです。」という会食の楽しさを知ることができた感想や「6年生と仲良くなれてよかったですなあと思いました。」「6年生と給食を食べられて知らない人とも仲良くなりました。」などの6年生とよりよい人間関係をつくることができた感想が出された。

これは、望ましい食習慣の一つである「会食の楽しさが分かり、6年生や友達とよりよい人間関係を築くことができる(社会性)」児童の姿とつながりがあると考える。

以上のような変化から、学級活動(1)の本授業の実践は、食に関する望ましい食習慣の形成の中の特に「社会性」をはぐくむ基礎となる活動として有効であり、望ましい食習慣の形成につながるものと、とらえた。

#### 資料-6 交流給食後の1年生の感想

- 6年生ときゅうしょくをたべたら、おいしいなあっておもいました。6年生となかよくなれてよかったですなあとおもいました。6年生が、マナーをちゃんとまもれているなあとおもいました。
- 6年生といっしょにきゅうしょくをたべて、しらない人となかよくなりました。うれしかったです。
- みんなで、ひじをつかないでたべられたから、うれしかったです。あと、きもちよくたべれたからとてもよかったです。

#### 資料-7 交流給食後の6年生の感想

- 今日は、1年生がぼくたちのために、にこにこレストランを開いてくれました。準備も後片付けも全て1年生がしてくれてすごいなあと思ったし、ありがとうの気持ちでいっぱいになりました。
- ×ゲームでは、ぼくたちを楽しませるために、いっぱい問題をかんがえてくれました。  
今日は、いつもより給食をおいしく食べることができました。わけは、大勢の人といっぱい話しながら食べれたからです。それと、知らない子とでも、楽しく話せば友だちになれるということも学びました。
- 1年生は、ひじをつかずにちゃんと行儀よく食べていて、私も気をつけようと思いました。今まで、ペアの子以外はあまりしゃべった事がなかったけど、いつのまにか話せるようになっていました。  
今日は、1年生との給食で1年生とも話せるようになりました、給食もとてもおいしく食べました。  
私は、楽しかったら自然と話せるようになるんだなあと思いました。
- 今日は、とても楽しい給食だったと思います。
- 今日のランチルームで1年生と給食を食べました。1年生が6年生の分まで給食を準備してくれました。1年生のみんなは、食器をていねいにあつかっていて6年生のところにおいてくれました。給食中のマナーについても、みんなで気をつけて食べるということを教えてくれました。1年生は、とってもお行儀よく食べていてふだん聞けない話をしてくれてとっても気分よく楽しく食べました。

## 2 地域との交流活動を生かした学級活動(1) の実践事例とその考察

### (1) 議題

「おいもパーティーについて話し合おう」

(第2学年)

### (2) 目標

- お世話になった方々へのお礼を計画・実行することで達成感や満足感をもち、学年の友達や地域の方々の大切さに気付くことができる。 (関心・意欲・態度)
- 学級目標や提案理由、めあてと結びつながら、よりよい考えを生み出すことができる。 (思考・判断)
- 一人一人の創意工夫を生かしながら話し合い、自分の役割を果たし協力して、お芋パーティーができる。 (技能・表現)
- お礼の理由やお芋パーティーの計画の立て方、役割がわかる。 (知識・理解)

### (3) 本議題の意義と食に関する指導との関連

本事例は、望ましい食習慣の形成を目指した学級活動(1)の授業実践を通して、特別活動における食に関する指導の在り方を探ろうとしたものである。

本学級の児童は、生活科の学習で校区探検を行い、地域の人々との関わりを深めている。また、校区にある畑で芋の苗植えや草取りをしている。その際に、地域の方に芋苗の植え方や草取りでの注意などを教えてもらった。その中で児童は芋苗や畝の準備、水やりなどのお世話をしていただいていることに気付いている。

そこで、本議題は学級目標「えがおのあふれるクラス」の達成に近付くために、「集会がしたい」「芋作りでお世話になった方々にお礼がしたい」と発議され、「お芋パーティーをしよう」と議題化したものである。

事前に行ったアンケートでは、「給食は好きですか」という質問に対して90%の児童が「大好

き」「好き」と答えており、理由の一位が「好きな物が食べられるから」であった。「みんなと食べる」「先生と食べる」という人間関係を理由としている人数は少ない。また、給食の完食率は低い。

そこで、お世話になった方々に感謝の気持ちを伝えることで、自分たちは地域の人々に見守られているという気持ちをもつことができ、地域との連携が深まると考える。さらに、お世話になった方々とお芋パーティーをすることで、食べることの喜びや楽しさを感じ、食事を通して人間関係形成能力を身に付けるうえからも、本議題は意義あるものと考える。

本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣を次のように設定した。(表-6)

表-6 本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣

- |   |
|---|
| ○ 芋づくりでお世話になった方々に感謝の気持ちを伝える方法を考え、実践することができる。<br>(感謝の心)            |
| ○ 学年の友達と協力して計画したり、お世話になった方々と話しながら、お芋パーティーを楽しんだりすることができる。<br>(社会性) |

### (4) 実践内容

#### ア 事前

##### (ア) 調査活動を行う

お世話になっている方の名前や畑を開放している理由、お世話をしている方の思いを知るために、計画委員会が公民館で調査活動を行い、調べたことを2年生に伝える。

##### (イ) プログラムについて話し合う

お芋パーティーでお世話になった方と楽しくお芋パーティーを過ごすために、お世話になった方となかよくなる内容をプログラムに付け加えをする。

##### (ウ) アンケートに回答する

お世話になった方々に感謝の気持ちを伝える方法について、アンケートをとる。

イ 事中

話し合いの順序	指導上の留意点 (○) 評価 (●)
1 始めの言葉	○ 大きな声でいさつや紹介ができるようにリハーサルで声かけをしておく。
2 司会者の紹介	○ お世話になった方への感謝の集会であることを確認するために、提案理由やめあての大切な部分にラインを引いて強調する。
3 議題の確認と提案理由の説明 ○議題 おいもパーティーについて話し合おう。 ○提案理由 1 学期の終わりにお楽しみ集会をして楽しかったので、お芋ができたら、お芋パーティーを開き、えがおあふれる集会にしたい。そして、お芋づくりでお世話になった人々をお芋パーティーに招待して、2年生みんなでありがとうの気持ちを伝えたい。そうすれば、それぞれのクラスの学級目標に近づくと思います。	○ みんなで大きな声で読み、大切な部分を確認する。
4 話し合いのめあての確認 地域の人々にありがとうの気持ちを伝えるために、みんなでアイデアを出し合おう。	○ 児童が相手意識をもって話し合いに臨めるように、お世話になった方のメッセージを伝える。 ○ 提案理由、めあてに沿った話し合いになるように、提案理由とめあてを再度確認する。 ○ 事前に提案者を募り、替え歌を途中まで考えさせる。提案者に歌の練習をさせておく。 ○ 事前に歌の歌詞を掲示し、学級会個人ノートに考えを書かせる。発表への意欲をもたせるために、コメントを付けるなど賞賛する。
5 先生の話	
6 話し合い 話し合いの柱：お礼の歌の内容について (1) 提案タイム 事前に考えた替え歌を途中まで歌い、最後の歌詞の内容について、みんなで話し合うことを確認する。 (2) 質問タイム 友達から提案されたアイデアに対する質問をする。 (3) 交流タイム 歌詞に入れたい言葉を発表する。 (4) 整理タイム 同じ言葉や内容ごとに整理する。 (5) 決定タイム 話し合った言葉をつかって、班ごとに歌詞を作成し、歌ってみる。	○ 自分の考えを短冊に書かせ、板書の準備をしておく。理由もはっきりと言わせるために、短冊に理由も書かせておく。 ○ 児童の意見を把握するために、一覧表にまとめる。  ● 歌詞に入れたい言葉を考えている。 ○ 考えが視覚的に分かるように、短冊を考え方ごとに分けて貼るように、黒板記録に指示しておく。 ○ 歌詞ができた班に紙に書いてもらい、みんなで歌を歌ってみる。 ● お世話になった方に向けた歌詞を考えている
7 話し合いの振り返り	
8 先生の話	
9 終わりの言葉	○ 実践に向けて意欲を高めるために、お世話になった方の話をビデオで流す。

## ウ 事後

### (ア) 役割分担とお芋パーティーの準備

実行委員を募集し、集会の進行について話し合い、リハーサルを行う。また、全員でお芋パーティーの準備をしたり、歌の練習をしたりする。

### (イ) お芋パーティーを実施

お世話になった方と仲良くなるために、自己紹介やじゃんけんゲームを行う。お世話になった方に感謝の気持ちを伝えるために、お礼の歌を全員で歌い、実行委員が代表して手紙を渡す。その後、お芋を食べながら話をする。

### (ウ) 活動の振り返り

「感謝の気持ちを伝えることができたか」「お世話になった人々と話をしながら、お芋パーティーを楽しむことができたか」の視点で振り返る。さらに、学級目標をもとに振り返りを行う。

## (5) 考察

望ましい食習慣の形成のために交流活動を生かした実践を中心に考察を述べる。

### ア 事前の活動

調査活動では、計画委員会が代表して公民館に行き、調査活動を行った。「地域の人々の輪を広げるために畠の開放を始めたこと」「植物や土にふれることで命の大切さを考てもらいたい」という思いを児童に伝えた。

すると、児童は「お芋パーティーでお芋のお世話をしてくれた人と楽しく過ごしたい」とお世話になった方に関心をもち始め、また「お芋パーティーを早くしたい」とお芋パーティーに意欲をもち始めた。

これは、望ましい食習慣の1つである「学年の友達と協力して計画したり、お世話になった人々と話しながら、お芋パーティーを楽しんだりすることができる(社会性)」児童の姿につながりがあると考える。

### 資料－8 調査したことを報告する様子



プログラムについての話し合いでは、まずパーティーのプログラムを計画委員で話し合い基本のプログラムを作った。そこで、「お芋のお世話をしたくれた人と楽しく過ごすためにプログラムに付け加えをしよう」というめあてで学年合同で話し合いを行った。

「地域の方が（自分たちの）名前を知らないから、自己紹介をしよう」「自分がお世話になったことをいう」などの意見から自己紹介の時間をプログラムに付け加えた。また、「お世話になった方と仲良くなりたい」「あそびも入ったら楽しくなると思う」などの意見から、じゃんけんゲームの時間をプログラムに付け加えた。

これは、望ましい食習慣の1つである「学年の友達と協力して計画したり、お世話になった人々と話しながら、お芋パーティーを楽しんだりすることができる(社会性)」児童の姿につながりがあると考える。

### 資料－9 お芋パーティーのプログラム

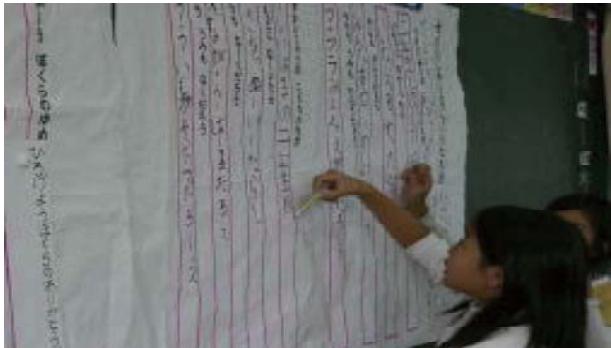


アンケートの回答では、お芋作りでお世話になった方へのお礼の方法について、回答を求めた。児童の考えは、「手紙を渡す」「プレゼントを渡す」「折り紙を折って渡す」「歌を歌う」が出た。そこで、個人でできるお礼、2年生みんなでできるお礼という視点で、計画委員会で、「飾りや絵をかくなどの工夫をした手紙」と「お礼の歌」にしぼった。アンケートに「歌」と書いた児童で、歌を決めたり、歌詞を途中まで考えたりして、提案の準備をした。

歌詞を考えるにあたって、「だれのために歌を歌うのか?」「なぜ歌を歌うのか?」と質問したところ、「お世話になった人に、ありがとうの気持ちを伝えるため」という答えが返ってきた。

これは望ましい食習慣の1つである「芋づくりでお世話になった方々に、感謝の気持ちを伝える方法を考え、実践することができる(感謝の心)」児童の姿につながりがあると考える。

資料-10 提案を準備する様子



#### イ 事中の活動

芋作りの経緯を振り返るために、活動の様子の写真を掲示し、お世話になった方の名前を伝えた。また、事前に芋畠でお世話になった方のメッセージを撮影し、話し合いの前に児童に見せた。

すると、交流タイムで、「ありがとう」「お芋」「みんなで楽しく食べようよ」「地域のみなさん」「お世話になった人の名前」「みんなの笑顔」などの意見がでた。

「ありがとう」の理由には、「芋のお世話をしてくれたから」「感謝の気持ちを伝えられるし、

ありがとうをいえるから」などがあった。

これは、望ましい食習慣の1つである「芋づくりでお世話になった方々に感謝の気持ちを伝える方法を考え、実践することができる(感謝の心)」児童の姿につながりがあると考える。

また、「みんなで楽しく食べようよ」という理由は、「お世話になった方が喜ぶから」である。さらに、「○○さん」という言葉を入れたい理由は、「○○さんは見たことがないけど、畠を作ってくれたり、草をとってくれたりしてくれて、ありがとうを伝えたい。今度、会いたいから」である。

これは、望ましい食習慣の1つである「学年の友達と協力して計画したり、お世話になった方々と話しながら、お芋パーティーを楽しんだりすることができる(社会性)」児童の姿につながりがあると考える。

資料-11 芋作りの経緯を振り返っている様子



資料-12 お世話になった方のメッセージを見ている様子



## ウ 事後の活動

役割分担とお芋パーティーの準備では、まず、個人でお礼の手紙を書き、学年でとじ合わせた。

つぎに、歌の提案者を中心に替え歌を作り上げた。そして、実行委員を組織し、お芋パーティーの役割分担を行った。朝の会や帰りの会を使って、クラスでお礼の歌の練習を行った。月の歌だったことから、メロディーは全員知っていたので、替え歌も大きな声で歌っていた。

また、お芋パーティーに向けて芋を洗ったり切ったりと準備をした。初めて包丁を使ったが、意欲的に準備をしていた。

お芋パーティーでは、各班ごとに1名ずつ入ってもらい、パーティーを開催した。最初は緊張していた児童も集会が進むにつれ、打ち解けてきた。自己紹介の後は、積極的に話をしたり、実行委員がじゃんけんゲームの進行をする前から、班でじゃんけんをしているところも見られた。また、会食の時間に児童が進んでお芋をお世話になった方に配る姿も見られた。

これは、望ましい食習慣の1つである「学年の友達と協力して計画したり、お世話になった方々と話しながら、お芋パーティーを楽しんだりすることができる(社会性)」児童の姿につながりがあると考える。

資料-13 お礼の歌を歌っている様子



資料-14 会食しながら話している様子



活動の振り返りでは、次のような感想が見られた。

「お礼はみんなで歌を歌いました。みなさんにはありがとうの気持ちが伝わっているといいです。」

これは望ましい食習慣の1つである「芋づくりでお世話になった方々に感謝の気持ちを伝える方法を考え、実践することができる(感謝の心)」児童の姿につながりがあると考える。

「お芋を食べながら話をして、食べるのが楽しかったです。みんなで協力してお芋パーティーが楽しくでき、みんなが笑顔になってよかったです。これからも地域の人、公民館の人と仲良くしていきたいです。」「またお芋パーティーをやりたいです。あと、○○さんと仲良くなれてよかったです。」

これは、望ましい食習慣の1つである「学年の友達と協力して計画したり、お世話になった方々と話しながら、お芋パーティーを楽しんだりすることができる(社会性)」児童の姿につながりがあると考える。

以上のような児童の姿から、学級活動(1)の本授業の実践は、食に関する望ましい食習慣の形成の中特に「社会性」「感謝の心」をはぐくむ基礎となる活動として有効であり、望ましい食習慣の形成につながるものととらえた。

### 3 栄養教諭との交流活動を生かした学級活動

#### (2) の実践事例とその考察

##### (1) 題材

「お米の力で元気100倍」（第3学年）

##### (2) 目標

- 食の課題に関心をもち、課題を克服するための食習慣に関心をもつことができる。 （関心・意欲・態度）
- 自分の食べ方を振り返り、友達と話し合ったり協力したりしながら自分の食習慣を見直すことができる。 （思考・判断）
- 望ましい食習慣について理解し、自己決定したことを実践することができる。 （技能・表現）
- 食の課題を克服するための望ましい食習慣について理解できる。 （知識・理解）

##### (3) 本題材の意義と食に関する指導との関連

本事例は、望ましい食習慣の形成を目指した学級活動（2）の授業実践を通して、特別活動における食に関する指導の在り方を探ろうとしたものである。

本学級の児童は給食を楽しみにしており、好き嫌いをせず食事をとることができる児童が多い。残菜率は0パーセントに近く、ほぼ毎日完食する。他者との交流に関しては、学習や地域の行事などでゲストティーチャーと接する機会を経験しており、他者と交流する良さや楽しさを実感している。

本学級で実施した食に関する実態調査の事前アンケートでは、バランス良く食べることの大切さについて、全員の児童が理解していた。その反面、学級の3割近くの児童に食の課題があることが分かった。また、実践が伴わず偏食を直すことが難しい児童や正しい知識が十分身に付いていない児童がいることが明らかになった。特にお米について「栄養があまりない」「食べると太る」「べたべたして噛むのも後片付けも面倒」など誤った認識や

マイナスイメージをもっている児童が、2割いた。食べ方に関してはおかげだけ食べお米を残す偏った食べ方や好き嫌いが激しい偏食傾向の児童が2割近くいることもわかった。

そこで、児童にとって身近な食であるお米を題材に、望ましい食習慣の形成を目標とした社会性の育成に関わる内容を学習のねらいとした。

お米については第5学年の社会科で生産や流通を、第6学年の家庭科で栄養的価値や調理について学習する。中学年でお米を題材に望ましい食習慣について学習することは、興味や関心を高める上で、高学年の学習につながるのではないかと考えた。また、知識だけでなく、お米の生産や給食に携わる人々の存在や努力についても知ることは、食に対する感謝の心を育てる上でも有効だと考えた。

また、友達との話し合いや栄養教諭や給食の先生との交流活動を通して、児童に自分の食の課題に気付かせ、望ましい食習慣を身につけさせたいと考えた。さらに、このような学習を通して、食や食に関わる人々に感謝の気持ちをもち、学んだことを生かして自分の食の課題を克服できるような児童になってほしいという担任の願いから、本題材を設定した。

以上のような考えのもと、学級担任と栄養教諭のそれぞれの専門性を生かした学級活動（2）の実践を試みた。

本題材では、身につけさせたい望ましい食習慣の形成につながる児童を、次のように設定した。（表-7）

表-7 本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣

- |  |
|--|
| ○ 自分の食べ方を見つめ直し、望ましい食習慣を形成しようと努力する。<br>（食事の重要性）     |
| ○ 食生活は、生産者をはじめ多くの人の苦労や努力に支えられていることを理解する。<br>（感謝の心） |

○ 友達と協力することやマナーを考えることは相手を思いやることであり、楽しい食事につながることを理解する。  
(社会性)

#### (4) 実践内容

ア 事前

(ア) 学級の実態調査を行う

食に関する児童の意識と実態を把握するために、実態調査を行う。

(イ) 調査結果を公表する

食に関する児童の意識と実態の差を明らかにし、児童に課題意識をもたせるために、アンケート結果をグラフ化し、食に関する課題に気付かせる。

(ウ) お米について調べる

お米について興味や関心を高めるために、他教科との関連(国語)を図り、児童が自分の調べたいテーマに沿って、お米について調べ学習をする。資料をまとめるだけの学習にならないよう、交流活動を仕組む。交流活動の対象は栄養教諭、給食の先生、家庭科の先生、給食のお金を集めめる事務の先生、農家の方などにする。発表を通して、児童がお米の栄養やよさについて、互いに質問したり情報を交換したりする。

(エ) お米に関する意識や知識の学習前後の変化を比較する

学習の前後で、お米についての意識や知識がどう変化したか比較できるように、新たに知ったことや発表を聞いた感想などを、ノートに記録する。

イ 事中

学級活動と内容	指導上の留意点 (○) 評価(●)
1 事前にとったアンケートの結果を知り、めあてについて話し合う。  お米の力（よさ）を知って、自分の食べ方をふりかえろう。	○ 児童が自分の食の課題に気付くように、意識と実態のズレに気付かせる。 ● 学級や自分の食の課題に関心をもつことができる。
2 米について調べたことを①栄養グループ②農家の人の大変さグループが発表する。	● お米の栄養やお米を育てる人々の工夫や努力を理解できる。
3 栄養教諭の先生からお米の栄養やよき、望ましい食べ方について話を聞く。	
4 食に携わる人(給食室の先生・栄養教諭の先生・お米をつくっている人・給食委員会)からのメッセージを聴き、一粒の米にはいろいろな願いや思いが込められていることを知る。	○ 児童が具体的にイメージしやすいように、ビデオやグラフなど視覚的に分かる資料を活用する。 ○ 給食室と栄養教諭の先生だけでなく農業に携わる人々や委員会の先輩などいろいろな人が食に関わっていること

4 自分の課題を振り返り、今日の授業で学んだことを生かした自己決定をする。

を児童に気付かせる。

- 給食に携わる人々の存在や願いを理解することができる。
- 課題意識や目的意識をもった事後の活動ができるような自己決定ができるよう支援する。
- クラス全員がめあて達成に向けて実践できるように、教師の期待を伝えとともに本時の頑張りを賞賛し、実践への意欲づけをする。
- 米のよさを理解し、米に携わる人々の存在や願いを考えながら話し合い、自分の考えをもつことができる。

#### ウ 事後

自分の食べ方を振り返り、望ましい食習慣を身に付けられるように、自己決定で決めた内容を実践する。

また、係活動など児童の自主的な活動を中心に、自分たちが食に関して学級集団としてできることに関しても話し合い、実践していく。保護者に対しては、学級通信で事前に学習の趣旨を伝えるとともに、懇談会で具体的に説明し、家庭の協力を依頼する。

(ア) 食に関する自分の課題を把握し、解決できるように、給食時間を中心に行なう。

より具体的な実践になるように、食べ方や食べる量・準備や後片付け・人との関わりなどの観点から、自己決定することを決め、取り組む。

(イ) 食後に振り返る時間を設ける。

望ましい食習慣を身につけることができるよう、3週間継続して取り組む。めあてが達成できたか、自分の課題がどれくらい改善したか記録し、実践前と後の変化を比べる。

#### (5) 考察

望ましい食習慣の形成のための交流活動を生かした実践を中心に考察を述べる。

#### ア 事前の活動

事中の活動をする前に、お米の調べ学習を行った。他教科との関連を図り、児童がお米の栄養や種類など、調べたいテーマにそって調べ学習をした。資料をまとめるだけでなく、農家の方や給食室の先生などに、質問したりお話を聞いたりしたことでお米を育てる大変さやおいしく調理するための工夫に、児童が気付くことができた。例えば、児童が献立表から給食のお米は福岡県産が使われていることを見つけたり、米飯が温かいのは給食の先生の工夫や努力だと気付いたりし始めた。

調べ学習の発表会(資料一15・資料一16)では、お米のルーツ、栄養やよさ、種類、育てる人の工夫や努力、調理方法などについて調べたことを報告した。新たにお米について学んだり、質問し合ったりする中で、お米について興味や関心が高まってきた。その中で児童から、「天気や害虫から守るためににはとても大変

なことに気付いた」「お米を今まで平氣で残していた」など新たな気付きや自分の食べ方を振り返るような発言が、出てきた。なかには「頂きますの挨拶は何かをもらうという意味ではないか」「手を合わせて挨拶するのは、育てた人へのありがとうの気持ちだと思う」と、いった食への姿勢について考えた児童もいた。

これは食に関する指導の内容の「自分の食べ方を見つめ直し、望ましい食習慣を形成しようと努力する(食事の重要性)」児童の姿につながりがあると考える。

資料-15 調べ学習を発表する児童



資料-16 種類別にお米の特徴を紹介する児童



#### イ 事中の活動

時中の活動では、児童の実態に即した学習ができるように、担任と栄養教諭が連携をとって指導した。

実態調査の結果(資料-17)を知らせ、児童の食に関する意識と実態の差に気付かせ、学級や自分の食べ方のどんな点が課題なのか、問題意識をもたせた。そこで栄養教諭が児童が調べたことをより専門的な視点から、お米に関する正しい知識やお米を食べることのよさ、望ましい食べ方について指導した。担任は給食室の先生、農家の方、給食委員会の児童の先生の工夫や努力など、心情的な面からのアプローチをした。(資料-18)

児童からは「一粒のお米から2000粒の命が生まれる。これから残さず食べる」「給食室の先生の顔を思い浮かべながら食べたい」など、農家の方や給食室の先生など、相手を意識した発意が出された。また「飯とおかずをバランス良く食べるため、稻妻食べを今日からする」「お米の栄養がよくとれるように、しっかり噛む」など、目的を意識した発言も出た。食べ方や食べる量に関して十分に実践できている児童の中には「今までひじについていたので、今度から気をつける」「挨拶の声が小さかったので、ちゃんと言う」など、課題を意識しながら発言した児童もいた。

これは食に関する指導の内容の「友達と協力することやマナーを考えることは相手を思いやることであり、楽しい食事につながることを理解する(社会性)」児童の姿と「食生活は、生産者をはじめ多くの人の苦労や努力に支えられていることを理解する(感謝の心)」につながりがあると考える。

このように自分の食の課題に応じて、児童が実現可能な自己決定をすることができた。(資料-19)また、お米は家庭でも毎日のように口にする食材であり、学校だけでなく土日も家庭で継続して実践できるという点で有効であった。

資料-17 アンケート結果



資料-18 1回の食事で食べるお米の量を紹介している様子



資料-19 自己決定を行う児童



#### ウ 事後の活動

事後の活動では、個人の取組として自己決定した内容を掲示し、3週間振り返り活動を行った。課題解決のために、家庭でも継続して行つたことで、課題意識を持続することができた。

学級集団の取組としては、お米カレンダーにお米の残量を記録したり、にこにこカードで食べ方や食器の返却の仕方を確認したりした。給食時には、児童がお互いに食べた後の食器を見せ合ったり、パンの日は最後の一口で食器についたスープをきれいにからめとて食べたりする工夫が見られ始めた。(資料-20)

このように 学級集団として、食べ方を見直そうとする意識の向上が見られるようになった。さらに振り返りの話し合いから、次第に人との関わりに変化がみられるようになってきた。例えば給食の先生を「先生」ではなく、「○○先生」ときちんと名前で呼び始めたり、食缶の返却時には必ずお礼を伝えたりする姿が見られるようになった。また、「おかずが温かいのは、すぐに食べられるように工夫してくれているのではないか」「献立によって野菜の切り方が違う」と、給食の先生の細やかな心配りに気付いた児童もいた。給食の時には、「給食の先生ってすごいね」「よくかむと、もっと甘くなっておいしいね」など、感想が聞こえるようになった。

これは食に関する指導の内容の「友達と協力することやマナーを考えることは相手を思いやることであり、楽しい食事につながることを理解する(社会性)」児童の姿と「食生活は、生産者をはじめ多くの人の苦労や努力に支えられていることを理解する(感謝の心)」につながりがあると考える。

今回、食の課題解決が目的であったが、児童の食に対する意識の変化は、自主的な実践的への広がりにつながった。本校では毎月、お誕生日給食の日に誕生日の児童を皆でお祝いしている。1・2月に誕生日だった児童の中から「ぼくたちも給食の先生を祝いたい」「給食室の先生の誕

「生日を知りたい」という発言が出た。野菜の形をした感謝状やメダル・バースディケーキをつくり、給食室の先生に贈る児童の姿が見られるようになった。(資料一21)

このように、児童自らが自分たちの力で課題を解決したり、食というフィルターを通して自主的・実践的な態度を身につけ、活動することができた。相手意識・目的意識・課題意識をもって他者に関わるようになったことや活動を継続発展できた点からも、交流活動は有効だったと考える。

以上のような、児童の心情面や行動面の変化から、学級活動(2)の本授業の実践は、特別活動の望ましい食習慣の形成の中特に「社会性」

「感謝の心」をはぐくむ基礎となる活動として有効であり、望ましい食習慣の形成につながるものととらえた。

今後は児童が活動を継続するだけでなく、新たな課題を発見・改善したりすることや家庭へ啓発したりすることで、本実践の意義がより深まるのではないかと考える。

資料一20 食器に米粒がついていないか見せ合う児童



資料一21 給食室の先生にお礼のお手紙を書き、贈る  
児童



## 第Ⅲ章 研究のまとめ

本研究室では、児童に望ましい食習慣を身に付けさせるために、食に関する指導の目標に照らし合わせて、目指す児童の姿を設定し、他者との交流活動を生かした学級活動を実践した。

その結果、学級活動に、効果的に交流活動を取り入れることにより望ましい食習慣の1つである社会性の育成に有効であることが分かった。

### 1 食に関する指導の視点から見た特別活動の役割

#### (1) 他者との交流活動を生かした学級活動の有効性

第1学年における検証授業「6年生となかよくなるためにこにコレストランをするためにマナーと食後のゲームについて話し合おう」では、6年生とのよりよい人間関係をつくるための異学年交流活動を取り入れた学級活動(1)の授業実践である。

普段接している6年生との交流活動は、相手意識や目的意識をもちやすいという点で、1年生の児童にとって有効であった。また、6年生にとっても1年生から交流給食に招待されたことで、人間関係が深まった。さらには自分たちの食生活も見直すことができたという点で交流活動は、有効であったと思われる。

実践後の振り返りの児童の感想の中で、「6年生と給食と一緒に食べて、もっと仲良くなれました」「人と一緒に食べたらおいしかったです」「人と食べるのが嫌いだったけど好きになりました」など食事のマナーや人間関係・心情面での変化が見られた。また、交流相手の6年生からも、「今日はいつもより給食をおいしく食べました。わけは、大勢の人といっぱい話しながら食べられたからです。」などの感想が寄せられた。6年生にとってもたくさんの人と食べる楽しさや喜びなどを知ることができ、交流活動は有効であったと思われる。

このように、交流活動は、気持ちよく会食をする喜びを知ること、食事を通して人間関係形

成能力を身に付ける点で有効であった。

第2学年における検証授業「お芋パーティーについて話し合おう」では、生活科の学習が発展し、地域との交流活動を取り入れた学級活動(1)の授業実践である。

芋の苗植え・草取りでお世話になった地域の方との交流活動を取り入れたことで、相手意識や目的意識をもち活動する姿が多く見られた。この姿から、2年生の児童には、今回の交流活動は有効だったと考える。また、今後、他教科でも地域の方との交流を仕組むという点で、本実践の発展性が考えられる。

また、児童の感想に「これからも地域の人、公民館の人と仲良くしていきたいです」とある。このことは、社会性の育成につながったと考える。

第3学年における検証授業「お米の力で元気100倍」では、児童が自分の食べ方を振り返り、克服するための栄養教諭との交流活動を取り入れた学級活動(2)の授業実践である。

今回の実践では栄養教諭、給食室の先生、給食委員会、お米を作っている人など身近な人と交流しながら活動できたことは、相手意識や課題意識がとぎれることなく食に関する興味・関心を高めながら活動を発展できた点で有効であったと思われる。

実践後の振り返りの児童の感想の中でも、「よく噛んで食べるようになった」「一粒で二千粒の命だから残さず食べるようになった」「育てたり給食を作ったりする人の顔を想像しながら食べることができた」など、食べ方や心情面での変化が見られた。保護者の方からも「家族みんなで残さず感謝して食べるようになった」「食事の採り方に偏りが減った」「命を頂くという気持ちが生まれた」などの感想が寄せられた。

このように、専門知識をもつ栄養教諭との交流活動は、給食をはじめとする実際の生活場面で毎日実践、振り返りができる点や家庭での啓発できる点でも有効であった。

今回、第1・2・3学年のどの実践においても

事前・事中・事後の段階で必要に応じて交流相手や活動を取り入れた。このことで、児童一人一人が課題意識、相手意識、目的意識をもって活動できた。

また活動の広がりも見られることができ交流相手との食事を通したよりよい人間関係をつくるうえで、交流活動が有効な手立てであった。今回、各々で課題が違う食という個人的行為であることから、より多くの人と関わることのできる交流活動を取り入れたことは、児童に望ましい食習慣を形成する上で大変有効であったと考える。

## (2) 社会性の育成との関連

第1・2・3学年における学級活動の検証授業では、児童一人一人が課題意識、相手意識、目的意識を明確にもち、進んで他者に関わろうとする姿が見られた。

例えば第1学年では、6年生と積極的に会話を楽しんだり協力して準備や後片付けをしたりする姿、第2学年では交流相手と自主的にゲームを始めたり話し始めたりする姿、第3学年では、感謝の気持ちを手紙や感謝状にして、給食室の先生に贈る姿など、どの実践においても他者との交流活動を通して、率先して友達と協力する姿や活動を発展させる姿などが見られるようになった。

このような姿から、今回の実践は特別活動の目標の「好ましい人間関係をはぐくむとともに、自主的・実践的態度の育成」とつながりがあると考えた。社会性は、児童一人一人が自分の役割や責任を果たしたり、自分の生活をよりよくするために課題を解決したりするような経験を積み重ねることで、確かなものとして身に付いていく。したがって他者との交流活動を生かした学級活動は社会性(人間関係形成能力)の育成に果たす特別活動の役割は大きいと捉えた。

## 2 成果と課題

### (1) 成果

食に関する指導は、学習指導要領解説特別活動編では、学級活動(2)に関する内容として「学校給食と望ましい食習慣の形成」が示されている。

しかし、各学級の実態に即したより自主的・実践的な学習を展開できるよう、今年度は学級活動(1)でも実践を行った。その結果、児童が能動的に活動する姿が見られた。したがって、第1・2学年の実践のように学級活動(1)においても食に関する指導を実践できたことは大きな成果であったと考える。

第3学年では、学級活動(2)の実践を栄養教諭と連携を取り、学級担任中心に授業を行った。食環境は、家庭的背景が大きく関わってくる。そのため、小学校段階では、児童理解の面から、児童と多くの時間を過ごす学級担任が中心となって授業を進めたことは、児童の実態に即した学習を展開できたことや家庭への啓発という点で成果があったと考える。

今回の3本の授業実践では、学級活動(1)(2)の両方とも学級担任を中心に行なったこと、児童の実態に即した支援ができたこと、課題解決に向けて児童が主体的に実践できたことなどの成果が見られた。

これらのことをふまえて、児童が望ましい食習慣を身に付けることを目指し、小学校低学年の段階から食に関する指導を行うことは重要であると考えた。また、児童が主体的に課題解決できる点や食を通して社会性をはぐくむことができる点から、特別活動が食に関する指導に果たす役割は大きいと考えた。

### (2) 今後の課題

他教科との区別化を図るために、特別活動で行なう食に関する指導の意義や価値を明らかにする。

### 3 研究のコメント

#### なぜ「食育」なのか？

なぜ、特別活動で食教育（食育）なのか、いぶかしく思われる方もいらっしゃるだろう。お昼の学校給食はともかくとして、朝ごはんや夕飯は家庭の範疇（聖域）であって、何をどのように食べるかといったきわめてプライベートな食の問題に学校が口出しすべきではないと指摘される方も多いことだろう。このあたりの研究背景をまず確認しておきたい。

2005年6月17日に制定された食育基本法の前文で「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも『食』が重要である」とし、食育を「知育、德育及び体育の基礎となるべきもの」と位置づけている。これまで我が国の学校教育はこれら知・徳・体（臨教審では徳・知・体として德育が強調されたが・・・）の教育を三位一体として推進することに特長があったが、これらのベースに食育が位置づけられたことは象徴的であった。実際、同法では基本的施策として、学校等における食育の推進（20条）を謳っており、教育最前線である学校現場でも「食育」は子どもを取り巻く食環境のきびしさと比例してその重みを増している。

こうした「食育」（食教育）は一過性のブームではない。すでに80年代に農林水産省や厚生省（当時）が「食生活指針」をそれぞれに発表してその重要性を訴えていたし、教育界でも90年代後半に社会問題化した青少年の「キレ」の原因をスナック菓子や炭酸飲料水の過剰摂取に求め、「コ」（孤・個・粉・小・…）食など子どもたちの食生活の乱れを問題視し、中教審「幼児期からの心の教育の在り方について」答申の2章で「もう一度、家庭を見直そう」として家庭の役割の重要性を提言している。

#### 食育の担い手はだれか

しかしながら、学校に注目が集まったのは、2002年中教審答申「子どもの体力向上のための総

合的な方策について」の「食に関する指導の充実」という項目で、「食に関する知識を教えるだけではなく、知識を望ましい食習慣の形成に結び付けられるような実践的な態度の育成が必要である」と指摘されてからである。なお、学校給食においては、「食に関する指導の『生きた教材』として活用し、栄養バランスのとれた食事内容などについて、体験を通して学ばせることも重要である」とし、学校栄養職員の積極的な活用によって、より専門的な視点からの食教育の提案がなされている。

さらに2004年の中教審答申「食に関する指導体制の整備について」では「学校における食に関する指導」に重心を一段と移し、「食に関する問題は、言うまでもなく家庭が中心となって担うものである」としながらも、「今後は学校が子どもの食について家庭に助言や働きかけを行うこと」を提言している。

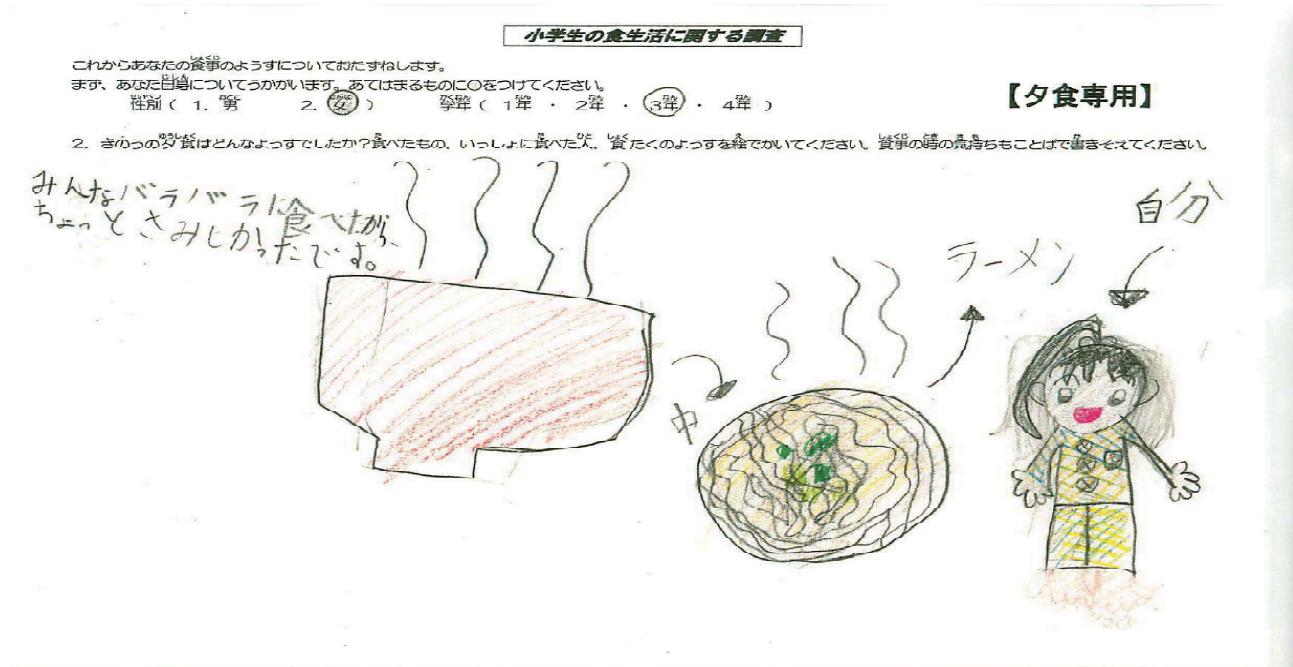
では、いったいだれが「子どもの食について家庭に助言や働きかけを行う」のだろうか。もちろん、上記の一連の流れの目玉として栄養教諭の法制化が行われたが、その数は全国でもまだ千人に届いていない状況（2007年9月末時点で45道府県に986人が配置）である。また、食育は「栄養」教育とも異なることに鑑みれば、専科の家庭科教員や学校栄養職員ではなく、日常的に学級の児童やその保護者（家庭）と関わりをもっている学級担任こそがその結節点としてもっと積極的に関わるべきがあるだろう。

#### 子どもたちの「食」の現実

ともすれば、学校現場は多忙なあまり、押し寄せてくる新たな教育課題（○○教育）を専門家にGT等としてアウトソーシングしてしまうきらいがある（実際、食育も大手企業が積極的に参入）。深刻化する教育現場の多忙さは別の手立てで解決策を探すこととし、ここでは学級担任（教諭）が真正面からこの抜き差しならない問題にがっぷり四つに組む場合、その土俵として特別活動（学級活動）を使用する可能性を模索することとした。

下の絵をご覧いただきたい。これは県内のある小学校児童の夕ご飯の様子である。一人でラーメンをする夕ご飯。調査対象日は日曜日であったにもかかわらず、家族のみながバラバラに食事をとるという孤食に、ラーメン一杯のみという粉食、もしかすると食べる内容も異なる個食だったかも知れない。これは決してレアケースでなく、一人でテレビを見ながら鍋をついた子、家族みんなでハンバーガー屋に「外食」に行った子、月曜日の朝ご飯はおまんじゅうだけだった子、等々。こうした食生活の乱れは直接、昼間の授業・学校生

活への意欲や活力に影響を与えるので無視するわけにもいかない。むしろ、「学力問題」(とりわけ底上げ)の最後の一線は、この食事も含めた家庭の「教育力」にどう働きかけるかにかかっていると言われる。子どもの連絡帳やプリント類を確認しないこと、宿題につきあわないこと、叱るべきところで叱らないこと、そして栄養を考慮した食事を与えないことも、軽微なネグレクト(育児放棄)と呼べるようにも思う。こうした問題は大なり小なりどこの学校・学級でも抱えている課題であり、そこで本研究の出番である。



### 3クラスの実践の意義

まず1年生の後藤学級では、本文中にも紹介されていたように、「うるさいから」「おなかがいたくなるから」といった理由で「ひと(他人)とたべるのがきらい」という子が3人(9%)もいたという現実から出発している。この抽出児たちが交流給食(及びその準備のための一連の学級活動)を通じて「楽しい」に劇的に変化するさまは見事である。小学校では1年生と6年生、2年生と5年生、3年生と4年生のようなサイコロの表裏でたして7になる組み合わせを、比較的よく見かける。とりわけ1年生は入学時から最上級生である

6年生にお世話になることが多いので関わりも深いが、5つも違う学年と組織的に同席することは中等教育学校にでも行かない限りこの時期をおいて他にない。もう二度とない貴重な瞬間の感謝の会なのである。「本時」の学級活動(1)では頼もしいまでに6年生が各班をリードしてくれ、教師とは違う角度から「ナナメ」の目線で1年生の児童を見守ってくれ、TTとも異なるメンター機能の重要性を実感させてくれる交流活動であった。

つぎに2年生の原学級は、オープンスペースを活用して、まずは隣の2組さんとの交流活動であった。学級集会ならぬ学年集会ということで、司

会進行役の子どもたちも普段とは勝手がちがう。クラスの雰囲気もずいぶん違う。「交流」の醍醐味は実はここにある。多文化的な背景を有する児童が多いこの学校では「異文化交流」が日頃より盛んなはずであるが、こうした「内なる」異文化との接触によるコンフリクト（葛藤）は新たな価値を創造する可能性を秘めている。また芋作りでお世話になった地域の方とのビデオレターでの「交流」では、「ありがとう」の感謝の言葉の向こうに、会ったことのない〇〇さんへの思いを馳せることができ可能となった。「一本のバナナから」の実践のように、私たちの口に食べ物が入るまでには多くの人々の汗（と涙）が込められていることを思い知ることもできており、このことは食育（食に関する指導）ではきわめて重要な（食物の生産等にかかる人々へ感謝する心をもつ）実践であったと言えよう。

最後に3年生の梅山学級では、福岡県内でまだ40名しか発令されていない栄養教諭の先生をお招きしての学級活動(2)に取り組まれた。学級活動(1)でも十分にこなせる活発なこのクラスで、敢えて「学級指導」にチャレンジされたことへ敬意を表したい。学活(1)ならば、形式的（視覚的）にも特活であることは示しやすいが、学活(2)の場合は給食に関わる指導が予定されているとはいえ、特活で行うことの必然性ないし固有性を示すのはなかなかむずかしい。栄養教諭という専門家との交流を通して、お米のよさをじっくり見つめ直すために、G Tとしての「情報提供者」役割を超えて、栄養教諭としての「評価者」役割にも期待しての(2)だったのだろう。さらに特筆すべきは、事後の活動では保護者との交流にまで拡大していることである。「米粒を食べたら太る」とか「ごはんは残してもまずおかずを」といった言説は家庭で多くみられるからこそ、ここに踏み込んだ本実践は食育を学校（学級）で行う最大の目的が果たされているのである。

## 残された研究課題

以上のように、3本の教育実践はたいへん魅力的であった。子どもたちの変化も事後に随所に見受けられる。一例を挙げれば、「給食の先生」ではなく「〇〇先生」、芋作りのお世話をしてくれている「〇〇さん」と名前が使われている点である。学校内においてもともすれば、「事務の先生」などとノンティーチングスタッフは本来の名前で呼ばれず、カオなしとなってアイデンティティクライシスに陥るといわれる（カオナシが登場する「千と千尋の神隠し」という映画それ自体が主人公の千尋が湯ばあばに名前を奪われて元の世界に戻れなくなるというアイデンティティ・クライシスがモチーフだったほど本来の名前で呼ばれるることは重要なのである）なか、子どもたちのこうした変化はまさに他者意識・相手意識の芽生えが実感できる特筆すべき変化である。

ただ、こうした子どもたちの変化の具体的検証方法のあり方など、殊に「研究」としてみた場合、まだいくつかの課題を残している。

まず、「特別活動」として上記のテーマを行う意義はどこにあったのか—「食」というきわめて個人的な行為を集団活動としての取り組みにいかに拡げていくか。テーマ設定と、そのための場の必然性をもっと誰もが納得できるレベルまで説きほぐさなければならないだろう。決して並列していない6つの「食に関する指導の目標」（食事の重要性、感謝の心、社会性（人間関係形成能力）、食文化、心身の健康、食品を選択する能力）に対し、特別活動は、どの要素に深く切り込むことが可能で、またその跳ね返りがどのようなかたちで特別活動ないし学級活動に還元されるかを明確にする必要がある。このことはキャリア教育を取り扱った過去2年間も同様の構えであったし、言わずもがなではあるが、今回も食育のための特別活動ではないことは改めて強調しておきたい。

また、今回の研究のキーワードないし、サブテーマは「交流」であったが、そもそも何のために交流するか。そのための交流相手である他者をどう設定するのか。このあたりの原理的確認も必要

である。KYという言葉が流行ったように、和を重視するこの社会では、従来は異質情報はノイズ（雑音）として切り捨てられ、異視線は疎まれがちであったが、こうした異文化をもつ他者との「交流」にこそ新しい価値を創造する契機となる可能性を秘めている。もちろん異なる価値観とのコンフリクト（葛藤）もあるが、こうした揺さぶりがまた重要なのである。6年生、他クラス、地域の方、それぞれの願いは異なり、予定調和にすすまないからこそ、そこに紛争処理的技法の習得が芽生える余地もある。

その他、学級活動において食に関する知識・理解はどのように位置づけられ、自己決定と事後の実践力はどこまで求められるか、等々もまだ未解決の課題である。もちろん、他教科との「交流」も重ねながら、食文化、心身の健康、食品を選択する能力といった今回関わりの希薄であった要素との関係も整理する必要があるだろう。かつて実践的社会性についてこのG研特別活動研究室で取り上げたことがある（平成16年度研究紀要参照）が、この実践的社会性の目指す先には「社会力」（門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、2003年）という価値多元化社会で生きる子どもたちに求められる資質・力量がある。門脇氏の言う「社会力」はいわば社会変革力のことであり、食育は実はここに結びつく大きな社会カイゼン「世直し」運動なのである。冒頭の児童画のような子どもたちの食環境の厳しい現実、見えない恐怖としての食の安全性の問題など、保護者（家庭）や社会との「交流」をはかりながらラジカルに研究開発することも本テーマの今後の課題なのであろう。

（九州大学大学院 准教授 元兼正浩）

## 引用文献

- |         |                          |         |
|---------|--------------------------|---------|
| 1 文部科学省 | 食に関する指導の手引               | (平成19年) |
| 2 文 部 省 | 小学校学習指導要領解説 特別活動編 東洋館出版社 | (平成11年) |

## 参考文献

- |                    |                       |         |
|--------------------|-----------------------|---------|
| 1 文 部 省            | 小学校学習指導要領解説 総則編 東京書籍  | (平成11年) |
| 2 宮川 八岐            | 特別活動で進める食育プラン集 明治図書   | (平成18年) |
| 3 福岡市教育センター        | 福岡市小学校評価事例集           |         |
| 4 福岡市教育委員会         | 教科等と関連付けた食育指導計画・実践事例集 | (平成19年) |
| 5 食農教育             | 2006年4月増刊号            | (平成18年) |
| 6 食農教育             | 2007年4月増刊号            | (平成19年) |
| 7 指導と評価            | 2006年10月              | (平成18年) |
| 8 特別活動研究I          | 2007年1月号              | (平成19年) |
| 9 福岡市教育センター特別活動研究室 |                       |         |

### 平成16年度研究紀要

自発的、自治的な活動を通して実践的な社会性を育てる特別活動の在り方 (平成16年)

- 10 福岡市教育センター特別活動研究室

### 平成17年度研究紀要 小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割

－「4つの能力」の育成を軸とした活動モデルの開発を通して－ (平成17年)

- 11 福岡市教育センター特別活動研究室

### 平成18年度研究紀要 小学校のキャリア教育に果たす特別活動の役割

－「4つの能力」の能力につながる学級活動(1)の実践を通して－ (平成18年)

- 12 福岡市小学校特別活動研究委員会 平成17年度 特別活動研究紀要 (平成17年)

- 13 福岡市小学校特別活動研究委員会 平成18年度 特別活動研究紀要 (平成18年)

---

## 共同研究者

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 元 兼 正 浩 | (九州大学大学院准教授)      |
| 豊 原 輝 昭 | (主任指導主事)          |
| 後 藤 美 香 | (柏原小学校教諭)         |
| 原 忠 孝   | (香椎浜小学校教諭)        |
|         | 梅 山 直 子 (有田小学校教諭) |

平成20年度  
研究紀要  
(第802号)

G 11-01

## 豊かな人間性や社会性を身に付けた児童を 育てる特別活動の役割

—食に関する交流活動を生かした特別活動の実践を通して—

本研究室では、児童に豊かな人間性や社会性を身に付けさせるために、  
食育の観点を踏まえた目指す児童の姿を設定し、家庭・地域との交流活動  
を生かした特別活動における食育を実践した。

その結果、食環境を整えていこうとする実践的な態度や、他者と協調する  
姿などが見られ、特別活動における食育の果たす役割が明らかになっ  
た。

## 目 次

### 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

1	主題設定の理由	125
(1)	社会的背景から	
(2)	学校教育における食の重要性	
(3)	新学習指導要領特別活動における食育の内容と観点から	
(4)	昨年度の研究との関連から	
2	研究の基本的な考え方	126
(1)	豊かな人間性や社会性とは	
(2)	交流活動とは	
3	研究の目標	127
4	研究の仮説	127
5	研究の内容と方法	127

### 第Ⅱ章 食に関する交流活動を生かした特別活動の実践例

1	家庭との交流活動を生かした学級活動（2）の実践事例とその考察 題材名 「めざせ！元気もりもりタベルンジャー」 (望ましい食習慣の形成) (第2学年)	129
2	家庭との交流活動を生かした学級活動（1）学級集会の実践事例とその考察 学級集会「何でもチャレンジ、笑顔いっぱい集会」 (第5学年)	134
3	地域・家庭との交流活動を生かした学級活動（1） 学級集会の実践事例とその考察 学級集会「手作りおやつ集会」 (第6学年)	139

### 第Ⅲ章 研究のまとめ

1	特別活動における食育の役割 (1) 家庭・地域との交流活動の有効性 (2) 豊かな人間性や社会性の育成との関連	144
2	今後の課題	145
3	研究のコメント	145

### 引用・参考文献

## 第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

### 1 主題設定の理由

#### (1) 社会的背景から

近年、都市化、少子高齢化、核家族化が進み、児童をとりまく環境は日々変化している。情報化、機械化の進展は、児童の生活体験や自然体験の不足につながり、家庭や地域社会において、社会性を身に付ける場を減少させている一つの要因となっている。

食環境においても同様で、例えば、近年、様々な「こ食」が問題視されている。核家族化や共働きの家庭の増加、少子化等の影響は、児童の生活リズムに変化をもたらした。夜型中心の生活や朝に余裕がないなどの理由で、家族揃って食事をとれない「孤食」が増えている。また、家族揃って食事をとっても、別々のものを食べる「個食」が生じ、同じものを食べるという共有感が生まれなくなっている。さらに、「個食」が進み、いつも同じものや好きなものしか食べない「固食」の傾向も高まっている。このような食環境の変化は、食べ物を粗末にしたり、食事の作法を軽視したりする風潮につながっているのではないかと考える。

#### (2) 学校教育における食育の重要性から

福岡市教育委員会が平成16年に行った「朝食を食べている児童生徒数」の調査では、小・中・高校生の割合は、小学生が81.2%，中学生では77.9%，高校生では73.6%と、学年が上がるにつれて、喫食率は下がっていくことが明らかになった。また、20代では、男性は2人に1人、女性では3人に1人が朝食を食べていない。つまり成人になっても、欠食状況が改善されるわけではないという結果が出た。また、食事の栄養バランスへの配慮が十分でないという結果もわかった。以上のような結果から、福岡市では家庭には食に関する啓発を図ること、児童生徒には食の大切さに

対する認識を深めるような教育を展開すること、成人に対しては、自己管理能力をつけることを課題として挙げた。

同様に、社会全体で食を見直そうという動きから平成17年6月、国は食育を重要課題ととらえ、国民的な運動として推進していくため「食育基本法」を制定した。

また、同法の規定に基づき、平成18年には「食育推進基本計画」、平成19年には文部科学省から「食に関する指導の手引き」が発行され、福岡市学校教育指導の重点にも、児童生徒の食生活の実態を把握して、教職員の共通理解と指導体制の整備を図り、食育を学校教育全体で取り組むことが重要であると示された。そのために各学校で食育指導全体計画を作成し継続的・系統的な指導を実践するとともに、家庭・地域と連携した取組を行うことが重要であると述べている。

#### (3) 新学習指導要領特別活動における食育の内容と観点から

学校教育において、よりよい人間関係を築くための社会的スキルの形成が特別活動に大きく期待されている。

新学習指導要領では「人間関係」や「自己的生き方についての考え方を深め、自己を生かす能力を養う」ことを新たな目標に加えている。また食育の充実に資する観点から「学校給食と望ましい食習慣の形成」に「食育の観点を踏まえた」文言が新たに加えられた。特別活動では、「楽しく食事をすること、健康によい食事のとり方、給食時の清潔、食事環境の整備、自然への恩恵などへの感謝、食文化、食料事情など」の指導により、「望ましい食習慣の形成を図ること」をねらいとしている。

ここでいう「食育の観点」を、本研究室では文部科学省の「食に関する指導の手引き」における食に関する指導目標(表-1)ととらえる。

表-1 食に関する指導の目標（食育の観点）

- 食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。 (食事の重要性)
- 心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し自ら管理していく能力を身に付ける。 (心身の健康)
- 正しい知識・情報に基づいて、食物の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身に付ける。 (食品を選択する能力)
- 食物を大事にし、食物の生産等にかかる人々へ感謝する心をもつ。 (感謝の心)
- 食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける。 (社会性)
- 各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心をもつ。 (食文化)

#### (4) 昨年度の研究との関連から

本研究室では、昨年度、交流活動を生かした学級活動(1)と(2)の実践を通して、食に関する特別活動の指導の在り方を探ってきた。交流活動の相手を他クラスの児童や異学年の児童、栄養教諭などとの交流活動を取り入れ食に関する指導を行ったところ、その成果として、望ましい食習慣の1つである社会性の育成に有効であることが分かった。例えば、実践前は「給食委員会のお兄ちゃんやお姉ちゃん」「栄養士の先生」「給食の先生」と呼んでいたのが、実践後「〇〇さん」「〇〇先生」と名前で呼ぶという変化が見られたことなどが挙げられる。このように、交流活動を通した実践が、特別活動が目指す児童を育成すると同時に、食育に大きな役割を果たすことが分かった。

その一方、家庭の「教育力」にどう働きかけるかという課題が残った。家庭の協力がないことには、児童に食育を行ったとしても、

食生活を変えていく効果は得にくい効果があった。

その一方、家庭の「教育力」にどう働きかけるかという課題が残った。家庭の協力がないことには、児童に食育を行ったとしても、継続的な効果は得にくいという課題が残った。児童は1日3食のうち2食は家庭でとる。そのため、児童の食に対する考え方は家族構成や嗜好の影響を受ける。そのため家庭の協力や理解を得ることができなければ、一過性の学習で終わってしまう可能性がある。

そこで、今年度は学校内の実践に留まらず、家庭や地域に働きかけを積極的に行うことが必要だと考えた。日常的に学級の児童やその家庭と関わりをもつ学級担任が中心となって実践すれば、児童の実態に即した実践が可能であり、家庭とも協力体制がとりやすい。また家庭や地域との交流は児童同士、親同士、地域の人同士など新たな人間関係を築いたり、児童の実践への意欲を高める効果が期待できる。このように、食という個人的行為を集団に広げ、学校と家庭や地域で見守ることで、児童の豊かな人間性や社会性が育まれると考える。

以上のような考えのもと、今年度は、特別活動が目指す豊かな人間性や社会性を培うことをねらいとし、家庭・地域との交流活動を生かした特別活動における食育の役割を模索したい。

## 2 研究の基本的な考え方

### (1) 豊かな人間性や社会性とは

一般に特別活動でいう「豊かな人間性」とは、人として大切な態度をさす。言い換えると、地域の一員としての自覚や誇りをもち、変化の激しい社会においても、自己実現を図りながら適応していく力、自己指導能力といえる。また、「豊かな社会性」とは、人として大切にしたい心をさしている。言い換えると自らを律しつつ、他人とともに協調し、他

人を思いやる心や感動する心といえる。

そこで本研究室では、食育における「豊かな人間性」と「豊かな社会性」を次のようにとらえた。「豊かな人間性」をよりよい食環境を整えていくこうとする実践的な態度、「豊かな社会性」を食を通して他者を理解したり、人間関係を築いたりする能力とした。豊かな人間性や社会性を育むためには、他者とかかわりながら、新たな価値観や考え方を見いだし、自己決定したことを実践する能力を養うことが大切だと考える。

## (2) 食に関する交流活動とは

交流活動とは、本研究室では、「望ましい食習慣を身に付けるために、相手意識・目的意識・課題意識を明確にもって、進んで他者にかかわる活動」ととらえる。

他者との交流活動の「他者」とは、主に学級や同学年の児童、異学年の児童、地域の方々、先生や学校職員（栄養教諭など）、保護者、施設などで働く人々などが考えられる。

また、交流活動の内容としては、話し合い、インタビュー、講話、○○会などのイベント、共同作業などが考えられる。この交流活動は、児童の活動内容や交流相手に応じて、事前・事中・事後に適宜仕組む。

## 3 研究の目標

家庭・地域との交流活動を生かした特別活動の実践を通して、豊かな人間性や社会性を身に付けた児童を育てる特別活動における食育の果たす役割を明らかにする。

## 4 研究の仮説

家庭・地域との交流活動を生かした特別活動における食育を実践すれば、児童が望ましい食習慣を身に付け、豊かな人間性や社会性を育むことができるであろう。

## 5 研究の内容と方法

家庭・地域との交流活動を生かした特別活動

における食育の果たす役割を明らかにする。

- 児童の食に関するアンケートを実施し、実態を把握する。
- 活動の目的と学級の実態をもとに、どの食育の観点と関連があるのか探る。
- 食育の観点を踏まえた活動題や題材を設定する。
- 相手意識・目的意識・課題意識をもたせた交流活動を開発する。
- 食に関する指導の目標を、議題や題材に応じて目指す児童の姿として具体化する。
- 検証授業を通して、児童の具体的な姿を記録する。
- 検証授業での具体的な児童の姿と、食に関する目指す児童の姿(指導目標)との関連を比較分析する。
- 比較分析した結果をもとに特別活動における食育の果たす役割について考察する。

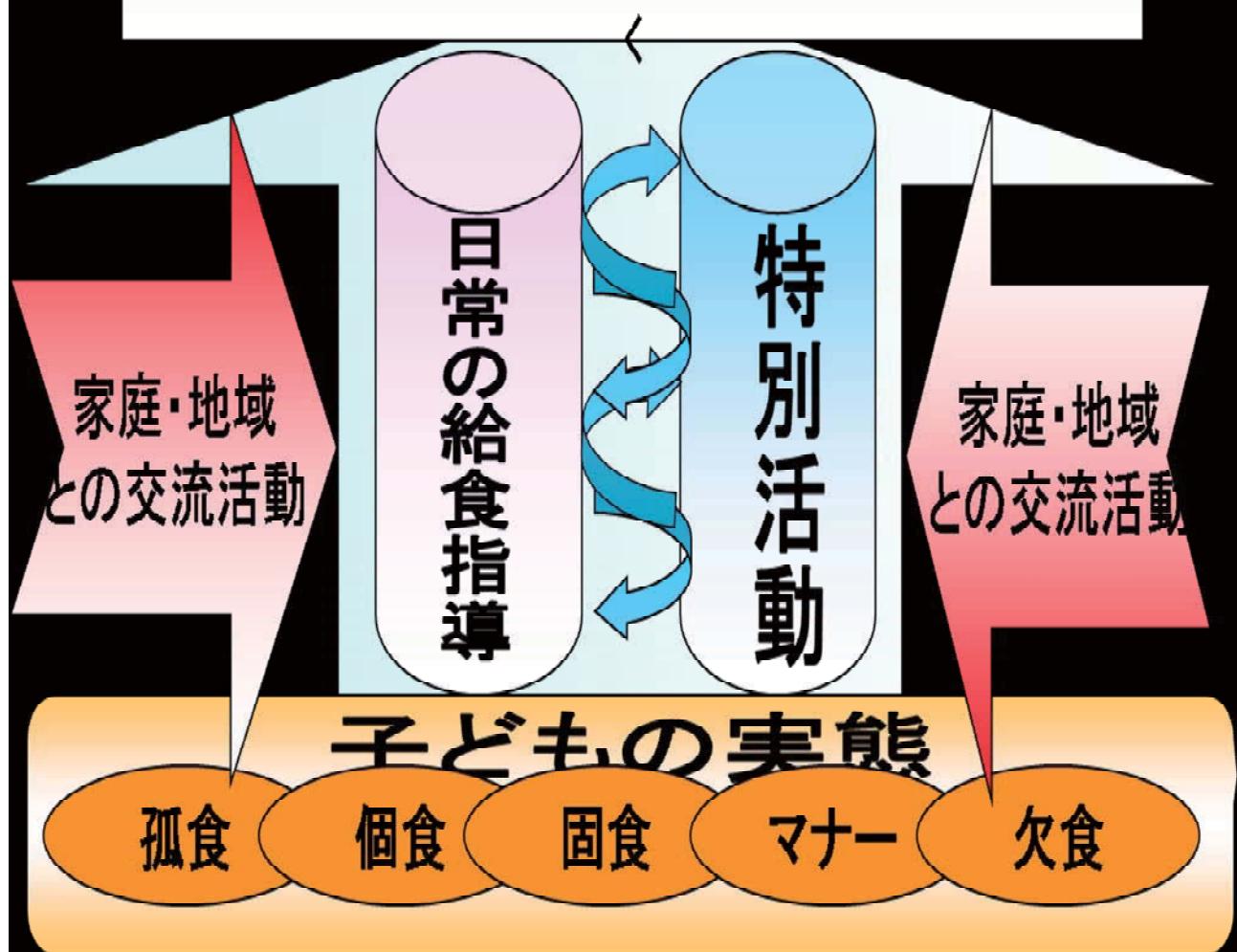
## 6 研究構想図

図-1 (P特-4)

特別活動のめざす  
豊かな人間性・社会性

望ましい食習慣の形成

食事の重要性・心身の健康・食品を選択する能力  
感謝の心・社会性・食文化



図－1 研究構想図

## 第Ⅱ章 食に関する交流活動を生かした特別活動の実践

### 1 家庭との交流活動を生かした学級活動(2)の実践事例とその考察

#### (1) 題材名

「めざせ！元気もりもりタベルンジャー」  
(望ましい食習慣の形成) (第2学年)

#### (2) 目標

- 望ましい食慣について関心をもち、話合いに参加することができる。  
(関心・意欲・態度)
- 自分の食の課題に気付き、課題に応じた体によい食べ方を考えることができる。  
(思考・判断)
- 家庭との交流活動を生かして、体によい食べ方の具体的な工夫について、自己決定することができる。  
(技能・表現)
- 体によい食べ方について、理解することができる。  
(知識・理解)

#### (3) 本題材の意義と食に関する指導との関連

本事例は家庭との交流活動を生かした学級活動(2)の教育実践を通して、豊かな人間性や社会性を身に付けた児童を育てる特別活動における食育の役割を探ろうとしたものである。

本学級の児童は給食時間を楽しみにしており、食事中も笑顔が絶えない。5月に食に関するアンケートを行ったところ「給食は好きですか。」という問い合わせに対し、「好き」と答えた児童は89%だった。その理由は「友達と食べるとおいしい。お話しながら食べるのが楽しい。」「好きな献立がある。」が主だった。「嫌い」と答えた11%の児童の理由は、「周りがうるさくて食べるのに集中できない。」「嫌いなおかずが出る。」などだった。また「自分の食べ方でなおしたいところはありますか。」という問い合わせに対しては、9割以上の児童が「好き嫌いが多い。」「早食

い。」「噛まずに食べる。」「挨拶を忘れる。」などの課題があり、極端な偏食や小食の児童が2割近くいることも明らかになった。給食の完食率は低く、牛乳以外は毎日残滓が出る。少しでも努力して食べよう、感謝しながら食べようとする児童も少ない。

保護者に実施したアンケートでは9割以上の家庭が「食の課題がある」と答えており、その内容は「食事中の会話が少ない、ファーストフード中心の食事や偏った食材中心の食事、」などを挙げていた。

そこで家庭との交流活動を生かし、児童に食を通した親の思いに気付かせるとともに、親子で食を見直すきっかけにしたい。また、今回の実践は、学校と家庭の両方で取り組むことが可能であり、保護者の励ましが児童の意欲をさらに高めることにつながると考える。さらに、自己決定した食べ方をふり返ったり、遠足のお弁当づくりに取り組んだりすることで、児童が食べることの大切さや楽しさを感じ、親への感謝の心をもつことが期待できる。このように「食事の重要性」や「感謝の心」などの望ましい食習慣を身に付けながら、食を通した豊かな人間性や社会性を身に付けることが期待できる点から、本活動は意義があると考える。

本題材では、身に付けさせたい望ましい食習慣の形成につながる児童を、次のように設定した(表-2)。

表-2 本活動での食に関する指導の目標

- |  |          |
|--|----------|
| ○ なんでも食べることが体によいことを知り、好き嫌いをなくすと努力することができる。   | (食事の重要性) |
| ○ 食には、つくり手の願いや思いが込められていることを知り、感謝して食べることができる。 | (感謝の心)   |
| ○ 家族や友達と協力して、楽しく食事をすることができる。                 | (社会性)    |

#### (4) 実践内容

##### ア 事前

###### (ア) 実態調査を行う

まず、児童と家庭の食への関心や食環境などの実態を把握するために、アンケートをとる。次に、児童が食の課題を身近なものとしてとらえられるように「給食の残滓がどれぐらい出て、どんな献立の時に多いのか。」を2週間記録する(資料-1)。さらに児童が自分の食べ方を意識できるように、鏡を見ながら給食を食べる。

##### イ 事中(本時) (資料-2)

###### (ア) 家庭を中心に交流活動をする

事中では、食の課題を克服するための具体的な食べ方を児童が自己決定できるように、家庭との交流活動を中心に保護者や友達との交流活動を取り入れる。交流活動では、食に関する疑問について保護者に質問したり、食に込められた親の願いや思いなどについて話を聞いたりする。

#### (イ) 自己決定をする

自分の課題を克服するための具体的な食べ方を自己決定する。自己決定した食べ方をもとに、決めた食べ方を実践するための具体的な工夫について自己決定ができるよう、課題別グループで話し合いながら食べ方のアイデアを考える。

資料-1 残滓の量を記録する児童



資料-2 本時の展開

学習活動と内容	指導上の留意点(○)評価(●)
1 アンケートの結果をふり返り、本時の学習のめあてを知る。  めあて 自分の食べ方をふりかえって、体によい食べ方を考えよう。	○ アンケートの結果をグラフや資料にしてわかりやすく提示する。 ● 自分たちの食の課題に気付くことができる。 (関心・意欲・態度)
2 担任から野菜の3つのはたらきについて話を聞く。 ○ 骨や歯、皮膚など体をつくる手助けをする。(ツクルンジャー) ○ 風邪などの病気から体を守る。(マモルンジャー) ○ 腸の中の掃除をし、体の中をきれいにする。(ピカリーンジャー)	○ いろいろな種類の野菜を摂取することが体に大切であることをおさえる。 ● 野菜の3つのはたらきについて知る。 (知識・理解)
3 保護者から話を聞いたり、インタビューしたりして交流する。 ○ 食にまつわるエピソードや食に込められた親の願いや思い	○ 食には栄養だけでなく、作り手の願いや思いが込められており、様々な工夫や努力があることに児童が気付くようにする。 ○ 自分の課題を元に、課題を解決するための食べ方の工夫について話し合わせる。
4 自分の食べ方をふり返り、自分の課題に応じた体によい食べ方とそれを実践するための具体的な工夫について考える。 (1) 自分の課題に応じた体によい食べ方を決める。 ○ バランスよく食べる・よく噛んで食べる・味わって食べる (2) 決めた食べ方を実践するための具体的な工夫について、課題別のグループで集まりアイデアを話し合う。 (予想される食べ方の工夫の例) ○ ・食べ物の色に気を付ける・順番食べをする・食べる量を決める ・嫌いな物は小さくして食べる・好きな物と一緒に食べる ・嫌いなおかずから食べる ・あごをよく動かす・噛む回数を数える・味が変わるまで噛む ・時間をかけてゆっくり食べる・あごの運動をしてから食べる ・あごや口がきちんと動いているかどうか、鏡を見て確かめながら食べる ・目を閉じて集中して食べる・耳をふさいで何回噛んだか数える ・笑顔で食べる・作った人の気持ちを考えて食べる ・お母さんや給食室の先生の顔を想像しながら食べる ・感謝しながら食べる・味を比べながら食べる	○ 課題を焦点化し、3つのグループ(バランスよく食べる・よく噛んで食べる・味わって食べる)にまとめる。 ○ 食べ方の具体的な工夫について話し合わせる。 ● 自分の食の課題に気付き、それを解決するための食べ方について話し合うことができる。 (技能・表現)
5 親からの応援レターを読み、自分が気を付ける体によい食べ方とその工夫について自己決定し、発表する。	● 自分の食の課題に応じた自己決定をすることができる。 (思考・判断)

## ウ 事後

- (ア) 課題を克服するために、自己決定した食べ方を、学校と家庭での食事の両方で実践する。児童が達成感を味わえるように、自分の課題がどれくらい改善したか2週間記録し、実践前後の食べ方の変化を比べる。
- (イ) 親子で遠足のお弁当づくりに取り組む。
- (ウ) 残滓をなくそうキャンペーンを行う。

給食係の児童を中心に、残滓ゼロキャンペーンを行う。具体的な取組として目指せタベルンジャーカレンダーに残滓の量を記録したり、ペロリンカードで残滓の量や食器の返却の仕方を確認したりする。

## (5) 考察

望ましい食習慣の形成と豊かな人間性や社会性の育成に関わる交流活動の有効性について、考察を述べる。

### ア 事前の活動

残滓調べの結果から、残滓が多いのは、煮物や和え物の献立の時に多いことがわかった。しかも、このような献立の時の食べ方は好きな献立と比べると、早食いや遊び食べなどをしていることが多いことに児童が気付いた。そこで自分の食べ方をより意識できるように、鏡を見ながら食べたり友達の食べ方と比べながら食べたりした。児童は「○○さんと比べて私はあまり噛んでいない。」など、気付いたことを話し合った(資料－3)。

資料－3 鏡で食べ方をチェックしている児童



このような活動を仕組んだことで、児童は自分の食べ方のどんな点が問題なのか、気付くことができ、課題意識をもつことができた。交流活動を通して残滓の量が気になるようになり、「どうしたら残滓をなくせるのかな。」「給食の先生はどんな気持ちだろう。」など目的や相手を意識した発言も聞かれるようになった。これらの児童の発言は食に関する指導目標(表－4)の「自分の食べ方を見つめ直し、望ましい食習慣を形成しようと努力する(食事の重要性)」児童の姿につながりがあると考える。

### イ 事中の活動

交流活動では、児童が保護者に食に関する疑問を質問したり食にまつわる話を聞いりした。例えばわが子が食物アレルギーのため食事に細心の注意を払っているという話や、食事を作る時に考えていることなどについて話を聞き、交流した(資料－4)。

資料－4 保護者と交流している児童の様子



栄養面の話だけではなく、親の願いや思いが児童に伝わるような交流活動だったので、児童が自分の課題や活動の目的を意識することができた。また、いろいろな家庭の食環境や保護者の話や考え方を聞いたことで、食に対して今までとは違う側面から自分の課題を見つめることができた。

課題を解決するための具体的な食べ方についてアイデアを出し合う交流活動でも、親の願いや思いを感じながら活発に意見を

出し合う児童の姿が見られた（資料－5）。

資料－5 課題別グループでアイデアを話し合う児童



このように保護者の思いや願いを感じる交流活動を仕組んだことで、児童の意識に変化が見られた。実態調査で「嫌いな食べ物は箸でつまんで下に落とす。おかずは好きなものしか食べない。」「人と食べるとうるさい。集中して食べられない。」「家では誰も喋らない。いつもシーン。早く食べ終わる。」と答えていた児童たちに次のような自己決定が見られた。「私がおなかにいる時、私のためにお母さんは好き嫌いを治したことを聞いて嬉しくなりました。今度は私がお母さんのために好き嫌いを治します。食べ物の色に気を付けます。」「食事には栄養とお母さんの気持ちが入っていることが分かりました。早食いはやめてお母さんの顔を見ながら味わって食べるようにします。」「楽しく食べると体も気持ちにも、いいことが分かりました。今日から二十回噛んで味を考えながら感謝して食べます。」など、課題意識・相手意識・目的意識をもった自己決定をすることができた（資料－6）（資料－7）。

これらの発言は、家庭との交流によって親の願いや思いを知り愛情を感じたことで、感謝の心をもつことができた結果だと考える。この姿は食に関する指導目標（表－4）の「食生活は食に関わる人々の工夫や努力、愛情に支えられていることを知り感謝して

食べることができる。（感謝の心）」や「家族や友達と協力して楽しく食事をすることができる。（社会性）」児童の姿につながりがあると考える。

資料－6 課題に応じて自分の食べ方を決める児童



資料－7 決めた食べ方を実践するための具体的な工夫



#### ウ 事後の活動

事後の活動では、家庭との交流を中心に行った。学校では児童全員がタベルンジャーになるという共通の目標と、自分の課題を克服するために課題解決するという個人の目標をもって取り組んだ。すると次第に食事中の会話や食べ方に変化が見られるようになった。例えばパンの味の違いに気付いたり、お皿にご飯粒を残さないようにきれいに食べたりする姿が見られ、給食時間が和やかな雰囲気になった。（資料－8）。12月に再度実施したアンケートでは全員が給食時間を「好き」と答え、6割の児童が課題を解決できたと答えている。残りの4割

の児童は課題を十分解決できなかったと答えた。この児童の中には「最初の課題は解決できたが新たな課題に気付いたから課題はまだある。」と答えた児童が2割いた。これらの姿は食に関する指導の目標の一つである「好き嫌いをせず何でも食べることが体によいことを知り、望ましい食習慣を形成しようと努力しようとする。(食事の重要性)」につながると考える。アンケートで「嫌いなおかずは床に落とす。」と書き、決まった食材しか口にしなかった児童は今では箸をつけるようになった。訳を尋ねると「友達が食べる方法と一緒にいっぱい考えてくれたから。家でもほめられたのが嬉しかったから。」と答えた。家庭や友達との交流を通して、進んで課題解決に取り組んだ姿は豊かな人間性につながったと考える。

資料－8 課題別グループで給食を食べる児童



遠足のお弁当づくりでは計画書づくりから買い物、料理の過程を親子で取り組んだ。実践後の感想には「初めてで大変だったけど楽しかったです。お母さんは毎日、色どりや栄養に気を付けていることを知りました。ありがとう。」など、感謝の気持ちが綴られていた。家庭からも「食べることの大切さを子どもと一緒に改めて考えることができて良かったです。我が子が嫌いな食べ物を食べようと努力する姿に感心しました。」などの感想が寄せられた。これらの姿は食に関する指導の目標の一つである「食生活は食に関わる人々の工夫や努力、

愛情に支えられていることを知り感謝して食べることができる。(感謝の心) や「家族や友達と協力して楽しく食事をすることができる。(社会性)」につながると考える。

児童が自分で料理したこと、食の作り手に対する児童の意識に変化が見られるようになった。例えば苦手な食材を食べる姿や給食室の先生との会話する姿が増えた。食缶を返却する際に、給食室の先生に目を見て「ごちそうさま。」を言ったり「今日のおかずおいしかったです。」など一言感想を添えたりする姿が見られるようになつた。給食の完食率も上がり、おかずの残滓が出たのは実践後2日のみである。児童も自分たちの変容を感じ取っているようで、給食係がペロリンカードで完食をお祝いし全員で拍手することを毎日楽しみにしている。(資料－9)。このように、感謝の気持ちをもちながら人との関わる姿は、豊かな社会性につながったと考える。

資料－9 ペロリンカードで祝う児童の様子



以上のような成果から、学級活動(2)の本授業の実践は、家庭との交流活動を通して食に関する望ましい食習慣の形成の中特に「食事の重要性」「社会性」「感謝の心」を身に付ける活動として有効であり、食を通して豊かな人間性や社会性を育むことができたのではないかと考える。

## 2 家庭との交流活動を生かした学級活動(1)

### 学級集会の実践事例とその考察

#### (1) 学級集会

「何でもチャレンジ、笑顔いっぱい集会」  
(第5学年)

#### (2) 目標

- 学校での学習や経験を生活に生かすことの交流を計画・実行することで達成感や満足感をもち、学年の友達や家族の大切さに気付くことができる。  
(関心・意欲・態度)
- 学級目標や提案理由、めあてと結びつけながら、よりよい考えを生み出すことができる。  
(思考・判断)
- 一人一人の創意工夫を生かしながら話し合い、自分の役割を果たして協力して学級集会ができる。  
(技能・表現)
- 学級集会の計画の立て方、役割がわかる。  
(知識・理解)

#### (3) 本議題の意義と食育との関連

本事例は、食に関する保護者との交流活動を生かした学級活動(1)の授業実践を通して、豊かな人間性や社会性を身に付けた児童を育てる特別活動の役割を探ろうとしたものである。

本学級では、1学期初めに食に関するアンケートを実施した。学校給食については、「給食は好きですか。」という質問に対して77%の児童が「大好き」「好き」と答えおり、理由の一位が「おいしい給食が食べられるから。」であった。しかし、「みんなと食べる。」「先生と食べる。」という人間関係を理由にあげている児童は少ない。

また、給食の完食率では、おかずは高いがパンやご飯は完食率が低いことがわかった。家庭では、朝ご飯を食べないことが多い児童が数名で固定化していることがわかった。

このような実態の中、学級目標「男女仲良く、何にでもチャレンジし、協力し合い笑顔いっぱいのクラス」の達成に近づくために、

2学期は学校で学習したことや経験したことの生活に生かしていくことを2学期の重点にした。そこで、学習係から「学習や経験を生かしたことの伝える集会がしたい。」と提案され、「何でもチャレンジ、笑顔いっぱい集会をしよう。」と議題化された。

5年生から家庭科が始まり、家庭でも調理をしている児童が見られたので、調理実践を交流することで、友達が作った料理に興味・関心をもつことができると考え、学級集会を計画した。

また、学級集会に保護者に参加してもらうことで、自分達は保護者に見守られていることに気付き、感謝の気持ちをもつことができると考える。そして、保護者との交流が、児童と保護者、保護者同士の人間関係が広がり、家庭での食育に変容が見られると考える。

さらに、夏休みのクッキング教室や自然教室での野外調理をふり返ることで、食べるものの喜びや楽しさを感じ、食事を通した社会性を身に付けるうえからも、本活動は重要な意義をもつものと考える。

そこで、本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣を次のように設定した。(表-3)

表-3 本活動での食に関する指導の目標

- |                                  |          |
|----------------------------------|----------|
| ○ 日常の食事に興味・関心をもつことができる。          | (食事の重要性) |
| ○ 食事に関わる人々や友達に感謝の気持ちをもつことができる。   | (感謝の心)   |
| ○ 楽しく食事をすることが、豊かな食生活につながることがわかる。 | (社会性)    |

#### (4) 実践内容

##### ア 事前

- (ア) 学級目標に近づくために、学級でできることを考え、カードに書く。(全員)
- 1学期の活動を振り返り、2学期の予定を知らせる。
- (イ) カードをもとに、議題を決定し、全員にお知らせする。(計画委員会)
- 「学級会で話し合う」「係にお願いす

- る」「先生にお願いする」「代表委員会のポストに入れる」の4つの視点で議題を選定させる。
- (ウ) 計画委員会を開き、めあてや話し合いの柱を決める。
- (エ) 実行委員をつくり、プログラムの原案を準備する(実行委員)。
- 1学期の集会のプログラムをもとに考えさせる。
- (オ) 自分の考えを個人ノートに書く。

- (全員)
- 学級目標とのつながりや活動を行うよさを考えさせる。
  - 提案理由やめあてに沿って、考えさせる。
- (カ) 学級会のリハーサルを行う。
- (計画委員会)
- 一人一人の役割をはっきりさせる。
- イ 事中
- 集会の内容について話し合う。(資料-10)

資料-10 話し合いの順序と指導上の留意点

話し合いの順序	指導上の留意点(○)評価(●)
1 はじめの言葉	○ 大きな声でいさつや紹介ができるようにリハーサルで声かけをしておく。
2 司会者の紹介	○ 児童の意見を一覧表にまとめ、司会グループにも渡しておく。
3 議題の確認と提案理由の説明	
○ 議題 何でもチャレンジ、笑顔いっぱい集会について話し合おう。	
○ 提案理由 今、一人一人が学習や経験を生かしているので、その報告会をして、何でもチャレンジし、笑顔いっぱいのクラスにしたいから。	○ 提案理由やめあての大切な部分にラインを引いて強調する。
4 話し合いのめあての確認 クラス全員でできる内容を付け加え、報告を盛り上げる報告の仕方を考えよう。	
5 先生の話	
6 話合い 柱1:プログラムについて	○ 提案理由、めあてに沿った話し合いになるように、提案理由とめあてを再度確認する。
柱2:報告の仕方について	○ 事前に、学級会個人ノートに考えを書かせる。発表への意欲をもたせるために、コメントを付けるなど賞賛する。 ○ 提案理由やめあてをもとに、原案の付加修正を行う。
7 話合いの振り返り	● 自分の考えをわかりやすく説明することができる。(技能・表現) ● 学級目標に近づくために、みんなで取り組めるプログラムを考えている。(思考・判断)
8 先生の話	
9 おわりの言葉	○ 黒板記録の児童にはっきりと大きな声で言うようにリハーサルで声をかけておく。 ○ 実践に向けて意欲を高めるために、事後の活動の流れを確認する。

## ウ 事後

- (ア) 学校での学習や経験をどのように生かしたかアンケートをとり、グループ分けをする。

- (イ) 役割分担をし、集会を準備する。
- (ウ) 「何でもチャレンジ、笑顔いっぱい集会」を開く。(本時)(資料-11)
- (エ) 活動を振り返る。

資料-11 本時の展開

学級集会活動	指導上の留意点(○) 評価(●)
1 はじめの言葉を言う。	○ 実行委員を組織し、リハーサルを行う。大きな声で言えるようにリハーサルで助言をしておく。
2 先生の話を聞く。	○ 集会への経緯や児童の取り組みを確認する。また保護者の参加を知らせる。
3 クラスの歌を歌う。	○ 朝の会や帰りの会など歌を歌う機会を設ける。
4 報告会をする。 ① 調理の経験 ② 教科の学習 ③ 夏休みのクッキング教室 ④ 自然教室での野外調理	○ 事前にアンケートをとり、グループ分けをしておく。そのグループで、時中の話合いをもとに発表の準備をさせておく。保護者の協力が得られる場合は発表のお手伝いをお願いする。 ● 日常の食事に興味・関心をもつことができる。（関心・意欲・態度） ● 食事に関わる人々や友達に感謝の気持ちをもつことができる。（思考・判断） ● 楽しく食事をすることが、豊かな食生活につながることがわかる。（知識・理解）
5 感想カード記入する。	○ 事前に学級通信で保護者に学級集会のことを知らせておく。学級委員の保護者に連絡をお願いする。児童のがんばりを賞賛してもらい、今後の活動への期待を話してもらう。
6 お家の方にインタビューをする。	○ 朝の会や帰りの会など歌を歌う機会を設ける。
7 クラスの歌を歌う。	○ いろんなところで学習や経験を生かしていることを賞賛する。また、自然教室では全員、学習や経験を生かしたことを確認する。そして、集会後も、学習や経験を生かすことに意欲をもたせるために、チャレンジコーナーを設ける。
8 先生の話を聞く。	○ 実行委員を組織し、リハーサルを行う。大きな声で言えるようにリハーサルで助言をしておく。
9 記念撮影をする。	
10 おわりの言葉を言う。	

## (5) 考察

調理グループには、家庭の中で食事の準備をしてくれる保護者を意識させ、報告をまとめさせた。また、学級集会では、保護者に、毎日の食事を考え、準備することの大変さを話してもらった。その結果、調理グループから「調理をして楽しかった。でも、毎日するといやになるかもしれない。毎日、食事をつくってくれるお母さんに感謝したい」という報告があった。そのため、児童が「料理を毎日しているお母さん達はすごいと思いました。」「毎日、おいしいごはんを作ってくれてありがとう。」などの発表があり、保護者に感謝状を渡す取組が見られた。このことは「感謝の心」につながったと考える（資料-12）。

また、給食のおかずの残滓が1学期に比べて2学期は減っている（資料-13）。その理由を児童聞いてみると、「栄養士の先生と食べ物の勉強をしたから。」「給食の先生がアイデアをいっぱい出して、給食を作ってくれるから。」と答え、相手意識が広がっていると考えられる。給食委員会が中心となって、

給食の先生に感謝のメッセージを作ったことは、豊かな人間性や社会性につながったと考える（資料-14）。

さらに、調理経験を報告することで、「家で調理がしたい。」「家族に何か作ってあげよう。」と、「食の重要性」につながったと考える。集会の1ヶ月後の社会科見学で、「卵焼きを作った」「お弁当を作った」「作ってもらったおかず自分で弁当箱につめた」などお弁当作りに関わった児童が41%いたことは、豊かな人間性につながると考える（資料-15）。

資料-12 感謝状を渡している様子



資料-13 給食のおかずの残滓ゼロの表



6月おかずの完食 7日 11月おかずの完食16日

資料-14 給食の先生への感謝のメッセージ



資料-15 社会科見学で児童が作ったお弁当



また、児童が自ら進んで調理する機会を設けるように、保護者に夏休みのクッキング教室で作った「誰でも作れるオムレットケーキのレシピ」を説明してもらったり、集会の次の日、そのようなレシピ本を教室に掲示したりしたことで、児童は自分で作る楽しさを感じた。

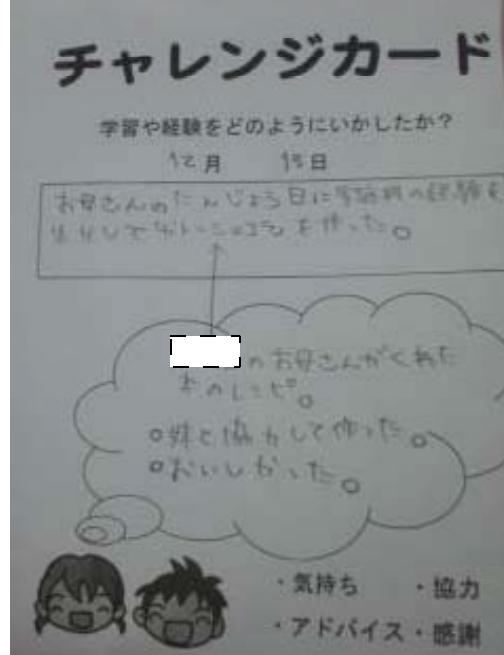
じ、そのレシピを欲しがり「オムレットケーキを作つてみたい」と発言していた。このことは、「食の重要性」につながったと考える。

さらに、実際に家庭で作った児童が見られたことや、事後のアンケートで、レシピを写しあわせたりを行つた児童、または行おうと予定している児童が40%いたことは、豊かな人間性につながったと考える（資料-17）。

資料-16 保護者がオムレットケーキのレシピを児童に説明している様子



資料-17 活動をふり返るチャレンジカード



また、自然教室グループから、「自然教室では、野外調理で学習や経験をみんな生かしていましたと思います。自然教室が終わり、笑顔

いっぱいプロジェクトの一つが成功しました。自然教室が成功したのは、学級目標にむかって、みんなで協力してがんばったからだと思います。」という報告があった（資料－18）。自然教室は学校行事で全員参加したので、経験を共有化できた。そのため、相手意識・目的意識・課題意識をもたせることができ、「社会性」を身に付けたと考える。自然教室をふり返り、事後に生かそうとする姿は、豊かな人間性や社会性につながると考えられる（資料－19）。

資料－18 自然教室での火おこし体験を説明する様子



資料－19 感想カードを記入している様子



以上のような成果から、学級活動(1)の本授業の実践は、家庭との交流活動を通して食に関する望ましい食習慣の形成の中特に「食事の重要性」「感謝の心」「社会性」を身に付ける活動として有効であり、食を通して豊かな人間性や社会性を育むことができたと考える。

### 3 家庭・地域との交流活動を生かした学級活動 (1) 学級集会の実践事例とその考察

#### (1) 学級集会

「手作りおやつ集会」（第6学年）

#### (2) 目標

- 学級集会で招待する方との交流を思い描きながら、話合いや集会の準備をしようとすることができる。

(関心・意欲・態度)

- 交流相手を意識した内容を考え発表したり、友達の考えと自分の考えを比べたりしながら考え、クラスのみんなや招待する方が喜んでくれる集会となるよう活動することができる。 (思考・判断)

- 自分の考えを話合いの柱にそって、自分の考えをもつことができ、友達の考えや自分の考えの中からよりよい考えを選び、集会の内容を決めることができる。

(技能・表現)

- 集会活動を通して、地域の方との交流のよさに気付くことができる。

(知識・理解)

#### (3) 本議題の意義と食育との関連

本事例は、家庭・地域との交流活動を生かした学級活動(1)の授業実践を通して、豊かな人間性や社会性を身に付けた児童を育てる特別活動の役割を探ろうとしたものである。

本学級の児童は、1学期に行った学級活動で、「自分でパワーアップ朝ごはん」という学習を行った。自分のできる範囲でバランスを考えた朝食メニューを考え、家庭で1週間程度の実践を行った。家庭での協力も得られ、半数程度の家庭では実践後に励ましや賞賛のコメントももらうことができた。また、子どもたちは調理について興味をもち、夏休みにも家族のために夕食を作るなど積極的なかかわりが見られる。しかし、おやつについては、10月に実施した実態調査によると、児童のほとんどがほぼ毎日、もしくは週に2、3日はおやつを食べている。よく食べるおやつに

はスナック菓子、チョコレート、ジュースなどの市販のもので、脂肪分、塩分、糖分が高いものを好んで食べることがわかった。また手作りのおやつを食べているという子どももほとんどいないこともわかった。本活動の直前に学級活動(2)で学校栄養職員と一緒におやつの取り方について見直す学習をおこなった。児童は市販のおやつよりも手作りのおやつには、カロリーや糖分、脂肪分が少ないことを知り、手作りおやつのよさについて興味をもつようになった。地域の方に「昔のおやつ」について聞いてみることにした。実際にインタビューを行い、さまざまな手作りおやつを知り、作ってみたいという思いを高めることができた。そこで、秋の学級集会として手作りおやつをテーマにした集会に取り組むことにした。おやつは子ども自身が選ぶことができ、身近な問題としてとらえやすいこと、交流活動を位置付けることで、家族や地域に昔ながらのおやつという食文化の伝達の一助になるのではないかと考え、この活動題と学級集会を設定した。

本活動で身に付けさせたい望ましい食習慣を次のように設定した（表－4）。

表－4 本活動での食に関する指導の目標

- |                                       |   |
|---------------------------------------|---|
| ○ 楽しい食事を通して、相手を思いやる気持ちをもつことができる。(社会性) | ○ 自分の食生活を見つめ直し、よりよい食習慣を形成しようと努力することができる。 (食品を選択の能力) |
|---------------------------------------|---|

#### (4) 実践内容

##### ア 事前

- (ア) 「チャレンジ集会」でどのようなことがしたいかアンケートを実施する。
- これまでに取り組んだことがないことを条件に考えさせるようにする。
- (イ) 第1回計画委員会を開く。
- 学級会の議題の選定と役割分担

- (ウ) 第2回計画委員会を開く。
- 議案作成
- (エ) 議案説明を行い、個人ノートに自分の考えを書く。
- (オ) おやつについてのインタビュー活動をする。
- 公民館で地域の方に聞いたり、家庭で親や祖父母から聞いたりする。その

- 際、おやつの名前、作り方、そのときの思い出の視点でインタビューさせる。
- (カ) リハーサルをする
- 提案理由を読ませた後、自分の考えを書かせるようにする。
- (キ) 集会の内容について話し合う。

(資料-20)

資料-20 話合いの順序と指導上の留意点

話合いの順序	指導上の留意点(○)評価(●)
1 はじめの言葉	○ 個人ノートには事前にチェックしておき、個人の考えにラインを引いたりコメントをつけたりして、発表への意欲をもたせる。 ○ 招待する方たちを楽しませることを念頭に置き、話合いをすることを確認する。
2 先生の話	
3 議題と提案理由の確認 ○ 議題 手作りおやつ集会について話し合おう。	
○ 提案理由 みんなで手作りのおやつにチャレンジして、クラスの団結がレベルアップすると思うので、	そしてインタビューした地域の方も招待して、楽しい集会をすれば、自分たちも地域の方も喜べる集会になるような内容を考えたいから。
4 話合いのめあての確認 ○ 友だちの考え方と自分の考え方を比べながら聞き、みんなでよりよい考え方を作り出そう。 ○ 招待する人たちのことを考えて内容について話し合おう。	
5 話合い 柱1：プログラムについて 柱2：盛り上げる工夫	○ 話がそれている場合は司会グループに軌道修正を行うよう助言する。 ● 友だちの考え方と自分の考え方を比べながら聞き、よりよい考え方を選択することができる。(技能・表現) ● 招待する人たちのことを考えて、集会を盛り上げる工夫を考えることができる。(思考・判断)
6 決まったことの確認 7 話合いのふり返り 8 先生の話	○ 集会に向けての意欲と準備のイメージを持たせる。
9 おわりの言葉	

#### ウ 事後

- (ア) おやつ作りのグルーピングをする。  
(イ) 役割分担をし、集会の準備をする。  
(ウ) 手作りおやつを作る。(家庭科)

(オ) お礼状を渡す。

- (カ) 活動をふり返る。  
(エ) 「手作りおやつ集会」を開く。(本時)

(資料-21)

資料-21 本時の展開

学習活動と内容	指導上の留意点(○)評価(●)
1 はじめの言葉を言う。	○ スムーズに会が進むよう、司会役の児童に適宜助言をしていく。
2 先生の話を聞く。	○ 集会の目的を確認する。
3 自己紹介をする。	○ 会がなごやかに進むように、集会に参加している人全員が自己紹介をする。
4 おやつ紹介 ○ 石がきだんご ○ いきなり団子 ○ 茶きんしほり ○ 焼きドーナツ ○ さつまいものケーキ ○ ○○家特製ホットケーキ ○ 焼き団子	○ 作り方とインタビューしたときに教えてもらったおやつの思い出などのエピソードを紹介するようにする。 ● 招待した方たちにも分かりやすく伝わるように発表することができる。(技能・表現)
5 会食をする。	○ 楽しく会話ができるように、招待した方たちの席の配置を工夫しておく。
6 感想を述べる。	● 楽しくなごやかな会食にするために、話題やマナーを意識して交流することができる。(思考・判断)
7 先生の話を聞く。	○ 自分の活動や友達のよさなどについて気付いたことなど感想を述べさせ
8 おわりの言葉を言う。	○ 今回の集会で喜んでもらえたか地域の方からも感想をいただく。

## (5) 考察

### ア 事前の活動

秋のチャレンジ集会を「手作りおやつ集会」に決めた際に、どんなおやつを作るかを考えさせた。そのとき、手作りのおやつは誰がよく食べていたか、作り方は誰に聞けばいいかを考えさせた。自分の親や祖父母、地域のおじいさんやおばあさんにも聞くともっとよくわかるのでは、ということに気付き、インタビューを行うことにした。

インタビュー活動では、公民館で地域のおじいさんやおばあさんから話を聞くことにした。

インタビューでは、「おやつの名前」、「作り方」、「そのときの思い出」の3つの視点に限定して、話を聞いた。地域の方は、おやつと同時に当時のことを懐かしそうに思い出しながら話していた。児童は社会の歴史学習と関連させるなどして話を広げる姿も見られた（資料-22）。

このインタビュー活動を行うことで、相手意識を明確にもたせることができ、その後の学級会や手作りおやつ集会においても常に意識しながら活動できた。

資料-22 地域の方にインタビュー活動をしている様子



### イ 事中の活動

学級会では、交流相手を意識した話合いを行わせた。柱2「盛り上げる工夫」では、招待する方の気持ちを思いやる意見が多数見られた。「参加してくれる地域の方やお

母さんは、自分たちの間に座ってもらえばいいと思う。理由は名前を知ることができて、町ですれ違うときあいさつができるから。」などの発言があり、一同が賛成する場面も見られた。これは相手意識や目的意識が明確になった交流場面と考える。

### ウ 事後の活動

集会の前におやつ作りを行った。他教科の関連（家庭科）で調理実習という形でおやつを作った（資料-23）。うまく作れるようにと前の日の夜に家で母親と作ったという児童もあり、どの児童も意欲をもって取り組むことができていた。また、紙ナプキンを用意してきた児童もいて、きれいに盛り付けをするなど工夫する姿も見られた。

資料-23 おやつ作りをしている様子



集会は地域の方8名、学校栄養士、保護者2名、校長先生に参加していただいた。児童が作ったおやつを8つに分け、各テーブルにおやつ紹介カードとともに置くようにした（資料-24）。会食のときに食べたいおやつをすぐに手に取れるようにということと立ち歩かずに会話に集中して楽しんでもらおうというねらいで行った。

目の前にしたおやつを見て、地域のおばあさんが涙ぐむ姿も見られた。

プログラムに自己紹介を入れたことで、雰囲気がいっそうなごやかになった。

資料-24 児童が作ったおやつ



会食の直前にフォークがないことに気付いた児童が、急いで準備する姿が見られた。今回作ったおやつは普段は手づかみで食べることの多い市販のお菓子とは違うことや、地域の方を招いているという改まった場であることに気付いたからであり、これは食事のマナーを考えての行動と共に、相手を思いやる気持ちの表れと考える。

会食では、おやつを介することによって地域の方との会話をはずませることができた。事前の活動で行ったインタビュー活動により、地域の方も児童もリラックスして話しているように見られた(資料-25)。

資料-25 会食で地域の方と児童が会話をしている様子



地域の方は、子どもの頃と今の食事情の違いなど、児童にぜひ知ってもらいたい、伝えたいという気持ちで参加していただいたようで、いい機会ととらえ、さまざまなお話を児童に話していただいた。会食の時

間は食文化の伝達という意味も兼ね備えていた。

集会後に地域の方にアンケートに答えていただいた(資料-26)。「みんな和気合々でお話をしました。」「とてもよい時間が過ごせました。子どもの気持ち、考えも少しあわかりました。」などが寄せられた。また、選択肢型の質問に対しても、「集会は楽しかった。」「楽しく会話ができた。」「内容がおやつだったので参加しやすい。」に全員が○を付けた。地域との交流には、このようなおやつなどの食に関したもので行うと地域の方は参加のしやすさを感じていることがわかった。

資料-26 地域の方から寄せられた感想

学級集会に参加していただいた方へ

本日は6年4組「手作りおやつ集会」に参加していただき、ありがとうございました。本日は楽しんでいただけたでしょうか?短い期間での計画や準備でしたが、参加していただく方々とおやつを食べながら楽しく会話をできるのを楽しみに取り組んできました。今日の集会の感想をぜひお願ひいたします。

①子どもたちの作ったおやつはいかがでしたか?

とてもよく出来ていたと思います  
かわいくて美味しいのがありました

②今回の集会(交流会)はいかがでしたか?

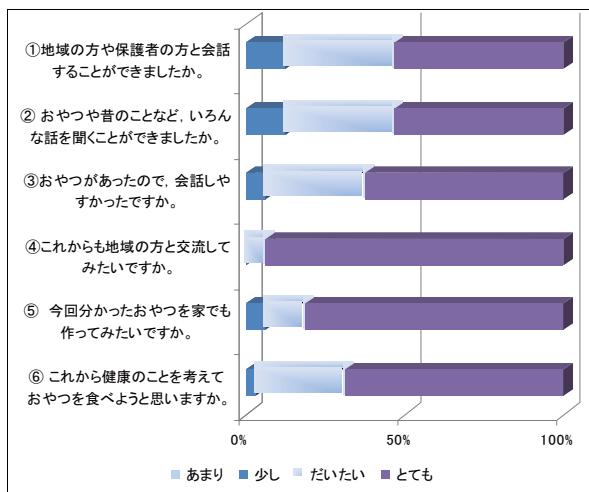
とても楽しい時間が過りました  
とても気持ち良くて色々しゃべかりました

③今後の参考にさせてもらいます。思ったものに○をつけてください。

- ・集会は楽しかった(○)
- ・集会はあまり楽しくなかった( )
- ・楽しく会話ができた(○)
- ・あまり会話ができなかつた( )
- ・内容がおやつだったので参加しやすい(○)
- ・他の内容(おやつ以外)のほうが参加しやすい( )
- ・その他 参加させていたい子ばかりで大盛況でした

本日はありがとうございました。今後ともよろしくお願ひいたします。

活動のふり返りでは、児童にアンケートを実施した。アンケートは選択肢方式と自由記述方式で行った。選択肢方式では主に「社会性」、自由記述方式では主に「食品を選択する能力」についてにしづつ実施した。アンケートの結果は以下のようになつた(図-2)。



図－2 児童の活動の振り返りアンケートの結果

アンケートの結果、児童のほとんどは、招待した方々と会話ができていた。これは、「おやつや昔のことなどを話を聞くことができた。」「おやつがあったので会話しゃすかったです。」などの結果が示すように、今回の集会は交流のしやすさを感じており、なごやかな会食にするためにおやつは有効であり、「社会性」が身に付いたと考えられる。また、「これからも地域の方と交流してみたい。」には、児童全員が「だいたい」か「とても」を選択しており、人間関係が広がり、豊かな社会性を身に付ける一端となつたと考える。

自由記述では、「おやつ集会はとても楽しかったです。それはみんなで協力して計画やおやつを作ったりしたからだと思います。それに来てくださつた方々もとても楽しそうにしてくれたし、みんなも楽しそうにしていたのは初めてだと思います。」

「地域の方々も昔の味を思い出していたのによかったです。ぼくは、昔の食べ物を食べて昔もくふうすればこんなにおいしい味が出てくるんだなあと思いました。」「おやつの作り方を学んだことで健康のことを考えるようになったし、地域の方からとてもいろんなことを教えてもらってすごく勉強になつたので、家でも作つてみておいしくできたらいいなと思いました。そしたら

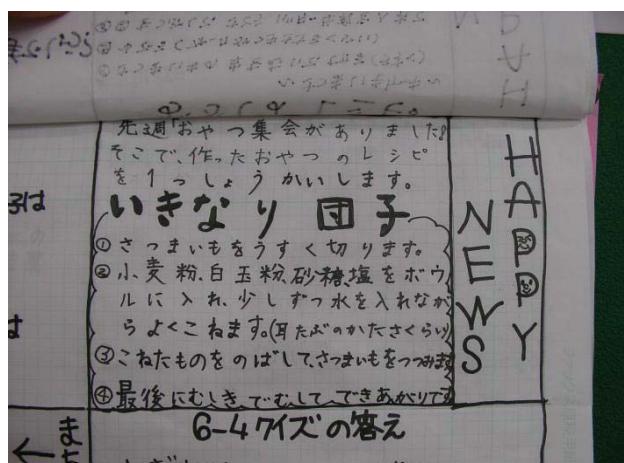
ポテトチップスなどの売つておやつをいっぱい食べなくても、変わりに手作りおやつを作つて食べたらいいと思いました。」(波線は担当者による)という感想を書いていた。本活動で、交流相手を意識した活動のよさに気付くことができた。また手作りおやつのよさに気付いたり、自分の食生活を見つめ直したりするきっかけとなり、本活動が有効であったと考える。

活動後には、休日にさっそく家族で作ったという児童がいた(資料-27)。また、本活動の後に、新聞係の作る学級新聞に手作りおやつのレシピを紹介するコーナーが設けられるようになった(資料-28)。本活動が生活の中で広がりを見せるようになったと考える。

#### 資料-27 集会後の児童の日記から

「今日は金曜日つくつた焼きドーナツを再チャレンジしてみました。金曜日作ったのはココア味とプレーンでした。今日はチョコチップを入れてみました。今度は茶巾しぶりや石がき団子、いきなり団子を作つてみたいです。」

#### 資料-28 学級新聞



以上のような成果から、学級活動(1)の本授業の実践は、家庭や地域との交流活動を通して、食に関する望ましい食習慣の形成の中特に「社会性」「食品を選択する能力」を身に付ける活動として有効であり、食を通して豊かな人間性や社会性を育むことができたと考える。

### 第Ⅲ章 研究のまとめ

本研究室では、児童に豊かな人間性や社会性を身に付けさせるために、食育の観点を踏まえた目指す児童の姿を設定し、家庭・地域との交流活動を生かした食に関する特別活動を実践した。

その結果、食環境を整えていこうとする実践的な態度や、他者と協調する姿などが見られ、特別活動における食育の果たす役割が明らかになつた。

#### 1 特別活動における食育の役割

##### (1) 家庭・地域との交流活動の有効性

昨年度の研究の課題から、今年度は家庭や地域との交流活動を生かした実践に取り組んだ。三校の実践に共通して挙げられた一番の成果は、家庭や地域と交流することで、児童の食に対する価値観や体験が豊かになった点である。例えば今まで食わず嫌いだったのが交流することで苦手な食べ物に対して児童が興味を持つことができたり、世代で異なる食環境事情を知ったことで、児童が食べ物の大切さや有り難さを感じたりしたことなどが、あげられる。

交流後、2年生の家庭ではクリスマスに親子でケーキやハンバーグを作ったり、お正月に子どもおせち弁当をつくったり親子で料理に取り組んだ家庭があった。児童が苦手だった食材を食べられるようになつたり、料理を手伝つたりする児童の変容を保護者が感じたことで、家庭でも小さな変容が見られるようになった一つの事例であると考える。他にも「食事中の会話が増えた。」「親子で一緒に台所に立つようになった。」「お父さんも時々料理をするようになった。」など、家庭での変化が保護者から寄せられた。

家庭の食環境は、家族の人数や世代、嗜好など様々な要因でつくられることから、児童

の嗜好や食に対する考え方、家庭の影響を大きく受ける。家庭や地域を中心に交流を仕組んだことで、家庭の食に関する関心が高まり、児童が食に対する多くの人の思いを感じとることができた。

家庭や地域との交流活動は、児童と保護者、児童と地域、保護者同士、保護者と地域などの新たな人間関係を築き、食環境の充実を促すことができたり、児童の実践への意欲を高めたりすることができた点から有効であったと考える。

##### (2) 豊かな人間性や社会性の育成との関連

本研究室では「豊かな人間性」をよりよい食環境を整えていこうとする実践的な態度、「豊かな社会性」を食を通して他者を理解したり人間関係を築いたりする能力とした。

第2学年においては、親子で共に食を考える活動に取り組んだ。家庭との交流活動を通して、児童が食の課題に気付き、望ましい食習慣を身に付けるためにふり返りを行つた。体に良い食べ方を実践するだけでなく、お弁当を作つたことで、調理する楽しさや家庭の愛情も感じることができた。交流活動を通して望ましい食習慣を身に付けただけでなく、作り手に感謝の思いを馳せるなど、他者を理解する「豊かな社会性」を育むことができた。また、交流後に家庭でも児童や保護者に変化が見られたことからも、交流活動で得た経験が「豊かな人間性」を育むことにつながつたと考える。今まで当たり前に食べていていた食事について、改めて親子で考えたことは、今後の食への自立の一歩につながることが期待できる。

第5学年においては、集会の次の日、レシピを説明してくれた保護者がおやつのレシピ本を教室に寄付してくれた。教室の後ろに掲示していたところ、レシピを写し、おやつ作りを行つた児童が見られた。また、集会の1ヶ月後の社会科見学では、「お弁当を自分で作つた。」「卵焼きを作つた。」「作つてもら

ったおかずを自分で弁当箱につめた。」「自分でお茶の準備をした。」など昼食の準備をした児童が41%いた。さらに、給食のおかずの残滓はほぼなくなるなど、食育を通して「豊かな人間性」を身に付けることができたと考える。

また、残滓が減った理由を児童に聞いてみると次のように考えていた。「栄養士の先生と食べ物の勉強をしたから。」「給食の先生がアイデアをいっぱい出して、給食を作ってくれるから。」であった。保護者が食事の準備をしてくれていることに感謝することから、食事の準備に関わっている他者に相手意識が広がっている。このことは、「豊かな社会性」も身に付いたと実感される。

第6学年においては、集会では保護者の参加が少なかったものの、集会後に家庭で親と一緒におやつを作ったという児童が数名おり、家庭での関心の高さを感じることができた。例えば家庭でおやつ作りに挑戦したり、係の新聞に料理レシピ紹介の欄が設けられたりしたなどの変容が見られた。世代や食環境の異なる地域の方との交流から、児童の今までの食の知識や考えを広げ、自分たちも昔の食についてもっと知りたい広げたいという思いをもつことができた。児童自身が地域の方から習ったおかしを家庭でも食べさせたいという姿から、豊かな社会性や人間性が身に付いたと考える。

今回の実践を通して、特別活動で行う食育の役割は、食の指導目標の中の「社会性」や「感謝の心」に深くつながりがあり、実践を通してさらに豊かな人間性や社会性を育む上で重要であることがわかった。児童は望ましい食習慣を身に付けることができただけではなく、児童がよりよい食環境を整えていくこうとする実践的な態度や、他者を理解したり、人間関係を築いたりすることができたと考える。

## 2 今後の課題

- 「食育」を中心に交流することに消極的な保護者も見られたので、そのような保護者も交流できる内容を検討する。
- 家庭へのより一層の啓発と連携を図る。
- 各教科や領域で行うには、単発の学習で終わってしまう可能性があるので、他教科との関連を図り、カリキュラムを作成していく。

## 3 研究のコメント

### 改めてなぜ「食育」なのか？－「弁当の日」を手がかりに

帰宅早々「ただいま」の挨拶がわりに「メシ」「フロ」というような「亭主」は、昭和30年代を憧憬する天然記念物のような方は例外として、もはやTVドラマかマンガの世界にしか棲息していないだろう。だが、子どもたちはどうだろうか。帰宅早々「お腹すいた」「ご飯まだ？」「今晚のおかずは何？」等々、時間になれば夕食がテーブルに用意されることをあたかも当然のように思っている子どもたちは少なくない。他方で、食事の支度がなされていることが決して当然でない厳しい家庭環境に生まれ落ち、そこで暮らしている子どもたちもまた存在している。どこの学級にもどこの学校にも双方いることだろう。

こうした格差社会の現実を再生産させぬために始められた試みの一つに「弁当の日」の取組がある。言うまでもなく、親が弁当を作って持参させるのが「弁当の日」ではない。「親は手伝わないでください」という約束のもと、子どもが献立、買い出し、調整、弁当詰め、片付けのすべてを一人で行うことが原則である。もともと弁当作りの指導は「学校の仕事」として捉えられており、弁当作りにあたっての基礎的な知識・技術を学校が責任をもって教えることとなっている（そのため「家庭科」がある5年生以上が主に対象）。

しかしながら、これは自炊ができるような料理の知識・技術を伝えるだけの取組でもない。現代日本の子どもたちは自己存在の価値を感じることができにくくなっている（本研究室でも平成15年度に自己存在感をテーマ「集団の一員として役割を果たし、自己存在感をもつ特別活動の在り方」に研究）、「心の空腹感」を訴えているとされる。この「弁当の日」の取組を始めた香川県高松市の竹下和男校長は、この「心の空腹感」を満たすためには、①自分を育てるのに手間暇をかけてくれている保護者の姿を見せること、そして②他者に「ありがとう」と感謝されることが必要だと言う。例えば、自分で弁当作りをするため、親が台所に立っているところを観察するようになり、前者①のネライが、また弁当に入りきらなかったおかずを振る舞うこと等で家族から感謝されることによって後者②のネライが、それぞれ達成されることになると指摘する。

実施にあたっては、子どもに包丁を持たせたことがない、ガスコンロを操作させたことがない、早起きができない、…などの不安が保護者から出るらしいが、子どもたちの能力や自立を信じ、指導に当たる学級担任、専門の家庭科教師、学校栄養職員・栄養教諭らが相談して、学習カードを作るなど事故を防ぐ事前指導を周到に行っている。当日はたとえ親に手伝ってもらった子がいても咎めないと、その子自身も後ろめたさを感じており、次回までの間に自主的に何度も台所に立つようになったり、親に教えを乞うたりするからというのがその理由である。回を重ねるごとに、腕を上げ、親子の対話も増えるといった結果がみられ、いつの間にか親たちも強く巻き込んでいくことになる。つまりは子どもを対象とした食育を「入口」としながらも、保護者を取り込んでいき、保護者の意識改善を促すところにまで届いていくのがこの試みの良さである。

## なぜ家庭や地域との交流を切り口にした食育なのか？

食育は大きな社会カイゼンのための「世直し」運動なのであると昨年のコメントで記述した。子どもたちの食環境の厳しい現実、見えない恐怖としての食の安全性の問題など、保護者（家庭）や社会（地域）との「交流」をはかりながらラジカルに研究開発することが今後の課題なのだと結んでいる。

このことは、食育ばかりでなく教育そのものにも該当しよう。「教育問題」とよばれる多くの課題が社会問題でもある今日、家庭や地域の協力なしに学校だけで問題解決できる状況とはなっていない。したがって、「開かれた学校（経営）」というスローガンの下、学校評議員制度、学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）、学校関係者評価制度、地域対策本部事業など次々と打ち出される施策は、当初のネライは異なっているが、結局いずれも学校と地域（保護者を含む）とのchannel（（物の通過・経由などの）経路、道筋、ルート；((~s))伝達経路〔手段〕）を増やし、等身大の学校（学校には「できること」と「できないこと」があるということ）を理解してもらうことで、学校の理解者ひいては学校の応援団になってもらうための試みであるといえる。

こうした応援団づくりに繋がるようなチャネルの確保はこれまで教室レベルでも行われてきた。たとえば、高学年担当の男性教諭が家庭科のミシン指導にあたって母親たちの応援を求めるなど（ジェンダー問題という課題はあるが）その第一歩とされる。男性教諭だからということでなく、一人の教師だけでは児童に目と手が行き届かない現実から出発することがむしろ求められよう。他方、算数の採点など学習指導の補助はハードルが高い保護者にとっても、ミシン指導であれば授業に参加協力しやすい。すなわち、ミシン指導は両者の歩み寄れる接点に位置してきた

わけである。このことは調理実習においても該当しよう。ミシンだけでなく調理も「最初の一歩」の可能性を秘めている。

なお、食育は調理場面にとどまらない。出来上がった料理を「食する」ことも含まれることに注目したい。人々を「惹きつける」魅力はミシン以上に有しているだろう。これが食のもつ大きな力である。食卓に人があつまり、コミュニケーションが始まる。こうしたコミュニケーションには媒体（メディア）が必要であり、電話やメールなどの情報伝達の手段としてではなく、コミュニケーションを促進する媒体として、カラオケマイクと同様、酒や肴、料理といった「食」はコミュニケーションの大きな位置を占めている。

したがって、「食」は保護者のみならず地域住民をも引き寄せ、学校の教育活動に巻き込んでいける可能性を秘めた方策となろう。ここでの食育はあくまで「入口」にすぎず、目的ではない。さきの「弁当の日」の実践例でも確認したように、究極の目的は保護者や地域との交流を深めていくことにより、教育問題の背景や原因に迫り、その改善を図っていくことにある。その意味では保護者や地域住民が「食」を手がかりに学校に足を向けてもらうことは物語の始まりにすぎず、「交流」を成立させるためには逆方向のベクトルも必要となる。つまり、学校から保護者や地域に対して、情報を発信し、足を伸ばし、エネルギーを手向け、保護者を地域をそして社会を変えていくことが求められているのである。

本研究室では以前、実践的社会性にも取り組んだ（平成16年度「自発的、自治的な活動を通して実践的な社会性を育てる特別活動の在り方」）。その目指す先には「社会力」、すなわち社会変革力（門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、2003年、参照。）という目標があった。本年度の研究テーマである「豊かな人間性や社会性」も今後の価値多元化社

会で生きる子どもたちに不可欠な資質として要請されるものだが、より早急に着手すべき課題として、大きな社会カイゼンのための「世直し」運動が必要である。学級や学校内部にとどまらず、保護者や地域などを巻き込み双方がwin-winとなる交流が緊要である。少々長くなつたが、本年度のサブテーマとなつてゐる「食に関する交流活動を活かした～」は以上のような問題関心からこれに焦点をあてた次第である。

### 3 学級の研究実践状況

まず2年生の梅山学級では、発達段階への配慮の他、偏食傾向などの課題を抱える児童がいることを踏まえ、望ましい食習慣の形成を目指した学級活動(2)として取り組んだ。学級の実態把握のためアンケート調査から始め、多くの児童が野菜を苦手としていることを明らかにしたうえで、野菜を摂取することがいかに大切かについて、児童による寸劇や教師による実演でその大切さを理解させる試みが展開された。当日は、保護者に参加してもらい、栄養のバランスに配慮して野菜を美味しく食べさせる工夫など食事をつくる際の思いや願いを各班ごとに語っていただいた。低学年ということもあって、乳飲み子当時の母親としての思いから語り始められる方もいるなど、普段なかなか面と向かって聞くことのない保護者の真摯な語りは児童にとってもインパクトのある体験となった様子で、単に栄養摂取という側面でなく、食に込められた愛情に応えうる食べ方についての話し合いやその後の姿勢に生かされることとなった。その後の児童の変化は保護者にも影響を与えていた様子が11～12頁に描かれてている。これが冒頭に示した本研究の目的であった。

次に5年生の原学級の「笑顔いっぱい集会」は、「男女仲良く、何にでもチャレンジし、協力し合い笑顔いっぱいのクラス」という学級目標通りの元気な歌から始まった。報

告会では、家庭科や自然教室（野外調理）などの既習体験を想起させたり、夏休みクッキング教室という一部児童の体験をクラス全員で共有できるよう視覚的に訴える工夫がこらされていた。事前に学級通信等でこの学級集会の案内をし、そこに9名もの保護者に参加してもらったことが特筆できる。ある保護者にはG.T.のように内容の説明をしてもらったり、また別の保護者には集会の最後に賞賛してもらったりして「参観」ではなく「参画」していただいていることの意味は大きい。食にかかわる内容が多く含まれていたため、感謝の対象として児童たちに「相手」意識を想起させる視覚的役割も果たしていただいており、感謝状や記念写真は印象的であった。その後の社会科見学で弁当づくりに挑戦した児童や給食残滓が減少している点など、食を意識した集会活動の成果は26頁に示されている。

最後に6年生の岩下学級では、交流対象を地域にまで拡大した「手作りおやつ集会」を開催するに至っている。全国的に同様の課題を抱えていることだろうが、事前調査の結果、スナック菓子やジュースなどの市販の高カロリーおやつを好んで多く摂取しているという児童の実態を踏まえ、学級活動(2)としておやつの取り方を見直す学習を仕組んでいる。それゆえ計画委員会から「手作りおやつ」という提案がなされ、保護者だけでなく地域の方々に「昔のおやつ」についてインタビューし、その方たちをお招きした「手作りおやつ」集会を開催する運びとなった。こうした流れは地域の方に学校にまで足を運んでいただく必然性をうみだし、また集会での案内や座席表、自己紹介と拍手、おやつ紹介とレシピ等、それぞれに来校者の居心地を確保するホスピタリティ（もてなし）の工夫が練られ、会場となった家庭科室は和やかな空気に包まれていた。地域の方は懐かしいおやつを前にして子どもたちに語るべき話題が濶みなく溢れるようで、世代間を越えた交流は「食」の

力を再確認できるものであった。また、ここで本物の味覚と、料理で感謝される喜びを知った子どもたちは家族にも作ってあげたいという次のアクションへの気持ちが芽生えていた。

## 研究成果と残された課題

以上のように、3つの実践とも保護者や地域の方々の多くの参加を得られたことにより、予想以上に充実した楽しい活動を行うことができた。なかには小さなお子さんを抱えての参加で大変だっただろうが、そうしたことも含め、子どもたちにとっては保護者の方々の「苦労」や「思い」が実感でき、感謝の相手を同じ教室空間に視覚的にまたは身体論的に意識することもでき、たいへん有意義なハレ舞台となった。他方、保護者や地域の方々にとっても改めて食を見直す機会となったり、交流によって普段みることのできないわが子の別の一面をみたり、クラスメイトの子どもたちと関係を築いたりするまたとない機会になったように見受けられた。地域の方にとっても、「食」を介した交流により、肩ひじを張らずに子どもたちとふれあいの機会をもつことができた。

ただし、問題はここからである。たしかにイベントとしての学級集会、その他の成果は子どもたちの日常の行動変容やつぶやきに看取することができよう。だが、これを持続的に深めていくためにはどのような実践を仕組んでいくかが問われるところである。児童や保護者、地域の方々の意識を変えていくような交流の「システム」を今後どう構築するかが経営実践上の課題である。これは他の学級、学年にとっても必要な取組ゆえ、波及し、一学級を越えたチャンネル構築として組織的に行われていくことに期待したい。

なお、今回の実践研究については2009年1月に、文部科学省国際イニシアティブ事業でパキスタン（首都イスラマバード）において

The “Children Make Lunch Day” Project の一環として上記 3 実践を紹介した。現地NGO関係者や初等学校の校長らにとてはまず学校で勉強以外の特別活動を行っていることが驚きの様子だったが、栄養バランスなど「食」をめぐる課題は同様に抱えているということで、レンジャーの寸劇の具体的な内容、保護者や地域の方々を学校に呼び込む工夫など多くの質問が寄せられた。また、昔のおやつとして紹介したものに似たお菓子がパキスタンにもあること、そしてスナック菓子に代わられていることなどの現代社会共通の課題についても意見交換することができた。こうした課題解決の場として学校を中心として保護者や地域を巻き込んで解決していく手法の重要性は国境を越えても十分理解してもらうことができたことをここで報告しておきたい。

### GP.6' The “Children Make Lunch Day” Project



他方、本年度の研究上の成果としては以下の諸点を指摘しておきたい。

まず、6つの「食に関する指導の目標」（食事の重要性、感謝の心、社会性（人間関係形成能力）、食文化、心身の健康、食品を選択する能力）に対し、特別活動はどの要素に深く切り込むことが可能かという昨年度からの課題に対し、今回の実践では各学年○印にかかるものとして整理されている。「心身の健康」「食文化」については関連づけがなされていないが、私の見立てでは☆のように、2年と6年の実践にそれぞれ関わっている。2年の梅山学級実践では、低学年ながら学活(1)でも十分活発にすすめられるクラスで、あえて学活(2)として「望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付ける」ために「望ましい食習慣の形成を目指した」授業展開がなされていた。また、6年の岩下学級実践では、「石垣だんご」「いきなり団子」「茶巾しづり」等、当地の昔の手作りお菓子を地域の方にインタビューしてレシピから起こして復元する試みは「各地域の産物、食文化や食にかかる歴史等を理解し、尊重する心をもつ」ことそのものだろう。

もちろん領域的には、「心身の健康」「食品を選択する能力」「食文化」は関連性が希薄（表中△印）である。これらは家庭科や社会科などの教科の方が迫れる部分もあるだろう。だが、特別活動で取り組む意味はそこに行事としての非日常性、そしてステイクホルダー（関係者）とよばれる保護者や地域住民を巻き込み続ける「持続性」を学級、学年を越えて組織的に構築する可能性を秘めているからである。

	2年	5年	6年	関連性
食事の重要性	○	○		○
心身の健康	☆			△
食品を選択する能力			○	△
感謝の心	○	○		○
社会性（人間関係形成能力）	○	○	○	◎
食文化			☆	△

そうしたサステナビリティ（英：sustainability, 持続可能性）だけが特別活動で食育を取扱う意義ではない。上記の表のように、どの実践も「社会性」という人間関係形成能力の育成に深く関わっており、さらに「食事の重要性」「感謝の心」という領域を加えると、そこに特別活動の有利な点が見えてくる。特別活動が給食指導に最も関わること、そして昨年のように6年生や栄養教諭、生産者、そして今回のように保護者や地域を巻き込んだ取組を行った場合に「感謝の心」の相手を明確に意識しながら活動できることに最大のアドバンテージがあるだろう。こうした地道な実践活動のベクトルの先に「豊かな人間性や社会性」という本研究課題のみならず我が国の公教育それ自体が目指している人間像があるとするならば、これをを目指した本研究の成果は、食育（食教育）のあり方を模索するものというよりは、特別活動ないし学級活動をより豊かにする実践研究としていずれ還元されるものと期待される。ただ、今回もテーマの重要性を導く根拠や社会的背景の説明は成功しているが、その仮説を実証するだけの根拠データは実践した本人には手応えとして感じられているものの、これを一般化し共有化するに至っていない。そのための質的研究の方法については本市G研をはじめ教育実践学研究に今なお残された課題である。

(九州大学大学院 准教授 元兼正浩)

## 引用文献

- |         |                   |                |
|---------|-------------------|----------------|
| 1 文部科学省 | 食に関する指導の手引        | (平成19年)        |
| 2 文部科学省 | 小学校学習指導要領解説 特別活動編 | 東洋館出版社 (平成20年) |

## 参考文献

- |                    |  |                       |
|--------------------|--|-----------------------|
| 1 文 部 省            | 小学校学習指導要領解説 総則編  | 東京書籍 (平成11年)          |
| 2 宮川 八岐            | 特別活動で進める食育プラン集   | 明治図書 (平成18年)          |
| 3 福岡市教育センター        | 福岡市小学校評価事例集  |                       |
| 4 福岡市教育センター特別活動研究室 | 平成19年度研究紀要 特別活動における食に関する指導の在り方<br>－交流活動を生かした学級活動の実践を通して－ | (平成18年)               |
| 5 長瀬 荘一            | 西川 貴子 平野 直美<br>子どもの「生きる力」を育てる食育ガイド                       | 明治図書 (平成18年)          |
| 6 福岡市教育委員会         | 教科などと関連付けた食育指導計画・実践事例集                                   | (平成19年)               |
| 7 「食生活」編集部         | 子どもの食育－栄養指導と食事管理のすすめかた－                                  | 株式会社カザン (平成19年)       |
| 8 ヨコハマ食教育研究グループ    | 心と体をはぐくむ食教育の指導実践集  | 社団法人 農山漁村文化協会 (平成19年) |
| 9 教育技術MOOK         | 〔図解〕みんなが楽しむゲーム・集会活動 小学館                                  | (平成19年)               |

---

## 共同研究者

- 元 兼 正 浩 (九州大学大学院准教授)  
瀧 口 博 之 (主任指導主事)  
梅 山 直 子 (飯倉中央小学校教諭) 岩 下 明 子 (那珂小学校教諭)  
原 忠 孝 (香椎浜小学校教諭)

## おわりに

毎年2月に実施される研究発表会では、最も苦労された研究員の先生方からプレゼンテーションが行われ、引き続きフロアーからの質疑応答、そして特別活動に詳しい校長先生からのコメントをいただき、最後に私がそれまでのやりとりを踏まえ、せっかくの研究プロセスが十分に伝わらなかった点や質問者に納得していただけなかった点を中心に全体総括として反射神経(?)を發揮したコメント(アドリブ?)を行ってきました。6年間のいよいよ最後になって、本務の都合でこの研究発表会に出られなくなつたため不本意ながら簡単なコメントを文書にまとめてみましたが、当日は時間が足りずあまり陽の目を見なかつたようですので、ここに掲載し「おわりに」にかえたいと思います。

最後のくだりで、「次年度は少し別の角度から「特別活動」を切り直す斬新なテーマに挑戦するとともに、個別抽出児童の変容に迫りうるような質的調査研究の方法論についても模索したいと考えております。」とありますように、実は、7年目は新たなテーマとして法教育を特別活動で取り組んでみるとどのような可能性の萌芽が認められるかについて構想しておりました。法教育が規範意識を教えるための道徳教育として位置づけられたり、裁判員制度を浸透させるためだけに矮小化されたりしている現状に対し、特別活動（学級活動(1)）においてこれまで模索し蓄積されてきた集団の意思決定を行う手法は、価値観が多様化し多元化する社会における紛争管理能力のスキルアップトレーニングの手法とシンクロさせることで一層魅力的に展開する可能性があると感じているからです。多数決を回避しながらも結局は数の勝負となり、付加的に少数意見を救済する方法を確認するタイプの学級活動とは異なる、新たな意思決定スタイルを生み出す可能性を感じているところです。また、機会があればこのテーマにも取り組んでみたいと思います。

本冊子を最後まで読み通していただいた方に心より御礼申し上げます。

元兼 正浩.

本日は「特別活動」研究室の発表会にお越しいただき心より感謝申し上げます。不本意ながら、このようなかたちとなり、誠に申し訳ございません。本務校の入試業務と重なってしまい、このハレ舞台に参加できないことをたいへん残念に思っております。

さて、3名の研究員の1年間にわたる取り組み経過を、わずか45分という限られた時間でご報告いたしましたので、その趣旨が十分に伝わったかどうか大変もどかしい気持ちであります。いくつか予想されるご質問にお答えする形で、本研究の位置づけと意味付けを行っておきます。

まず1つめは、なぜこの「特別活動」研究室で食育なのか？という疑問についてです。お隣の「家庭科」研究室でも、今年は食育についての発表が行われているとうかがっております。家庭科において食教育は「目的」の一つでしょうが、特別活動での食育は目的ではなく一つの「方法」にすぎません。そもそも特別活動と食育どちらが大きな概念かも定かではありませんが、両者の接点は限られています。したがって、その重なり合う部分を明らかにするということが目的ではなく、特別活動の領域を「食育」というメスで切り直すと、どのような断面が見えてくるか。これによって「特別活動」それ自体の新たな可能性がみられるのではないかというのが本G研「特別活動」研究室で取り組んできたゆえんです。この食育を手掛かりとして今回「特別活動」研究が豊かになっていると感じられないのであれば私の不徳の致す限りです。

なお、食育に取り組む今日的意義については、お手元に配布されております研究紀要の最後にコメントしておりますので、そちらをご参照ください。

次に2つめとして、ではなぜ交流なのか？という疑問についてです。これも紀要に書いておりますので、少し別の話をしておきます。実は昨年度も「交流」をキーワードにしましたが、そこでは他の学級、他の学年など異質情報や異視線をもつ他者との異文化摩擦接触によって、社会性を磨くということがネライでした。本年度は少し角度を替えて、保護者や地域の高齢者といった感謝の直接的な相手との交流として他者を捉えることで、「豊かな人間性」を身につけるという課題を意識しております。この「豊かな人間性」の醸成は「心の教育」などともすれば内向きになるところですが、ここでは外部との交流を仕組むことでその実現を目指しています。他方で、社会性につきましては給食マナーや「弁当づくり」など、事後の実践力に期待しており、今回の発表でもありましたように、その成果は3実践とともに垣間見られました。

最後に3つめとして、本研究の検証可能性についてです。本来、実証は追試可能でなければなりませんが、教育活動はたとえ相手が同じであっても、同じ働きかけで同じ結果がかえってくるとは限りません。ましてや、ここにいらっしゃる先生方が本研究の手立てを教室にお持ち帰りになんて、ちがう相手で同じ結果がえられる保証はありません。このことは教育研究のほとんどに当てはまります。ただ、その不一致は、教室単位でいえば今回8割の児童にうまく変容をもたらした手立てが4割とか5割の児童にしかうまく適合しないといった誤差の範囲です。つまり、クラスの81%に成果があったとか78%だったとかいう量的な数値にはあまり意味がなく、むしろ残りの2割の壁を突破する手立て、すなわち個別の質的な研究方法が必要となってきます。クラスの6割なのか8割なのか担任教師にとっては重要ですが、子ども各人の目線では、それは無意味です。その子に届くが否か、その子が変わるが否か、10か0かの世界です。「あと2割の壁」に届けるための手立ての有効性を客観的に評価していくような質的研究の手法がまだまだ未解決な点に本研究の限界はありますが、授業者としての3研究員のたしかな手ごたえを紀要や本発表で今回ともに共有していただけたならば幸せに存じます。

この2年間、食育を切り口とした特別活動研究に真摯に取り組んで参りました。次年度は少し別の角度から「特別活動」を切り直す斬新なテーマに挑戦するとともに、個別抽出児童の変容に迫りうるような質的調査研究の方法論についても模索したいと考えております。

以上、3点の疑問に応える形でのポイントの整理と、今後の課題のみに絞った拙い見解で誠に恐縮ですが、これをもちまして私のコメントにかえさせていただきます。

2009年2月25日

元兼正浩 拝

## 「特別活動実践研究」資料集（2003～2008）

---

2010年1月20日 発行

発行者 福岡市教育センター特別活動研究室・九州大学 元兼研究室

福岡市教育センター特別活動研究室：

〒814-0006 福岡市早良区百道3丁目10-1

TEL 092-822-2801

FAX 092-822-2807

HP : <http://www.fuku-c.ed.jp/center/>

九州大学 元兼研究室：

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

人間環境学研究院 元兼研究室

TEL&FAX 092-642-3123

HP : <http://teachers.edu.kyushu-u.ac.jp/motokane/>

印刷所 城島印刷株式会社

---